

しばしこそ、「さのたまひしものを」など、情けつくれど、うはべこそあれ、つらきこと多かり。とあるもかかるも世の道理なれば、身一つの憂きことにて、嘆き明かし暮らす。ただ、この河内守のみぞ、昔より好き心ありて、すこし情けがりける。

「あはれにのたまひ置きし、数ならずとも、思し疎までのたまはせよ」
など追従し寄りて、いとあさましき心の見えければ、

「憂き宿世ある身にて、かく生きとまりて、果て果ては、めづらしきことどもを聞き添ふるかな」と、人知れず思ひ知りて、人にさなむとも知らせで、尼になりにけり。

ある人びと、いふかひなしと、思ひ嘆く。守も、いとつらう、

「おのれを厭ひたまふほどに。残りの御齡は多くものしたまふらむ。いかでか過ぐしたまふべき」

などぞ、あいなさかしらやなどぞ、はべるめる。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

とて、賜へれば、かたじけなくて持て行きて、

「なほ、聞こえたまへ。昔にはすこし思しのくことあらむと思ひたまふるに、同じやうなる御心のなつかしきなむ、いとどありがたき。すさびごとぞ用なきことと思へど、えこそすくよかに聞こえ返さね。女にては、負けきこえたまへらむに、罪ゆるされぬべし」

など言ふ。今は、ましていと恥づかしう、よろづのこと、うひうひしき心地すれど、めづらしきにや、え忍ばれざりけむ、

「逢坂の関やいかなる関なれば

しげき嘆きの仲を分くらむ

夢のやうになむ」

と聞こえたり。あはれもつらさも、忘れぬふしと思し置かれたる人なれば、折々は、なほ、のたまひ動かしけり。

かかるほどに、この常陸守、老いの積もりにや、悩ましくのみして、もの心細かりければ、子どもに、ただこの君の御ことをのみ言ひ置きて、

「よろづのこと、ただこの御心にのみ任せて、ありつる世に変はらで仕うまつれ」

とのみ、明け暮れ言ひけり。

女君、「心憂き宿世ありて、この人にさへ後れて、いかなるさまにはふれ惑ふべきにかあらむ」と思ひ嘆きたまふを見るに、

「命の限りあるものなれば、惜しみ止むべき方もなし。いかでか、この人の御ために残し置く魂もがな。わが子どもの心も知らぬを」

と、うしろめたう悲しきことに、言ひ思へど、心にえ止めぬものにて、亡せぬ。

にてかひなし。女も、人知れず昔のこと忘れねば、とりかへして、ものあはれなり。

「行くと来とせき止めがたき涙をや

絶えぬ清水と人は見るらむ

え知りたまはじかし」と思ふに、いとかひなし。

石山より出でたまふ御迎へに右衛門佐参りてぞ、まかり過ぎしかしこまりな
ど申す。昔、童にて、いとむつましうらうたきものにしたまひしかば、かうぶ
りなど得しまで、この御徳に隠れたりしを、おぼえぬ世の騒ぎありしころ、も
のの聞こえに憚りて、常陸に下りしをぞ、すこし心置きて年ごろは思しけれど、
色にも出だしたまはず、昔のやうにこそあらねど、なほ親しき家人のうちには
数へたまひけり。

紀伊守といひしも、今は河内守にぞなりにける。その弟の右近将監解けて御
供に下りしをぞ、とりわきてなし出でたまひければ、それにぞ誰も思ひ知りて、
「などですこしも、世に従ふ心をつかひけむ」など、思ひ出でける。

佐召し寄せて、御消息あり。「今は思し忘れぬべきことを、心長くもおはする
かな」と思ひるたり。

「一日は、契り知られしを、さは思し知りけむや。

わくらばに行き逢ふ道を頼みしも

なほかひなしや潮ならぬ海

関守の、さもうらやましく、めざましかりしかな
とあり。

「年ごろのとだえも、うひうひしくなりにけれど、心にはいつとなく、ただ
今の心地するならひになむ。好き好きしう、いとど憎まれむや」

伊予介といひしは、故院崩れさせたまひて、またの年、常陸になりて下りしかば、かの帚木もいざなはれにけり。須磨の御旅居も遙かに聞きて、人知れず思ひやりきこえぬにしもあらざりしかど、伝へ聞こゆべきよすがだになくて、筑波嶺の山を吹き越す風も、浮きたる心地して、いささかの伝へだになくて、年月かさなりにけり。限れることもなかりし御旅居なれど、京に帰り住みたまひて、またの年の秋ぞ、常陸は上りける。

関入る日しも、この殿、石山に御願果しに詣でたまひけり。京より、かの紀伊守などいひし子ども、迎へに来たる人びと、「この殿かく詣でたまふべし」と告げければ、「道のほど騒がしかりなむものぞ」とて、まだ暁より急ぎけるを、女車多く、所狭うゆるぎ来るに、日たけぬ。

打出の浜来るほどに、「殿は、栗田山越えたまひぬ」とて、御前の人びと、道もさりあへず来込みぬれば、関山に皆下りゐて、ここかしこの杉の下に車どもかき下ろし、木隠れに居かしこまりて過ぐしたてまつる。車など、かたへは後らかし、先に立てなどしたれど、なほ、類広く見ゆ。

車十ばかりぞ、袖口、物の色あひなども、漏り出でて見えたる、田舎びず、よしありて、斎宮の御下りなにぞやうの折の物見車思し出でらる。殿も、かく世に榮え出でたまふめづらしさに、数もなき御前ども、皆目とどめたり。

九月晦日なれば、紅葉の色々こきませ、霜枯れの草むらむらをかしう見えわたるに、関屋より、さとくづれ出でたる旅姿どもの、色々の襖のつきづきしき縫物、括り染めのさまも、さるかたにをかしう見ゆ。御車は簾下ろしたまひて、かの昔の小君、今、右衛門佐なるを召し寄せて、

「今日の御関迎へは、え思ひ捨てたまはじ」

などのたまふ御心のうち、いとあはれに思し出づること多かれど、おほぞう

関 屋

関

屋

どにて、おほかたにも渡りたまふに、さしのぞきなどしたまひつつ、いとあなづらはしげにもてなしきこえたまはず。

かの大弐の北の方、上りて驚き思へるさま、侍従が、うれしきものの、今しばし待ちきこえざりける心浅さを、恥づかしう思へるほどなどを、今すこし問はず語りもせまほしけれど、いと頭いたう、うるさく、もの憂ければなむ。今またもついであらむ折に、思ひ出でて聞こゆべき、とぞ。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

まふを、

「そこになむ渡したてまつるべき。よろしき童女など、求めさぶらはせたまへ」

など、人びとの上まで思しやりつつ、訪らひきこえたまへば、かくあやしき蓬のもとには、置き所なきまで、女ばらも空を仰ぎてなむ、そなたに向きて喜びきこえける。

なげの御すさびにても、おしなべたる世の常の人をば、目止め耳立てたまはず、世にすこしこれとは思ほえ、心地にとまる節あるあたりを尋ね寄りたまふものと、人の知りたるに、かく引き違へ、何ごともなのめにだにあらぬ御ありさまを、ものめかし出でたまふは、いかなりける御心にかありけむ。これも昔の契りなめりかし。

今は限りと、あなづり果てて、さまざまに迷ひ散りあかれし上下の人びと、我も我も参らむと争ひ出づる人もあり。心ばへなど、はた、埋もれいたきまでよくおはする御ありさまに、心やすくならひて、ことなることなきなま受領などやうの家にある人は、ならばはずはしたなき心地するもありて、うちつけの心みえに参り帰り、君は、いにしへにもまさりたる御勢のほどにて、ものの思ひやりもまして添ひたまひにければ、こまやかに思しておきてたるに、にほひ出でて、宮の内やうやう人目見え、木草の葉もただすぐくあはれに見えなされしを、遣水かき払ひ、前裁のもとだちも涼しうしなしなどして、ことなるおぼえなき下家司の、ことに仕へまほしきは、かく御心とどめて思さるることなめりと見取りて、御けしき賜はりつつ、追従し仕うまつる。

二年ばかりこの古宮に眺めたまひて、東の院といふ所になむ、後は渡したてまつりたまひける。対面したまふことなどは、いとかたけれど、近きしめのほ

も、さまざまあはれになむ。今、のどかにぞ鄙の別れに衰へし世の物語も聞こえ尽くすべき。年経たまへらむ春秋の暮らしがたきなども、誰にかは愁へたまはむと、うらもなくおぼゆるも、かつは、あやしうなむ」

など聞こえたまへば、

「年を経て待つしるしなきわが宿を

花のたよりに過ぎぬばかりか」

と忍びやかにうちみじろきたまへるけはひも、袖の香も、「昔よりはねびまさりたまへるにや」と思さる。

月入り方になりて、西の妻戸の開きたるより、障はるべき渡殿だつ屋もなく、軒のつまも残りなければ、いとはなやかにさし入りたれば、あたりあたり見ゆるに、昔に変はらぬ御しつらひのさまなど、忍草にやつれたる上の見るめよりは、みやびかに見ゆるを、昔物語に塔こぼちたる人もありけるを思しあはするに、同じさまにて年古りにけるもあはれなり。ひたぶるにもものづつみしたるけはひの、さすがにあてやかなるも、心にくく思されて、さる方にて忘れじと心苦しく思ひしを、年ごころさまごまの思ひに、ほれぼれしくて隔てつるほど、つらしと思はれつらむと、いとほしく思す。

かの花散里も、あざやかに今めかしうなどは花やぎたまはぬ所にて、御目移しこよなからぬに、咎多う隠れにけり。

祭、御禊などのほど、御いそぎどもにことつけて、人のたてまつりたる物いろいろに多かるを、さるべき限り御心加へたまふ。中にもこの宮にはこまやかに思し寄りて、むつましき人びとに仰せ言賜ひ、下部どもなど遣はして、蓬払はせ、めぐりの見苦しきに、板垣といふもの、うち堅め繕はせたまふ。かう尋ね出でたまへりと、聞き伝へむにつけても、わが御ため面目なければ、渡りたまふことはなし。御文いとこまやかに書きたまひて、二条院近き所を造らせた

づかしき御ありさまにて対面せむも、いとつつましく思したり。大式の北の方のたてまつり置きし御衣どもをも、心ゆかず思されしゆかりに、見入れたまはざりけるを、この人びとの、香の御唐櫃に入れたりけるが、いとなつかしき香したるをたてまつりければ、いかがはせむに、着替へたまひて、かの煤けたる御几帳引き寄せておはす。

入りたまひて、

「年ごろの隔てにも、心ばかりは変はらずなむ、思ひやりきこえつるを、さしもおどろかいたまはぬ恨めしさに、今までこころみきこえつるを、杉ならぬ木立のしるさに、え過ぎでなむ、負けきこえにける」

とて、帷子をすこしかきやりたまへれば、例の、いとつつましげに、とみにも応へきこえたまはず。かくばかり分け入りたまへるが浅からぬに、思ひ起こしてぞ、ほのかに聞こえ出でたまひける。

「かかる草隠れに過ぐしたまひける年月のあはれも、おろかならず、また変はらぬ心ならひに、人の御心のうちもたどり知らずながら、分け入りはべりつる露けさなどを、いかが思す。年ごろのおこたり、はた、なべての世に思しゆるすらむ。今よりのちの御心になはざらむなむ、言ひしに違ふ罪も負ふべき」
など、さしも思されぬことも、情け情けしう聞こえなしたまふことども、あむめり。

立ちとどまりたまはむも、所のさまよりはじめ、まばゆき御ありさまなれば、つきづきしうのたまひすぐして、出でたまひなむとす。引き植ゑしならねど、松の木高くなりける年月のほどもあはれに、夢のやうなる御身のありさまも思し続けらる。

「藤波のうち過ぎがたく見えつるは

松こそ宿のしるしなりけれ

数ふれば、こよなう積もりぬらむかし。都に変はりにけることの多かりける

し老人なむ、変はらぬ声にてはべりつる」

と、ありさま聞こゆ。

いみじうあはれに、

「かかるしげき中に、何心地して過ぐしたまふらむ。今まで訪はざりけるよ」と、わが御心の情けなさも思し知らる。

「いかがすべき。かかる忍びあるきも難かるべきを、かかるついでならでは、え立ち寄らじ。変はらぬありさまならば、げにさこそはあらめと、推し量らるる人ざまになむ」

とはのたまひながら、ふと入りたまはむこと、なほつつましう思さる。ゆゑある御消息もいと聞こえまほしけれど、見たまひしほどの口遅さも、まだ変らずは、御使の立ちわづらはむもいとほしう、思しとどめつ。惟光も、

「さらにえ分けさせたまふまじき、蓬の露けさになむはべる。露すこし払はせてなむ、入らせたまふべき」

と聞こゆれば、

「尋ねても我こそ訪はめ道もなく

深き蓬のもとの心を」

と独りごちて、なほ下りたまへば、御先の露を、馬の鞭して払ひつつ入れたてまつる。

雨そそきも、なほ秋の時雨めきてうちそそけば、

「御傘さぶらふ。げに、木の下露は、雨にまさりて」

と聞こゆ。御指貫の裾は、いたうそほちぬめり。昔だにあるかなきかなりし中門など、まして形もなくなりて、入りたまふにつけても、いと無徳なるを、立ちまじり見る人なきぞ心やすかりける。

姫君は、さりととも待ち過ぐしたまへる心もしるく、うれしけれど、いと恥

動くけしきなり。わづかに見つけたる心地、恐ろしくさへおぼゆれど、寄りて、声づくれば、いともの古りたる声にて、まづしはぶきを先にたてて、

「かれは誰れぞ。何人ぞ」

と問ふ。名のりして、

「侍従の君と聞こえし人に、対面賜はらむ」

と言ふ。

「それは、ほかになむものしたまふ。されど、思しわくまじき女なむはべる」と言ふ声、いたうねび過ぎたれど、聞きし老人と聞き知りたり。

内には、思ひも寄らず、狩衣姿なる男、忍びやかにもてなし、なごやかなれば、見ならはずなりにける目にて、「もし、狐などの変化にや」とおぼゆれど、近う寄りて、

「たしかになむ、うけたまはらまほしき。変はらぬ御ありさまならば、尋ねきこえさせたまふべき御心ざしも、絶えずなむおはしますめるかし。今宵も行き過ぎがてに、止まらせたまへるを、いかが聞こえさせむ。うしろやすくを」と言へば、女どもうち笑ひて、

「変はらせたまふ御ありさまならば、かかる浅茅が原を移ろひたまはでははべりなむや。ただ推し量りて聞こえさせたまへかし。年経たる人の心にも、たぐひあらじとのみ、めづらかなる世をこそは見たてまつり過ごしはべれ」

と、ややくづし出でて、問はず語りもしつべきが、むつかしければ、

「よしよし。まづ、かくなむ、聞こえさせむ」

とて参りぬ。

「などかいと久しかりつる。いかにぞ。昔のあとも見えぬ蓬のしげさかな」とのたまへば、

「しかしかなむ、たどり寄りてはべりつる。侍従が叔母の少将といひはべり

しげく森のやうなるを過ぎたまふ。

大きな松に藤の咲きかかりて、月影になよびたる、風につきてきと匂ふがなつかしく、そこはかとなき香りなり。橋に変はりてをかしければ、さし出でたまへるに、柳もいたうしだりて、築地も障はらねば、乱れ伏したり。

「見し心地する木立かな」と思すは、早う、この宮なりけり。いとあはれにて、おし止めさせたまふ。例の、惟光はかかる御忍びありきに後れねば、さぶらひけり。召し寄せて、

「ここは、常陸の宮ぞかしな」

「しかはべる」

と聞こゆ。

「ここにありし人は、まだや眺むらむ。訪らふべきを、わざとものせむも所狭し。かかるついでに、入りて消息せよ。よく尋ね入りてを、うち出でよ。人違へしては、をこならむ」

とのたまふ。

ここには、いとど眺めまさるころにて、つくづくとおはしけるに、昼寝の夢に故宮の見えたまひければ、覚めて、いと名残悲しく思して、漏り濡れたる廂の端つ方おし拭はせて、ここかしこの御座引きつくるはせなどしつつ、例ならず世づきたまひて、

「亡き人を恋ふる袂のひまなきに

荒れたる軒のしづくさへ添ふ」

も、心苦しきほどになむありける。

惟光入りて、めぐるめぐる人の音する方やと見るに、いささかの人氣もせず。

「さればこそ、往き来の道に見入るれど、人住みげもなきものを」と思ひて、帰り参るほどに、月明くさし出でたるに、見れば、格子二間ばかり上げて、簾

命こそ知りはべらね」

など言ふに、

「いづら。暗うなりぬ」

と、つぶやかかれて、心も空にて引き出づれば、かへり見のみせられける。

年ごろわびつつも行き離れざりつる人の、かく別れぬることを、いと心細う思すに、世に用ゐらるまじき老人さへ、

「いでや、ことわりぞ。いかでか立ち止まりたまはむ。われらも、えこそ念じ果つまじけれ」

と、おのが身々につけたるたよりども思ひ出でて、止まるまじう思へるを、人悪ろく聞きおはす。

霜月ばかりになれば、雪、霰がちにて、ほかには消ゆる間もあるを、朝日、夕日をふせぐ蓬葎の蔭に深う積もりて、越の白山思ひやらるる雪のうちに、出で入る下人だになくて、つれづれと眺めたまふ。はかなきことを聞こえ慰め、泣きみ笑ひみ紛らはしつる人さへなくて、夜も塵がましき御帳のうちも、かたはらさびしく、もの悲しく思さる。

かの殿には、めづらし人に、いとどもの騒がしき御ありさまにて、いとやむごとなく思されぬ所々には、わざともえ訪れたまはず。まして、「その人はまだ世にやおはすらむ」とばかり思し出づる折もあれど、尋ねたまふべき御心ざしも急がであり経るに、年変はりぬ。

卯月ばかりに、花散里を思ひ出できこえたまひて、忍びて対の上に御暇聞こえて出でたまふ。日ごろ降りつる名残の雨、いますこしそそきて、をかしきほどに、月さし出でたり。昔の御ありき思し出でられて、艶なるほどの夕月夜に、道のほど、よろづのこと思し出でておはするに、形もなく荒れたる家の、木立

など言ひ知らするを、げにと思すも、いと悲しくて、つくづくと泣きたまふ。されど、動くべうもあらねば、よろづに言ひわづらひ暮らして、

「さらば、侍従をだに」

と、日の暮るるままに急げば、心あわたたしくて、泣く泣く、

「さらば、まづ今日は。かう責めたまふ送りばかりにまうではべらむ。かの聞こえたまふもことわりなり。また、思しわづらふもさることにはべれば、中に見たまふるも心苦しくなむ」

と、忍びて聞こゆ。

この人さへうち捨ててむとするを、恨めしうもあはれにも思せど、言ひ止むべき方もなくて、いとど音をのみたけきことにてもものしたまふ。

形見に添へたまふべき身馴れ衣も、しほなれたれば、年経ぬるしるし見せたまふべきものなくて、わが御髪の落ちたりけるを取り集めて、鬘にしたまへるが、九尺余ばかりにて、いときよらなるを、をかしげなる箱に入れて、昔の薫衣香のいとかうばしき、一壺具して賜ふ。

「絶ゆまじき筋を頼みし玉かづら

思ひのほかにかけ離れぬる

故ままの、のたまひ置きしこともありしかば、かひなき身なりとも、見果ててむとこそ思ひつれ。うち捨てらるるもことわりなれど、誰に見ゆづりてかと、恨めしうなむ」

とて、いみじう泣いたまふ。この人も、ものも聞こえやらず。

「ままの遺言は、さらにも聞こえさせず、年ごろの忍びがたき世の憂さを過ぐしはべりつるに、かくおぼえぬ道にいぎなはれて、遙かにまかりあくがるること」とて、

「玉かづら絶えてもやまじ行く道の

手向の神もかけて誓はむ

「出で立ちなむことを思ひながら、心苦しきありさまの見捨てたてまつりたきを。侍従の迎へになむ参り来たる。心憂く思し隔てて、御みづからこそあからさまにも渡らせたまはね、この人をだに許させたまへとてなむ。などかうあはれげなるさまには」

とて、うちも泣くべきぞかし。されど、行く道に心をやりて、いと心地よげなり。

「故宮おはせしとき、おのをば面伏せなりと思し捨てたりしかば、疎々しきやうになりそめにしかど、年ごろも、何かは。やむごとなきさまに思しあがり、大将殿などおはしまし通ふ御宿世のほどを、かたじけなく思ひたまへられしかばなむ、むつびきこえさせむも、憚ること多くて、過ぐしはべるを、世の中のかく定めもなかりければ、数ならぬ身は、なかなか心やすくはべるものなりけり。及びなく見たてまつりし御ありさまの、いと悲しく心苦しきを、近きほどはおこたる折も、のどかに頼もしくなむはべりけるを、かく遙かにまかりなむとすれば、うしろめたくあはれになむおぼえたまふ」

など語らへど、心解けても応へたまはず。

「いとうれしきことなれど、世に似ぬさまにて、何かは。かうながらこそ朽ちも失せめとなむ思ひはべる」

とのみのたまへば、

「げに、しかなむ思さるべけれど、生ける身を捨て、かくむくつけき住まひするたぐひははべらずやあらむ。大将殿の造り磨きたまはむにこそは、引きかへ玉の台にもなりかへらめとは、頼もしうははべれど、ただ今は、式部卿宮の御女よりほかに、心分けたまふ方もなかなり。昔より好き好きしき御心にて、なほざりに通ひたまひける所々、皆思し離れにたなり。まして、かうものはかなきさまにて、藪原に過ぐしたまへる人をば、心きよく我を頼みたまへるありさまと尋ねきこえたまふこと、いとかたくなむあるべき」

もあらずかし。詳しくは聞こえじ。いとほしう、もの言ひさがなきやうなり。冬になりゆくままに、いとど、かき付かむかたなく、悲しげに眺め過ぎたまふ。かの殿には、故院の御料の御八講、世の中ゆすりてしたまふ。ことに僧などは、なべてのは召さず、才すぐれ行なひにしみ、尊き限りを選らせたまひければ、この禅師の君参りたまへりけり。

帰りざまに立ち寄りたまひて、

「しかしか。権大納言殿の御八講に参りてはべるなり。いとかしこう、生ける浄土の飾りに劣らず、いかめしうおもしろきことどもの限りをなむしたまひつる。仏菩薩の変化の身にこそものしたまふめれ。五つの濁り深き世に、などて生まれたまひけむ」

と言ひて、やがて出でたまひぬ。

言少なに、世の人に似ぬ御あはひにて、かひなき世の物語をだにえ聞こえ合はせたまはず。「さて、かばかりつたなき身のありさまを、あはれにおぼつかなくて過ぐしたまふは、心憂の仏菩薩や」と、つらうおぼゆるを、「げに、限りなめり」と、やうやう思ひなりたまふに、大弐の北の方、にはかに来たり。

例はさしもむつびぬを、誘ひ立てむの心にて、たてまつるべき御装束など調じて、よき車に乗りて、面もち、けしき、ほこりかにも思ひなげなるさまして、ゆくりもなく走り来て、門開けさするより、人悪ろく寂しきこと、限りもなし。左右の戸もみなよろほひ倒れにければ、男ども助けてとかく開け騒ぐ。いづれか、この寂しき宿にもかならず分けたる跡あなる三つの径と、たどる。

わづかに南面の格子上げたる間に寄せたれば、いとどはしたなしと思したれど、あさましう煤けたる几帳さし出でて、侍従出で来たり。容貌など、衰へにけり。年ごろいたうつひえたれど、なほものきよげによしあるさまして、かたじけなくとも、取り変へつべく見ゆ。

大弐の北の方、

「さればよ。まさに、かくたづきなく、人悪ろき御ありさまを、数まへたまふ人はありなむや。仏、聖も、罪軽きをこそ導きよくしたまふなれ、かかる御ありさまにて、たけく世を思し、宮、上などのおはせし時のままにならひたまへる、御心おごりの、いとほしきこと」

と、いとどをこがましげに思ひて、

「なほ、思ほし立ちね。世の憂き時は、見えぬ山路をこそは尋ぬなれ。田舎などは、むつかしきものと思しやるらめど、ひたぶるに人悪ろげには、よも、もてなしきこえじ」

など、いと言よく言へば、むげに屈んじにたる女ばら、

「さもなびきたまはなむ。たけきこともあるまじき御身を、いかに思して、かく立てたる御心ならむ」

と、もどきつぶやく。

侍従も、かの大弐の甥だつ人、語らひつきて、とどむべくもあらざりければ、心よりほかに出で立ちて、

「見たてまつり置かむが、いと心苦しきを」

とて、そそのかしきこゆれど、なほ、かくかけ離れて久しうなりたまひぬる人に頼みをかけたまふ。御心のうちに、「さりとも、あり経ても、思し出づるついであらじやは。あはれに心深き契りをしたまひしに、わが身は憂くて、かく忘られたるにこそあれ、風のつてにても、我かくいみじきありさまを聞きつきたまはば、かならず訪らひ出でたまひてむ」と、年ごろ思しければ、おほかたの御家居も、ありしよりけにあさましけれど、わが心もて、はかなき御調度どもなども取り失はせたまはず、心強く同じさまにて念じ過ごしたまふなりけり。

音泣きがちに、いと思し沈みたるは、ただ山人の赤き木の実一つを顔に放たぬと見えたまふ、御側目などは、おぼろけの人の見たてまつりゆるすべきに

べる」

と聞こえけり。この侍従も、常に言ひもよほせど、人にいどむ心にはあらで、ただこちたき御ものづつみなれば、さもむつびたまはぬを、ねたしとなむ思ひける。

かかるほどに、かの家主人、大弑になりぬ。娘どもあるべきさまに見置きて、下りなむとす。この君を、なほも誘はむの心深くて、

「はるかに、かくまかりなむとするに、心細き御ありさまの、常にしも訪らひきこえねど、近き頼みはべりつるほどこそあれ、いとあはれにうしろめたくなむ」

など、言よがるを、さらに受け引きたまはねば、

「あな、憎。ことごとしや。心一つに思し上がるとも、さる藪原に年経たまふ人を、大将殿も、やむごとなくしも思ひきこえたまはじ」

など、怨じうけひけり。

さるほどに、げに世の中に赦されたまひて、都に帰りたまふと、天の下の喜びにて立ち騒ぐ。我もいかで、人より先に、深き心ぎしを御覽ぜられむとのみ、思ひきほふ男、女につけて、高きをも下れるをも、人の心ばへを見たまふに、あはれに思し知ること、さまざまなり。かやうに、あわたたしきほどに、さらに思ひ出でたまふけしき見えで月日経ぬ。

「今は限りなりけり。年ごろ、あらぬさまなる御さまを、悲しういみじきことを思ひながらも、萌え出づる春に逢ひたまはなむと念じわたりつれど、たびしかはらなどまで喜び思ふなる、御位改まりなどするを、よそにのみ聞くべきなりけり。悲しかりし折のうれはしきは、ただわが身一つのためになれるとおぼえし、かひなき世かな」と、心くだけで、つらく悲しければ、人知れず音のみ泣きたまふ。

時々のみまぐりものにしたまふ。

古歌とても、をかしきやうに選り出で、題をも読人をもあらはし心得たるこそ見所もありけれ、うるはしき紙屋紙、陸奥紙などのふくだめるに、古言どもの目馴れたるなどは、いとすさまじげなるを、せめて眺めたまふ折々は、ひき広げたまふ。今の世の人のすめる、経うち読み、行なひなどいふことは、いと恥づかしくしたまひて、見たてまつる人もなければ、数珠など取り寄せたまはず。かやうにうるはしくぞものしたまひける。

侍従などいひし御乳母子のみこそ、年ごろあくがれ果てぬ者にてさぶらひつれど、通ひ参りし齋院亡せたまひなどして、いと堪へがたく心細きに、この姫君の母北の方のはらから、世におちぶれて受領の北の方になりたまへるありけり。

娘どもかしづきて、よろしき若人どもも、「むげに知らぬ所よりは、親どももまうで通ひしを」と思ひて、時々行き通ふ。この姫君は、かく人疎き御癖なれば、むつましくも言ひ通ひたまはず。

「おのれをばおとしめたまひて、面伏せに思したりしかば、姫君の御ありさまの心苦しげなるも、え訪らひきこえず」

など、なま憎げなる言葉ども言ひ聞かせつつ、時々聞こえけり。

もとよりありつきたるさやうの並々の人は、なかなかよき人の真似に心をつくろひ、思ひ上がるも多かるを、やむごとなき筋ながらも、かうまで落つべき宿世ありければにや、心すこしなほなほしき御叔母にぞありける。

「わがかく劣りのさまにて、あなづらはしく思はれたりしを、いかで、かかる世の末に、この君を、わが娘どもの使人になしてしがな。心ばせなどの古びたる方こそあれ、いとうしろやすき後見ならむ」と思ひて、

「時々ここに渡らせたまひて。御琴の音もうけたまはらまほしがる人なむは

はかなきことにても、見訪らひきこゆる人はなき御身なり。ただ、御兄の禅師の君ばかりぞ、まれにも京に出でたまふ時は、さしのぞきたまへど、それも、世になき古めき人にて、同じき法師といふなかにも、たづきなく、この世を離れたる聖にもしたまひて、しげき草、蓬をだに、かき払はむものとも思ひ寄りたまはず。

かかるままに、浅茅は庭の面も見えず、しげき蓬は軒を争ひて生ひのぼる。葎は西東の御門を閉ぢこめたるぞ頼もしけれど、崩れがちなるめぐりの垣を馬、牛などの踏みならしたる道にて、春夏になれば、放ち飼ふ総角の心さへぞ、めざましき。

八月、野分荒かりし年、廊どもも倒れ伏し、下の屋どもの、はかなき板葺なりしなどは、骨のみわづかに残りて、立ちとまる下衆だになし。煙絶えて、あはれにいみじきこと多かり。

盗人などいふひたぶる心ある者も、思ひやりの寂しければにや、この宮をば不要のものに踏み過ぎて、寄り来ざりければ、かくいみじき野良、藪なれども、さすがに寝殿のうちばかりは、ありし御しつらひ変らず、つややかに掻い掃きなどする人もなし。塵は積もれど、紛るることなきうるはしき御住まひにて、明かし暮らしたまふ。

はかなき古歌、物語などやうのすさびごとにてこそ、つれづれをも紛らはし、かかる住まひをも思ひ慰むるわざなめれ、さやうのことにも心遅くものしたまふ。わざと好ましからねど、おのづからまた急ぐことなきほどは、同じ心なる文通はしなどうちしてこそ、若き人は木草につけても心を慰めたまふべけれど、親のもてかしづきたまひし御心掟のままに、世の中をつつましきものに思して、まれにも言通ひたまふべき御あたりをも、さらに馴れたまはず、古りにたる御厨子開けて、『唐守』、『藐姑射の刀自』、『かぐや姫の物語』の絵に描きたるをぞ、

ぬもありて、月日に従ひては、上下人数少なくなりゆく。

もとより荒れたりし宮の内、いとど狐の棲みかになりて、うとましよう、気遠き木立に、梟の声を朝夕に耳ならしつ、人気にこそ、さやうのものもせかれ、て影隠しけれ、木霊など、けしからぬものども、所得て、やうやう形を現はし、ものわびしきことのみ数知らぬに、まれまれ残りてさぶらふ人は、

「なほ、いとわりなし。この受領どもの、おもしろき家造り好むが、この宮の木立を心につけて、放ちたまはせてむやと、ほとりにつきて、案内し申さずるを、さやうにせさせたまひて、いとかう、もの恐ろしからぬ御住まひに、思し移ろはなむ。立ちとまりさぶらふ人も、いと堪へがたし」

など聞こゆれど、

「あな、いみじや。人の聞き思はむこともあり。生ける世に、しか名残なきわぎ、いかがせむ。かく恐ろしげに荒れ果てぬれど、親の御影とまりたる心地する古き住みかと思ふに、慰みてこそあれ」

と、うち泣きつつ、思しもかけず。

御調度どもを、いと古代になれたるが、昔やうにてうるはしきを、なまものゆゑ知らむと思へる人、さるもの要じて、わぎとその人かの人にせさせたまへると尋ね聞きて、案内するも、おのづからかかる貧しきあたりと思ひあなづりて言ひ来るを、例の女ばら、

「いかがはせむ。そこそは世の常のこと」

とて、取り紛らはしつ、目に近き今日明日の見苦しさを繕はむとする時もあるを、いみじう諫めたまひて、

「見よと思ひたまひてこそ、しおかせたまひけめ。などてか、軽々しき人の家の飾りとはなきむ。亡き人の御本意違はむが、あはれなること」

とのたまひて、さるわぎはせさせたまはず。

藻塩垂れつつわびたまひしころほひ、都にも、さまざまに思し嘆く人多かりしを、さても、わが御身の抛り所あるは、一方の思ひこそ苦しげなりしか、二条の上なども、のどやかにて、旅の御住みかをもおぼつかなからず、聞こえ通ひたまひつつ、位を去りたまへる仮の御よそひをも、竹の子の世の憂き節を、時々につけてあつかひきこえたまふに、慰めたまひけむ、なかなか、その数と人にも知られず、立ち別れたまひしほどの御ありさまをも、よそのことに思ひやりたまふ人びとの、下の心くだきたまふたぐひ多かり。

常陸宮の君は、父親王の亡せたまひにし名残に、また思ひあつかふ人もなき御身にて、いみじう心細げなりしを、思ひかけぬ御ことの出で来て、訪らひきこえたまふこと絶えざりしを、いかめしき御勢にこそ、ことにもあらず、はかなきほどの御情けばかりと思したりしかど、待ち受けたまふ袂の狭きに、大空の星の光を盪の水に映したる心地して過ぐしたまひしほどに、かかる世の騒ぎ出で来て、なべての世憂く思し乱れしまぎれに、わざと深からぬ方の心ざしはうち忘れたるやうにて、遠くおはしましにしのち、ふりはへてもえ尋ねきこえたまはず。その名残に、しばしは、泣く泣くも過ぐしたまひしを、年月経るままに、あはれにさびしき御ありさまなり。

古き女ばらなどは、

「いでや、いと口惜しき御宿世なりけり。おぼえず神仏の現はれたまへらむやうなりし御心ばへに、かかるよすがも人は出でおはするものなりけりと、ありがたう見たてまつりしを、おほかたの世の事といひながら、また頼む方なき御ありさまこそ、悲しけれ」

と、つぶやき嘆く。さる方にありつきたりしあなたの年ごろは、いふかひなきさびしさに目なれて過ぐしたまふを、なかなかすこし世づきてならひにける年月に、いと堪へがたく思ひ嘆くべし。すこしも、さてありぬべき人びとは、おのづから参りつきてありしを、皆次々に従ひて行き散りぬ。女ばらの命堪へ

蓬 生

蓬

生

と、聞こえ知らせたまへば、うれしきことに思して、御渡りのことをいそぎたまふ。

入道の宮、兵部卿宮の、姫君をいつしかとかしづき騒ぎたまふめるを、「大臣の隙ある仲にて、いかがもてなしたまはむ」と、心苦しく思す。

権中納言の御女は、弘徽殿の女御と聞こゆ。大殿の御子にて、いとよそほしうもてかしづきたまふ。主上もよき御遊びがたきに思いたり。

「宮の中の君も同じほどにおはすれば、うたて雛遊びの心地すべきを、おとなしき御後見は、いとうれしかべいこと」

と思しのたまひて、さる御けしき聞こえたまひつつ、大臣のよろづに思し至らぬことなく、公方の御後見はさらにもいはず、明け暮れにつけて、こまかなる御心ばへの、いとあはれに見えたまふを、頼もしきものに思ひきこえたまひて、いとあつしくのみおはしませば、参りなどしたまひても、心やすくさぶらひたまふこともかたきを、すこしおとなびて、添ひさぶらはむ御後見は、かならずあるべきことなりけり。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

大臣、聞きたまひて、「院より御けしきあらむを、引き違へ、横取りたまはむを、かたじけなきこと」と思すに、人の御ありさまのいとらうたげに、見放たむはまた口惜しうて、入道の宮にぞ聞こえたまひける。

「かうかうのことをなむ、思うたまへわづらふに、母御息所、いと重々しく心深きさまにものしはべりしを、あぢきなき好き心にまかせて、さるまじき名をも流し、憂きものに思ひ置かれはべりにしをなむ、世にいとほしく思ひたまふる。この世にて、その恨みの心とけず過ぎはべりにしを、今はとなりての際に、この齋宮の御ことをなむ、ものせられしかば、さも聞き置き、心にも残すまじうこそは、さすがに見おきたまひけめ、と思ひたまふるにも、忍びがたう。おほかたの世につけてだに、心苦しきことは見聞き過ぐされぬわざにはべるを、いかで、なき蔭にても、かの恨み忘るばかり、と思ひたまふるを、内にも、さこそおとなびさせたまへど、いときなき御齡におはしますを、すこし物の心知る人はさぶらはれてもよくやと思ひたまふるを、御定めに」

など聞こえたまへば、

「いとよう思し寄りけるを、院にも、思さむことは、げにかたじけなう、いとほしかるべけれど、かの御遺言をかこちて、知らず顔に参らせたてまつりたまへかし。今はた、さやうのこと、わざとも思しとどめず、御行なひがちになりたまひて、かう聞こえたまふを、深うしも思しとがめじと思ひたまふる」

「さらば、御けしきありて、数まへさせたまはば、もよほしばかりの言を、添ふるになしはべらむ。とぎまかうぎまに、思ひたまへ残すことなきに、かくまでさばかりの心構へも、まねびはべるに、世人やいかにとこそ、憚りはべれ」

など聞こえたまで、後には、「げに、知らぬやうにて、ここに渡したてまつりてむ」と思す。

女君にも、しかなむ思ひ語らひきこえて、

「過ぐいたまはむに、いとよきほどなるあはひならむ」

と思すも、うちとくべき御親心にはあらずやありけむ。

わが御心も定めがたければ、かく思ふといふことも、人にも漏らしたまはず。御わざなどの御ことをも取り分きてせさせたまへば、ありがたき御心を、宮人もよろこびあへり。

はかなく過ぐる月日に添へて、いとどさびしく、心細きことのみまさるに、さぶらふ人びとも、やうやうあかれ行きなどして、下つ方の京極わたりなれば、人気遠く、山寺の入相の声々に添へても、音泣きがちにてぞ、過ぐしたまふ。同じき御親と聞こえしなにも、片時の間も立ち離れたてまつりたまはで、ならはしたてまつりたまひて、齋宮にも親添ひて下りたまふことは、例なきことなるを、あながちに誘ひきこえたまひし御心に、限りある道にては、たぐひきこえたまはずなりにしを、干る世なう思し嘆きたり。

さぶらふ人びと、貴きも賤しきもあまたあり。されど、大臣の、「御乳母たちだに、心にまかせたること、引き出だし仕うまつるな」

など、親がり申したまへば、「いと恥づかしき御ありさまに、便なきこと聞こし召しつけられじ」と言ひ思ひつつ、はかなきことの情けも、さらにつくらず。

院にも、かの下りたまひし大極殿のいつかしかりし儀式に、ゆゆしきまで見えたまひし御容貌を、忘れがたう思しおきければ、

「参りたまひて、齋院など、御はらからの宮々おはしますたぐひにて、さぶらひたまへ」

と、御息所にも聞こえたまひき。されど、「やむごとなき人びとさぶらひたまふに、数々なる御後見もなくてや」と思しつづみ、「主上は、いとあつしうおはしますも恐ろしう、またもの思ひや加へたまはむ」と、憚り過ぐしたまひしを、今は、まして誰かは仕うまつらむと、人びと思ひたるを、ねむごろに院には思しのためはせけり。

と責めきこゆれば、鈍色の紙の、いと香ばしう艶なるに、墨つきなど紛らはして、

「消えがてにふるぞ悲しきかきくらし

わが身それとも思ほえぬ世に」

つつまじげなる書きざま、いとおほどかに、御手すぐれてはあらねど、らうたげにあてはかなる筋に見ゆ。

下りたまひしほどより、なほあらず思したりしを、「今は心にかけて、ともかくも聞こえ寄りぬべきぞかし」と思すには、例の、引き返し、

「いとほしくこそ。故御息所の、いとうしろめたげに心おきたまひしを。ことわりなれど、世の中の人も、さやうに思ひ寄りぬべきことなるを、引き違へ、心清くてあつかひきこえむ。主上の今すこしもの思し知る齢にならせたまひなば、内住みせさせたまつりて、さうぎうしきに、かしづきぐさにこそ」と思しなる。

いとまめやかにねむごろに聞こえたまひて、さるべき折々は渡りなどしたまふ。

「かたじけなくとも、昔の御名残に思しなずらへて、気遠からずもてなさせたまはばなむ、本意なる心地すべき」

など聞こえたまへど、わりなくもの恥ぢをしたまふ奥まりたる人ざまにて、ほのかにも御声など聞かせたまつらむは、いと世になくめづらかなることと思したれば、人びとも聞こえわづらひて、かかる御心ざまを愁へきこえあへり。

「女別当、内侍などいふ人びと、あるは、離れたてまつらぬわかむどほりなどにて、心ばせある人々多かるべし。この、人知れず思ふ方のまじらひをせさせたまつらむに、人に劣りたまふまじかめり。いかでさやかに、御容貌を見てしがな」

七、八日ありて亡せたまひにけり。あへなう思さるるに、世もいとほかなくて、もの心細く思されて、内へも参りたまはず、とかくの御ことなど掟てさせたまふ。また頼もしき人もことにおはせざりけり。古き齋宮の宮司など、仕うまつり馴れたるぞ、わづかにことども定めける。

御みづからも渡りたまへり。宮に御消息聞こえたまふ。

「何ごともおぼえはべらでなむ」

と、女別当して、聞こえたまへり。

「聞こえさせ、のたまひ置きしこともはべしを、今は、隔てなきさまに思されば、うれしくなむ」

と聞こえたまひて、人びと召し出でて、あるべきことども仰せたまふ。いと頼もしげに、年ごろの御心ばへ、取り返しつべう見ゆ。いといかめしう、殿の人びと、数もなう仕うまつらせたまへり。あはれにうち眺めつつ、御精進にて、御簾下ろしこめて行はせたまふ。

宮には、常に訪らひきこえたまふ。やうやう御心静まりたまひては、みづから御返りなど聞こえたまふ。つつましう思したれど、御乳母など、「かたじけなし」と、そそのかしきこゆるなりけり。

雪、霽、かき乱れ荒るる日、「いかに、宮のありさま、かすかに眺めたまふらむ」と思ひやりきこえたまひて、御使たてまつれたまへり。

「ただ今の空を、いかに御覧ずらむ。

降り乱れひまなき空に亡き人の

天翔るらむ宿ぞ悲しき」

空色の紙の、曇らはしきに書いたまへり。若き人の御目にとどまるばかりと、心してつくろひたまへる、いと目もあやなり。

宮は、いと聞こえにくくしたまへど、これかれ、

「人づてには、いと便なきこと」

火影に、御髪いとをかしげにはなやかにそぎて、寄りゐたまへる、絵に描きたらむさまして、いみじうあはれなり。帳の東面に添ひ臥したまへるぞ、宮ならむかし。御几帳のしどけなく引きやられたるより、御目とどめて見通したまへれば、頬杖つきて、いともの悲しと思いたるさまなり。はつかなれど、いとうつくしげならむと見ゆ。

御髪のかかりたるほど、頭つき、けはひ、あてに気高きものから、ひちちかに愛敬づきたまへるけはひ、しるく見えたまへば、心もとなくゆかしきにも、「さばかりのたまふものを」と、思し返す。

「いと苦しきさまよりはべる。かたじけなきを、はや渡らせたまひね」とて、人にかき臥せられたまふ。

「近く参り来たるしるしに、よろしう思さればうれしかるべきを、心苦しきわざかな。いかに思さるるぞ」

とて、覗きたまふけしきなれば、

「いと恐ろしげにはべるや。乱り心地のいとかく限りなる折しも渡らせたまへるは、まことに浅からずなむ。思ひはべることを、すこしも聞こえさせつれば、さりともと、頼もしくなむ」

と聞こえさせたまふ。

「かかる御遺言の列に思しけるも、いとどあはれになむ。故院の御子たち、あまたものしたまへど、親しくむつび思ほすも、をさをさなきを、主上の同じ御子たちのうちに数まへきこえたまひしかば、さこそは頼みきこえはべらめ。すこしおとなしきほどになりぬる齢ながら、あつかふ人もなければ、さうざうしきを」

など聞こえて、帰りたまひぬ。御訪らひ、今すこしたちまさりて、しばしば聞こえたまふ。

も、いたう弱りたまへるけはひなれば、「絶えぬ心ぎしのほどは、え見えたてまつらでや」と、口惜しうて、いみじう泣いたまふ。

かくまでも思しとどめたりけるを、女も、よろづにあはれに思して、齋宮の御ことをぞ聞こえたまふ。

「心細くてとまりたまはむを、かならず、ことに触れて数まへきこえたまへ。また見ゆづる人もなく、たぐひなき御ありさまになむ。かひなき身ながらも、今しばし世の中を思ひのどむるほどは、とぎまかうさまにものを思し知るまで、見たてまつらむことこそ思ひたまへつれ」

とても、消え入りつつ泣いたまふ。

「かかる御ことなくてだに、思ひ放ちきこえさすべきにもあらぬを、まして、心の及ばむに従ひては、何ごとも後見きこえむとなむ思うたまふる。さらに、うしろめたくな思ひきこえたまひそ」

など聞こえたまへば、

「いとかたきこと。まことにうち頼むべき親などにて、見ゆづる人だに、女親に離れぬるは、いとあはれなることにこそはべるめれ。まして、思ほし人めかさむにつけても、あぢきなき方やうち交り、人に心も置かれたまはむ。うたである思ひやりごとなれど、かけてさやうの世づいたる筋に思し寄るな。憂き身を抓みはべるにも、女は、思ひの外にても思ひを添ふるものになむはべりければ、いかでさる方をもて離れて、見たてまつらむと思うたまふる」

など聞こえたまへば、「あいなくものたまふかな」と思せど、

「年ごろに、よろづ思うたまへ知りにたるものを、昔の好き心の名残あり顔にのたまひなすも本意なくなむ。よし、おのづから」

とて、外は暗うなり、内は大殿油のほのかにもものより通りて見ゆるを、「もしもや」と思して、やをら御几帳のほころびより見たまへば、心もとなきほどの

へむことをぞのたまへる。

「いと頼もしげに、数まへのたまふめれど、いさや、また、島漕ぎ離れ、中空に心細きことやあらむ」

と、思ひわづらふ。

入道も、さて出だし放たむは、いとうしろめたう、さりとて、かく埋もれ過ぐさむを思はむも、なかなか来し方の年ごろよりも、心尽くしなり。よろづにつつましう、思ひ立ちがたきことを聞こゆ。

まことや、かの齋宮も替はりたまひにしかば、御息所上りたまひてのち、変はらぬさまに何ごとも訪らひきこえたまふことは、ありがたきまで、情けを尽くしたまへど、「昔だにつれなかりし御心ばへの、なかなかならむ名残は見じ」と、思ひ放ちたまへれば、渡りたまひなどすることはことになし。

あながちに動かしきこえたまひても、わが心ながら知りがたく、とかくかかづらはむ御歩きなども、所狭う思しなりにたれば、強ひたるさまにもおはせず。

齋宮をぞ、「いかにねびなりたまひぬらむ」と、ゆかしう思ひきこえたまふ。なほ、かの六条の旧宮をいとよく修理しつくりひたりければ、みやびかにて住みたまひけり。よしづきたまへること、旧りがたくて、よき女房など多く、好いたる人の集ひ所にて、ものさびしきやうなれど、心やれるさまにて経たまふほどに、にはかに重くわづらひたまひて、もののいと心細く思されければ、罪深き所ほとりに年経つるも、いみじう思して、尼になりたまひぬ。

大臣、聞きたまひて、かけかけしき筋にはあらねど、なほさる方のものをも聞こえあはせ、人に思ひきこえつるを、かく思しなりにけるが口惜しうおぼえたまへば、おどろきながら渡りたまへり。飽かずあはれなる御訪らひ聞こえたまふ。

近き御枕上に御座よそひて、脇息におしかかりて、御返りなど聞こえたまふ

御車とどむる所にてたてまつれり。「をかし」と思して、畳紙に、

「みをつくし恋ふるしるしにここまで

めぐり逢ひけるえには深しな」

とて、たまへれば、かしの心知れる下人して遣りけり。駒並めて、うち過ぎたまふにも、心のみ動くに、露ばかりなれど、いとあはれにかたじけなくおぼえて、うち泣きぬ。

「数ならで難波のこともかひなきに

などみをつくし思ひそめけむ」

田蓑の島に御禊仕うまつる、御祓への物につけてたてまつる。日暮れ方になりゆく。

夕潮満ち来て、入江の鶴も声惜しまぬほどのあはれなる折からなればにや、人目もつつまず、あひ見まほしくさへ思さる。

「露けきの昔に似たる旅衣

田蓑の島の名には隠れず」

道のままに、かひある逍遙遊びののしりたまへど、御心にはなほかかりて思しやる。遊女どもの集ひ参れる、上達部と聞こゆれど、若やかにこと好ましげなるは、皆、目とどめたまふべかめり。されど、「いでや、をかしきことも、ものあはれも、人からこそあべけれ。なのめなることをだに、すこしあはき方に寄りぬるは、心とどむるたよりもなきものを」と思すに、おのが心をやりて、よしめきあへるも疎ましう思しけり。

か人は、過ぐしきこえて、またの日ぞ吉ろしかりければ、御幣たてまつる。ほどにつけたる願どもなど、かつがつ果たしける。また、なかなかもの思ひ添はりて、明け暮れ、口惜しき身を思ひ嘆く。

今や京におはし着くらむと思ふ日数も経ず、御使あり。このころのほどに迎

へをだにせむ」

とて、漕ぎ渡りぬ。

君は、夢にも知りたまはず、夜一夜、いろいろのことをせさせたまふ。まことに、神の喜びたまふべきことを、し尽くして、来し方の御願にもうち添へ、ありがたきまで、遊びののしり明かしたまふ。

惟光やうの人は、心のうちに神の御徳をあはれにめでたしと思ふ。あからさまに立ち出でたまへるに、さぶらひて、聞こえ出でたり。

「住吉の松こそものはかなしけれ

神代のことをかけて思へば」

げに、と思し出でて、

「荒かりし波のまよひに住吉の

神をばかけて忘れやはする

験ありな」

とのたまふも、いとめでたし。

かの明石の舟、この響きに圧されて、過ぎぬることも聞こゆれば、「知らざりけるよ」と、あはれに思す。神の御するべを思し出づるも、おろかならねば、「いささかなる消息をだにして、心慰めばや。なかなか思ふらむかし」と思す。

御社立ちたまで、所々に逍遙を尽くしたまふ。難波の御祓へ、七瀬によそほしう仕まつる。堀江のわたりを御覧じて、

「今はた同じ難波なる」

と、御心にもあらで、うち誦じたまへるを、御車のもと近き惟光、うけたまはりやしつらむ、さる召しもやと、例にならひて懐にまうけたる柄短き筆など、

るに、何の罪深き身にて、心にかけておぼつかなく思ひきこえつつ、かかりける御響きをも知らず、立ち出でつらむ」

など思ひ続くるに、いと悲しうて、人知れずしほたれけり。

松原の深緑なるに、花紅葉をこき散らしたると見ゆる表の衣の、濃き薄き、数知らず。六位のなかにも蔵人は青色しるく見えて、かの賀茂の瑞垣恨みし右近将監も鞆負になりて、ことごとしげなる隨身具したる蔵人なり。

良清も同じ佐にて、人よりことにも思ひなきけしきにて、おどろおどろしき赤衣姿、いときよげなり。

すべて見し人びと、引き変へはなやかに、何ごと思ふらむと見えて、うち散りたるに、若やかなる上達部、殿上人の、我も我もと思ひいどみ、馬鞍などまで飾りを整へ磨きたまへるは、いみじき物に、田舎人も思へり。

御車を遙かに見やれば、なかなか、心やましくて、恋しき御影をもえ見たてまつらず。河原大臣の御例をまねびて、童隨身を賜りたまひける、いとをかしげに装束き、みづら結ひて、紫裾濃の元結なまめかしう、丈姿ととのひ、うつくしげにて十人、さまことに今めかしう見ゆ。

大殿腹の若君、限りなくかしづき立てて、馬添ひ、童のほど、皆作りあはせて、やう変へて装束きわけたり。

雲居遙かにめでたく見ゆるにつけても、若君の数ならぬさまにてもものしたまふを、いみじと思ふ。いよいよ御社の方を拝みきこゆ。

国の守参りて、御まうけ、例の大臣などの参りたまふよりは、ことに世になく仕うまつりけむかし。

いとほしたなければ、

「立ち交じり、数ならぬ身の、いささかのことせむに、神も見入れ、数まへたまふべきにもあらず。帰らむにも中空なり。今日は難波に舟さし止めて、祓

思し憚りたまひしことを、大臣は憂きものに思しおきて、昔のやうにもむつびきこえたまはず。

なべての世には、あまねくめでたき御心なれど、この御あたりは、なかなか情けなき節も、うち交ぜたまふを、入道の宮は、いとほしう本意なきことに見たてまつりたまへり。

世の中のこと、ただなかばを分けて、太政大臣、この大臣の御ままなり。

権中納言の御女、その年の八月に参らせたまふ。祖父殿るたちて、儀式などいとあらまほし。

兵部卿宮の中の君も、さやうに心ざしてかしづきたまふ名高きを、大臣は、人よりまさりたまへとしも思さずなむありける。いかがしたまはむとすらむ。

その秋、住吉に詣でたまふ。願ども果たしたまふべければ、いかめしき御ありきにて、世の中ゆすりて、上達部、殿上人、我も我もと仕うまつりたまふ。折しも、かの明石の人、年ごとの例のことにて詣づるを、去年今年は障ることありて、おこたりける、かしこまり取り重ねて、思ひ立ちけり。

舟にて詣でたり。岸にさし着くるほど、見れば、ののしりて詣でたまふ人のけはひ、渚に満ちて、いつくしき神宝を持て続けたり。楽人、十列など、装束をととのへ、容貌を選びたり。

「誰が詣でたまへるぞ」

と問ふめれば、

「内大臣殿の御願果たしに詣でたまふを、知らぬ人もありけり」

とて、はかなきほどの下衆だに、心地よげにうち笑ふ。

「げに、あさましよう、月日もこそあれ。なかなか、この御ありさまを遙かに見るも、身のほど口惜しうおぼゆ。さすがに、かけ離れたてまつらぬ宿世ながら、かく口惜しき際の者だに、もの思ひなげにて、仕うまつるを色節に思ひた

を思ひ絶えたり。

心やすき殿造りしては、「かやうの人集へても、思ふさまにかしづきたまふべき人も出でものしたまはば、さる人の後見にも」と思す。

かの院の造りざま、なかなか見どころ多く、今めいたり。よしある受領などを選びて、当て当てに催したまふ。

尚侍の君、なほえ思ひ放ちきこえたまはず。こりずまに立ち返り、御心ばへもあれど、女は憂きに懲りたまひて、昔のやうにもあひしらへきこえたまはず。なかなか、所狭う、さうぎうしう世の中、思さる。

院はのどやかに思しなりて、時々につけて、をかしき御遊びなど、好ましげにておはします。女御、更衣、みな例のごときぶらひたまへど、春宮の御母女御のみぞ、とり立てて時めきたまふこともなく、尚侍の君の御おぼえにおし消たれたまへりしを、かく引き変へ、めでたき御幸ひにて、離れ出でて宮に添ひたてまつりたまへる。

この大臣の御宿直所は、昔の淑景舎なり。梨壺に春宮はおはしませば、近隣の御心寄せに、何ごとも聞こえ通ひて、宮をも後見たてまつりたまふ。

入道後の宮、御位をまた改めたまふべきならねば、太上天皇になずらへて、御封賜らせたまふ。院司どもなりて、さまことにいつくし。御行なひ、功德のことを、常の御いとなみにておはします。年ごろ、世に憚りて出で入りも難く、見たてまつりたまはぬ嘆きをいぶせく思しけるに、思すさまにて、参りまかたたまふもいとめでたければ、大后は、「憂きものは世なりけり」と思し嘆く。

大臣はことに触れて、いと恥づかしげに仕まつり、心寄せきこえたまふも、なかなかいとほしげなるを、人もやすからず、聞こえけり。

兵部卿親王、年ごろの御心ばへのつらく思はずにて、ただ世の聞こえをのみ

ふべきならねば、心やすげなり。年ごろに、いよいよ荒れまさり、すごげにておはす。

女御の君に御物語聞こえたまひて、西の妻戸に夜更かして立ち寄りたまへり。月おぼろにさし入りて、いとど艶なる御ふるまひ、尽きもせず見えたまふ。いとどつつましけれど、端近うち眺めたまひけるさまながら、のどやかにてものしたまふけはひ、いとめやすし。水鶏のいと近う鳴きたるを、

「水鶏だにおどろかさずはいかにして

荒れたる宿に月を入れまし」

と、いとなつかしう、言ひ消ちたまへるぞ、

「とりどりに捨てがたき世かな。かかるこそ、なかなか身も苦しけれ」と思す。

「おしなべてたたく水鶏におどろかば

うはの空なる月もこそ入れ

うしろめたう」

とは、なほ言に聞こえたまへど、あだあだしき筋など、疑はしき御心ばへにはあらず。年ごろ、待ち過ぐしきこえたまへるも、さらにおろかには思されざりけり。「空な眺めそ」と、頼めきこえたまひし折のことも、のたまひ出でて、

「などで、たぐひあらじと、いみじうものを思ひ沈みけむ。憂き身からは、同じ嘆かしきにこそ」

とのたまへるも、おいらかにらうたげなり。例の、いづこの御言の葉にかあらむ、尽きせず語らひ慰めきこえたまふ。

かやうのついでにも、五節を思し忘れず、「また見てしがな」と、心にかけたまへれど、いとかたきことにて、え紛れたまはず。

女、もの思ひ絶えぬを、親はよろづに思ひ言ふこともあれど、世に経むこと

と、思ひ続けられるれど、「乳母のことはいかに」など、こまやかに訪らはせたまへるも、かたじけなく、何ごとも慰めけり。

御返りには、

「数ならぬみ島隠れに鳴く鶴を

今日もいかにと問ふ人ぞなき

よろづに思うたまへ結ばほるるありさまを、かくたまさかの御慰めにかけてはべる命のほども、はかなくなむ。げに、後ろやすく思うたまへ置くわざもがな」とまめやかに聞こえたり。

うち返し見たまひつつ、「あはれ」と、長やかにひとりごちたまふを、女君、しり目に見おこせて、

「浦よりをちに漕ぐ舟の」

と、忍びやかにひとりごち、眺めたまふを、

「まことは、かくまでとりなしたまふよ。こは、ただ、かばかりのあはれぞや。所のさまなど、うち思ひやる時々、来し方のこと忘れがたき独り言を、ようこそ聞き過ぎいたまはね」

など、恨みきこえたまひて、上包ばかりを見せたてまつらせたまふ。筆などのいとゆゑづきて、やむごとなき人苦しげなるを、「かかればなめり」と、思す。

かく、この御心とりたまふほどに、花散里などを離れ果てたまひぬるこそ、いとほしけれ。公事も繁く、所狭き御身に、思し憚るに添へても、めづらしく御目おどろくことのなきほど、思ひしづめたまふなめり。

五月雨つれづれなるころ、公私もの静かなるに、思し起こして渡りたまへり。よそながらも、明け暮れにつけて、よろづに思しやり訪らひきこえたまふを頼みにて、過ぐいたまふ所なれば、今めかしう心にくきさまに、そばみ恨みたま

と思す。「男君ならましかば、かうしも御心にかけてたまふまじきを、かたじけなういとほしう、わが御宿世も、この御ことにつけてぞかたほなりけり」と思さるる。

御使出だし立てたまふ。

「かならずその日違へずまかり着け」

とのたまへば、五日に行き着きぬ。思しやることも、ありがたうめでたきさまにて、まめまめしき御訪らひもあり。

「海松や時ぞともなき蔭にゐて

何のあやめもいかにわくらむ

心のおくがるるまでなむ。なほ、かくてはえ過ぐすまじきを、思ひ立ちたまひぬ。さりとも、うしろめたきことは、よも

と書いたまへり。

入道、例の、喜び泣きしてゐたり。かかる折は、生けるかひもつくり出でたる、ことわりなりと見ゆ。

ここにも、よろづ所狭きまで思ひ設けたりけれど、この御使なくは、闇の夜にてこそ暮れぬべかりけれ。乳母も、この女君のあはれに思ふやうなるを、語らひ人にて、世の慰めにしけり。をさをさ劣らぬ人も、類に触れて迎へ取りてあらずれど、こよなく衰へたる宮仕へ人などの、巖の中尋ぬるが落ち止まれるなどこそあれ、これは、こよなうこめき思ひあがり。

聞きどころある世の物語などして、大臣の君の御ありさま、世にかしづかれたまへる御おぼえのほども、女心地にまかせて限りなく語り尽くせば、げに、かく思し出づばかりの名残とどめたる身も、いとたけくやうやう思ひなりけり。御文ももろともに見て、心のうちに、

「あはれ、かうこそ思ひの外に、めでたき宿世はありけれ。憂きものはわが身こそありけれ」

「人がらのをかしかりしも、所からにや、めづらしうおぼえきかし」
など語りきこえたまふ。

あはれなりし夕べの煙、言ひしことなど、まほならねど、その夜の容貌ほの見し、琴の音のなまめきたりしも、すべて御心とまれるさまにのたまひ出づるにも、

「われはまたなくこそ悲しと思ひ嘆きしか、すさびにても、心を分けたまひけむよ」

と、ただならず、思ひ続けたまひて、「われは、われ」と、うち背き眺めて、「あはれなりし世のありさま」など、独り言のやうにうち嘆きて、

「思ふどちなびく方にはあらずとも

われぞ煙に先立ちなまし」

「何とか。心憂や。」

誰れにより世を海山に行きめぐり

絶えぬ涙に浮き沈む身ぞ

いでや、いかでか見えたてまつらむ。命こそかなひがたかべいものなめれ。はかなきことにて、人に心おかれじと思ふも、ただ一つゆるぎぞや」

とて、箏の御琴引き寄せて、掻き合せすさびたまひて、そそのかしきこえたまへど、かの、すぐれたりけむもねたきにや、手も触れたまはず。いとおほどかにうつくしう、たをやぎたまへるものから、さすがに執念きところつきて、もの怨じしたまへるが、なかなか愛敬づきて腹立ちなしたまふを、をかしう見どころありと思す。

「五月五日にぞ、五十日には当たるらむ」と、人知れず数へたまひて、ゆかしうあはれに思しやる。「何ごと、いかにかひあるさまにもてなし、うれしからまし。口惜しのわざや。さる所にしも、心苦しきさまにて、出で来たるよ」

らむとおぼえざりつるを、この御おきての、すこしもの思ひ慰めらるるにぞ、
頭もたげて、御使にも二なきさまの心ざしを尽くす。とく参りなむと急ぎ苦し
がれば、思ふことどもすこし聞こえ続けて、

「ひとりして撫づるは袖のほどなきに

覆ふばかりの蔭をしぞ待つ」

と聞こえたり。あやしきまで御心にかかり、ゆかしう思さる。

女君には、言にあらはしてをさをさ聞こえたまはぬを、聞きあはせたまふこ
ともこそ、と出して、

「さこそあなれ。あやしうねぢけたるわざなりや。さもおはせなむと思ふあ
たりには、心もとなくて、思ひの外に、口惜しくなむ。女にてあなれば、いと
こそものしけれ。尋ね知らでもありぬべきことなれど、さはえ思ひ捨つまじき
わざなりけり。呼びにやりて見せたてまつらむ。憎みたまふなよ」

と聞こえたまへば、面うち赤みて、

「あやしう、つねにかやうなる筋のたまひつくる心のほどこそ、われながら
疎ましけれ。もの憎みは、いつならふべきにか」

と怨じたまへば、いとよくうち笑みて、

「そよ。誰がならはしにかあらむ。思はずにぞ見えたまふや。人の心より外
なる思ひやりごととして、もの怨じなどしたまふよ。思へば悲し」

とて、果て果ては涙ぐみたまふ。年ごろ飽かず恋しと思ひきこえたまひし御
心のうちども、折々の御文の通ひなど思し出づるには、「よろづのこと、すさび
にこそあれ」と思ひ消たれたまふ。

「この人を、かうまで思ひやり言問ふは、なほ思ふやうのはべるぞ。まだき
に聞こえば、またひが心得たまふべければ」

とのたまひさして、

慕ひやしなまし」

とのたまへば、うち笑ひて、

「うちつけの別れを惜しむかことにて

思はむ方に慕ひやはせぬ」

馴れて聞こゆるを、いたしと思す。

車にてぞ京のほどは行き離れける。いと親しき人さし添へたまひて、ゆめ漏らすまじく、口がためたまひて遣はず。御佩刀、さるべきものなど、所狭きまで思しやらぬ隈なし。乳母にも、ありがたうこまやかなる御いたはりのほど、浅からず。

入道の思ひかしづき思ふらむありさま、思ひやるも、ほほ笑まれたまふこと多く、また、あはれに心苦しうも、ただこのことの御心にかかるも、浅からぬにこそは。御文にも、「おろかにもてなし思ふまじ」と、返す返すいましめたまへり。

「いつしかも袖うちかけむをとめ子が

世を経て撫づる岩の生ひ先」

津の国までは舟にて、それよりあなたは馬にて、急ぎ行き着きぬ。

入道待ちとり、喜びかしこまりきこゆること、限りなし。そなたに向きて拝みきこえて、ありがたき御心ばへを思ふに、いよいよいたはしう、恐ろしきまで思ふ。

稚児のいとゆゆしきまでうつくしうおはすること、たぐひなし。「げに、かしこき御心に、かしづききこえむと思したるは、むべなりけり」と見たてまつるに、あやしき道に出で立ちて、夢の心地しつる嘆きもさめにけり。いとうつくしうらうたうおぼえて、扱ひきこゆ。

子持ちの君も、月ごろものをのみ思ひ沈みて、いとど弱れる心地に、生きた

さる所に、はかばかしき人しもありがたからむを思して、故院にさぶらひし宣旨の娘、宮内卿の宰相にて亡くなりし人の子なりしを、母なども亡せて、かすかなる世に経けるが、はかなきさまにて子産みたりと、聞こしめしつけたるを、知る便りありて、ことのついでにまねびきこえける人召して、さるべきさまにのたまひ契る。

まだ若く、何心もなき人にて、明け暮れ人知れぬあばら家に、眺むる心細きなれば、深うも思ひたどらず、この御あたりのことをひとへにめでたう思ひきこえて、参るべきよし申させたり。いとあはれにかつは思して、出だし立てたまふ。

もののついでに、いみじう忍びまぎれておはしまいたり。さは聞こえながら、いかにせましと思ひ乱れけるを、いとかたじけなきに、よろづ思ひ慰めて、

「ただ、のたまはせむままだ」
と聞こゆ。吉ろしき日なりければ、急がし立てたまひて、

「あやしう、思ひやりなきやうなれど、思ふさま殊なることにてなむ。みづからもおぼえぬ住まひに結ばれたりし例を思ひよそへて、しばし念じたまへ」
など、ことのありやう詳しく語らひたまふ。

主上の宮仕へ時々せしかば、見たまふ折もありしを、いたう衰へにけり。家のさまも言ひ知らず荒れまどひて、さすがに、大きな所の、木立など疎ましげに、「いかで過ぐしつらむ」と見ゆ。人のさま、若やかにをかしければ、御覧じ放たれず。とかく戯れたまひて、

「取り返しつべき心地こそすれ。いかに」
とのたまふにつけても、「げに、同じうは、御身近うも仕うまつり馴れば、憂き身も慰みなまし」と見たてまつる。

「かねてより隔てぬ仲とならねど
別れは惜しきものにぞありける

まことや、「かの明石に、心苦しげなりしことはいかに」と、思し忘るる時なれば、公、私いそがしき紛れに、え思すままにも訪ひたまはざりけるを、三月朔日のほど、「このころや」と思しやるに、人知れずあはれにて、御使ありけり。とく帰り参りて、

「十六日になむ。女にて、たひらかにものしたまふ」

と告げきこゆ。めづらしきさまにてさへあなるを思すに、おろかならず。「などて、京に迎へて、かかることをもせさせざりけむ」と、口惜しう思さる。

宿曜に、

「御子三人。帝、后かならず並びて生まれたまふべし。中の劣りは、太政大臣にて位を極むべし」

と、勘へ申したりしこと、さしてかなふなめり。おほかた、上なき位に昇り、世をまつりごちたまふべきこと、さばかりかしこかりしあまたの相人どもの聞こえ集めたるを、年ごろは世のわづらはしきにみな思し消ちつるを、当帝のかく位にかなひたまひぬることを、思ひのごとうれしと思す。みづからも、「もて離れたまへる筋は、さらにあるまじきこと」と思す。

「あまたの皇子たちのなかに、すぐれてらうたきものに思したりしかど、ただ人に思しおきてける御心を思ふに、宿世遠かりけり。内のかくておはしますを、あらはに人の知ることならねど、相人の言むなしからず」

と、御心のうちに思しけり。今、行く末のあらましごとを思すに、

「住吉の神のしるべ、まことにかの人も世になべてならぬ宿世にて、ひがひがしき親も及びなき心をつかふにやありけむ。さるにては、かしこき筋にもなるべき人の、あやしき世界にて生まれたらむは、いとほしうかたじけなくもあるべきかな。このほど過ぐして迎へてむ」

と、思して、東の院、急ぎ造らすべきよし、もよほし仰せたまふ。

かしきことはべらじ」

と、受けひき申したまはず。「人の国にも、こと移り世の中定まらぬ折は、深き山に跡を絶えたる人だにも、治まれる世には、白髪も恥ぢず出で仕へけるをこそ、まことの聖にはしけれ。病に沈みて、返し申したまひける位を、世の中変はりてまた改めたまはむに、さらに咎あるまじう」、公、私定めらる。さる例もありければ、すまひ果てたまはで、太政大臣になりたまふ。御年も六十三にぞなりたまふ。

世の中すさまじきにより、かつは籠もりゐたまひしを、とりかへし花やぎたまへば、御子どもなど沈むやうにもしたまへるを、皆浮かびたまふ。とりわきて、宰相中将、権中納言になりたまふ。かの四の君の御腹の姫君、十二になりたまふを、内に参らせむとかしづきたまふ。かの「高砂」歌ひし君も、かうぶりせさせて、いと思ふさまなり。腹々に御子どもいとあまた次々に生ひ出でつつ、にぎははしげなるを、源氏の大臣は羨みたまふ。

大殿腹の若君、人よりことにうつくしうて、内、春宮の殿上したまふ。故姫君の亡せたまひにし嘆きを、宮、大臣、またさらに改めて思し嘆く。されど、おはせぬ名残も、ただこの大臣の御光に、よろづもてなされたまひて、年ごろ、思し沈みつる名残なきまで栄えたまふ。なほ昔に御心ばへ変はらず、折節ごとに渡りたまひなどしつつ、若君の御乳母たち、さらぬ人びとも、年ごろのほどまかで散らざりけるは、皆さるべきことに触れつつ、よすがつけむことを思しおきつるに、幸ひ人多くなりぬべし。

二条院にも、同じごと待ちきこえける人を、あはれなるものに思して、年ごろの胸あくばかりと思せば、中将、中務やうの人びとには、ほどほどにつけつつ情けを見えたまふに、御いとまなくて、他歩きもしたまはず。

二条院の東なる宮、院の御処分なりしを、二なく改め造らせたまふ。「花散里などやうの心苦しき人びと住ませむ」など、思し当てて繕はせたまふ。

のためには、今見出でたまひてむと思ふも、口惜しや。限りあれば、ただ人にてぞ見たまはむかし」

など、行く末のことをさへのたまはするに、いと恥づかしうも悲しうもおぼえたまふ。御容貌など、なまめかしうきよらにて、限りなき御心ざしの年月に添ふやうにもてなさせたまふに、めでたき人なれど、さしも思ひたまへらざりしけしき、心ばへなど、もの思ひ知られたまふままに、「などて、わが心の若くいはけなきにまかせて、さる騒ぎをさへ引き出でて、わが名をばさらにもいはず、人の御ためさへ」など思し出づるに、いと憂き御身なり。

明くる年の如月に、春宮の御元服のことあり。十一になりたまへど、ほどよりに大きに、おとなしうきよらにて、ただ源氏の大納言の御顔を二つに写したらむやうに見えたまふ。いとまばゆきまで光りあひたまへるを、世人めでたきものに聞こゆれど、母宮、いみじうかたはらいたきことに、あいなく御心を尽くしたまふ。

内にも、めでたしと見たてまつりたまひて、世の中譲りきこえたまふべきことなど、なつかしう聞こえ知らせたまふ。

同じ月の二十余日、御国譲りのことにはかなれば、太后思しあわてたり。

「かひなきさまながらも、心のどかに御覧ぜらるべきことを思ふなり」

とぞ、聞こえ慰めたまひける。

坊には承香殿の皇子ゐたまひぬ。世の中改まりて、引き変へ今めかしきことも多かり。源氏の大納言、内大臣になりたまひぬ。数定まりて、くつろぐ所もなかりければ、加はりたまふなりけり。

やがて世の政事をしたまふべきなれど、「さやうの事しげき職には堪へずなむ」とて、致仕の大臣、摂政したまふべきよし、譲りきこえたまふ。

「病によりて、位を返したてまつりてしを、いよいよ老のつもり添ひて、さ

さやかに見えたまひし夢の後は、院の帝の御ことを心にかけてきこえたまひて、「いかで、かの沈みたまふらむ罪、救ひたてまつることをせむ」と、思し嘆きけるを、かく帰りたまひては、その御急ぎしたまふ。神無月に御八講したまふ。世の人なびき仕うまつること、昔のやうなり。

大后、御悩み重くおはしますうちにも、「つひにこの人をえ消たずなりなむ」とと、心病み思しけれど、帝は院の御遺言を思ひきこえたまふ。ものの報いありぬべく思しけるを、直し立てたまひて、御心地涼しくなむ思しける。時々おこり悩ませたまひし御目も、さはやぎたまひぬれど、「おほかた世にえ長くあるまじう、心細きこと」とのみ、久しからぬことを思しつつ、常に召しありて、源氏の君は参りたまふ。世の中のことなども、隔てなくのたまはせつつ、御本意のやうなれば、おほかたの世の人も、あいなく、うれしきことに喜びきこえける。

下りみなむの御心づかひ近くなりぬるにも、尚侍、心細げに世を思ひ嘆きたまひつる、いとあはれに思されけり。

「大臣亡せたまひ、大宮も頼もしげなくのみ篤いたまへるに、我が世残り少なき心地するになむ、いといとほしう、名残なきさまにてとまりたまはむとすらむ。昔より、人には思ひ落としたまへれど、みづからの心ざしのまたなきならひに、ただ御ことのみなむ、あはれにおぼえける。立ちまさる人、また御本意ありて見たまふとも、おろかならぬ心ざしはしも、なずらはざらむと思ふさへこそ、心苦しけれ」

とて、うち泣きたまふ。

女君、顔はいと赤く匂ひて、こぼるばかりの御愛敬にて、涙もこぼれぬるを、よろづの罪忘れて、あはれにらうたしと御覽ぜらる。

「などか、御子をだに持たまへるまじき。口惜しうもあるかな。契り深き人

滯 標

滯

標

かの帥の娘五節、あいなく、人知れぬもの思ひさめぬる心地して、まくなぎ
つくらせてさし置かせけり。

「須磨の浦に心を寄せし舟人の

やがて朽たせる袖を見せばや」

「手などこよなくまさりにけり」と、見おほせたまひて、遣はず。

「帰りてはかことやせまし寄せたりし

名残に袖の干がたかりしを」

「飽かずをかし」と思しし名残なれば、おどろかされたまひて、いどと思し
出づれど、このごろは、さやうの御振る舞ひ、さらにつつみたまふめり。

花散里などにも、ただ御消息などばかりにて、おぼつかなく、なかなか恨め
しげなり。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

出でおはします。御心地、例ならで、日ごろ経させたまひければ、いたう衰へさせたまへるを、昨日今日ぞ、すこしよろしう思されける。御物語しめやかにありて、夜に入りぬ。

十五夜の月おもしろう静かなるに、昔のこと、かき尽くし思し出でられて、しほたれさせたまふ。もの心細く思さるるなるべし。

「遊びなどもせず、昔聞きし物の音なども聞かで、久しうなりにけるかな」とのたまはするに、

「わたつ海にしなえうらぶれ蛭の児の

脚立たざりし年は経にけり」

と聞こえたまへり。いとあはれに心恥づかしう思されて、

「宮柱めぐりあひける時しあれば

別れし春の恨み残すな」

いとなまめかしき御ありさまなり。

院の御ために、八講行はるべきこと、まづ急がせたまふ。春宮を見たてまつりたまふに、こよなくおよすげさせたまひて、めづらしう思しよろこびたるを、限りなくあはれと見たてまつりたまふ。御才もこよなくまさらせたまひて、世をたもたせたまはむに、憚りあるまじく、かしこく見えさせたまふ。

入道の宮にも、御心すこし静めて、御対面のほどにも、あはれなることどもあらむかし。

まことや、かの明石には、返る波に御文遣はす。ひき隠してこまやかに書きたまふめり。

「波のよるよるいかに、

嘆きつつ明石の浦に朝霧の

立つやと人を思ひやるかな」

君は、難波の方に渡りて御被へしたまひて、住吉にも、平らかにて、いろいろの願果たし申すべきよし、御使して申させたまふ。にはかに所狭うて、みづからはこのたびえ詣でたまはず、ことなる御逍遥などなくて、急ぎ入りたまひぬ。

二条院におはしまし着きて、都の人も、御供の人も、夢の心地して行き合ひ、喜び泣きどもゆゆしきまで立ち騒ぎたり。

女君も、かひなきものに思し捨てつる命、うれしう思さるらむかし。いとうつくしげにねびととのほりて、御もの思ひのほどに、所狭かりし御髪のすこしへがれたるしも、いみじうめでたきを、「今はかくて見るべきぞかし」と、御心落ちるるにつけては、また、かの飽かず別れし人の思へりしさま、心苦しう思しやらる。なほ世とともに、かかる方にて御心の暇ぞなきや。

その人のことどもなど聞こえ出でたまへり。思し出でたる御けしき浅からず見ゆるを、ただならずや見たてまつりたまふらむ、わざとならず、「身をば思はず」など、ほのめかしたまふぞ、をかしうらく思ひきこえたまふ。かつ、「見るにだに飽かぬ御さまを、いかで隔てつる年月ぞ」と、あさましきまで思ほすに、取り返し、世の中もいと恨めしうなむ。

ほどもなく、元の御位あらたまりて、員より外の権大納言になりたまふ。次々の人も、さるべき限りは元の官返し賜はり、世に許さるるほど、枯れたりし木の春にあへる心地して、いとめでたげなり。

召しありて、内に参りたまふ。御前にさぶらひたまふに、ねびまごりて、「いかで、さるものむつかしき住まひに年経たまひつらむ」と見たてまつる。女房などの、院の御時さぶらひて、老いしらへるどもは、悲しくて、今さらに泣き騒ぎめできこゆ。

主上も、恥づかしうさへ思し召されて、御よそひなどことに引きつくろひて

みかこそ見捨てがたけれ。いかがすべき」とて、

「都出でし春の嘆きに劣らめや

年経る浦を別れぬる秋」

とて、おし拭ひたまへるに、いとどものおぼえず、しほたれまさる。立ちるもあさましうよろぼふ。

正身の心地、たとふべき方なくて、かうしも人に見えじと思ひ沈むれど、身の憂きをもとにて、わりなきことなれど、うち捨てたまへる恨みのやる方なきに、たけきこととは、ただ涙に沈めり。母君も慰めわびては、

「何に、かく心尽くしなることを思ひそめけむ。すべて、ひがひがしき人に従ひける心のおこたりぞ」

と言ふ。

「あなかまや。思し捨つまじきこともものしたまふめれば、さりとも、思すところあらむ。思ひ慰めて、御湯などをだに参れ。あな、ゆゆしや」

とて、片隅に寄りゐたり。乳母、母君など、ひがめる心を言ひ合はせつつ、「いつしか、いかで思ふさまにて見たてまつらむと、年月を頼み過ぐし、今や、思ひ叶ふところ頼みきこえつれ、心苦しきことをも、もののはじめに見るかな」

と嘆くを見るにも、いとほしければ、いとどほけられて、昼は日一日、寝のみ寝暮らし、夜はすくよかに起きゐて、「数珠の行方も知らずなりにけり」とて、手をおしすりて仰ぎゐたり。

弟子どもにあはめられて、月夜に出でて行道するものは、遣水に倒れ入りにけり。よしある岩の片側に腰もつきそこなひて、病み臥したるほどになむ、すこしもの紛れける。

うれしきにも、「げに、今日を限りに、この渚を別るること」などあはれがりて、口々しほたれ言ひあへることどもあめり。されど、何かはとてなむ。

入道、今日の御まうけ、いといかめしう仕うまつれり。人びと、下の品まで、旅の装束めづらしきさまなり。いつの間にかしあへけむと見えたり。御よそひは言ふべくもあらず。御衣櫃あまたかけさぶらはす。まことの都の苞にしつべき御贈り物ども、ゆゑづきて、思ひ寄らぬ隈なし。今日たてまつるべき狩の御装束に、

「寄る波に立ちかさねたる旅衣

しほどけしとや人の厭はむ」

とあるを御覧じつけて、騒がしけれど、

「かたみにぞ換ふべかりける逢ふことの

日数隔てむ中の衣を」

とて、「心ざしあるを」とて、たてまつり替ふ。御身になれたるどもを遣はす。げに、今一重偲ばれたまふべきことを添ふる形見なめり。えならぬ御衣に匂ひの移りたるを、いかが人の心にも染めざらむ。

入道、

「今はと世を離ればべりにし身なれども、今日の御送りに仕うまつらぬこと」など申して、かひをつくるもいとほしながら、若き人は笑ひぬべし。

「世をうみにここらしほじむ身となりて

なほこの岸をえこそ離れね

心の闇は、いとど惑ひぬべくはべれば、境までだに」と聞こえて、

「好き好きしきさまなれど、思し出でさせたまふ折はべらば」

など、御けしき賜はる。いみじうものをあはれと思して、所々うち赤みたまへる御まみのわたりなど、言はむかたなく見えたまふ。

「思ひ捨てがたき筋もあめれば、今いとく見直したまひてむ。ただこの住

らむ」と、悔しう思さる。心の限り行く先の契りをのみしたまふ。

「琴は、また掻き合はするまでの形見に」

とのたまふ。女、

「なほざりに頼め置くめる一ことを

尽きせぬ音にやかけて偲ばむ」

言ふともなき口すさびを、恨みたまひて、

「逢ふまでのかたみに契る中の緒の

調べはことに変はらざらなむ

この音違はぬさきにかならずあひ見む」

と頼めたまふめり。されど、ただ別れむほどのわりなさを思ひ咽せたるも、

いとことわりなり。

立ちたまふ暁は、夜深く出でたまひて、御迎への人びとも騒がしければ、心も空なれど、人まをはからひて、

「うち捨てて立つも悲しき浦波の

名残いかにと思ひやるかな」

御返り、

「年経つる苦屋も荒れて憂き波の

返る方にや身をたぐへまし」

と、うち思ひけるままなるを見たまふに、忍びたまへど、ほろほろとこぼれぬ。心知らぬ人びとは、

「なほかかる御住まひなれど、年ごろといふばかり馴れたまへるを、今はと思すは、さもあることぞかし」

など見たてまつる。

良清などは、「おろかならず思すなめりかし」と、憎くぞ思ふ。

男の御容貌、ありさまはた、さらにも言はず。年ごろの御行なひにいたく面瘦せたまへるしも、言ふ方なくめでたき御ありさまにて、心苦しげなるけしきにうち涙ぐみつつ、あはれ深く契りたまへるは、「ただかばかりを、幸ひにても、などか止まざらむ」とまでぞ見ゆめれど、めでたきにしも、我が身のほどを思ふも、尽きせず。波の声、秋の風には、なほ響きことなり。塩焼く煙かすかにたなびきて、とりあつめたる所のさまなり。

「このたびは立ち別るとも藻塩焼く

煙は同じ方になびかむ」

とのたまへば、

「かきつめて海人のたく藻の思ひにも

今はかひなき恨みだにせじ」

あはれにうち泣きて、言少ななるものから、さるべき節の御応へなど浅からず聞こゆ。この、常にゆかしがりたまふ物の音など、さらに聞かせたてまつらざりつるを、いみじう恨みたまふ。

「さらば、形見にも偲ぶばかりの一琴をだに」

とのたまひて、京より持ておはしたりし琴の御琴取りに遣はして、心ことなる調べをほのかにかき鳴らしたまへる、深き夜の澄めるは、たとへむ方なし。

入道、え堪へで箏の琴取りてさし入れたり。みづからも、いとど涙さへそそのかされて、とどむべき方なきに、誘はるるなるべし、忍びやかに調べたるほど、いと上衆めきたり。入道の宮の御琴の音を、ただ今のまたなきものに思ひきこえたるは、「今めかしう、あなめでた」と、聞く人の心ゆきて、容貌さへ思ひやらるることは、げに、いと限りなき御琴の音なり。

これはあくまで弾き澄まし、心にくくねたき音ぞまされる。この御心にだに、初めてあはれになつかしう、まだ耳なれたまはぬ手など、心やましきほどに弾きさしつつ、飽かず思さるるにも、「月ごろ、など強ひても、聞きならざざりつ

て悩みけり。かく別れたまふべきほどなれば、あやにくなるにやありけむ、ありしよりもあはれに思して、「あやしうもの思ふべき身にもありけるかな」と思し乱る。

女は、さらにも言はず思ひ沈みたり。いとことわりなりや。思ひの外に悲しき道に出で立ちたまひしかど、「つひには行きめぐり来なむ」と、かつは思し慰めき。

このたびはうれしき方の御出で立ちの、「またやは帰り見るべき」と思すに、あはれなり。

さぶらふ人びと、ほどほどにつけてはよろこび思ふ。京よりも御迎へに人びと参り、心地よげなるを、主人の入道、涙にくれて、月も立ちぬ。

ほどさへあはれなる空のけしきに、「なぞや、心づから今も昔も、すずろなることにて身をはふらかすらむ」と、さまざまに思し乱れたるを、心知れる人びとは、

「あな憎、例の御癖ぞ」

と、見たてまつりむつかるめり。

「月ごろは、つゆ人にけしき見せず、時々はひ紛れなどしたまへるつれなきを」

「このころ、あやにくに、なかなかの、人の心づくしにか」

と、つきしろふ。少納言、しるべして聞こえ出でし初めのことなど、ささめきあへるを、ただならず思へり。

明後日ばかりになりて、例のやうにいたくも更かさで渡りたまへり。さやかにもまだ見たまはぬ容貌など、「いとよしよしう、気高きさまして、めざましうもありけるかな」と、見捨てがたく口惜しう思さる。「さるべきさまにして迎へむ」と思しなりぬ。さやうにぞ語らひ慰めたまふ。

月を過ぐしたまひ、ただならずうち思ひおこせたまふらむが、いと心苦しければ、独り臥しがちにて過ぐしたまふ。

絵をさまざま描き集めて、思ふことどもを書きつけ、返りこと聞くべきさまにしなしたまへり。見む人の心に染みぬべきものさまなり。いかでか、空に通ふ御心ならむ、二条の君も、ものあはれに慰む方なくおぼえたまふ折々、同じやうに絵を描き集めたまひつつ、やがて我が御ありさま、日記のやうに書きたまへり。いかなるべき御さまどもにかあらむ。

年変はりぬ。内に御葉のことありて、世の中さまざまにのしる。当代の御子は、右大臣の女、承香殿の女御の御腹に男御子生まれたまへる、二つになりたまへば、いといはけなし。春宮にこそは譲りきこえたまはめ。朝廷の御後見をし、世をまつりごつべき人を思しめぐらすに、この源氏のかく沈みたまふこと、いとあたらしうあるまじきことなれば、つひに後の御諫めを背きて、赦されたまふべき定め出で来ぬ。

去年より、后も御もののけ悩みたまひ、さまざまのものさとししきり、騒がしきを、いみじき御つつしみどもをしたまふしるしにや、よろしうおはしましける御目の悩みさへ、このころ重くならせたまひて、もの心細く思されければ、七月二十余日のほどに、また重ねて、京へ帰りたまふべき宣旨下る。

つひのことと思ひしかど、世の常なきにつけても、「いかになり果つべきにか」と嘆きたまふを、かうにはかなれば、うれしきに添へても、また、この浦を今とは思ひ離れむことを思し嘆くに、入道、さるべきことと思ひながら、うち聞くより胸ふたがりておぼゆれど、「思ひのごと栄えたまはばこそは、我が思ひの叶ふにはあらめ」など、思ひ直す。

そのころは、夜離れなく語らひたまふ。六月ばかりより心苦しきけしきあり

あながちなる御心ざしのほどなりかし。「かかる方のことをば、さすがに、心とどめて怨みたまへりし折々、などで、あやなきすさびごとにつけても、さ思はれたてまつりけむ」など、取り返さまほしう、人のありさまを見たまふにつけても、恋しさの慰む方なければ、例よりも御文こまやかに書きたまひて、

「まことや、我ながら心より外なるなほざりごとにて、疎まれたてまつりし節々を、思ひ出づるさへ胸いたきに、また、あやしうものはかなき夢をこそ見はべりしか。かう聞こゆる問はず語りに、隔てなき心のほどは思し合はせよ。

『誓ひしことも』など書きて、

「何事につけても、

しほしほとまづぞ泣かるるかりそめの

みるめは海人のすさびなれども」

とある御返り、何心なくらうたげに書きて、

「忍びかねたる御夢語りにつけても、思ひ合はせらるること多かるを、うらなくも思ひけるかな契りしを

松より波は越えじものぞと」

おいらかなるものから、ただならずかすめたまへるを、いとあはれに、うち置きがたく見たまひて、名残久しう、忍びの旅寝もしたまはず。

女、思ひしもしるきに、今ぞまことに身も投げつべき心地する。

「行く末短げなる親ばかりを頼もしきものにて、いつの世に人並々になるべき身と思はざりしかど、ただそこはかたなくて過ぐしつる年月は、何ごとをか心をも悩ましけむ、かういみじうもの思はしき世にこそありけれ」

と、かねて推し量り思ひしよりも、よろづに悲しけれど、なだらかにもてなして、憎からぬさまに見えたてまつる。

あはれとは月日に添へて思しませど、やむごとなき方の、おぼつかなくて年

けながら掻きまきぐりけるほど見えてをかしければ、

「この、聞きならしたる琴をさへや」
など、よろづにのたまふ。

「むつごとを語りあはせむ人もがな
憂き世の夢もなかば覚むやと」

「明けぬ夜にやがて惑へる心には
いづれを夢とわきて語らむ」

ほのかなるけはひ、伊勢の御息所にいとようおぼえたり。何心もなくうちとけてゐたりけるを、かうものおぼえぬに、いとわりなくて、近かりける曹司の内に入りて、いかで固めけるにか、いと強きを、しひてもおし立ちたまはぬさまなり。されど、さのみもいかでかあらむ。

人ざま、いとあてに、そびえて、心恥づかしきはひぞしたる。かうあながちなりける契りを思すにも、浅からずあはれなり。御心ぎしの、近まさりするなるべし、常は厭はしき夜の長さも、とく明けぬる心地すれば、「人に知られじ」と思すも、心あわたたしうて、こまかに語らひ置きて、出でたまひぬ。

御文、いと忍びてぞ今日はある。あいなき御心の鬼なりや。ここにも、かかることいかで漏らさじとつつみて、御使ことことうももてなさぬを、胸いたく思へり。

かくて後は、忍びつつ時々おはす。「ほどもすこし離れたるに、おのづからもの言ひさがなき海人の子もや立ちまじらむ」と思し憚るほどを、「さればよ」と思ひ嘆きたるを、「げに、いかならむ」と、入道も極楽の願ひをば忘れて、ただこの御けしきを待つことにはす。今さらに心を乱るも、いといとほしげなり。

二条の君の、風のつてにも漏り聞きたまはむことは、「たはぶれにても、心の隔てありけると、思ひ疎まれたてまつらむ、心苦しう恥づかしう」思さるるも、

のはなやかにさし出でたるに、ただ「あたら夜の」と聞こえたり。

君は、「好きのさまや」と思せど、御直衣たてまつりひきつくろひて、夜更かして出でたまふ。御車は二なく作りたれど、所狭しとて、御馬にて出でたまふ。惟光などばかりをさぶらはせたまふ。やや遠く入る所なりけり。道のほども、四方の浦々見わたしたまひて、思ふどち見まほしき入江の月影にも、まづ恋しき人の御ことを思ひ出できこえたまふに、やがて馬引き過ぎて、赴きぬべく思す。

「秋の夜の月毛の駒よ我が恋ふる

雲居を翔れ時の間も見む」

と、うちひとりごたれたまふ。

造れるさま、木深く、いたき所まさりて、見どころある住まひなり。海のつらはいかめしうおもしろく、これは心細く住みたるさま、「ここにゐて、思ひ残すことはあらじ」と、思しやらるるに、ものあはれなり。三昧堂近くて、鐘の聲、松風に響きあひて、もの悲しう、岩に生ひたる松の根ざしも、心ばへあるさまなり。前裁どもに虫の声を尽くしたり。ここかしこのありさまなど御覽ず。娘住ませたる方は、心ことに磨きて、月入れたる真木の戸口、けしきばかり押し開けたり。

うちやすらひ、何かとのたまふにも、「かうまでは見えたてまつらじ」と深く思ふに、もの嘆かしうて、うちとけぬ心さまを、「こよなうも人めきたるかな。さしもあるまじき際の人だに、かばかり言ひ寄りぬれば、心強うしもあらずならひたりしを、いとかくやつれたるに、あなづらはしきにや」とねたう、さまさまに思し悩み。「情けなうおし立たむも、ことのさまに違へり。心比べに負けむこそ、人悪ろけれ」など、乱れ怨みたまふさま、げにももの思ひ知らむ人こそ見せまほしけれ。

近き几帳の紐に、箏の琴の弾き鳴らされたるも、けはひしどけなく、うちと

とのたまひて、渡りたまはむことをばあるまじう思したるを、正身はた、さらに思ひ立つべくもあらず。

「いと口惜しき際の田舎人こそ、仮に下りたる人のうちとけ言につきて、さやうに軽らかに語らふわざをもすなれ、人数にも思されざらむものゆるゑ、我はいみじきもの思ひをや添へむ。かく及びなき心を思へる親たちも、世籠もりて過ぐす年月こそ、あいな頼みに、行く末心にくく思ふらめ、なかなかなる心をや尽くさむ」と思ひて、「ただこの浦におはせむほど、かかる御文ばかりを聞こえかはさむこそ、おろかならね。年ごろ音にのみ聞きて、いつかはさる人の御ありさまをほのかにも見たてまつらむなど、思ひかけざりし御住まひにて、まほならねどほのかにも見たてまつり、世になきものと聞き伝へし御琴の音をも風につけて聞き、明け暮れの御ありさまおぼつかなからで、かくまで世にあるものと思し尋ぬるなどこそ、かかる海人のなかに朽ちぬる身にあまることなれ」など思ふに、いよいよ恥づかしくて、つゆも気近きことは思ひ寄らず。

親たちは、ここの年のごろの祈りの叶ふべきを思ひながら、

「ゆくりかに見せたてまつりて、思し数まへざらむ時、いかなる嘆きをかせむ」

と思ひやるに、ゆゆしくて、

「めでたき人と聞こゆとも、つらういみじうもあるべきかな。目にも見えぬ仏、神を頼みたてまつりて、人の御心をも、宿世をも知らで」

など、うち返し思ひ乱れたり。君は、

「このころの波の音に、かの物の音を聞かばや。さらずは、かひなくこそ」
など、常はのたまふ。

忍びて吉しき日見て、母君のとかく思ひわづらふを聞き入れず、弟子どもなどにだに知らせず、心一つに立ちゐ、かかやくばかりしつらひて、十三日の月

その年、おほやけにものさとししきりて、もの騒がしきこと多かり。三月十三日、雷鳴りひらめき、雨風騒がしき夜、帝の御夢に、院の帝、御前の御階のもとに立たせたまひて、御けしきいと悪しうて、にらみきこえさせたまふをかしくまりておはします。聞こえさせたまふことも多かり。源氏の御事なりけむかし。

いと恐ろしう、いとほしと思して、后に聞こえさせたまひければ、

「雨など降り、空乱れたる夜は、思ひなしなることはさぞはべる。軽々しきやうに、思し驚くまじきこと」

と聞こえたまふ。

にらみたまひしに、目見合はせたまふと見しけにや、御目患ひたまひて、堪へがたう悩みたまふ。御つつしみ、内にも宮にも限りなくせさせたまふ。

太政大臣亡せたまひぬ。ことわりの御齡なれど、次々におのづから騒がしきことあるに、大宮もそこはかとなう患ひたまひて、ほど経れば弱りたまふやうなる、内に思し嘆くこと、さまざまなり。

「なほ、この源氏の君、まことに犯しなきにてかく沈むならば、かならずこの報いありなむとなむおぼえはべる。今は、なほもとの位をも賜ひてむ」とたびたび思しのたまふを、

「世のもどき、軽々しきやうなるべし。罪に懼ぢて都を去りし人を、三年をだに過ぐさず許されむことは、世の人もいかが言ひ伝へはべらむ」

など、后かたく諫めたまふに、思し憚るほどに月日かさなりて、御悩みども、さまざまに重りまさらせたまふ。

明石には、例の、秋、浜風のことなるに、一人寝もまめやかにものわびしうて、入道にも折々語らはせたまふ。

「とかく紛らはして、こち参らせよ」

やよやいかにと問ふ人もなみ

『言ひがたみ』

と、このたびは、いといたうなよびたる薄様に、いとうつくしげに書きたまへり。若き人のめでざらむも、いとあまり埋れいたからむ。めでたしとは見れど、なずらひならぬ身のほどの、いみじうかひなければ、なかなか、世にあるものと、尋ね知りたまふにつけて、涙ぐまれて、さらに例の動なきを、せめて言はれて、浅からず染めたる紫の紙に、墨つき濃く薄く紛らはして、

「思ふらむ心のほどややよいかに

まだ見ぬ人の聞きか悩まむ」

手のさま、書きたるさまなど、やむごとなき人にいたう劣るまじう、上衆めきたり。

京のことおぼえて、をかしと見たまへど、うちしきりて遣はさむも、人目つつましければ、二、三日隔てつつ、つれづれなる夕暮れ、もしは、ものあはれる曙などやうに紛らはして、折々、同じ心に見知りぬべきほど推し量りて、書き交はしたまふに、似げなからず。

心深う思ひ上がりたるけしきも、見ではやまじと思すものから、良清が領じて言ひしけしきもめざましう、年ごろ心つけてあらむを、目の前に思ひ違へむもいとほしう思しめぐらされて、「人進み参らば、さる方にも、紛らはしてむ」と思せど、女はた、なかなかやむごとなき際の人よりも、いたう思ひ上がりて、ねたげにもてなしきこえたれば、心比べにてぞ過ぎける。

京のことを、かく関隔たりては、いよいよおぼつかなく思ひきこえたまひて、「いかにせまし。たはぶれにくくもあるかな。忍びてや、迎へたてまつりてまし」と、思し弱る折々あれど、「さりとも、かくてやは、年を重ねむと、今さらに人悪ろきことをば」と、思し静めたり。

思ふこと、かつがつ叶ひぬる心地して、涼しう思ひるたるに、またの日の昼つ方、岡辺に御文つかはす。心恥づかしきさまなめるも、なかなか、かかるものの隈にぞ、思ひの外なることも籠もるべかめると、心づかひしたまひて、高麗の胡桃色の紙に、えならずひきつくろひて、

「をちこちも知らぬ雲居に眺めわび

かすめし宿の梢をぞ訪ふ

『思ふには』

とばかりやありけむ。

入道も、人知れず待ちきこゆとて、かの家に来りたりけるもしるければ、御使いとまばゆきまで酔はず。

御返り、いと久し。内に入りてそそのかせど、娘はさらに聞かず。恥づかしげなる御文のさまに、さし出でむ手つきも、恥づかしうつつまし。人の御ほど、わが身のほど思ふに、こよなくて、心地悪しとて寄り臥しぬ。

言ひわびて、入道ぞ書く。

「いとかしこきは、田舎びてはべる袂に、つつみあまりぬるにや。さらに見たまへも、及びはべらぬかしこさになむ。さるは、

眺むらむ同じ雲居を眺むるは

思ひも同じ思ひなるらむ

となむ見たまふる。いと好き好きしや」

と聞こえたり。陸奥紙に、いたう古めきたれど、書きざまよしばみたり。「げにも、好きたるかな」と、めざましう見たまふ。御使に、なべてならぬ玉裳などかづけたり。

またの日、

「宣旨書きは、見知らずなむ」とて、

「いぶせくも心にものを悩むかな

は狭き衣にもはぐくみはべりなむ。かくながら見捨てはべりなば、波のなかにも交り失せね、となむ掟てはべる」

など、すべてまねぶべくもあらぬことどもを、うち泣きうち泣き聞こゆ。

君も、ものをさまさま思し続ける折からは、うち涙ぐみつつ聞こしめす。

「横さまの罪に当たりて、思ひかけぬ世界にただよふも、何の罪にかとおぼつかなく思ひつる、今宵の御物語に聞き合はすれば、げに浅からぬ前の世の契りにこそはと、あはれになむ。などかは、かくさだかに思ひ知りたまひけることを、今までは告げたまはざりつらむ。都離れし時より、世の常なきもあぢきなう、行なひより他のことなくて月日を経るに、心も皆くづほれにけり。かかる人ものしたまふとは、ほの聞きながら、いたづら人をばゆゆしきものにこそ思ひ捨てたまふらめと、思ひ屈しつるを、さらば導きたまふべきにこそあなれ。心細き一人寝の慰めにも」

などのたまふを、限りなくうれしと思へり。

「一人寝は君も知りぬやつれづれと

思ひ明かしの浦さびしさを

まして年月思ひたまへわたるいぶせさを、推し量らせたまへ」

と聞こゆるけはひ、うちわななきたれど、さすがにゆゑなからず。

「されど、浦なれたまへらむ人は」とて、

「旅衣うら悲しさに明かしかね

草の枕は夢も結ばず」

と、うち乱れたまへる御さまは、いとぞ愛敬づき、言ふよしなき御けはひなる。数知らぬことども聞こえ尽くしたれど、うるさしや。ひがことどもに書きなしたれば、いとど、をこにかたくなしき入道の心ばへも、あらはれぬべかめり。

ひいといたう唐めき、ゆの音深う澄ましたり。「伊勢の海」ならねど、「清き渚に貝や拾はむ」など、声よき人に歌はせて、我も時々拍子とりて、声うち添へたまふを、琴弾きさしつつ、めできこゆ。御くだものなど、めづらしきさまにて参らせ、人びとに酒強ひそしなどして、おのづからもの忘れしぬべき夜のさまなり。

いたく更けゆくままに、浜風涼しうて、月も入り方になるままに、澄みまさり、静かなるほどに、御物語残りなく聞こえて、この浦に住みはじめしほどの心づかひ、後の世を勤むるさま、かきくづし聞こえて、この娘のありさま、問はず語りに聞こゆ。をかききものの、さすがにあはれと聞きたまふ節もあり。

「いと取り申しがたきことなれど、わが君、かうおぼえなき世界に、仮にても、移ろひおはしましたるは、もし、年ごろ老法師の祈り申しはべる神仏のあはれびおはしまして、しばしのほど、御心をも悩ましたてまつるにやとなむ思うたまふる。

その故は、住吉の神を頼みはじめたてまつりて、この十八年になりはべりぬ。女の童いときなうはべりしより、思ふ心はべりて、年ごとの春秋ごとに、かならずかの御社に参ることなむはべる。昼夜の六時の勤めに、みづからの蓮の上の願ひをば、さるものにて、ただこの人を高き本意叶へたまへと、なむ念じはべる。

前の世の契りつたなくてこそ、かく口惜しき山賤となりはべりけめ、親、大臣の位を保ちたまへりき。みづからかく田舎の民となりてはべり。次々、さのみ劣りまからば、何の身にかなりはべらむと、悲しく思ひはべるを、これは、生れし時より頼むところなむはべる。いかにして都の貴き人にたてまつらむと思ふ心、深きにより、ほどほどにつけて、あまたの人の嫉みを負ひ、身のためからき目を見る折々も多くはべれど、さらに苦しみと思ひはべらず。命の限り

と、おほかたにのたまふを、入道はあいなくうち笑みて、

「あそばすよりなつかしきさまなるは、いづこのかはべらむ。なにがし、延喜の御手より弾き伝へたること、四代になむなりはべりぬるを、かうつたなき身にて、この世のことは捨て忘れはべりぬるを、もののせちにいぶせき折々は、かき鳴らしはべりしを、あやしう、まねぶ者のはべるこそ、自然にかの先大王の御手に通ひてはべれ。山伏のひが耳に、松風を聞きわたしはべるにやあらむ。いかで、これも忍びて聞こしめさせてしかな」

と聞こゆるままに、うちわななきて、涙落とすべかめり。

君、

「琴を琴とも聞きたまふまじかりけるあたりに、ねたきわざかな」

とて、押しやりたまふに、

「あやしう、昔より箏は、女なむ弾き取るものなりける。嵯峨の御伝へにて、女五の宮、さる世の中の上手にもしたまひけるを、その御筋にて、取り立てて伝ふる人なし。すべて、ただ今世に名を取れる人びと、搔き撫での心やりばかりにのみあるを、ここにかう弾きこめたまへりける、いと興ありけることかな。いかでかは、聞くべき」

とのたまふ。

「聞こしめさむには、何の憚りかはべらむ。御前に召しても。商人の中にてだにこそ、古琴聞きはやす人は、はべりけれ。琵琶なむ、まことの音を弾きしづむる人、いにしへも難うはべりしを、をさをさとどこほることなうなつかしき手など、筋ことになむ。いかでたどるにかはべらむ。荒き波の声に交るは、悲しくも思うたまへられながら、かき積むるもの嘆かしき、紛るる折々もはべり」

など好きむたれば、をかしと思して、箏の琴取り替へて賜はせたり。

げに、いとすぐしてかい弾きたり。今の世に聞こえぬ筋弾きつけて、手づか

久しう手触れたまはぬ琴を、袋より取り出でたまひて、はかなくかき鳴らしたまへる御さまを、見たてまつる人もやすからず、あはれに悲しう思ひあへり。

「広陵」といふ手を、ある限り弾きすましたまへるに、かの岡辺の家も、松の響き波の音に合ひて、心ばせある若人は身にしみて思ふべかめり。何とも聞きわくまじきこのもかのものはふる人どもも、すずろはしくて、浜風をひきありく。

入道もえ堪へで、供養法たゆみて、急ぎ参れり。

「さらに、背きにし世の中も取り返し思ひ出でぬべくはべり。後の世に願ひはべる所のありさまも、思うたまへやらるる夜の、さまかな」と泣く泣く、めできこゆ。

わが御心にも、折々の御遊び、その人かの人の子笛、もしは声の出でしさまに、時々につけて、世にめでられたまひしありさま、帝よりはじめたてまつりて、もてかしづきあがめたてまつりたまひしを、人の上もわが御身のありさまも、思し出でられて、夢の心地したまふままに、かき鳴らしたまへる声も、心すぐく聞こゆ。

古人は涙もとどめあへず、岡辺に、琵琶、箏の琴取りにやりて、入道、琵琶の法師になりて、いとをかしう珍しき手一つ二つ弾きたり。

箏の御琴参りたれば、少し弾きたまふも、さまざまいみじうのみ思ひきこえたり。いと、さしも聞こえぬ物の音だに、折からこそはまさるものなるを、はるばると物のとどこほりなき海づらなるに、なかなか、春秋の花紅葉の盛りなるよりは、ただそこはかとなう茂れる蔭ども、なまめかしきに、水鶏のうちたたきたるは、「誰が門さして」と、あはれにおぼゆ。

音もいと二なう出づる琴どもを、いとなつかしう弾き鳴らしたるも、御心とまりて、

「これは、女のなつかしきさまにてしどけなう弾きたるこそ、をかしけれ」

年は六十ばかりになりたれど、いとよげにあらまほしう、行なひさらばひて、人のほどのあてはかなればにやあらむ、うちひがみほればしきことはあれど、いにしへのことをも知りて、ものきたなからず、よしづきたることも交れば、昔物語などせさせて聞きたまふに、すこしつれづれの紛れなり。年ごろ、公私御暇なくて、さしも聞き置きたまはぬ世の古事どもくづし出でて、「かかる所をも人をも、見ざらましかば、さうざうしくや」とまで、興ありと思すことも交る。

かうは馴れきこゆれど、いと気高う心恥づかしき御ありさまに、さこそ言ひしか、つつましようなりて、わが思ふことは心のままにもえうち出できこえぬを、「心もとなう、口惜し」と、母君と言ひ合はせて嘆く。

正身は、「おしなべての人だに、めやすきは見えぬ世界に、世にはかかる人もおはしけり」と見たてまつりしにつけて、身のほど知られて、いと遙かにぞ思ひきこえける。親たちのかく思ひあつかふを聞くにも、「似げなきことかな」と思ふに、ただなるよりはものあはれなり。

四月になりぬ。更衣の御装束、御帳の帷子など、よしあるさまにし出でつつ、よろづに仕うまつりいとなむを、「いとほしう、すずろなり」と思せど、人さまのあくまで思ひ上がりたるさまのあてなるに、思しゆるして見たまふ。

京よりも、うちしきりたる御とぶらひども、たゆみなく多かり。のどやかなる夕月夜に、海の上曇りなく見えわたれるも、住み馴れたまひし故郷の池水、思ひまがへられたまふに、言はむかたなく恋しきこと、何方となく行方なき心地したまひて、ただ目の前に見やらるるは、淡路島なりけり。

「あはと、遙かに」などのたまひて、

「あはと見る淡路の島のあはれさへ

残るくまなく澄める夜の月」

思ひ離るる心のみまさりはべれど、『鏡を見ても』とのたまひし面影の離るる世なきを、かくおぼつかかなながらやと、こころ悲しきさまぎまのうれはしきは、さしおかれて、

遙かにも思ひやるかな知らざりし

浦よりをちに浦伝ひして

夢のうちなる心地のみして、覚め果てぬほど、いかにひがこと多からむ」

と、げに、そこはかたなく書き乱りたまへるしもぞ、いと見まほしき側目なるを、「いとこよなき御心ざしのほど」と、人びと見たてまつる。

おのおの、故郷に心細げなる言伝てすべかめり。

を止みなかりし空のけしき、名残なく澄みわたりて、漁する海人ども誇らしげなり。須磨はいと心細く、海人の岩屋もまれなりしを、人しげき厭ひはしたまひしかど、ここはまた、さまことにあはれなること多くて、よろづに思し慰まる。

明石の入道、行なひ勤めたるさま、いみじう思ひ澄ましたるを、ただこの娘一人をもてわづらひたるけしき、いとかたはらいたきまで、時々漏らし愁へきこゆ。御心地にも、をかしと聞きおきたまひし人なれば、「かくおぼえなくてめぐりおはしたるも、さるべき契りあるにや」と思しながら、「なほ、かう身を沈めたるほどは、行なひより他のことは思はじ。都の人も、ただなるよりは、言ひしに違ふと思さむも、心恥づかしう」思さるれば、けしきだちたまふことなし。ことに触れて、「心ばせ、ありさま、なべてならずもありけるかな」と、ゆかしう思されぬにしもあらず。

ここにはかしこまりて、みづからもをさをさ参らず、もの隔たりたる下の屋にさぶらふ。さるは、明け暮れ見たてまつらまほしう、飽かず思ひきこえて、「思ふ心を叶へむ」と、仏、神をいよいよ念じたてまつる。

かすべき渚の苦屋、行なひをして後の世のことを思ひ澄ましつべき山水のつらに、いかめしき堂を建てて三昧を行なひ、この世のまうけに、秋の田の実を刈り収め、残りの齡積むべき稲の倉町どもなど、折々、所につけたる見どころありてし集めたり。

高潮に怖ぢて、このころ、娘などは岡辺の宿に移して住ませければ、この浜の館に心やすくおはします。

舟より御車にたてまつり移るほど、日やうやうさし上がりて、ほのかに見たてまつるより、老忘れ、齡延ぶる心地して、笑みさかえて、まづ住吉の神を、かつがつ拝みたてまつる。月日の光を手を得たてまつりたる心地して、いとなみ仕うまつること、ことわりなり。

所のさまをばさらにも言はず、作りなしたる心ばへ、木立、立石、前栽などもありさま、えも言はぬ入江の水など、絵に描かば、心のいたり少なからむ絵師は描き及ぶまじと見ゆ。月ごろの御住まひよりは、こよなくあきらかに、なつかしき。御しつらひなど、えならずして、住まひけるさまなど、げに都のやむごとなき所々に異ならず、艶にまばゆきさまは、まさりざまにぞ見ゆる。

すこし御心静まりては、京の御文ども聞こえたまふ。参れりし使は、今は、「いみじき道に出で立ちて悲しき目を見る」

と泣き沈みて、あの須磨に留まりたるを召して、身にあまれる物ども多くたまひて遣はす。むつましき御祈りの師ども、さるべき所々には、このほどの御ありさま、詳しく言ひ遣はすべし。

入道の宮ばかりには、めづらかにてよみがへるさまなど聞こえたまふ。二条院のあはれなりしほどの御返りは、書きもやりたまはず、うち置きうち置き、おしのごひつつ聞こえたまふ御けしき、なほことなり。

「返す返すいみじき目の限りを尽くし果てつるありさまなれば、今はと世を

もししろしめすことやばりつらむ、とてなむ。いと憚り多くはべれど、このよし、申したまへ」

と言ふ。良清、忍びやかに伝へ申す。

君、思しまはすに、夢うつつさまさま静かならず、さとしのやうなることどもを、来し方行く末思し合はせて、

「世の人の聞き伝へむ後のそしりもやすからざるべきを憚りて、まことの神の助けにもあらむを、背くものならば、またこれよりまさりて、人笑はれなる目をや見む。うつつさまの人の心だになほ苦し。はかなきことをもつつみて、我より齡まさり、もしは位高く、時世の寄せ今一際まさる人には、なびき従ひて、その心むけをたどるべきものなりけり。退きて咎なしとこそ、昔、さかしき人も言ひ置きけれ。げに、かく命を極め、世にまたなき目の限りを見尽くしつ。さらに後のあとの名をはぶくとても、たけきこともあらじ。夢の中にも父帝の御教へありつれば、また何ごとか疑はむ」

と思して、御返りのたまふ。

「知らぬ世界に、めづらしき愁への限り見つれど、都の方よりとて、言問ひおこする人もなし。ただ行方なき空の月日の光ばかりを、故郷の友と眺めはべるに、うれしき釣舟をなむ。かの浦に、静やかに隠ろふべき隈はべりなむや」

とのたまふ。限りなくよろこび、かしこまり申す。

「ともあれ、かくもあれ、夜の明け果てぬ先に御舟にたてまつれ」

とて、例の親しき限り、四、五人ばかりして、たてまつりぬ。

例の風出で来て、飛ぶやうに明石に着きたまひぬ。ただはひ渡るほどに片時の間といへど、なほあやしきまで見ゆる風の心なり。

浜のさま、げにいと心ことなり。人しげう見ゆるのみなむ、御願ひに背きける。入道の領占めたる所々、海のつらにも山隠れにも、時々につけて、興をさ

こと、限りなし。

胸つとふたがりて、なかなかなる御心惑ひに、うつつの悲しきこともうち忘れ、「夢にも御応へを今すこし聞こえずなりぬること」といふせきに、「またや見えたまふ」と、ことさらに寝入りたまへど、さらに御目も合はで、暁方になりにけり。

渚に小さやかなる舟寄せて、人二、三人ばかり、この旅の御宿りをさして参る。何人ならむと問へば、

「明石の浦より、前の守新発意の、御舟装ひて参れるなり。源少納言、さぶらひたまはば、対面してことの心とり申さむ」

と言ふ。良清、おどろきて、

「入道は、かの国の得意にて、年ごろあひ語らひはべりつれど、私に、いささかあひ恨むることはべりて、ことなる消息をだに通はさで、久しうなりはべりぬるを、波の紛れに、いかなることかあらむ」

と、おぼめく。君の、御夢なども思し合はすることもありて、「はや会へ」とのたまへば、舟に行きて会ひたり。「さばかり激しかりつる波風に、いつの間にか舟出しつらむ」と、心得がたく思へり。

「去ぬる朔日の日、夢にさま異なるものの告げ知らすることはべりしかば、信じがたきことと思うたまへしかど、『十三日にあらたなるしるし見せむ。舟装ひまうけて、かならず、雨風止まば、この浦にを寄せよ』と、かねて示すことのはべりしかば、試みに舟の装ひをまうけて待ちはべりしに、いかめしき雨、風、雷のおどろかしはべりつれば、人の朝廷にも、夢を信じて国を助くるたぐひ多うはべりけるを、用るさせたまはぬまでも、このいましめの日を過ぐさず、このよしを告げ申しはべらむとて、舟出だしはべりつるに、あやしき風細う吹きて、この浦に着きはべること、まことに神のしるべ違はずなむ。ここにも、

「海にます神の助けにかからずは

潮の八百会にさすらへなまし」

ひねもすにいりもみつる雷の騒ぎに、さこそいへ、いたう困じたまひにければ、心にもあらずうちまどろみたまふ。かたじけなき御座所なれば、ただ寄りゐたまへるに、故院、ただおはしまししさまながら立ちたまひて、

「など、かくあやしき所にもものするぞ」

とて、御手を取りて引き立てたまふ。

「住吉の神の導きたまふままには、はや舟出して、この浦を去りね」

とのたまはず。いとうれしくて、

「かしこき御影に別れたてまつりにしこなた、さまざま悲しきことのみ多くはべれば、今はこの渚に身をや捨てはべりなまし」

と聞こえたまへば、

「いとあるまじきこと。これは、ただいささかなる物の報いなり。我は、位に在りし時、あやまつことなかりしかど、おのづから犯しありければ、その罪を終ふるほど暇なくて、この世を顧みざりつれど、いみじき愁へに沈むを見るに、堪へがたくて、海に入り、渚に上り、いたく困じにたれど、かかるついでに内に奏すべきことのあるによりなむ、急ぎ上りぬる」

とて、立ち去りたまひぬ。

飽かず悲しくて、「御供に参りなむ」と泣き入りたまひて、見上げたまへれば、人もなく、月の顔のみきらきらとして、夢の心地もせず、御けはひ止まれる心地して、空の雲あはれにたなびけり。

年ごろ、夢のうちにも見たてまつらで、恋しうおぼつかなき御さまを、ほのかなれど、さだかに見たてまつりつるのみ、面影におぼえたまひて、「我かく悲しびを極め、命尽きなむとしつるを、助けに翔りたまへる」と、あはれに思すに、「よくぞかかる騒ぎもありける」と、名残頼もしう、うれしうおぼえたまふ

安き空なく、嘆きたまふに、かく悲しき目をさへ見、命尽きなむとするは、前の世の報いか、この世の犯しか、神、仏、明らかにましまさば、この愁へやすめたまへ」

と、御社の方に向きて、さまざまの願を立てたまふ。

また、海の中の龍王、よろづの神たちに願を立てさせたまふに、いよいよ鳴りとどろきて、おはしますに続きたる廊に落ちかかりぬ。炎燃え上がりて、廊は焼けぬ。心魂なくて、ある限り惑ふ。後の方なる大炊殿とおぼしき屋に移したてまつりて、上下となく立ち込みて、いとらうがはしく泣きとよむ声、雷にも劣らず。空は墨をすりたるやうにて、日も暮れにけり。

やうやう風なほり、雨の脚しめり、星の光も見ゆるに、この御座所のいとめづらかなるも、いとかたじけなくて、寢殿に返し移したてまつらむとするに、

「焼け残りたる方も疎ましげに、そこらの人の踏みとどろかし惑へるに、御簾などもみな吹き散らしてけり」

「夜を明してこそは」

とたどりあへるに、君は御念誦したまひて、思しめぐらすに、いと心あわたし。

月さし出でて、潮の近く満ち来ける跡もあらはに、名残なほ寄せ返る波荒きを、柴の戸押し開けて、眺めおはします。近き世界に、ものの心を知り、来し方行く先のことうちおぼえ、とやかくやとはかばかしう悟る人もなし。あやしき海人どもなどの、貴き人おはする所とて、集り参りて、聞きも知りたまはぬことどもをさへづりあへるも、いとめづらかなれど、え追ひも払はず。

「この風、今しばし止まざらましかば、潮上りて残る所なからまし。神の助けおろかならざりけり」

と言ふを聞きたまふも、いと心細しといへばおろかなり。

「ただ、例の雨のを止みなく降りて、風は時々吹き出でて、日ごろになりはべるを、例ならぬことに驚きはべるなり。いとかく、地の底徹るばかりの氷降り、雷の静まらぬことははべらざりき」

など、いみじきさまに驚き懼ぢてをる顔のいとからきにも、心細さまさりける。

「かくしつ世は尽きぬべきにや」と思さるるに、そのまたの日の暁より、風いみじう吹き、潮高う満ちて、波の音荒きこと、巖も山も残るまじきけしきなり。雷の鳴りひらめくさま、さらに言はむ方なくて、「落ちかかりぬ」とおぼゆるに、ある限りさかしき人なし。

「我はいかなる罪を犯して、かく悲しき目を見るらむ。父母にもあひ見ず、かなしき妻子の顔をも見で、死ぬべきこと」

と嘆く。君は御心を静めて、「何ばかりのあやまちにてか、この渚に命をば極めむ」と、強う思しなせど、いともの騒がしければ、色々の幣帛ささげさせたまひて、

「住吉の神、近き境を鎮め守りたまふ。まことに迹を垂れたまふ神ならば、助けたまへ」

と、多くの大願を立てたまふ。おのおのみづからの命をば、さるものにて、かかる御身のまたなき例に沈みたまひぬべきことはいみじう悲しき、心を起こして、すこしものおぼゆる限りは、「身に代へてこの御身一つを救ひたてまつらむ」と、とよみて、諸声に仏、神を念じたてまつる。

「帝王の深き宮に養はれたまひて、いろいろの楽しみにおごりたまひしかど、深き御慈しみ、大八洲にあまねく、沈める輩をこそ多く浮かべたまひしか。今、何の報いにか、ここら横様なる波風には溺ほれたまはむ。天地、ことわりたまへ。罪なくて罪に当たり、官、位を取られ、家を離れ、境を去りて、明け暮れ

なほ雨風やまず、雷鳴り静まらず、日ごろになりぬ。いとどものわびしきこと、数知らず、来し方行く先、悲しき御ありさまに、心強うしもえ思しなさず、「いかにせまし。かかりとて、都に帰らむことも、まだ世に許されもなくては、人笑はれなることこそまさらめ。なほ、これより深き山を求めてや、あと絶えなまし」と思すにも、「波風に騒がれてなど、人の言ひ伝へむこと、後の世まで、いと軽々しき名や流し果てむ」と思し乱る。

夢にも、ただ同じさまなる物のみ来つつ、まつはしきこゆと見たまふ。雲間なくて、明け暮るる日数に添へて、京の方もいとどおぼつかなく、「かくながら身をはふらかしつるにや」と、心細う思せど、頭さし出づべくもあらぬ空の乱れに、出で立ち参る人もなし。

二条院よりぞ、あながちにあやしき姿にて、そほち参れる。道かひにてだに、人か何ぞとだに御覧じわくべくもあらず、まづ追ひ払ひつべき賤の男の、むつまじうあはれに思さるるも、我ながらかたじけなく、屈しにける心のほど思ひ知らる。御文に、

「あさましくを止みなきころのけしきに、いとど空さへ閉づる心地して、眺めやる方なくなむ。

浦風やいかに吹くらむ思ひやる

袖うち濡らし波間なきころ」

あはれに悲しきことども書き集めたまへり。いとど汀まさりぬべく、かきくらす心地したまふ。

「京にも、この雨風、あやしき物のさとしなりとて、仁王会など行はるべしとなむ聞こえはべりし。内に参りたまふ上達部なども、すべて道閉ぢて、政事も絶えてなむはべる」

など、はかばかしうもあらず、かたくなしう語りなせど、京の方のことと思せばいぶかしうて、御前に召し出でて、問はせたまふ。

明 石

明

石

「多く立てつる願の力なるべし」

「今しばし、かくあらば、波に引かれて入りぬべかりけり」

「高潮といふものになむ、とりあへず人そこなはるとは聞けど、いと、かかることは、まだ知らず」

と言ひあへり。

暁方、みなうち休みたり。君もいささか寝入りたまへれば、そのさまとも見えぬ人来て、

「など、宮より召しあるには参りたまはぬ」

とて、たどりありくと見るに、おどろきて、「きは、海の中の龍王の、いといたうものめでするものにて、見入れたるなりけり」と思すに、いともものむつかしう、この住まひ堪へがたく思しなりぬ。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

弥生の朔日に出で来たる巳の日、

「今日なむ、かく思ふことある人は、御禊したまふべき」

と、なまさかしき人の聞こゆれば、海づらもゆかしうて出でたまふ。いとおろそかに、軟障ばかりを引きめぐらして、この国に通ひける陰陽師召して、祓へせさせたまふ。舟にこととしき人形乗せて流すを見たまふに、よそへられて、

「知らざりし大海の原に流れ来て

ひとかたにやはものは悲しき」

とて、ゐたまへる御さま、さる晴れに出でて、言ふよしなく見えたまふ。

海の面うらうらと凧ぎわたりて、行方も知らぬに、来し方行く先思し続けられて、

「八百よろづ神もあはれと思ふらむ

犯せる罪のそれとなければ」

とのたまふに、にはかに風吹き出でて、空もかき暮れぬ。御祓へもし果てず、立ち騒ぎたり。肱笠雨とか降りきて、いとあわたたしければ、みな帰りたまはむとするに、笠も取りあへず。さる心もなきに、よろづ吹き散らし、またなき風なり。波いといかめしう立ちて、人びとの足をそらなり。海の面は、袞を張りたらむやうに光り満ちて、雷鳴りひらめく。落ちかかる心地して、からうしてたどり来て、

「かかる目は見ずもあるかな」

「風などは吹くも、けしきづきてこそあれ。あさましうめづらかなり」

と惑ふに、なほ止まず鳴りみちて、雨の脚当たる所、徹りぬべく、はらめき落つ。「かくて世は尽きぬるにや」と、心細く思ひ惑ふに、君は、のどやかに経うち誦じておはす。

暮れぬれば、雷すこし鳴り止みて、風ぞ、夜も吹く。

「あかなくに雁の常世を立ち別れ

花の都に道や惑はむ」

さるべき都の苞など、由あるさまにてあり。主人の君、かくかたじけなき御送りにとて、黒駒たてまつりたまふ。

「ゆゆしう思されぬべけれど、風に当たりては、嘶えぬべければなむ」

と申したまふ。世にありがたげなる御馬のさまなり。

「形見に偲びたまへ」

とて、いみじき笛の名ありけるなどばかり、人咎めつべきことは、かたみにえしたまはず。

日やうやうさし上がりて、心あわたたしければ、顧みのみしつつ出でたまふを、見送りとたまふけしき、いとなかなかなり。

「いつまた対面は」

と申したまふに、主人、

「雲近く飛び交ふ鶴も空に見よ

我は春日の曇りなき身ぞ

かつは頼まれながら、かくなりぬる人、昔のかしこき人だに、はかばかしう世にまたまじらふこと難くはべりければ、何か、都のさかひをまた見むとなむ思ひはべらぬ」

などのたまふ。宰相、

「たづかなき雲居にひとり音をぞ鳴く

翼並べし友を恋ひつつ

かたじけなく馴れきこえはべりて、いとしもと悔しう思ひたまへらるる折多く」

など、しめやかにあらで帰りたまひぬる名残、いとど悲しう眺め暮らしたまふ。

ことさらに田舎びもてなしたまへるしも、いみじう、見るに笑まれてきよらなり。

取り使ひたまへる調度も、かりそめにしなして、御座所もあらは見入れらる。碁、双六盤、調度、弾棊の具など、田舎わざにしなして、念誦の具、行なひ勤めたまひけりと見えたり。もの参れるなど、ことさら所につけ、興ありてしなしたり。

海人ども漁りして、貝つ物持て参れるを、召し出でて御覧ず。浦に年経るさまなど問はせたまふに、さまざま安げなき身の愁へを申す。そこはかとなくさへづるも、「心の行方は同じこと。何か異なる」と、あはれに見たまふ。御衣どもなどかづけさせたまふを、生けるかひありと思へり。御馬ども近う立てて、見やりなる倉か何ぞなる稲取り出でて飼ふなど、めづらしう見たまふ。

「飛鳥井」すこし歌ひて、月ごろの御物語、泣きみ笑ひみ、

「若君の何とも世を思きでものしたまふ悲しきを、大臣の明け暮れにつけて思し嘆く」

など語りたまふに、堪へがたく思したり。尽きすべくもあらねば、なかなか片端もえまねばず。

夜もすがらまどろまず、文作り明かしたまふ。さ言ひながらも、ものの聞こえをつつみて、急ぎ帰りたまふ。いとなかなかなり。御土器参りて、

「酔ひの悲しび涙そそく春の盃の裏」

と、諸声に誦じたまふ。御供の人も涙を流す。おのがじし、はつかなる別れ惜しむべかめり。

朝ぼらけの空に雁連れて渡る。主人の君、

「故郷をいづれの春か行きて見む

うらやましきは帰る雁がね」

宰相、さらに立ち出でむ心地せで、

きものに思ひ知りて、

「高き人は、我を何の数にも思さじ。ほどにつけたる世をばさらに見じ。命長くて、思ふ人びとに後れなば、尼にもなりなむ、海の底にも入りなむ」

などぞ思ひける。

父君、所狭く思ひかしづきて、年に二たび、住吉に詣でさせけり。神の御しるしをぞ、人知れず頼み思ひける。

須磨には、年返りて、日長くつれづれなるに、植ゑし若木の桜ほのかに咲き初めて、空のけしきうらかなるに、よろづのこと思し出でられて、うち泣きたまふ折多かり。

二月二十日あまり、去にし年、京を別れし時、心苦しかりし人びとの御ありさまなど、いと恋しく、「南殿の桜、盛りになりぬらむ。一年の花の宴に、院の御けしき、内の主上のいときよらになまめいて、わが作れる句を誦じたまひし」も、思ひ出できこえたまふ。

「いつとなく大宮人の恋しきに

桜かざしし今日も来にけり」

いとつれづれなるに、大殿の三位中将は、今は宰相になりて、人柄のいとよければ、時世のおぼえ重くてもおぼえたまへど、世の中あはれにあぢきなく、もの折ごとに恋しくおぼえたまへば、「ことの聞こえありて罪に当たるともいかがはせむ」と思しなして、にはかに参うでたまふ。

うち見るより、めづらしううれしきにも、ひとつ涙ぞこぼれける。

住まひたまへるさま、言はむかたなく唐めいたり。所のさま、絵に描きたらむやうなるに、竹編める垣しわたして、石の階、松の柱、おろそかなるものから、めづらかにをかす。

山賤めきて、ゆるし色の黄がちなるに、青鈍の狩衣、指貫、うちやつれて、

の浦にもものしたまふなれ。吾子の御宿世にて、おぼえぬことのあるなり。いかでかかるついでに、この君にをたてまつらむ」

と言ふ。母、

「あな、かたはや。京の人の語るを聞けば、やむごとなき御妻ども、いと多く持ちたまひて、そのあまり、忍び忍び帝の御妻さへあやまちたまひて、かくも騒がれたまふなる人は、まさにかくあやしき山賤を、心とどめたまひてむや」と言ふ。腹立ちて、

「え知りたまはじ。思ふ心ことなり。さる心をしたまへ。ついでして、ここにもおはしませむ」

と、心をやりて言ふもかたくなしく見ゆ。まばゆきまでしつらひかしづきけり。母君、

「などか、めでたくとも、ものの初めに、罪に当たりて流されておはしたらむ人をしも思ひかけむ。さても心をとどめたまふべくはこそあらめ、たはぶれにてもあるまじきことなり」

と言ふを、いといたくつぶやく。

「罪に当たるとは、唐土にも我が朝廷にも、かく世にすぐれ、何ごとも人にことになりぬる人の、かならずあることなり。いかにものしたまふ君ぞ。故母御息所は、おのが叔父にもものしたまひし按察使大納言の娘なり。いとかうぎくなる名をとりて、宮仕へに出だしたまへりしに、国王すぐれて時めかしたまふこと、並びなかりけるほどに、人の嫉み重くて亡せたまひにしかど、この君のとまりたまへる、いとめでたしかし。女は心高くつかふべきものなり。おのれ、かかる田舎人なりとて、思し捨てじ」

など言ひるたり。

この娘、すぐれたる容貌ならねど、なつかしうあてはかに、心ばせあるさまなどぞ、げに、やむごとなき人に劣るまじかりける。身のありさまを、口惜し

「霜の後の夢」

と誦じたまふ。

月いと明うさし入りて、はかなき旅の御座所、奥まで隈なし。床の上に夜深き空も見ゆ。入り方の月影、すぐく見ゆるに、

「ただ是れ西に行くなり」

と、ひとりごちたまて、

「いづ方の雲路に我も迷ひなむ

月の見るらむことも恥づかし」

とひとりごちたまひて、例のまどろまれぬ暁の空に、千鳥いとあはれに鳴く。

「友千鳥諸声に鳴く暁は

ひとり寢覚の床も頼もし」

また起きたる人もなければ、返す返すひとりごちて臥したまへり。

夜深く御手水参り、御念誦などしたまふも、めづらしきことのやうに、めでたうのみおぼえたまへば、え見たてまつり捨てず、家にあからさまにもえ出でざりけり。

明石の浦は、ただはひ渡るほどなれば、良清の朝臣、かの入道の娘を思ひ出でて、文など遣りけれど、返り事もせず、父入道ぞ、

「聞こゆべきことなむ。あからさまに对面もがな」

と言ひけれど、「うけひかざらむものゆゑ、行きかかりて、むなしく帰らむ後手もをこなるべし」と、屈指いたうて行かず。

世に知らず心高く思へるに、国の内は守のゆかりのみこそはかしこきことにすめれど、ひがめる心はさらにさも思はで年月を経けるに、この君かくておはすと聞きて、母君に語らふやう、

「桐壺の更衣の御腹の、源氏の光る君こそ、朝廷の御かしこまりにて、須磨

など、悪しきことども聞こえければ、わづらはしとて、消息聞こえたまふ人なし。

二条院の姫君は、ほど経るままに、思し慰む折なし。東の対にさぶらひし人びとも、みな渡り参りし初めは、「などかさしもあらむ」と思ひしかど、見たてまつり馴るるままに、なつかしうをかしき御ありさま、まめやかなる御心ばへも、思ひやり深うあはれなれば、まかで散るもなし。なべてならぬ際の人びとには、ほの見えなどしたまふ。「そこのなかにすぐれたる御心ざしもことわりなりけり」と見たてまつる。

かの御住まひには、久しくなるままに、え念じ過ぐすまじうおぼえたまへど、「我が身だにあさましき宿世とおぼゆる住まひに、いかでかは、うち具しては、つきなからむ」さまを思ひ返したまふ。所につけて、よろづのことさま変はり、見たまへ知らぬ下人のうへをも、見たまひ慣らはぬ御心地に、めざましうかたじけなう、みづから思さる。煙のいと近く時々立ち来るを、「これや海人の塩焼くならむ」と思しわたるは、おはします後の山に、柴といふものふすぶるなりけり。めづらかにて、

「山賤の庵に焚けるしばしばも

言問ひ来なむ恋ふる里人」

冬になりて雪降り荒れたるころ、空のけしきもことにすぐく眺めたまひて、琴を弾きすさびたまひて、良清に歌うたはせ、大輔、横笛吹きて、遊びたまふ。心とどめてあはれなる手など弾きたまへるに、他物の声どもはやめて、涙のごひあへり。

昔、胡の国に遣しけむ女を思しやりて、「ましていかなりけむ。この世に我が思ひきこゆる人などをさやうに放ちやりたらむこと」など思ふも、あらむことのやうにゆゆしうて、

かくわざと立ち寄りものしたること」

とのたまふ。御返りもさやうになむ。

守、泣く泣く帰りて、おはする御ありさま語る。帥よりはじめ、迎への人びと、まがまがしう泣き満ちたり。五節は、とかくして聞こえたり。

「琴の音に弾きとめらるる綱手縄

たゆたふ心君知るらめや

好き好きしさも、人な咎めそ」

と聞こえたり。ほほ笑みて見たまふ、いと恥づかしげなり。

「心ありて引き手の綱のたゆたはば

うち過ぎましや須磨の浦波

いさりせむとは思はざりしはや」

とあり。駅の長に句詩取らする人もありけるを、まして、落ちとまりぬべくなむおぼえける。

都には、月日過ぐるままに、帝を初めたてまつりて、恋ひきこゆる折ふし多かり。春宮は、まして、常に思し出でつつ忍びて泣きたまふ。見たてまつる御乳母、まして命婦の君は、いみじうあはれに見たてまつる。

入道の宮は、春宮の御ことをゆゆしうのみ思ししに、大将もかくさすらへたまひぬるを、いみじう思し嘆かる。

御兄弟の親王たち、むつまじう聞こえたまひし上達部など、初めつ方はとぶらひきこえたまふなどありき。あはれなる文を作り交はし、それにつけても、世の中へのみめでられたまへば、後の宮聞こしめして、いみじうのたまひけり。

「朝廷の勤事なる人は、心に任せてこの世のあぢはひをだに知ること難うこそあなれ。おもしろき家居して、世の中を誹りもどきて、かの鹿を馬と言ひけむ人のひがめるやうに追従する」

月の都は遙かなれども」

その夜、主上のいとなつかしう昔物語などしたまひし御さまの、院に似たてまつりたまへりしも、恋しく思ひ出できこえたまひて、

「恩賜の御衣は今此に在り」

と誦じつつ入りたまひぬ。御衣はまことに身を放たず、かたはらに置きたまへり。

「憂しとのみひとへにものは思ほえで

左右にも濡るる袖かな」

そのころ、大式は上りける。いかめしく類広く、娘がちにて所狭かりければ、北の方は舟にて上る。浦づたひに逍遙しつつ来るに、他よりもおもしろきわたりなれば、心とまるに、「大将かくておはす」と聞けば、あいなう、好いたる若き娘たちは、舟の内さへ恥づかしう、心懸想せらる。まして、五節の君は、綱手引き過ぐるも口惜しきに、琴の声、風につきて遙かに聞こゆるに、所のさま、人の御ほど、物の音の心細さ、取り集め、心ある限りみな泣きにけり。

帥、御消息聞こえたり。

「いと遙かなるほどよりまかり上りては、まづいつしかさぶらひて、都の御物語もところそ、思ひたまへはべりつれ、思ひの外に、かくておはしましたける御宿をまかり過ぎはべる、かたじけなう悲しうもはべるかな。あひ知りてはべる人びと、さるべきこれかれ、参で来向ひてあまたはべれば、所狭さを思ひたまへ憚りはべることもはべりて、えさぶらはぬこと。ことさらに参りはべらむ」

など聞こえたり。子の筑前守ぞ参れる。この殿の、蔵人になし顧みたまひし人なれば、いとも悲し、いみじと思へども、また見る人びとのあれば、聞こえを思ひて、しばしもえ立ち止まらず。

「都離れて後、昔親しかりし人びと、あひ見ること難うのみなりにたるに、

「初雁は恋しき人の列なれや
旅の空飛ぶ声の悲しき」

とのたまへば、良清、

「かきつらね昔のことぞ思ほゆる
雁はその世の友ならねども」

民部大輔、

「心から常世を捨てて鳴く雁を
雲のよそにも思ひけるかな」

前右近将督、

「常世出でて旅の空なる雁がねも

列に遅れぬほどぞ慰む

友まどはしては、いかにはべらまし」

と言ふ。親の常陸になりて、下りしにも誘はれで、参れるなりけり。下には
思ひくたくべかめれど、ほこりかにもてなして、つれなきさまにしありく。

月のいとほなやかにさし出でたるに、「今宵は十五夜なりけり」と思し出でて、
殿上の御遊び恋しく、「所々眺めたまふらむかし」と思ひやりたまふにつけても、
月の顔のみまもられたまふ。

「二千里外故人心」

と誦じたまへる、例の涙もとどめられず。入道の宮の、「霧や隔つる」とのた
まはせしほど、言はむ方なく恋しく、折々のこと思ひ出でたまふに、よよと、
泣かれたまふ。

「夜更けはべりぬ」

と聞こゆれど、なほ入りたまはず。

「見るほどぞしばし慰むめぐりあはむ

と歌ひたまへるに、人びとおどろきて、めでたうおぼゆるに、忍ばれで、あいなう起きゐつつ、鼻を忍びやかにかみわたす。

「げに、いかに思ふらむ。我が身ひとつにより、親、兄弟、片時立ち離れがたく、ほどにつけつつ思ふらむ家を別れて、かく惑ひあへる」と思すに、いみじくて、「いとかく思ひ沈むさまを、心細しと思ふらむ」と思せば、昼は何くれとうちのたまひ紛らはし、つれづれなるままに、色々の紙を継ぎつつ、手習ひをしたまひ、めづらしきさまなる唐の綾などに、さまさまの絵どもを描きすさびたまへる屏風の面どもなど、いとめでたく見所あり。

人びとの語り聞こえし海山のありさまを、遙かに思しやりしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のたたずまひ、二なく描き集めたまへり。

「このころの上手にすめる千枝、常則などを召して、作り絵仕うまつらせばや」

と、心もとながりあへり。なつかしうめでたき御さまに、世のもの思ひ忘れて、近う馴れ仕うまつるをうれしきことにて、四、五人ばかりぞ、つとさぶらひける。

前裁の花、色々咲き乱れ、おもしろき夕暮れに、海見やらるる廊に出でたまひて、たたずみたまふさまの、ゆゆしうきよらなること、所からは、ましてこの世のものと見えたまはず。白き綾のなよやかなる、紫苑色などたてまつりて、こまやかなる御直衣、帯しどけなくうち乱れたまへる御さまにて、

「釈迦牟尼仏の弟子」

と名のりて、ゆるるかに読みたまへる、また世に知らず聞こゆ。

沖より舟どもの歌ひののしりて漕ぎ行くなども聞こゆ。ほのかに、ただ小さき鳥の浮かべると見やらるるも、心細げなるに、雁の連ねて鳴く声、楫の音にまがへるを、うち眺めたまひて、涙こぼるるをかき払ひたまへる御手つき、黒き御数珠に映えたまへる、故郷の女恋しき人びと、心みな慰みにけり。

何ごとも光なき心地するかな」とのたまはせて、「院の思しのたまはせし御心を違へつるかな。罪得らむかし」

とて、涙ぐませたまふに、え念じたまはず。

「世の中こそ、あるにつけてもあぢきなきものなりけれ、と思ひ知るままに、久しく世にあらむものとなむ、さらに思はぬ。さもなりなむに、いかが思さるべき。近きほどの別れに思ひ落とされむこそ、ねたけれ。生ける世には、げに、よからぬ人の言ひ置きけむ」

と、いとなつかしき御さまにて、ものをまことにあはれと思し入りてのたまはするにつけて、ほろほろとこぼれ出づれば、

「さりや。いづれに落つるにか」

とのたまはず。

「今まで御子たちのなきこそ、さうぎうしけれ。春宮を院ののたまはせしさまに思へど、よからぬことども出で来れば、心苦しう」

など、世を御心のほかにまつりごちなしたまふ人びとのあるに、若き御心の、強きところなきほどにて、いとほしと思したることも多かり。

須磨には、いとど心尽くしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平中納言の、「関吹き越ゆる」と言ひけむ浦波、夜々はげにいと近く聞こえて、またなくあはれるものは、かかる所の秋なりけり。

御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、一人目を覚まして、枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、波ただこもとに立ちくる心地して、涙落つともおぼえぬに、枕浮くばかりになりけり。琴をすこしかき鳴らしたまへるが、我ながらいとすごう聞こゆれば、弾きさしたまひて、

「恋ひわびて泣く音にまがふ浦波は

思ふ方より風や吹くらむ」

海人がつむなげきのなかに塩垂れて

いつまで須磨の浦に眺めむ

聞こえさせむことの、いつともはべらぬこそ、尽きせぬ心地しはべれ」
などぞありける。かやうに、いづこにもおぼつかかなからず聞こえかはしたまふ。

花散里も、悲しと思しけるままに書き集めたまへる御心々見たまふ、をかしまも目なれぬ心地して、いづれもうち見つつ慰めたまへど、もの思ひのもよほしぐさなめり。

「荒れまさる軒のしのぶを眺めつつ

しげくも露のかかる袖かな」

とあるを、「げに、葎よりほかの後見もなきさまにておはすらむ」と思しやりて、「長雨に築地所々崩れてなむ」と聞きたまへば、京の家司のもとに仰せつかはして、近き国々の御荘の者などもよほさせて、仕うまつるべき由のたまはず。

尚侍の君は、人笑へにいみじう思しくづほるるを、大臣いとなしうしたまふ君にて、せちに、宮にも内にも奏したまひければ、「限りある女御、御息所にもおはせず、公ぎまの宮仕へ」と思し直り、また、「かの憎かりしゆゑこそ、いかめしきことも出で来しか」。許されたまひて、参りたまふべきにつけても、なほ心に染みにし方ぞ、あはれにおぼえたまける。

七月になりて参りたまふ。いみじかりし御思ひの名残なれば、人のそしりもしろしめされず、例の、主上につとさぶらはせたまひて、よろづに怨み、かつはあはれに契らせたまふ。

御さま容貌もいとなまめかしうきよらなれど、思ひ出づることのみ多かる心のうちぞ、かたじけなき。御遊びのついでに、

「その人のなきこそ、いとさうぎうしけれ。いかにましてさ思ふ人多からむ。

ありけり。かれよりも、ふりはへ尋ね参れり。浅からぬことども書きたまへり。言の葉、筆づかひなどは、人よりことになまめかしく、いたり深う見えたり。

「なほうつつとは思ひたまへられぬ御住ひをうけたまはるも、明けぬ夜の心惑ひかとなむ。さりとも、年月隔てたまはじと、思ひやりきこえさするにも、罪深き身のみこそ、また聞こえさせむこともはるかなるべけれ。

うきめかる伊勢をの海人を思ひやれ

藻塩垂るてふ須磨の浦にて

よろづに思ひたまへ乱るる世のありさまも、なほいかになり果つべきにか」と多かり。

「伊勢島や潮干の潟に漁りても

いふかひなきは我が身なりけり」

ものをあはれと思しけるままに、うち置きうち置き書きたまへる、白き唐の紙、四、五枚ばかりを巻き続けて、墨つきなど見所あり。

「あはれに思ひきこえし人を、ひとふし憂しと思ひきこえし心あやまりに、かの御息所も思ひ倦じて別れたまひにし」と思せば、今にいとほしくかたじけなきものに思ひきこえたまふ。折からの御文、いとあはれなれば、御使さへむつまじうて、二、三日据ゑさせたまひて、かしこの物語などせさせて聞こしめす。

若やかにけしきある侍の人なりけり。かくあはれなる御住まひなれば、かやうの人もおのづからもの遠からで、ほの見たてまつる御さま、容貌を、いみじうめでたし、と涙落しをりけり。御返り書きたまふ、言の葉、思ひやるべし。

「かく世を離るべき身と、思ひたまへましかば、同じくは慕ひきこえましものを、などなむ。つれづれと、心細きままに、

伊勢人の波の上漕ぐ小舟にも

うきめは刈らで乗らましものを

も、いかが思し出でざらむ。御返りも、すこしこまやかにて、

「このころは、いとど、

塩垂るることをやくにて松島に

年ふる海人も嘆きをぞつむ」

尚侍君の御返りには、

「浦にたく海人だにつつむ恋なれば

くゆる煙よ行く方ぞなき

さらなることどもは、えなむ」

とばかり、いささか書きて、中納言の君の中にあり。思し嘆くさまなど、いみじう言ひたり。あはれと思ひきこえたまふ節々もあれば、うち泣かれたまひぬ。

姫君の御文は、心ことにこまかなりし御返りなれば、あはれなること多くて、

「浦人の潮くむ袖に比べ見よ

波路へだつる夜の衣を」

ものの色、したまへるさまなど、いときよらなり。何ごともらうらうじうものしたまふを、思ふさまにて、「今は他事に心あわたたしう、行きかかづらふ方もなく、しめやかにてあるべきものを」と思すに、いみじう口惜しう、夜昼面影におぼえて、堪へがたう思ひ出でられたまへば、「なほ忍びてや迎へまし」と思す。またうち返し、「なぞや、かく憂き世に、罪をだに失はむ」と思せば、やがて御精進にて、明け暮れ行なひておはす。

大殿の若君の御事などあるにも、いと悲しけれど、「おのづから逢ひ見てむ。頼もしき人びともしたまへば、うしろめたうはあらず」と、思しなざるは、なかなか、子の道の惑はれぬにやあらむ。

まことや、騒がしかりしほどの紛れに漏らしてけり。かの伊勢の宮へも御使

大殿にも、宰相の乳母にも、仕うまつるべきことなど書きつかはす。

京には、この御文、所々に見たまひつつ、御心乱れたまふ人びとのみ多かり。二条院の君は、そのままに起きも上がりたまはず、尽きせぬさまに思しこがれば、さぶらふ人びともこしらへわびつつ、心細う思ひあへり。

もてならしたまひし御調度ども、弾きならしたまひし御琴、脱ぎ捨てたまひつる御衣の匂ひなどにつけても、今はと世になからむ人のやうにのみ思したれば、かつはゆゆしうて、少納言は、僧都に御祈りのことなど聞こゆ。二方に御修法などせさせたまふ。かつは、「思し嘆く御心静めたまひて、思ひなき世にあらせたてまつりたまへ」と、心苦しきままに祈り申したまふ。

旅の御宿直物など、調べてたてまつりたまふ。かとの御直衣、指貫、さま変はりたる心地するもいみじきに、「去らぬ鏡」とのたまひし面影の、げに身に添ひたまへるもかひなし。

出で入りたまひし方、寄りゐたまひし真木柱などを見たまふにも、胸のみふたがりて、ものをとかう思ひめぐらし、世にしほじみぬる齢の人だにあり、まして、馴れむつびきこえ、父母にもなりて生ほし立てならはしたまへれば、恋しう思ひきこえたまへる、ことわりなり。ひたすら世になくなりなむは、言はむ方なくて、やうやう忘れ草も生ひやすらむ、聞くほどは近けれど、いつまでと限りある御別れにもあらで、思すに尽きせずなむ。

入道宮にも、春宮の御事により思し嘆くさま、いとさらなり。御宿世のほどを思すには、いかが浅く思されむ。年ごろはただものの聞こえなどのつつましさ、「すこし情けあるけしき見せば、それにつけて人のとがめ出づることこそそ」とのみ、ひとへに思し忍びつつ、あはれをも多う御覧じ過ぐし、すくすくしうもてなしたまひしを、「かばかり憂き世の人言なれど、かけてもこの方には言ひ出づることなくて止みぬるばかりの、人の御おもむけも、あながちなりし心の引く方にまかせず、かつはめやすくもて隠しつるぞかし」。あはれに恋しう

おはすべき所は、行平の中納言の、「藻塩垂れつつ」侘びける家居近きわたりなりけり。海づらはやや入りて、あはれにすぐげなる山中なり。

垣のさまよりはじめて、めづらかに見たまふ。茅屋ども、葦葺ける廊めく屋など、をかしうしつらひなしたり。所につけたる御住まひ、やう変はりて、「からぬ折ならば、をかしうもありなまし」と、昔の御心のすさび思し出づ。

近き所々の御荘の司召して、さるべきことどもなど、良清朝臣、親しき家司にて、仰せ行なふもあはれなり。時の間に、いと見所ありてしなさせたまふ。水深う遣りなし、植木どもなどして、今はと静まりたまふ心地、うつつならず。国の守も親しき殿人なれば、忍びて心寄せ仕うまつる。かかる旅所ともなう、人騒がしけれども、はかばかしう物をものたまひあはすべき人しなければ、知らぬ国の心地して、いと埋れいたく、「いかで年月を過ぐさまし」と思しやらる。

やうやう事静まりゆくに、長雨のころになりて、京のことも思しやらるるに、恋しき人多く、女君の思したりしさま、春宮の御事、若君の何心もなく紛れたまひしなどをはじめ、ここかしこ思ひやりきこえたまふ。

京へ人出だし立てたまふ。二条院へたてまつりたまふと、入道の宮のとは、書きもやりたまはず、昏されたまへり。宮には、

「松島の海人の苦屋もいかならむ

須磨の浦人しほたるるころ

いつとはべらぬなかにも、来し方行く先かきくらし、『汀まさりて』なむ

尚侍の御もとに、例の、中納言の君の私事のやうにて、中なるに、

「つれづれと過ぎにし方の思ひたまへ出でらるるにつけても、

こりずまの浦のみるめのゆかしきを

塩焼く海人やいかが思はむ」

さまざま書き尽くしたまふ言の葉、思ひやるべし。

たまへり。「わが身かくてはかなき世を別れなば、いかなるさまにさすらへたまはむ」と、うしろめたく悲しけれど、思し入りたるに、いとどしかるべければ、

「生ける世の別れを知らで契りつつ

命を人に限りけるかな

はかなし」

など、あきはかに聞こえなしたまへば、

「惜しからぬ命に代へて目の前の

別れをしぼしとどめてしがな」

「げに、さぞ思さるらむ」と、いと見捨てがたけれど、明け果てなば、はしたなかるべきにより、急ぎ出でたまひぬ。

道すがら、面影につと添ひて、胸もふたがりながら、御舟に乗りたまひぬ。

日長きころなれば、追風さへ添ひて、まだ申の時ばかりに、かの浦に着きたまひぬ。かりそめの道にても、かかる旅をならひたまはぬ心地に、心細さもをかしまもめづらかなり。大江殿と言ひける所は、いたう荒れて、松ばかりぞしるしなる。

「唐国に名を残しける人よりも

行方知られぬ家居をやせむ」

渚に寄る波のかつ返るを見たまひて、「うらやましくも」と、うち誦じたまへるさま、さる世の古言なれど、珍しう聞きなされ、悲しとのみ御供の人びと思へり。うち顧みたまへるに、来し方の山は霞はるかにて、まことに「三千里の外」の心地するに、權の雫も堪へがたし。

「故郷を峰の霞は隔つれど

眺むる空は同じ雲居か」

つらからぬものなくなむ。

花の都を立ち帰り見よ

時しあらば」

と聞こえて、名残もあはれなる物語をしつつ、一宮のうち、忍びて泣きあへり。

一目も見たてまつれる人は、かく思しくづほれぬる御ありさまを、嘆き惜しみきこえぬ人なし。まして、常に参り馴れたりしは、知り及びたまふまじき長女、御厠人まで、ありがたき御顧みの下なりつるを、「しばしにても、見たてまつらぬほどや経む」と、思ひ嘆きけり。

おほかたの世の人も、誰かはよろしく思ひきこえむ。七つになりたまひしこのかた、帝の御前に夜昼さぶらひたまひて、奏したまふことのならぬはなかりしかば、この御いたはりにかからぬ人なく、御徳をよろこばぬやありし。やむごとなき上達部、弁官などのなかにも多かり。それより下は数知らぬを、思ひ知らぬにはあらねど、さしあたりて、いちはやき世を思ひ憚りて、参り寄るもなし。世ゆすりて惜しみきこえ、下に朝廷をそしり、恨みたてまつれど、「身を捨ててとぶらひ参らむにも、何のかひかは」と思ふにや、かかる折は人悪ろく、恨めしき人多く、「世の中はあぢきなきものかな」とのみ、よろづにつけて思す。

その日は、女君に御物語のどかに聞こえ暮らしたまひて、例の、夜深く出でたまふ。狩の御衣など、旅の御よそひ、いたくやつしたまひて、

「月出でにけりな。なほすこし出でて、見だに送りたまへかし。いかに聞こゆべきこと多くつもりにけりとおぼえむとすらむ。一日、二日たまさかに隔たる折だに、あやしういぶせき心地するものを」

とて、御簾巻き上げて、端にいぎなひきこえたまへば、女君、泣き沈みたまへるを、ためらひて、ゐざり出でたまへる、月影に、いみじうをかしげにてゐ

御墓は、道の草茂くなりて、分け入りたまふほど、いとど露けきに、月も隠れて、森の木立、木深く心すごし。帰り出でむ方もなき心地して、拝みたまふに、ありし御面影、さやかに見えたまへる、そぞろ寒きほどなり。

「亡き影やいかが見るらむよそへつつ

眺むる月も雲隠れぬる」

明け果つるほどに帰りたまひて、春宮にも御消息聞こえたまふ。王命婦を御代はりにてさぶらはせたまへば、「その御局に」とて、

「今日なむ、都離れはべる。また参りはべらずなりぬるなむ、あまたの憂へにまさりて思うたまへられはべる。よろづ推し量りて啓したまへ。

いつかまた春の都の花を見む

時失へる山賤にして」

桜の散りすぎたる枝につけたまへり。「かくなむ」と御覽ぜさすれば、幼き御心地にもまめだちておはします。

「御返りいかがものしたまふらむ」

と啓すれば、

「しばし見ぬだに恋しきものを、遠くはましていかに、と言へかし」

とのたまはず。「ものはかなの御返りや」と、あはれに見たてまつる。あぢきなきことに御心をくだきたまひし昔のこと、折々の御ありさま、思ひ続けらるるにも、もの思ひなくて我も人も過ぐいたまひつべかりける世を、心と思し嘆きけるを悔しう、わが心ひとつにかからむことのやうにぞおぼゆる。御返りは、

「さらに聞こえさせやりはべらず。御前には啓しはべりぬ。心細げに思し召したる御けしきもいみじくなむ」

と、そこはかとなく、心の乱れけるなるべし。

「咲きてとく散るは憂けれどゆく春は

いみじき御心惑ひどもに、思し集むることどもも、えぞ続けさせたまはぬ。

「別れしに悲しきことは尽きにしを

またぞこの世の憂さはまされる」

月待ち出でて出でたまふ。御供にただ五、六人ばかり、下人もむつまじき限りして、御馬にてぞおはする。さらなることなれど、ありし世の御ありきに異なり、皆いと悲しう思ふなり。なかに、かの御禊の日、仮の御隨身にて仕うまつりし右近の将監の蔵人、得べきかうぶりもほど過ぎつるを、つひに御簡削られ、官も取られて、はしたなければ、御供に参るうちなり。

賀茂の下の御社を、かれと見渡すほど、ふと思ひ出でられて、下りて、御馬の口を取る。

「ひき連れて葵かざししそのかみを

思へばつらし賀茂の瑞垣」

と言ふを、「げに、いかに思ふらむ。人よりけにはなやかなりしものを」と思すも、心苦し。

君も、御馬より下りたまひて、御社のかた拝みたまふ。神にまかり申したまふ。

「憂き世をば今ぞ別るとどまらむ

名をば糺の神にまかせて」

とのたまふさま、ものめでする若き人にて、身にしみてあはれにめでたしと見たてまつる。

御山に詣うでたまひて、おはしましし御ありさま、ただ目の前のやうに思し出でらる。限りなきにても、世に亡くなりぬる人ぞ、言はむかたなく口惜しきわざなりける。よろづのことを泣く泣く申したまひても、そのことわりをあらはに承りたまはねば、「さばかり思しのたまはせしさまさまの御遺言は、いつちか消え失せにけむ」と、いふかひなし。

流れて後の瀬をも待たずて」

泣く泣く乱れ書きたまへる御手、いとをかしげなり。今ひとたび対面なくやと思すは、なほ口惜しけれど、思し返して、憂しと思しなすゆかり多うて、おぼろけならず忍びたまへば、いとあながちにも聞こえたまはずなりぬ。

明日とて、暮には、院の御墓拝みたてまつりたまふとて、北山へ詣でたまふ。暁かけて月出づるころなれば、まづ、入道の宮に参うでたまふ。近き御簾の前に御座参りて、御みづから聞こえさせたまふ。春宮の御事をいみじうしろめたきものに思ひきこえたまふ。

かたみに心深きどちの御物語は、よろづあはれまさりけむかし。なつかしうめでたき御けはひの昔に変はらぬに、つらかりし御心ばへも、かすめきこえさせまほしけれど、今さらにうたてと思さるべし、わが御心にも、なかなか今ひとときは乱れまさりぬべければ、念じ返して、ただ、

「かく思ひかけぬ罪に当たりはべるも、思うたまへあはすることの一節になむ、空も恐ろしうはべる。惜しげなき身はなきになしても、宮の御世にだに、ことなくおはしまさば」

とのみ聞こえたまふぞ、ことわりなるや。

宮も、みな思し知らるることにしあれば、御心のみ動きて、聞こえやりたまはず。大将、よろづのことかき集め思し続けて、泣きたまへるけしき、いと尽きせすなまめきたり。

「御山に参りはべるを、御ことつてや」

と聞こえたまふに、とみにものも聞こえたまはず、わりなくためらひたまふ御けしきなり。

「見しはなくあるは悲しき世の果てを

背きしかひもなくなくぞ経る」

琴一つぞ持たせたまふ。所狭き御調度、はなやかなる御よそひなど、さらに具したまはず、あやしの山賤めきてもてなしたまふ。

さぶらふ人びとよりはじめ、よろづのこと、みな西の対に聞こえわたしたまふ。領じたまふ御莊、御牧よりはじめて、さるべき所々、券など、みなたてまつり置きたまふ。それよりほかの御倉町、納殿などいふことまで、少納言をはかばかしきものに見置きたまへれば、親しき家司ども具して、しろしめすべきさまどものたまひ預く。

わが御方の中務、中将などやうの人びと、つれなき御もてなしながら、見たてまつるほどこそ慰めつれ、「何ごとにつけてか」と思へども、

「命ありてこの世にまた帰るやうもあらむを、待ちつけむと思はむ人は、あなたにさぶらへ」

とのたまひて、上下、皆参う上らせたまふ。

若君の御乳母たち、花散里なども、をかしきさまのはさるものにて、まめまめしき筋に思し寄らぬことなし。

尚侍の御もとに、わりなくして聞こえたまふ。

「問はせたまはぬも、ことわりに思ひたまへながら、今はと、世を思ひ果つるほどの憂さもつらさも、たぐひなきことにこそはべりけれ。

逢ふ瀬なき涙の河に沈みしや

流るる漕の初めなりけむ

と思ひたまへ出づるのみなむ、罪逃れがたうはべりける」

道のほども危ふければ、こまかには聞こえたまはず。

女、いといみじうおぼえたまひて、忍びたまへど、御袖よりあまるも所狭うなむ。

「涙河浮かぶ水泡も消えぬべし

月おぼろにさし出でて、池広く、山木深きわたり、心細げに見ゆるにも、住み離れたらむ巖のなか、思しやらる。

西面は、「かうしも渡りたまはずや」と、うち屈して思しけるに、あはれ添へたる月影の、なまめかしうしめやかなるに、うち振る舞ひたまへるにほひ、似るものなくて、いと忍びやかに入りたまへば、すこしるぎり出でて、やがて月を見ておはす。またここに御物語のほどに、明け方近うなりにけり。

「短夜のほどや。かばかりの対面も、またはえしもやと思ふこそ、ことなしにて過ぐしつる年ごろも悔しう、来し方行く先のためしになるべき身にて、何となく心のどまる世なくこそありけれ」

と、過ぎにし方のことどものたまひて、鶏もしばしば鳴けば、世につつみて急ぎ出でたまふ。例の、月の入り果つるほど、よそへられて、あはれなり。女君の濃き御衣に映りて、げに、漏るる顔なれば、

「月影の宿れる袖はせばくとも

とめても見ばやあかぬ光を」

いみじと思いたるが、心苦しければ、かつは慰めきこえたまふ。

「行きめぐりつひにすむべき月影の

しばし雲らむ空な眺めそ

思へば、はかなしや。ただ、知らぬ涙のみこそ、心を昏らすものなれ」

などのたまひて、明けぐれのほどに出でたまひぬ。

よろづのことどもしたためさせたまふ。親しう仕まつり、世になびかぬ限りの人びと、殿の事とり行なふべき上下、定め置かせたまふ。御供に慕ひきこゆる限りは、また選り出でたまへり。

かの山里の御住みかの具は、えさらずとり使ひたまふべきものども、ことさらよそひもなくことそぎて、さるべき書ども『文集』など入りたる箱、さては

日たくるまで大殿籠もれり。帥宮、三位中将などおはしたり。対面したまはむとて、御直衣などたてまつる。

「位なき人は」

とて、無紋の直衣、なかなか、いとなつかしきを着たまひて、うちやつれたまへる、いとめでたし。御鬢かきたまふとて、鏡台に寄りたまへるに、面痩せたまへる影の、我ながらいとあてにきよらなれば、

「こよなうこそ、衰へにけれ。この影のやうにや痩せてはべる。あはれなるわぎかな」

とのたまへば、女君、涙一目うけて、見おこせたまへる、いと忍びがたし。

「身はかくてさすらへぬとも君があたり

去らぬ鏡の影は離れじ」

と、聞こえたまへば、

「別れても影だにとまるものならば

鏡を見ても慰めてまし」

柱隠れに隠れて、涙を紛らはしたまへるさま、「なほ、ここら見るなかにたぐひなかりけり」と、思し知らるる人の御ありさまなり。

親王は、あはれなる御物語聞こえたまひて、暮るるほどに帰りたまひぬ。

花散里の心細げに思して、常に聞こえたまふもことわりにて、「かの人も、今ひとたび見ずは、つらしとや思はむ」と思せば、その夜は、また出でたまふものから、いともの憂くて、いたう更かしておはしたれば、女御、

「かく数まへたまひて、立ち寄せたまへること」

と、よろこびきこえたまふさま、書き続けむもうるさし。

いといみじう心細き御ありさま、ただ御蔭に隠れて過ぐいたまへる年月、いとど荒れまさらむほど思しやられて、殿の内、いとかすかなり。

を見たまふにも、心細う、「年月経ば、かかる人びとも、えしもあり果てでや、行き散らむ」など、さしもあるまじきことさへ、御目のみとまりけり。

「昨夜は、しかしかして夜更けにしかばなむ。例の思はずなるさまにや思しなしつる。かくてはべるほどだに御目離れずと思ふを、かく世を離るる際には、心苦しきことのおのづから多かりける、ひたやごもりにてやは。常なき世に、人にも情けなきものと心おかれ果てむと、いとほしうてなむ」

と聞こえたまへば、

「かかる世を見るよりほかに、思はずなることは、何ごとにか」

とばかりのたまひて、いみじと思し入れたるさま、人よりことなるを、ことわりぞかし、父親王、いとおろかにもとより思しつきにけるに、まして、世の聞こえをわづらはしがりて、訪れきこえたまはず、御とぶらひにだに渡りたまはぬを、人の見るらむことも恥づかしく、なかなか知られたてまつらでやみなましを、継母の北の方などの、

「にはかなりし幸ひのあわたたしき。あな、ゆゆしや。思ふ人、方々につけて別れたまふ人かな」

とのたまひけるを、さる便りありて漏り聞きたまふにも、いみじう心憂ければ、これよりも絶えて訪れきこえたまはず。また頼もしき人もなく、げにぞ、あはれなる御ありさまなる。

「なほ世に許されがたうて、年月を経ば、巖の中にも迎へたてまつらむ。ただ今は、人聞きのいとつきなかるべきなり。朝廷にかしこまりきこゆる人は、明らかなる月日の影をだに見ず、安らかに身を振る舞ふことも、いと罪重かなり。過ちなけれど、さるべきにこそかかることもあらめと思ふに、まして思ふ人具するは、例なきことなるを、ひたおもむきにもぐるほしき世にて、立ちまさることもありなむ」

など聞こえ知らせたまふ。

「聞こえさせまほしきことも、返す返す思うたまへながら、ただに結ばほれはべるほど、推し量らせたまへ。いぎたなき人は、見たまへむにつけても、なかなか、憂き世逃れがたう思うたまへられぬべければ、心強う思うたまへなして、急ぎまかではべり」

と聞こえたまふ。

出でたまふほどを、人びと覗きて見たてまつる。

入り方の月いと明きに、いとどなまめかしうきよらにて、ものを思いたるさま、虎、狼だに泣きぬべし。まして、いはけなくおはせしほどより見たてまつりそめてし人びとなれば、たとしへなき御ありさまをいみじと思ふ。

まことや、御返り、

「亡き人の別れやいとど隔たらむ

煙となりし雲居ならでは」

取り添へて、あはれのみ尽きせず、出でたまひぬる名残、ゆゆしきまで泣きあへり。

殿におはしたれば、わが御方の人びとも、まどろまざりけるけしきにて、所々に群れゐて、あさましとのみ世を思へるけしきなり。侍には、親しう仕まつる限りは、御供に参るべき心まうけして、私の別れ惜しむほどにや、人もなし。さらぬ人は、とぶらひ参るも重き咎めあり、わづらはしきことまされば、所狭く集ひし馬、車の方もなく、寂しきに、「世は憂きものなりけり」と、思し知る。

台盤なども、かたへは塵ばみて、畳、所々引き返したり。「見るほどだにかかり。ましていかに荒れゆかむ」と思す。

西の対に渡りたまへれば、御格子も参らで、眺め明かしたまひければ、簀子などに、若き童女、所々に臥して、今ぞ起き騒ぐ。宿直姿どもをかしうてゐる

まりたまひて、人びと御前にさぶらはせたまひて、物語などせさせたまふ。人よりはこよなう忍び思す中納言の君、言へばえに悲しう思へるさまを、人知れずあはれと思す。人皆静まりぬるに、とりわきて語らひたまふ。これにより泊まりたまへるなるべし。

明けぬれば、夜深う出でたまふに、有明の月いとをかし。花の木どもやうやう盛り過ぎて、わづかなる木蔭の、いと白き庭に薄く霧りわたりたる、そこはかとなく霞みあひて、秋の夜のあはれにおほくたちまされり。隅の高欄におしかかりて、とばかり、眺めたまふ。

中納言の君、見たてまつり送らむとにや、妻戸おし開けてゐたり。

「また対面あらむことこそ、思へばいと難けれ。かかりける世を知らで、心やすくもありぬべかりし月ごろ、さしも急がで、隔てしよ」
などのたまへば、ものも聞こえず泣く。

若君の御乳母の宰相の君して、宮の御前より御消息聞こえたまへり。

「身づから聞こえまほしきを、かきくらす乱り心地ためらひはべるほどに、いと夜深う出でさせたまふなるも、さま変はりたる心地のみしはべるかな。心苦しき人のいぎたなきほどは、しばしもやすらはせたまはで」

と聞こえたまへれば、うち泣きたまひて、

「鳥辺山燃えし煙もまがふやと

海人の塩焼く浦見にぞ行く」

御返りともなくうち誦じたまひて、

「暁の別れは、かうのみや心尽くしなる。思ひ知りたまへる人もあらむかし」
とのたまへば、

「いつとなく、別れといふ文字こそうたてはべるなるなかにも、今朝はなほたぐひあるまじう思うたまへらるるほどかな」

と、鼻声にて、げに浅からず思へり。

と聞こえたまひて、いたうしほたれたまふ。

「とあることも、かかることも、前の世の報いにこそはべるなれば、言ひもてゆけば、ただ、みづからのおこたりになむはべる。さして、かく、官爵を取られず、あさはかなることにかかづらひてだに、朝廷のかしこまりなる人の、うつしぎまにて世の中にあり経るは、咎重きわざに人の国にもしはべるなるを、遠く放ちつかはすべき定めなどもはべるなるは、さま異なる罪に当たるべきにこそはべるなれ。濁りなき心にまかせて、つれなく過ぐしはべらむも、いと憚り多く、これより大きな恥にのぞまぬさきに、世を逃れなむと思うたまへ立ちぬる」

など、こまやかに聞こえたまふ。

昔の御物語、院の御こと、思しのたまはせし御心ばへなど聞こえ出でたまひて、御直衣の袖もえ引き放ちたまはぬに、君も、え心強くもてなしたまはず。若君の何心なく紛れありきて、これかれに馴れきこえたまふを、いみじと思いたり。

「過ぎはべりにし人を、世に思うたまへ忘るる世なくのみ、今に悲しびはべるを、この御ことになむ、もしはべる世ならましかば、いかやうに思ひ嘆きはべらまし。よくぞ短くて、かかる夢を見ずなりにけると、思うたまへ慰めはべり。幼くものしたまふが、かく齢過ぎぬるなかにとまりたまひて、なづさひきこえぬ月日や隔たりたまはむと思ひたまふるをなむ、よろづのことよりも、悲しうはべる。いにしへの人も、まことに犯しあるにても、かかることに当たらざりけり。なほさるべきにて、人の朝廷にもかかるたぐひ多うはべりけり。されど、言ひ出づる節ありてこそ、さることもはべりけれ、とぎまかうぎまに、思ひたまへ寄らむかたなくなむ」

など、多くの御物語聞こえたまふ。

三位中将も参りあひたまひて、大御酒など参りたまふに、夜更けぬれば、泊

をも見せたまはましかば」と、うち思ひ出でたまふにも、「さも、さまざまに、心をみ尽くすべかりける人の御契りかな」と、つらく思ひきこえたまふ。

三月二十日あまりのほどになむ、都を離れたまひける。人にいつとしも知らせたまはず、ただいと近う仕うまつり馴れたる限り、七、八人ばかり御供にて、いとかすかに出で立ちたまふ。さるべき所々に、御文ばかりうち忍びたまひしにも、あはれと忍ぶるばかり尽くいたまへるは、見どころもありぬべかりしかど、その折の、心地の紛れに、はかばかしうも聞き置かずなりにけり。

二、三日かねて、夜に隠れて、大殿に渡りたまへり。網代車のうちやつれたるにて、女車のやうにて隠ろへ入りたまふも、いとあはれに、夢とのみ見ゆ。御方、いと寂しげにうち荒れたる心地して、若君の御乳母ども、昔さぶらひし人のなかに、まかで散らぬ限り、かく渡りたまへるをめぐらしがりきこえて、参う上り集ひて見たてまつるにつけても、ことにも深からぬ若き人びとさへ、世の常なさ思ひ知られて、涙にくれたり。

若君はいとうつくしうて、され走りおはしたり。

「久しきほどに、忘れぬこそ、あはれなれ」

とて、膝に据ゑたまへる御けしき、忍びがたげなり。

大臣、こなたに渡りたまひて、対面したまへり。

「つれづれに籠もらせたまへらむほど、何とはべらぬ昔物語も、参りて、聞こえさせむと思うたまへれど、身の病重きにより、朝廷にも仕うまつらず、位をも返したてまつりてはべるに、私ざまには腰のべてなむと、ものの聞こえひがひがしかるべきを、今は世の中憚るべき身にもはべらねど、いちはやき世のいと恐ろしうはべるなり。かかる御ことを見たまふるにつけて、命長きは心憂く思うたまへらるる世の末にもはべるかな。天の下をさかさまになしても、思うたまへ寄らざりし御ありさまを見たまふれば、よろづいとあぢきなくなむ」

世の中、いとわづらはしく、はしたなきことのみまされば、「せめて知らず顔にあり経ても、これよりまさることもや」と思しなりぬ。

「かの須磨は、昔こそ人の住みかなどもありけれ、今は、いと里離れ心すごくて、海人の家だにまれに」など聞きたまへど、「人しげく、ひたたけたらむ住まひは、いと本意なかるべし。さりとて、都を遠ざからむも、故郷おぼつかなかるべきを」、人悪くぞ思し乱るる。

よろづのこと、来し方行く末、思ひ続けたまふに、悲しきこといとさまざまなり。憂きものと思ひ捨てつる世も、今はと住み離れなむことを思すには、いと捨てがたきこと多かるなかにも、姫君の、明け暮れにそへては、思ひ嘆きたまへるさまの、心苦しうあはれなるを、「行きめぐりても、また逢ひ見むことかなならず」と、思さむにてだに、なほ一、二日のほど、よそよそに明かし暮らす折々だに、おぼつかなきものにおぼえ、女君も心細うのみ思ひたまへるを、「幾年そのほどと限りある道にもあらず、逢ふを限りに隔たりゆかむも、定めなき世に、やがて別るべき門出にもや」と、いみじうおぼえたまへば、「忍びてもろともにもや」と、思し寄る折あれど、さる心細からむ海づらの、波風よりほかに立ちまじる人もなからむに、かくらうたき御さまにて、引き具したまへらむも、いとつきなく、わが心にも、「なかなか、もの思ひのつまなるべきを」など思し返すを、女君は、「いみじからむ道にも、後れきこえずだにあらば」と、おもむけて、恨めしげに思いたり。

かの花散里にも、おはし通ふことこそまれなれ、心細くあはれなる御ありさまを、この御蔭に隠れてものしたまへば、思し嘆きたるさまも、いとことわりなり。なほざりにても、ほのかに見たてまつり通ひたまひし所々、人知れぬ心をくだきたまふ人ぞ多かりける。

入道の宮よりも、「ものの聞こえや、またいかがりなきむ」と、わが御ためつつましけれど、忍びつつ御とぶらひ常にあり。「昔、かやうに相思し、あはれ

須 磨

須

磨

たまふ。

「橘の香をなつかしみほととぎす

花散る里をたづねてぞとふ

いにしへの忘れがたき慰めには、なほ参りはべりぬべかりけり。こよなうこそ、紛るることも、数添ふこともはべりけれ。おほかたの世に従ふものなれば、昔語もかきくづすべき人少なうなりゆくを、まして、つれづれも紛れなく思さるらむ」

と聞こえたまふに、いとさらなる世なれど、ものをいとあはれに思し続けたる御けしきの浅からぬも、人の御さまからにや、多くあはれぞ添ひにける。

「人目なく荒れたる宿は橘の

花こそ軒のつまとなりけれ」

とばかりのたまへる、「さはいへど、人にはいとことなりけり」と、思し比べらる。

西面には、わざとなく、忍びやかにうち振る舞ひたまひて、覗きたまへるも、めづらしきに添へて、世に目なれぬ御さまなれば、つらさも忘れぬべし。何やかやと、例の、なつかしく語らひたまふも、思さぬことにあらざるべし。

かりにも見たまふかぎりは、おしなべての際にはあらず、さまざまにつけて、いふかひなしと思さるるはなければにや、憎げなく、我も人も情けを交はしつ、過ぐしたまふなりけり。それをあいなしと思ふ人は、とにかくに変はるも、「ことわりの、世のさが」と、思ひなしたまふ。ありつる垣根も、さやうにて、ありさま変はりにたるあたりなりけり。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

し。

「ほととぎす言問ふ声はそれなれど

あなおぼつかかな五月雨の空」

ことさらたどると見れば、

「よしよし、植ゑし垣根も」

とて出づるを、人知れぬ心には、ねたうもあはれにも思ひけり。

「さも、つつむべきことぞかし。ことわりにもあれば、さすがなり。かやうの際に、筑紫の五節が、らうたげなりしはや」

と、まづ思し出づ。

いかなるにつけても、御心の暇なく苦しげなり。年月を経ても、なほかやうに、見しあたり、情け過ぐしたまはぬにしも、なかなか、あまたの人のもの思ひぐさなり。

かの本意の所は、思しやりつるもしるく、人目なく、静かにておはするありさまを見たまふも、いとあはれなり。まづ、女御の御方にて、昔の御物語など聞こえたまふに、夜更けにけり。

二十日の月さし出づるほどに、いとど木高き蔭ども木暗く見えわたりて、近き橘の薫りなつかしく匂ひて、女御の御けはひ、ねびにたれど、あくまで用意あり、あてにらうたげなり。

「すぐれてはなやかなる御おぼえこそなかりしかど、むつまじうなつかしき方には思したりしものを」

など、思ひ出できこえたまふにつけても、昔のことかきつらね思されて、うち泣きたまふ。

ほととぎす、ありつる垣根のにや、同じ声にうち鳴く。「慕ひ来にけるよ」と、思さるるほども、艶なりかし。「いかに知りてか」など、忍びやかにうち誦んじ

人知れぬ、御心づからのもの思はしきは、いつとなきことなめれど、かくおほかたの世につけてさへ、わづらはしう思し乱るることのみまされば、もの心細く、世の中なべて厭はしう思しならるるに、さすがなること多かり。

麗景殿と聞こえしは、宮たちもおはせず、院隠れさせたまひて後、いよいよあはれなる御ありさまを、ただこの大将殿の御心にもて隠されて、過ぐしたまふなるべし。

御おとうとの三の君、内わたりにてはかなうほのめきたまひしなごりの、例の御心なれば、さすがに忘れも果てたまはず、わざともてなしたまはぬに、人の御心のみ尽くし果てたまふべかめるをも、このごろ残ることなく思し乱るる世のあはれのくさはひには、思ひ出でたまふには、忍びがたくて、五月雨の空めづらしく晴れたる雲間に渡りたまふ。

何ばかりの御よそひなく、うちやつして、御前などもなく、忍びて、中川のほどおはし過ぐるに、ささやかなる家の、木立などよしばめるに、よく鳴る琴を、あづまに調べて、掻き合はせ、にぎははしく弾きなすなり。

御耳とまりて、門近なる所なれば、すこしきし出でて見入れたまへば、大きな桂の木の追ひ風に、祭のころ思し出でられて、そこはかとなくけはひをかしきを、「ただ一目見たまひし宿りなり」と見たまふ。ただならず、「ほど経にける、おぼめかしくや」と、つつましかれど、過ぎがてにやすらひたまふ、折しも、ほととぎす鳴きて渡る。もよほしきこえ顔なれば、御車おし返させて、例の、惟光入れたまふ。

「をちかへりえぞ忍ばれぬほととぎす

ほの語らひし宿の垣根に」

寢殿とおぼしき屋の西の妻に人びとゐたり。先々も聞きし声なれば、声づくりけしきとりて、御消息聞こゆ。若やかなるけしきどもして、おぼめくなるべ

花散里

花
散
里

当たりはべらむ」

など、聞こえ直したまへど、ことに御けしきも直らず。

「かく、一所におはして隙もなきに、つつむところなく、さて入りものせらるらむは、ことさらに軽め弄ぜらるるにこそは」と思しなすに、いとどいみじうめざましく、「このついでに、ちるべきことも構へ出でむに、よきたよりなり」と、思しめぐらすべし。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

て、うけばりたる女御なども言はせたまはぬをだに、飽かず口惜しう思ひたまふるに、また、かかることさへはべりければ、さらにいと心憂くなむ思ひなりはべりぬる。男の例とはいひながら、大将もいとけしからぬ御心なりけり。齋院をもなほ聞こえ犯しつつ、忍びに御文通はしなどして、けしきあることなど、人の語りはべりしをも、世のためのみにもあらず、我がためもよかるまじきことなれば、よもさる思ひやりなきわざ、し出でられじとなむ、時の有職と天の下をなびかしたまへるさま、ことなめれば、大将の御心を、疑ひはべらざりつる」

などのたまふに、宮は、いとどしき御心なれば、いとものしき御けしきにて、「帝と聞こゆれど、昔より皆人思ひ落としきこえて、致仕の大臣も、またなくかしづく一つ女を、兄の坊にておはするにはたてまつらで、弟の源氏にて、いとさなきが元服の副臥にとり分き、また、この君をも宮仕へにと心ざしてはべりしに、をこがましかりしありさまなりしを、誰れも誰れもあやしとやは思したりし。皆、かの御方にこそ御心寄せはべるめりしを、その本意違ふさまにてこそは、かくてもさぶらひたまふめれど、いとほしさに、いかでさる方にても、人に劣らぬさまにもてなしきこえむ、さばかりねたげなりし人の見るところもあり、などこそは思ひはべりつれど、忍びて我が心の入る方に、なびきたまふにこそははべらめ。齋院の御ことは、ましてさもあらむ。何ごとにつけても、朝廷の御方にうしろやすからず見ゆるは、春宮の御世、心寄せ殊なる人なれば、ことわりになむあめる」

と、すすすすくしうのたまひ続くるに、さすがにいとほしう、「など、聞こえつることぞ」と、思さるれば、

「さはれ、しばし、このこと漏らしはべらじ。内にも奏せさせたまふな。かくのごと、罪はべりとも、思し捨つまじきを頼みにて、あまえてはべるなるべし。うちうちに制しのたまはむに、聞きはべらずは、その罪に、ただみづから

とのたまふに、薄二藍なる帯の、御衣にまつはれて引き出でられたるを見つけたまひて、あやしと思すに、また、畳紙の手習ひなどしたる、御几帳のもとに落ちたり。「これはいかなる物どもぞ」と、御心おどろかれて、

「かれは、誰れがぞ。けしき異なるもののさまかな。たまへ。それ取りて誰がぞと見はべらむ」

とのたまふにぞ、うち見返りて、我も見つけたまへる。紛らはすべきかたもなければ、いかがは応へきこえたまはむ。我にもあらでおはするを、「子ながらも恥づかしと思すらむかし」と、さばかりの人は、思し憚るべきぞかし。されど、いと急に、のどめたるところおはせぬ大臣の、思しもまはさずなりて、畳紙を取りたまふままに、几帳より見入れたまへるに、いといたうなよびて、慎ましからず添ひ臥したる男もあり。今ぞ、やをら顔ひき隠して、とかう紛らはす。あさましう、めざましう心やましけれど、直面には、いかでか現はしたまはむ。目もくるる心地すれば、この畳紙を取りて、寝殿に渡りたまひぬ。

尚侍の君は、我かの心地して、死ぬべく思さる。大将殿も、「いとほしう、つひに用なき振る舞ひのつもりて、人のもどきを負はむとすること」と思せど、女君の心苦しき御けしきを、とかく慰めきこえたまふ。

大臣は、思ひのままに、籠めたるところおはせぬ本性に、いとど老いの御ひがみさへ添ひたまふに、これは何ごとにかはとどこほりたまはむ。ゆくゆくと、宮にも愁へきこえたまふ。

「かうかうのことなむはべる。この畳紙は、右大将の御手なり。昔も、心宥されでありそめにけることなれど、人柄によろづの罪を宥して、さても見むと、言ひはべりし折は、心もとどめず、めざましげにもてなされにしかば、やすからず思ひたまへしかど、さるべきにこそはとて、世に穢れたりとも、思し捨つまじきを頼みにて、かく本意のごとくたてまつりながら、なほ、その憚りあり

誰も誰も、うれしう思すに、例の、めづらしき隙なるをと、聞こえ交はしたまひて、わりなきさまにて、夜な夜な対面したまふ。

いと盛りに、にぎははしきけはひしたまへる人の、すこしうち悩みて、痩せ瘦せになりたまへるほど、いとをかしげなり。

後の宮も一所におはするころなれば、けはひいと恐ろしけれど、かかることしもまさる御癖なれば、いと忍びて、たび重なりゆけば、けしき見る人びともあるべかめれど、わづらはしうて、宮には、さなむと啓せず。

大臣、はた思ひかけたまはぬに、雨にはかにおどろおどろしう降りて、神いたう鳴りさわぐ暁に、殿の君達、宮司など立ちさわぎて、こなたかなたの人目しげく、女房どもも怖ぢまどひて、近う集ひ参るに、いとわりなく、出でたまはむ方なくて、明け果てぬ。

御帳のめぐりにも、人びとしげく並みふたれば、いと胸つぶらはしく思さる。心知りの人二人ばかり、心を惑はす。

神鳴り止み、雨すこしを止みぬるほどに、大臣渡りたまひて、まづ、宮の御方におはしけるを、村雨のまぎれにてえ知りたまはぬに、軽らかにふとはひ入りたまひて、御簾引き上げたまふままに、

「いかにぞ。いとうたてありつる夜のさまに、思ひやりきこえながら、参り来でなむ。中将、宮の亮など、さぶらひつや」

など、のたまふけはひの、舌疾にあはつけきを、大将は、ものまぎれにも、左の大臣の御ありさま、ふと思し比べられて、たとしへなうぞ、ほほ笑まれたまふ。げに、入り果ててもものたまへかしな。

尚侍の君、いとわびしう思されて、やをらゐざり出でたまふに、面のいたう赤みたるを、「なほ悩ましう思さるるにや」と見たまひて、

「など、御けしきの例ならぬ。もののけなどのむつかしきを、修法延べさすべかりけり」

だして謡ふ、いとうつくし。大将の君、御衣脱ぎてかづけたまふ。

例よりは、うち乱れたまへる御顔の匂ひ、似るものなく見ゆ。薄物の直衣、単衣を着たまへるに、透きたまへる肌つき、ましていみじう見ゆるを、年若いたる博士どもなど、遠く見たてまつりて、涙落しつゝるたり。「逢はましものを、小百合ばの」と謡ふとぢめに、中将、御土器参りたまふ。

「それもがと今朝開けたる初花に
劣らぬ君が匂ひをぞ見る」

ほほ笑みて、取りたまふ。

「時ならで今朝咲く花は夏の雨に
しをれにけらし匂ふほどなく

衰へにたるものを」

と、うちさうどきて、らうがはしく聞こし召しなすを、咎め出でつつ、しひきこえたまふ。

多かめりし言どもも、かうやうなる折のまほならぬこと、数々に書きつくる、心地なきわざとか、貫之が諫め、たうるる方にて、むつかしければ、とどめつ。皆、この御ことをほめたる筋にのみ、大和のも唐のも作り続けたり。わが御心地にも、いたう思しおごりて、

「文王の子、武王の弟」

と、うち誦じたまへる御名のりさへぞ、げに、めでたき。「成王の何」とか、のたまはむとすらむ。そればかりや、また心もとなからむ。

兵部卿宮も常に渡りたまひつつ、御遊びなども、をかしうおはする宮なれば、今めかしき御遊びどもなり。

そのころ、尚侍の君まかだたまへり。瘧病に久しう悩みたまひて、まじなひなども心やすくせむとてなりけり。修法など始めて、おこたりたまひぬれば、

韻塞ぎなどやうのすさびわざどもをもしなど、心をやりて、宮仕へをもをさをさしたまはず、御心にまかせてうち遊びておはするを、世の中には、わづらはしきことどもやうやう言ひ出づる人びとあるべし。

夏の雨、のどかに降りて、つれづれなるころ、中将、さるべき集どもあまた持たせて参りたまへり。殿にも、文殿開けさせたまひて、まだ開かぬ御厨子どもの、めづらしき古集のゆゑなからぬ、すこし選り出でさせたまひて、その道の人びと、わざとはあらねどあまた召したり。殿上人も大学のも、いと多う集ひて、左右にこまどりに方分かせたまへり。賭物どもなど、いと二なくて、挑みあへり。

塞ぎもて行くままに、難き韻の文字どもいと多くて、おぼえある博士どもなどの惑ふところどころを、時々うちのたまふさま、いとこよなき御才のほどなり。

「いかで、かうしもたらひたまひけむ」

「なほさるべきにて、よろづのこと、人にすぐれたまへるなりけり」

と、めできこゆ。つひに、右負けにけり。

二日ばかりありて、中将負けわざしたまへり。ことことしうはあらで、なまめきたる椀破籠ども、賭物などさまさまにて、今日も例の人びと、多く召して、文など作らせたまふ。

階のもとの薔薇、けしきばかり咲きて、春秋の花盛りよりもしめやかにをかしきほどなるに、うちとけ遊びたまふ。

中将の御子の、今年初めて殿上する、八つ、九つばかりにて、声いとおもしろく、笙の笛吹きなどするを、うつくしびもてあそびたまふ。四の君腹の二郎なりけり。世の人の思へる寄せ重くて、おぼえことにかしづけり。心ばへもかどかどしう、容貌もをかしくて、御遊びのすこし乱れゆくほどに、「高砂」を出

人知れず危ふくゆゆしう思ひきこえさせたまふことしあれば、「我にその罪を軽めて、宥したまへ」と、仏を念じきこえたまふに、よろづを慰めたまふ。

大将も、しか見たてまつりたまひて、ことわりに思す。この殿の人どもも、また同じきさまに、からきことのみあれば、世の中はしたなく思されて、籠もりおはす。

左の大臣も、公私ひき変へたる世のありさまに、もの憂く思して、致仕の表たてまつりたまふを、帝は、故院のやむごとなく重き御後見と思して、長き世のかためと聞こえ置きたまひし御遺言を思し召すに、捨てがたきものに思ひきこえたまへるに、かひなきことと、たびたび用ゐさせたまはねど、せめて返さひ申したまひて、籠もりゐたまひぬ。

今は、いとど一族のみ、返す返す栄えたまふこと、限りなし。世の重しともしたまへる大臣の、かく世を逃がれたまへば、朝廷も心細う思され、世の人も、心ある限りは嘆きけり。

御子どもは、いづれともなく人がらめやすく世に用ゐられて、心地よげにものしたまひしを、こよなう静まりて、三位中将なども、世を思ひ沈めるさま、こよなし。かの四の君をも、なほ、かれがれにうち通ひつつ、めざましうもてなされたれば、心解けたる御婿のうちにも入れたまはず。思ひ知れとにや、このたびの司召にも漏れぬれど、いとしも思ひ入れず。

大将殿、かう静かにておはするに、世ははかなきものと見えぬるを、ましてことわり、と思しなして、常に参り通ひたまひつつ、学問をも遊びをももろともにしたまふ。

いにしへも、もの狂ほしきまで、挑みきこえたまひしを思し出でて、かたみに今もはかなきことにつけつつ、さすがに挑みたまへり。

春秋の御読経をばさるものにて、臨時にも、さまざま尊き事どもをせさせたまひなどして、また、いたづらに暇ありげなる博士ども召し集めて、文作り、

まへる、またなうなまめかし。

「ながめかる海人のすみかを見るからに

まづしほたるる松が浦島」

と聞こえたまへば、奥深うもあらず、みな仏に譲りきこえたまへる御座所なれば、すこしけ近き心地して、

「ありし世のなごりだになき浦島に

立ち寄る波のめづらしきかな」

とのたまふも、ほの聞こゆれば、忍ぶれど、涙ほろほろとこぼれたまひぬ。世を思ひ澄ましたる尼君たちの見るらむも、はしたなければ、言少なにて出でたまひぬ。

「さも、たぐひなくねびまさりたまふかな」

「心もとなきところなく世に栄え、時にあひたまひし時は、さる一つものにて、何につけてか世を思し知らむと、推し量られたまひしを」

「今はいといたう思ししづめて、はかなきことにつけても、ものあはれなるけしきさへ添はせたまへるは、あいなう心苦しうもあるかな」

など、老いしらへる人びと、うち泣きつつ、めできこゆ。宮も思し出づること多かり。

司召のころ、この宮の人は、賜はるべき官も得ず、おほかたの道理にても、宮の御賜はりにても、かならずあるべき加階などをだにせずなどして、嘆くたぐひいと多かり。かくても、いつしかと御位を去り、御封などの停まるべきにもあらぬを、ことつけて変はること多かり。皆かねて思し捨ててし世なれど、宮人どもも、よりどころなげに悲しと思へるけしきどもにつけてぞ、御心動く折々あれど、「わが身をなきになしても、春宮の御代をたひらかにおはしまさば」とのみ思しつつ、御行なひたゆみなくつとめさせたまふ。

「今は、かかるかたぎまの御調度どもをこそは」と思せば、年の内にと、急がせたまふ。命婦の君も御供になりければ、それも心深うとぶらひたまふ。詳しく言ひ続けむに、ことごとしきさまなれば、漏らしてけるなめり。さるは、かうやうの折こそ、をかしき歌など出で来るやうもあれ、さうざうしや。参りたまふも、今はつつましさ薄らぎて、御みづから聞こえたまふ折もありけり。思ひしめてしことは、さらに御心に離れねど、まして、あるまじきことなりかし。

年も変はりぬれば、内わたりはなやかに、内宴、踏歌など聞きたまふも、もののみあはれにて、御行なひしめやかにしたまひつつ、後の世のことをのみ思すに、頼もしく、むつかしかりしこと、離れて思ほさる。常の御念誦堂をば、さるものにて、ことに建てられたる御堂の、西の対の南にあたりて、すこし離れたるに渡らせたまひて、とりわきたる御行なひせさせたまふ。

大将、参りたまへり。改まるしるしもなく、宮の内のどかに、人目まれにて、宮司どもの親しきばかり、うちうなだれて、見なしにやあらむ、屈しいたげに思へり。

白馬ばかりぞ、なほ牽き変へぬものにて、女房などの見ける。所狭う参り集ひたまひし上達部など、道を避きつつひき過ぎて、向かひの大殿に集ひたまふを、かかるべきことなれど、あはれに思さるるに、千人にも変へつべき御さまにて、深うたづね参りたまへるを見るに、あいなく涙ぐまる。

客人も、いとものあはれなるけしきに、うち見まはしたまひて、とみに物ものたまはず。さま変はれる御住まひに、御簾の端、御几帳も青鈍にて、隙々よりほの見えたる薄鈍、梶子の袖口など、なかなかなまめかしう、奥ゆかしう思ひやられたまふ。「解けわたる池の薄氷、岸の柳のけしきばかりは、時を忘れぬ」など、さまざま眺められたまひて、「むべも心ある」と、忍びやかにうち誦じた

風、はげしう吹きふぶきて、御簾のうちの匂ひ、いともの深き黒方にしみて、名香の煙もほのかなり。大将の御匂ひさへ薰りあひ、めでたく、極楽思ひやるる夜のさまなり。

春宮の御使も参れり。のたまひさま、思ひ出できこえさせたまふにぞ、御心強さも堪へがたくて、御返りも聞こえさせやらせたまはねば、大将ぞ、言加はへ聞こえたまひける。

誰も誰も、ある限り心収まらぬほどなれば、思すことどもも、えうち出でたまはず。

「月のすむ雲居をかけて慕ふとも

この世の闇になほや惑はむ

と思ひたまへらるこそ、かひなく。思し立たせたまへる恨めしきは、限りなう」

とばかり聞こえたまひて、人びと近うさぶらへば、さまざま乱るる心のうちをだに、え聞こえあらはしたまはず、いぶせし。

「おほふかたの憂きにつけては厭へども

いつかこの世を背き果つべき

かつ、濁りつつ」

など、かたへは御使の心しらひなるべし。あはれのみ尽きせねば、胸苦しうてまかでたまひぬ。

殿にても、わが御方に一人うち臥したまひて、御目もあはず、世の中厭はしう思さるるにも、春宮の御ことのみぞ心苦しき。

「母宮をだに朝廷がたさまにと、思しおきしを、世の憂さに堪へず、かくなりたまひにたれば、もとの御位にてもえおはせじ。我さへ見たてまつり捨てては」など、思し明かすこと限りなし。

に、皆人びと驚きたまひぬ。兵部卿宮、大将の御心も動き、あさましと思す。

親王は、なかばのほどに立ち、入りたまひぬ。心強う思し立つさまのたまひて、果つるほどに、山の座主召して、忌むこと受けたまふべきよし、のたまはず。御伯父の横川の僧都、近う参りたまひて、御髪下ろしたまふほどに、宮の内ゆすりて、ゆゆしう泣きみちたり。何となき老い衰へたる人だに、今はと世を背くほどは、あやしうあはれなるわざを、まして、かねての御けしきにも出だしたまはざりつることなれば、親王もいみじう泣きたまふ。

参りたまへる人びとも、おほかたのこのさまも、あはれに尊ければ、みな、袖濡らしてぞ帰りたまひける。

故院の御子たちは、昔の御ありさまを思し出づるに、いとど、あはれに悲しう思されて、みな、とぶらひきこえたまふ。大将は、立ちとまりたまひて、聞こえ出でたまふべきかたもなく、暮れまどひて思さるれど、「などか、さしも」と、人見たてまつるべければ、親王など出でたまひぬる後にぞ、御前に参りたまへる。

やうやう人静まりて、女房ども、鼻うちかみつ、所々に群れるたり。月は隈なきに、雪の光りあひたる庭のありさまも、昔のこと思ひやらるるに、いと堪へがたう思さるれど、いとよう思し静めて、

「いかやうに思し立たせたまひて、かうにはかには
と聞こえたまふ。

「今はじめて、思ひたまふることにもあらぬを、ものさわがしきやうなりつれば、心乱れぬべく」

など、例の、命婦して聞こえたまふ。

御簾のうちのけはひ、そこら集ひさぶらふ人の衣の音なひ、しめやかに振る舞ひなして、うち身じろぎつつ、悲しげさの慰めがたげに漏り聞こゆるけしき、ことわりに、いみじと聞きたまふ。

ひせさせたまひけり。

霜月の朔日ごろ、御国忌なるに、雪いたう降りたり。大将殿より宮に聞こえたまふ。

「別れにし今日は来れども見し人に行き逢ふほどをいつと頼まむ」

いづこにも、今日はもの悲しう思さるるほどにて、御返りあり。

「ながらふるほどは憂けれど行きめぐり

今日はその世に逢ふ心地して」

ことにつくろひてもあらぬ御書きざまなれど、あてに気高きは思ひなしなるべし。筋変はり今めかしうはあらねど、人にはことに書かせたまへり。今日は、この御ことも思ひ消ちて、あはれなる雪の雫に濡れ濡れ行ひたまふ。

十二月十余日ばかり、中宮の御八講なり。いみじう尊し。日々に供養せさせたまふ御経よりはじめ、玉の軸、羅の表紙、帙篋の飾りも、世になきさまにととのへさせたまへり。さらぬことのきよらだに、世の常ならずおはしませば、ましてことわりなり。仏の御飾り、花机のおほひなどまで、まことの極楽思ひやらる。

初めの日は、先帝の御料。次の日は、母后の御ため。またの日は、院の御料。五巻の日なれば、上達部なども、世のつつましさをえしも憚りたまはで、いとあまた参りたまへり。今日の講師は、心ことに選らせたまへれば、「薪こる」ほどよりうちはじめ、同じう言ふ言の葉も、いみじう尊し。親王たちも、さまざまの捧物ささげてめぐりたまふに、大将殿の御用意など、なほ似るものなし。常におなじことのやうなれど、見たてまつるたびごとに、めづらしからむをば、いかがはせむ。

果ての日、わが御ことを結願にて、世を背きたまふよし、仏に申させたまふ

ど、深うも思し入れたらぬを、いとうしろめたく思ひきこえたまふ。例は、いとく大殿籠もるを、「出でたまふまでは起きたらむ」と思すなるべし。恨めしげに思したれど、さすがに、え慕ひきこえたまはぬを、いとあはれと、見たてまつりたまふ。

大将、頭の弁の誦じつることを思ふに、御心の鬼に、世の中わづらはしうおぼえたまひて、尚侍の君にも訪れきこえたまはで、久しうなりにけり。

初時雨、いつしかとけしきだつに、いかが思しけむ、かれより、

「木枯の吹くにつけつつ待ちし間に

おぼつかなきのころも経にけり」

と聞こえたまへり。折もあはれに、あながちに忍び書きたまへらむ御心ばへも、憎からねば、御使とどめさせて、唐の紙ども入れさせたまへる御厨子開けさせたまひて、なべてならぬを選び出でつつ、筆なども心ことにひきつくろひたまへるけしき、艶なるを、御前なる人びと、「誰ればかりならむ」とつきしろふ。

「聞こえさせても、かひなきもの懲りにこそ、むげにくづほれにけれ。身の
みもの憂きほどに、

あひ見ずてしのぶるころの涙をも

なべての空の時雨とや見る

心の通ふならば、いかに眺めの空ももの忘れしはべらむ」

など、こまやかになりにけり。

かうやうにおどろかしきこゆるたぐひ多かめれど、情けなからずうち返りごちたまひて、御心には深う染まざるべし。

中宮は、院の御はてのことにうち続き、御八講のいそぎをさまざまに心づか

ど、まだ、いと片なりに」

など、その御ありさまも奏したまひて、まかでたまふに、大宮の御兄の藤大納言の子の、頭の弁といふが、世にあひ、はなやかなる若人にて、思ふことなきなるべし、妹の麗景殿の御方に行くに、大将の御前駆を忍びやかに追へば、しばし立ちとまりて、

「白虹日を貫けり。太子畏ぢたり」

と、いとゆるるかにうち誦じたるを、大将、いとまばゆしと聞きたまへど、咎むべきことかは。後の御けしきは、いと恐ろしう、わづらはしげにのみ聞こゆるを、かう親しき人びとも、けしきだち言ふべかめることどももあるに、わづらはしう思されけれど、つれなうのみもてなしたまへり。

「御前にさぶらひて、今まで、更かしはべりにける」

と、聞こえたまふ。

月のはなやかなるに、「昔、かうやうなる折は、御遊びせさせたまひて、今めかしうもてなさせたまひし」など、思し出づるに、同じ御垣の内ながら、変はれること多く悲し。

「九重に霧や隔つる雲の上の

月をはるかに思ひやるかな」

と、命婦して、聞こえ伝へたまふ。ほどなければ、御けはひも、ほのかなれど、なつかしう聞こゆるに、つらさも忘られて、まづ涙ぞ落つる。

「月影は見し世の秋に変はらぬを

隔つる霧のつらくもあるかな

霞も人のとか、昔もはべりけることにや」

など聞こえたまふ。

宮は、春宮を飽かず思ひきこえたまひて、よろづのことを聞こえさせたまへ

しなまめかしき氣添ひて、なつかしうなごやかにぞおはします。かたみにあはれと見たてまつりたまふ。

尚侍の君の御ことも、なほ絶えぬさまに聞こし召し、けしき御覽ずる折もあれど、

「何かは、今はじめたることならばこそあらめ。さも心交はさむに、似げなかるまじき人のあはひなりかし」

とぞ思しなして、咎めさせたまはざりける。

よろづの御物語、文の道のおぼつかなく思さるることどもなど、問はせたまひて、また、好き好きしき歌語りなども、かたみに聞こえ交はさせたまふついでに、かの齋宮の下りたまひし日のこと、容貌のをかしくおはせしなど、語らせたまふに、我もうちとけて、野の宮のあはれなりし曙も、みな聞こえ出でたまひてけり。

二十日の月、やうやうさし出でて、をかしきほどなるに、

「遊びなども、せまほしきほどかな」

とのたまはす。

「中宮の、今宵、まかでたまふなる、とぶらひにものしはべらむ。院のたまはせおくことはべりしかば。また、後見仕うまつる人もはべらざめるに。春宮の御ゆかり、いとほしう思ひたまへられはべりて」

と奏したまふ。

「春宮をば、今の皇子になしてなど、のたまはせ置きしかば、とりわきて心ざしものすれど、ことにさしわきたるさまにも、何ごとをかはとてこそ。年のほどよりも、御手などのわざとかしこうこそものしたまふべけれ。何ごとにも、はかばかしからぬみづからの面起こしになむ」

と、のたまはすれば、

「おほかた、したまふわざなど、いとさとく大人びたるさまにもしたまへ

たまへば、あいなき心のさまさま乱るるやしるからむ、「色変はる」とありしも
らうたうおぼえて、常よりことに語らひきこえたまふ。

山づとに持たせたまへりし紅葉、御前に御覧じ比ぶれば、ことに染めまし
ける露の心も見過ぐしがたう、おぼつかなきも、人悪るきまでおぼえたまへば、
ただおほかたにて宮に参らせたまふ。命婦のもとに、

「入らせたまひにけるを、めづらしきこととうけたまはるに、宮の間の事、
おぼつかなくなりはべりにければ、静心なく思ひたまへながら、行ひもつとめ
むなど、思ひ立ちはべりし日数を、心ならずやとてなむ、日ごろになりはべり
にける。紅葉は、一人見はべるに、錦暗う思ひたまふればなむ。折よく御覧
ぜさせたまへ」

などあり。

げに、いみじき枝どもなれば、御目とまるに、例の、いささかなるものあり
けり。人びと見たてまつるに、御顔の色も移ろひて、

「なほ、かかる心の絶えたまはぬこそ、いと疎ましけれ。あたり思ひやり深
うものしたまふ人の、ゆくりなく、かうやうなること、折々混ぜたまふを、人
もあやしと見るらむかし」

と、心づきなく思されて、瓶に挿させて、廂の柱のもとにおしやらせたまひ
つ。

おほかたのことども、宮の御事に触れたることなどをば、うち頼めるさまに、
すくよかなる御返りばかり聞こえたまへるを、「さも心かしこく、尽きせずも」
と、恨めしうは見たまへど、何ごとも後見きこえならひたまひにたれば、「人あ
やしと、見とがめもこそすれ」と思して、まかでたまふべき日、参りたまへり。

まづ、内の御方に参りたまへれば、のどやかにおはしますほどにて、昔今の
御物語聞こえたまふ。御容貌も、院にいとよう似たてまつりたまひて、今すこ

近き世に」

とぞある。

「御手、こまやかにあらねど、らうらうじう、草などをかしうなりにけり。まして、朝顔もねびまさりたまへらむかし」と思ほゆるも、ただならず、恐ろしや。

「あはれ、このころぞかし。野の宮のあはれなりしこと」と思し出でて、「あやう、やうのもの」と、神恨めしう思さるる御癖の、見苦しきぞかし。わりなう思さば、さもありぬべかりし年ごろは、のどかに過ぐいたまひて、今は悔しう思さるべかめるも、あやしき御心なりや。

院も、かくなべてならぬ御心ばへを見知りきこえたまへれば、たまさかなる御返りなどは、えしももて離れきこえたまふまじかめり。すこしあいなきことなりかし。

六十巻といふ書、読みたまひ、おぼつかなきところどころ解かせなどしておはしますを、「山寺には、いみじき光行なひ出だしたてまつれり」と、「仏の御面目あり」と、あやしの法師ばらまでよろこびあへり。しめやかにて、世の中を思ほしつづくるに、帰らむことももの憂かりぬべけれど、人一人の御こと思しやるがほだしなれば、久しうもえおはしまさで、寺にも御誦経いかめしうせさせたまふ。あるべき限り、上下の僧ども、そのわたりの山賤まで物賜び、尊きことの限りを尽くして出でたまふ。見たてまつり送るとて、このもかのもに、あやしきはふるひどもも集りてゐて、涙を落としつつ見たてまつる。黒き御車のうちにて、藤の御袂にやつれたまへれば、ことに見えたまはねど、ほのかなる御ありさまを、世になく思ひきこゆべかめり。

女君は、日ごろのほどに、ねびまさりたまへる心地して、いといたうしづまりたまひて、世の中いかがあらむと思へるけしきの、心苦しうあはれにおぼえ

四方の嵐ぞ静心なき」

など、こまやかなるに、女君もうち泣きたまひぬ。御返し、白き色紙に、

「風吹けばまづぞ乱るる色変はる

浅茅が露にかかるささがに」

とのみありて、「御手はいとをかしうのみなりまさるものかな」と、独りごちて、うつくしとほほ笑みたまふ。

常に書き交はしたまへば、わが御手にいとよく似て、今すこしなまめかしう、女しきところ書き添へたまへり。「何ごとにつけても、けしうはあらず生ほし立てたりかし」と思ほす。

吹き交ふ風も近きほどにて、齋院にも聞こえたまひけり。中将の君に、

「かく、旅の空になむ、もの思ひにあくがれにけるを、思し知るにもあらしかし」

など、怨みたまひて、御前には、

「かけまくはかしこけれどもそのかみの

秋思ほゆる木綿櫛かな

昔を今に、と思ひたまふるもかひなく、とり返されむもののやうに」

と、なれなれしげに、唐の浅緑の紙に、榊に木綿つけなど、神々しうしなして参らせたまふ。

御返し、中将、

「紛るることなくて、来し方のことを思ひたまへ出づるつれづれのままには、思ひやりきこえさすること多くはべれど、かひなくのみなむ」

と、すこし心とどめて多かり。御前のは、木綿の片端に、

「そのかみやいかがはありし木綿櫛

心にかけてしのぶらむゆゑ

大将の君は、宮をいと恋しう思ひきこえたまへど、「あさましき御心のほどを、時々、思ひ知るさまにも見せたてまつらむ」と、念じつつ過ぐしたまふに、人悪ろく、つれづれに思さるれば、秋の野も見たまひがてら、雲林院に詣でたまへり。

「故母御息所の御兄の律師の籠もりたまへる坊にて、法文など読み、行なひせむ」と思して、二、三日おはするに、あはれなること多かり。

紅葉やうやう色づきわたりて、秋の野のいとなまめきたるなど見たまひて、故里も忘れぬべく思さる。法師ばらの、才ある限り召し出でて、論議せさせて聞こしめさせたまふ。所からに、いとど世の中の常なきを思し明かしても、なほ、「憂き人しもぞ」と、思し出でらるるおし明け方の月影に、法師ばらの闕伽たてまつるとて、からからと鳴らしつつ、菊の花、濃き薄き紅葉など、折り散らしたるも、はかなげなれど、

「このかたのいとなみは、この世もつれづれならず、後の世はた、頼もしげなり。さも、あぢきなき身をもて悩むかな」

など、思し続けたまふ。律師の、いと尊き声にて、

「念仏衆生摂取不捨」

と、うちのべて行なひたまへるは、いとうらやましければ、「なぞや」と思しなるに、まづ、姫君の心にかかりて思ひ出でられたまふぞ、いと悪ろき心なるや。

例ならぬ日数も、おぼつかなくのみ思さるれば、御文ばかりぞ、しげう聞こえたまふめる。

「行き離れぬべしやと、試みはべる道なれど、つれづれも慰めがたう、心細さまさりてなむ。聞きさしたることありて、やすらひはべるほど、いかに」
など、陸奥紙にうちとけ書きたまへるさへぞ、めでたき。

「浅茅生の露のやどりに君をおきて

は、同じやうなれど、「むげに、思し屈しにける」と、心知るどちは、いとほしがりきこゆ。

宮は、いみじうつくしうおとなびたまひて、めづらしううれしと思して、むつれきこえたまふを、かなしと見たてまつりたまふにも、思し立つ筋はいとかたけれど、内わたりを見たまふにつけても、世のありさま、あはれにはななく、移り変はることのみ多かり。

大後の御心もいとわづらはしくて、かく出で入りたまふにも、はしたなく、事に触れて苦しければ、宮の御ためにも危ふくゆゆしう、よろづにつけて思ほし乱れて、

「御覽ぜで、久しからむほどに、容貌の異さまにてうたてげに変はりてはべらば、いかが思さるべき」

と聞こえたまへば、御顔うちまもりたまひて、

「式部がやうにや。いかでか、さはなりたまはむ」と、笑みてのたまふ。いふかひなくあはれにて、

「それは、老いてはべれば醜きぞ。さはあらで、髪はそれよりも短くて、黒き衣などを着て、夜居の僧のやうになりはべらむとすれば、見たてまつらむことも、いとど久しかるべきぞ」

とて泣きたまへば、まめだちて、

「久しうおはせぬは、恋しきものを」

とて、涙の落つれば、恥づかしと思して、さすがに背きたまへる、御髪はゆるらとよきよらにて、まみのなつかしげに匂ひたまへるさま、おとなびたまふままに、ただかの御顔を脱ぎすべたまへり。御齒のすこし朽ちて、口の内黒みて、笑みたまへる薫りうつくしきは、女にて見たてまつらまほしうきよらなり。

「いと、かうしもおぼえたまへるこそ、心憂けれ」と、玉の瑕に思さるるも、世のわづらはしきの、空恐ろしうおぼえたまふなりけり。

かつは心をあだと知らなむ」

はかなく言ひなさせたまへるさまの、言ふよしなき心地すれど、人の思さむところも、わが御ためも苦しければ、我にもあらで、出でたまひぬ。

「いづこを面にてかは、またも見えたてまつらむ。いとほしと思し知るばかり」と思して、御文も聞こえたまはず。うち絶えて、内、春宮にも参りたまはず、籠もりおはして、起き臥し、「いみじかりける人の御心かな」と、人悪ろく恋しう悲しきに、心魂も失せにけるにや、悩ましうさへ思さる。もの心細く、「なぞや、世に経れば憂さこそまされ」と、思し立つには、この女君のいとらうたげにて、あはれにうち頼みきこえたまへるを、振り捨てむこと、いとかたし。

宮も、その名残、例にもおはしまさず。かうことさらめきて籠もりゐ、おとづれたまはぬを、命婦などはいとほしがりきこゆ。宮も、春宮の御ためを思すには、「御心置きたまはむこと、いとほしく、世をあぢきなきものに思ひなりたまはば、ひたみちに思し立つこともや」と、さすがに苦しう思さるべし。

「かかること絶えずは、いとどしき世に、憂き名さへ漏り出でなむ。大后の、あるまじきことにのたまふなる位をも去りなむ」と、やうやう思しなる。院の思しのたまはせしさまの、なのめならざりしを思し出づるにも、「よろづのこと、ありしにもあらず、変はりゆく世にこそあめれ。戚夫人の見けむ目のやうにはあらずとも、かならず、人笑へなることは、ありぬべき身にこそあめれ」など、世の疎ましく、過ぐしがたう思さるれば、背きなむことを思し取るに、春宮、見たてまつらで面変はりせむこと、あはれに思さるれば、忍びやかにて参りたまへり。

大将の君は、さらぬことだに、思し寄らぬことなく仕うまつりたまふを、御心地悩ましきのことつけて、御送りにも参りたまはず。おほかたの御とぶらひ

御衣をすべし置きて、みざりのきたまふに、心にもあらず、御髪の取り添へられたりければ、いと心憂く、宿世のほど、思し知られて、いみじ、と思したり。男も、こころ世をもてしづめたまふ御心、みな乱れて、うつしぎまにもあらず、よろづのことを泣く泣く怨みきこえたまへど、まことに心づきなし、と思して、いらへも聞こえたまはず。ただ、

「心地の、いと悩ましきを。かからぬ折もあらば、聞こえてむ」とのたまへど、尽きせぬ御心のほどを言ひ続けたまふ。

さすがに、いみじと聞きたまふふしもまじるらむ。あらざりしことにはあらねど、改めて、いと口惜しう思さるれば、なつかしきものから、いとようのたまひ逃れて、今宵も明け行く。

せめて従ひきこえざらむもかたじけなく、心恥づかしき御けはひなれば、「ただ、かばかりにても、時々、いみじき愁へをだに、はるけはべりぬべくは、何のおほけなき心もはべらじ」

など、たゆめきこえたまふべし。なのめなることだに、かやうなる仲らひは、あはれなることも添ふなるを、まして、たぐひなげなり。

明け果つれば、二人して、いみじきことどもを聞こえ、宮は、半ばは亡きやうなる御けしきの心苦しければ、

「世の中にありと聞こし召されむも、いと恥づかしければ、やがて亡せはべりなむも、また、この世ならぬ罪となりはべりぬべきこと」

など聞こえたまふも、むくつけきまで思し入れり。

「逢ふことのかたきを今日に限らずは

今幾世をか嘆きつつ経む

御ほだしにもこそ」

と聞こえたまへば、さすがに、うち嘆きたまひて、

「長き世の恨みを人に残しても

ぞおこたりたまへる。

かく籠もりゐたまへらむとは思しもかけず、人びとも、また御心惑はさじとて、かくなむとも申さぬなるべし。昼の御座にみぎり出でておはします。よろしう思さるるなめりとて、宮もまかでたまひなどして、御前人少なになりぬ。例もけ近くならさせたまふ人少なければ、ここかしこの物のうしろなどにぞさぶらふ。命婦の君などは、

「いかにたばかりて、出だしたてまつらむ。今宵さへ、御気上がらせたまはむ、いとほしう」

など、うちささめき扱ふ。

君は、塗籠の戸の細めに開きたるを、やをらおし開けて、御屏風のはさまに伝ひ入りたまひぬ。めづらしくうれしきにも、涙落ちて見たてまつりたまふ。

「なほ、いと苦しうこそあれ。世や尽きぬらむ」

とて、外の方を見出だしたまへるかたはら目、言ひ知らずなまめかしう見ゆ。御くだものをだに、とて参り据ゑたり。箱の蓋などにも、なつかしきさまにてあれど、見入れたまはず。世の中をいたう思し悩めるけしきにて、のどかに眺め入りたまへる、いみじうらうたげなり。髪ざし、頭つき、御髪のかかりたるさま、限りなき匂はしさなど、ただ、かの対の姫君に違ふところなし。年ごろ、すこし思ひ忘れたまへりつるを、「あさましきまでおぼえたまへるかな」と見たまふままに、すこしもの思ひのはるけどころある心地したまふ。

気高う恥づかしげなるさまなども、さらに異人とも思ひ分きがたきを、なほ、限りなく昔より思ひしめきこえてし心の思ひなしにや、「さまことに、いみじうねびまさりたまひにけるかな」と、たぐひなくおぼえたまふに、心惑ひして、やをら御帳のうちにかかづらひ入りて、御衣の裾を引きならしたまふ。けはひしるく、さと匂ひたるに、あさましうむくつけう思されて、やがてひれ伏したまへり。「見だに向きたまへかし」と心やましうつらうて、引き寄せたまへるに、

かやうのことにつけても、もて離れつれなき人の御心を、かつはめでたしと思ひきこえたまふものから、わが心の引くかたにては、なほつらう心憂し、とおぼえたまふ折多かり。

内に参りたまはむことは、うひうひしく、所狭く思しなりて、春宮を見たまつりたまはぬを、おぼつかなく思ほえたまふ。また、頼もしき人もものしたまはねば、ただこの大将の君をぞ、よろづに頼みきこえたまへるに、なほ、この憎き御心のやまぬに、ともすれば御胸をつぶしたまひつつ、いささかもけしきを御覧じ知らずなりにしを思ふだに、いと恐ろしきに、今さらにまた、さる事の聞こえありて、わが身はさるものにて、春宮の御ためにならずよからぬこと出で来なむ、と思すに、いと恐ろしければ、御祈りをさへせさせて、このこと思ひやませたてまつらむと、思しいたらぬことなく逃れたまふを、いかなる折にかありけむ、あさましうて、近づき参りたまへり。心深くたばかりたまひけむことを、知る人なかりければ、夢のやうにぞありける。

まねぶべきやうなく聞こえ続けたまへど、宮、いとこよなくもて離れきこえたまひて、果て果ては、御胸をいたう悩みたまへば、近うさぶらひつる命婦、弁などぞ、あさましう見たてまつりあつかふ。男は、憂し、つらし、と思ひきこえたまふこと、限りなきに、来し方行く先、かきくらす心地して、うつし心失せにければ、明け果てにけれど、出でたまはずなりぬ。

御悩みにおどろきて、人びと近う参りて、しげうまがへば、我にもあらで、塗籠に押し入れられておはす。御衣ども隠し持たる人の心地ども、いとむつかし。宮は、ものをいとわびし、と思しけるに、御氣上がりて、なほ悩ましうせさせたまふ。兵部卿宮、大夫など参りて、

「僧召せ」

など騒ぐを、大将、いとわびしう聞きおはす。からうして、暮れゆくほどに

をうかがひて、例の、夢のやうに聞こえたまふ。かの、昔おぼえたる細殿の局に、中納言の君、紛らはして入れたてまつる。人目もしげきころなれば、常よりも端近なる、そら恐ろしうおぼゆ。

朝夕に見たてまつる人だに、飽かぬ御さまなれば、まして、めづらしきほどにのみある御対面の、いかでかはおろかならむ。女の御さまも、げにぞめでたき御盛りなる。重りかなるかたは、いかがあらむ、をかしうなまめき若びたる心地して、見まほしき御けはひなり。

ほどなく明け行くにや、とおぼゆるに、ただここにしも、

「宿直申し、さぶらふ」

と、声づくるなり。「また、このわたりに隠ろへたる近衛司ぞあるべき。腹ぎたなきかたへの教へおこするぞかし」と、大将は聞きたまふ。をかしきものから、わづらはし。

ここかしこ尋ねありきて、

「寅一つ」

と申すなり。女君、

「心からかたがた袖を濡らすかな

明くと教ふる声につけても」

とのたまふさま、はかなだちて、いとをかし。

「嘆きつつわが世はかくて過ぐせとや

胸のあくべき時ぞともなく」

静心なくて、出でたまひぬ。

夜深き暁月夜の、えもいはず霧りわたれるに、いといたうやつれて、振る舞ひなしたまへるしも、似るものなき御ありさまにて、承香殿の御兄の藤少将、藤壺より出でて、月の少し隈ある立蔭のもとに立てりけるを、知らで過ぎたまひけむこそいとほしけれ。もどききこゆるやうもありなむかし。

なかにこまかに思しおきて、若君をかしづき思ひきこえたまへること、限りなければ、あはれにありがたき御心と、いとどいたつききこえたまふことども、同じさまなり。限りなき御おぼえの、あまりもの騒がしきまで、暇なげに見えたまひしを、通ひたまひし所々も、かたがたに絶えたまふことどもあり、軽々しき御忍びありきも、あいなう思しなりて、ことにしたまはねば、いとのどやかに、今しもあらまほしき御ありさまなり。

西の対の姫君の御幸ひを、世人もめできこゆ。少納言なども、人知れず、「故尼上の御祈りのしるし」と見たてまつる。父親王も思ふさまに聞こえ交はしたまふ。嫡腹の、限りなくと思すは、はかばかしうもえあらぬに、ねたげなること多くて、継母の北の方は、やすからず思すべし。物語にことさらに作り出でたるやうなる御ありさまなり。

齋院は、御服にて下りゐたまひにしかば、朝顔の姫君は、替はりにゐたまひにき。賀茂のいつきには、孫王のゐたまふ例、多くもあらざりけれど、さるべき女御子やおはせざりけむ。大将の君、年月経れど、なほ御心離れたまはざりつるを、かう筋ことになりたまひぬれば、口惜しくと思す。中將におとづれたまふことも、同じことにて、御文などは絶えざるべし。昔に変わる御ありさまなどをば、ことに何とも思したらず、かやうのはかなしごとどもを、紛るることなきままに、こなたかなたと思し悩み。

帝は、院の御遺言違へず、あはれに思したれど、若うおはしますうちにも、御心なよびたるかたに過ぎて、強きところおはしまさぬなるべし、母后、祖父大臣とりどりしたまふことは、え背かせたまはず、世のまつりごと、御心にかなはぬやうなり。

わづらはしきのみまされど、尚侍の君は、人知れぬ御心し通へば、わりなくと、おぼつかなくはあらず。五壇の御修法の初めにて、慎しみおはします隙

年かへりぬれど、世の中今めかしきことなく静かなり。まして大将殿は、もの憂くて籠もりゐたまへり。除目のころなど、院の御時をばさらにもいはず、年ごろ劣るけぢめなくて、御門のわたり、所なく立ち込みたりし馬、車うすらぎて、宿直物の袋をさをさ見え、親しき家司どもばかり、ことに急ぐことなげにてあるを見たまふにも、「今よりは、かくこそは」と思ひやられて、ものすさまじくなむ。

御匣殿は、二月に、尚侍になりたまひぬ。院の御思ひにやがて尼になりたまへる、替はりなりけり。やむごとなくもてなし、人がらもいとよくおはすれば、あまた参り集りたまふなかにも、すぐれて時めきたまふ。后は、里がちにおはしまして、参りたまふ時の御局には梅壺をしたれば、弘徽殿には尚侍の君住みたまふ。登花殿の埋れたりつるに、晴れ晴れしうなりて、女房なども数知らず集ひ参りて、今めかしう花やぎたまへど、御心のうちは、思ひのほかなりしことどもを忘れがたく嘆きたまふ。いと忍びて通はしたまふことは、なほ同じさまなるべし。「ものの聞こえもあらばいかならむ」と思しながら、例の御癖なれば、今しも御心ざしまさるべかめり。

院のおはしましたる世こそ憚りたまひつれ、後の御心いちはやくて、かたがた思しつめたることどもの報いせむ、と思すべかめり。ことにふれて、はしたなきことのみ出で来れば、かかるべきこととは思ししかど、見知りたまはぬ世の憂さに、立ちまふべくも思されず。

左の大殿も、すさまじき心地したまひて、ことに内にも参りたまはず。故姫君を、引きよきて、この大将の君に聞こえつけたまひし御心を、后は思しおきて、よろしうも思ひきこえたまはず。大臣の御仲も、もとよりそばそばしうおはするに、故院の御世にはわがままにおはせしを、時移りて、したり顔におはするを、あぢきなしと思したる、ことわりなり。

大将は、ありしに変はらず渡り通ひたまひて、さぶらひし人びとをも、なか

にも、まづ思し立たるることはあれど、また、さまざまの御ほだし多かり。

御四十九日までは、女御、御息所たち、みな、院に集ひたまへりつるを、過ぎぬれば、散り散りにまかだたまふ。師走の二十日なれば、おほかたの世の中とどむる空のけしきにつけても、まして晴るる世なき、中宮の御心のうちなり。大后の御心も知りたまへれば、心にまかせたまへらむ世の、はしたなく住み憂からむを思すよりも、馴れきこえたまへる年ごろの御ありさまを、思ひ出できこえたまはぬ時の間なきに、かくてもおはしますまじう、みな他々へと出でたまふほどに、悲しきこと限りなし。

宮は、二条の宮に渡りたまふ。御迎へに兵部卿宮参りたまへり。雪うち散り、風はげしうて、院の内、やうやう人目かれゆきて、しめやかなるに、大将殿、こなたに参りたまひて、古き御物語聞こえたまふ。御前の五葉の雪にしをれて、下葉枯れたるを見たまひて、親王、

「蔭ひろみ頼みし松や枯れにけむ
下葉散りゆく年の暮かな」

何ばかりのことにもあらぬに、折から、ものあはれにて、大将の御袖、いたう濡れぬ。池の隙なう氷れるに、

「さえわたる池の鏡のさやけきに
見なれし影を見ぬぞ悲しき」

と、思すままに、あまり若々しうぞあるや。王命婦、

「年暮れて岩井の水もこほりとぢ
見し人影のあせもゆくかな」

そのついでに、いと多かれど、さのみ書き続くべきことかは。

渡らせたまふ儀式、変はらねど、思ひなしにあはれにて、旧き宮は、かへりて旅心地したまふにも、御里住み絶えたる年月のほど、思しめぐらさるべし。

かなること多くなむ。

春宮も、一度にと思し召しけれど、ものさわがしきにより、日を変へて、渡らせたまへり。御年のほどよりは、大人びうつくしき御さまにて、恋しと思ひきこえさせたまひけるつもりに、何心もなくうれしと思し、見たてまつりたまふ御けしき、いとあはれなり。

中宮は、涙に沈みたまへるを、見たてまつらせたまふも、さまざま御心乱れて思し召さる。よろづのことを聞こえ知らせたまへど、いとものはかなき御ほどなれば、うしろめたく悲しと見たてまつらせたまふ。

大将にも、朝廷に仕うまつりたまふべき御心づかひ、この宮の御後見したまふべきことを、返す返すのたまはず。

夜更けてぞ帰らせたまふ。残る人なく仕うまつりてののしるさま、行幸に劣るけぢめなし。飽かぬほどにて帰らせたまふを、いみじう思し召す。

大后も、参りたまはむとするを、中宮のかく添ひおはするに、御心置かれて、思しやすらふほどに、おどろおどろしきさまにもおはしまさで、隠れさせたまひぬ。足を空に、思ひ惑ふ人多かり。

御位を去らせたまふといふばかりにこそあれ、世のまつりごとをしづめさせたまへることも、我が御世の同じことにておはしまいつるを、帝はいと若うおはします、祖父大臣、いと急にさがなくおはして、その御ままになりなむ世を、いかならむと、上達部、殿上人、皆思ひ嘆く。

中宮、大将殿などは、ましてすぐれて、ものも思しわかれず、後々の御わざなど、孝じ仕うまつりたまふさまも、そこらの親王たちの御中にすぐれたまへるを、ことわりながら、いとあはれに、世人も見たてまつる。藤の御衣にやつれたまへるにつけても、限りなくきよらに心苦しげなり。去年、今年とうち続き、かかることを見たまふに、世もいとあぢきなう思さるれど、かかるついで

と聞こえたまへれど、いと暗う、ものさわがしきほどなれば、またの日、関のあなたよりぞ、御返しある。

「鈴鹿川八十瀬の波に濡れ濡れず

伊勢まで誰れか思ひおこせむ」

ことそぎて書きたまへるしも、御手いとよしよしくなまめきたるに、「あはれなるけをすこし添へたまへらましかば」と思す。

霧いたう降りて、ただならぬ朝ぼらけに、うち眺めて独りごちおはす。

「行く方を眺めもやらむこの秋は

逢坂山を霧な隔てそ」

西の対にも渡りたまはで、人やりならず、もの寂しげに眺め暮らしたまふ。まして、旅の空は、いかに御心尽くしなること多かりけむ。

院の御悩み、神無月になりては、いと重くおはします。世の中に惜しみきこえぬ人なし。内にも、思し嘆きて行幸あり。弱き御心地にも、春宮の御事を、返す返す聞こえさせたまひて、次には大将の御こと、

「はべりつる世に変はらず、大小のことを隔てず、何ごとも御後見と思せ。齢のほどよりは、世をまつりごたむにも、をさをさ憚りあるまじうなむ、見たまふる。かならず世の中たもつべき相ある人なり。さるによりて、わづらはしさに、親王にもなさず、ただ人にて、朝廷の御後見をせさせむと、思ひたまへしなり。その心違へさせたまふな」

と、あはれなる御遺言ども多かりけれど、女のまねぶべきことにしあらねば、この片端だにかたはらいたし。

帝も、いと悲しと思して、さらに違へきこえさすまじきよしを、返す返す聞こえさせたまふ。御容貌も、いときよらにねびまさらせたまへるを、うれしく頼もしく見たてまつらせたまふ。限りあれば、急ぎ帰らせたまふにも、なかな

宮の御返りのおとなおとなしきを、ほほ笑みて見るたまへり。「御年のほどよりは、をかしうもおはすべきかな」と、ただならず。かうやうに例に違へるわづらはしきに、かならず心かかる御癖にて、「いとよう見たてまつりつべかりしいはけなき御ほどを、見ずなりぬるこそねたけれ。世の中定めなければ、対面するやうもありなむかし」など思す。

心にくくよしある御けはひなれば、物見車多かる日なり。申の時に内に参りたまふ。

御息所、御輿に乗りたまへるにつけても、父大臣の限りなき筋に思し志して、いつきたてまつりたまひしありさま、変はりて、末の世に内を見たまふにも、もののみ尽きせず、あはれに思さる。十六にて故宮に参りたまひて、二十にて後れたてまつりたまふ。三十にてぞ、今日また九重を見たまひける。

「そのかみを今日はかけじと忍ぶれど

心のうちにもぞ悲しき」

齋宮は、十四にぞなりたまひける。いとうつくしうおはするさまを、うるはしうしたてたてまつりたまへるぞ、いとゆゆしきまで見えたまふを、帝、御心動きて、別れの櫛たてまつりたまふほど、いとあはれにて、しほたれさせたまひぬ。

出でたまふを待ちたてまつるとて、八省に立て続けたる出車どもの袖口、色あひも、目馴れぬさまに、心にくきけしきなれば、殿上人どもも、私の別れ惜しむ多かり。

暗う出でたまひて、二条より洞院の大路を折れたまふほど、二条の院の前なれば、大将の君、いとあはれに思されて、櫛にさして、

「振り捨てて今日は行くとも鈴鹿川

八十瀬の波に袖は濡れじや」

きたまひなむとするを、口惜しうもいとほしうも、思し悩むべし。

旅の御装束よりはじめ、人びとのまで、何くれの御調度など、いかめしうめづらしきさまにて、とぶらひきこえたまへど、何とも思されず。あはあはしう心憂き名をのみ流して、あさましき身のありさまを、今はじめたらむやうに、ほど近くなるままに、起き臥し嘆きたまふ。

齋宮は、若き御心地に、不定なりつる御出で立ちの、かく定まりゆくを、うれし、とのみ思したり。世人は、例なきことと、もどきもあはれがりも、さまざまに聞こゆべし。何ごとも、人にもどきあつかはれぬ際はやすげなり。なかなか世に抜け出でぬる人の御あたりは、所狭きこと多くなむ。

十六日、桂川にて御祓へしたまふ。常の儀式にまさりて、長奉送使など、さらぬ上達部も、やむごとなく、おぼえあるを選らせたまへり。院の御心寄せもあればなるべし。出でたまふほどに、大将殿より例の尽きせぬことども聞こえたまへり。「かけまくもかしこき御前にて」と、木綿につけて、

「鳴る神だにこそ、

八洲もる国つ御神も心あらば

飽かぬ別れの仲をことわれ

思うたまふるに、飽かぬ心地しはべるかな」

とあり。いとさわがしきほどなれど、御返りあり。宮の御をば、女別当して書かせたまへり。

「国つ神空にことわる仲ならば

なほざりごとをまづや糾さむ」

大将は、御ありさまゆかしうて、内にも参らまほしく思せど、うち捨てられて見送らむも、人悪ろき心地したまへば、思しとまりて、つれづれに眺めりたまへり。

るに、「さればよ」と、なかなか心動きて、思し乱る。

殿上の若君達などうち連れて、とかく立ちわづらふなる庭のたたずまひも、げに艶なるかたに、うけばりたるありさまなり。思ほし残すことなき御仲らひに、聞こえ交はしたまふことども、まねびやらむかたなし。

やうやう明けゆく空のけしき、ことさらに作り出でたらむやうなり。

「暁の別れはいつも露けきを

こは世に知らぬ秋の空かな」

出でがてに、御手をとらへてやすらひたまへる、いみじうなつかし。

風、いと冷やかに吹きて、松虫の鳴きからしたる声も、折知り顔なるを、さして思ふことなきだに、聞き過ぐしがたげなるに、まして、わりなき御心惑ひどもに、なかなか、こともゆかぬにや。

「おほかたの秋の別れも悲しきに

鳴く音を添へそ野辺の松虫」

悔しきこと多かれど、かひなければ、明け行く空もはしたなうて、出でたまふ。道のほどいと露けし。

女も、え心強からず、名残あはれにて眺めたまふ。ほの見たてまつりたまへる月影の御容貌、なほとまれる匂ひなど、若き人びとは身にしめて、あやまちもしつべく、めできこゆ。

「いかばかりの道にてか、かかる御ありさまを見捨てては、別れきこえむ」と、あいなく涙ぐみあへり。

御文、常よりもこまやかなるは、思しなびくばかりなれど、またうち返し、定めかねたまふべきことならねば、いとかひなし。

男は、さしも思さぬことをだに、情けのためにはよく言ひ続けたまふべかめれば、まして、おしなべての列には思ひきこえたまはざりし御仲の、かくて背

「こなたは、簀子ばかりの許されははべりや」

とて、上りゐたまへり。

はなやかにさし出でたる夕月夜に、うち振る舞ひたまへるさま、匂ひに、似るものなくめでたし。月ごろのつもりを、つきづきしう聞こえたまはむも、まばゆきほどになりければ、榊をいささか折りて持たまへりけるを、挿し入れて、

「変らぬ色をしるべにてこそ、斎垣も越えはべりにけれ。さも心憂く」

と聞こえたまへば、

「神垣はしるしの杉もなきものを

いかにまがへて折れる榊ぞ」

と聞こえたまへば、

「少女子があたりと思へば榊葉の

香をなつかしみとめてこそ折れ」

おほかたのけはひわづらはしけれど、御簾ばかりはひき着て、長押におしかかりてゐたまへり。

心にまかせて見たてまつりつべく、人も慕ひさまに思したりつる年月は、のどかなりつる御心おごりに、さしも思されざりき。

また、心のうちに、「いかにぞや、疵ありて」、思ひきこえたまひにし後、はた、あはれもさめつつ、かく御仲も隔たりぬるを、めづらしき御対面の昔おぼえたるに、「あはれ」と、思し乱ること限りなし。来し方、行く先、思し続けられて、心弱く泣きたまひぬ。

女は、さしも見えじと思しつ々むめれど、え忍びたまはぬ御けしきを、いよいよ心苦しう、なほ思しとまるべきさまにぞ、聞こえたまふめる。

月も入りぬるにや、あはれなる空を眺めつつ、怨みきこえたまふに、こころ思ひ集めたまへるつらさも消えぬべし。やうやう、「今は」と、思ひ離れたまへ

とともに聞き分かれぬほどに、物の音ども絶え絶え聞こえたる、いと艶なり。

むつまじき御前、十余人ばかり、御隨身、こととしき姿ならで、いたう忍びたまへれど、ことにひきつくろひたまへる御用意、いとめでたく見えたまへば、御供なる好き者ども、所からさへ身にしみて思へり。御心にも、「などで、今まで立ちならさざりつらむ」と、過ぎぬる方、悔しう思さる。

ものはかなげなる小柴垣を大垣にて、板屋どもあたりいとかりそめなり。黒木の鳥居ども、さすがに神々しう見わたされて、わづらはしきけしきなるに、神司の者ども、ここかしこにうちしはぶきて、おのがどち、物うち言ひたるけはひなども、他にはさま変はりて見ゆ。火焼屋かすかに光りて、人気すくなく、しめじめとして、ここにも思はしき人の、月日を隔てたまへらむほどを思しやるに、いといみじうあはれに心苦し。

北の対のさるべき所に立ち隠れたまひて、御消息聞こえたまふに、遊びはみなやめて、心にくきはひ、あまた聞こゆ。

何くれの人づての御消息ばかりにて、みづからは対面したまふべきさまにもあらねば、「いとものし」と思して、

「かうやうの歩きも、今はつきなきほどになりてはべるを、思ほし知らば、かう注連のほかにはもてなしたまはで。いぶせうはべることをも、あきらめはべりにしがな」

と、まめやかに聞こえたまへば、人びと、

「げに、いとかたはらいたう」

「立ちわづらはせたまふに、いとほしう」

など、あつかひきこゆれば、「いさや。この人目も見苦しう、かの思さむことも、若々しう、出でるむが、今さらにつつましきこと」と思すに、いともの憂けれど、情けなうもてなきむにもたけからねば、とかくうち嘆き、やすらひて、るぎり出でたまへる御けはひ、いと心にくし。

齋宮の御下り、近うなりゆくままに、御息所、もの心細く思ほす。やむごとなくわづらはしきものにおぼえたまへりし大殿の君も亡せたまひて後、さりともと世人も聞こえあつかひ、宮のうちにも心ときめきせしを、その後しも、かき絶え、あさましき御もてなしを見たまふに、まことに憂しと思すことこそありけめと、知り果てたまひぬれば、よろづのあはれを思し捨てて、ひたみちにいで立ちたまふ。

親添ひて下りたまふ例も、ことになけれど、いと見放ちがたき御ありさまなるにことつけて、「憂き世を行き離れむ」と思すに、大将の君、さすがに、今はとかけ離れたまひなむも、口惜しく思されて、御消息ばかりは、あはれなるさまにて、たびたび通ふ。対面したまはむことをば、今さらにあるまじきことと、女君も思す。「人は心づきなしと、思ひ置きたまふこともあらむに、我は、今すこし思ひ乱るることのまさるべきを、あいなし」と、心強く思すなるべし。

もとの殿には、あからさまに渡りたまふ折々あれど、いたう忍びたまへば、大将殿、え知りたまはず。たはやすく御心にまかせて、参うでたまふべき御すみかにはたあらねば、おぼつかなくて月日も隔たりぬるに、院の上、おどろおどろしき御悩みにはあらで、例ならず、時々悩ませたまへば、いとど御心の暇なけれど、「つらき者に思ひ果てたまひなむも、いとほしく、人聞き情けなくや」と思し起して、野の宮に参うでたまふ。

九月七日ばかりなれば、「むげに今日明日」と思すに、女方も心あわたたしけれど、「立ちながら」と、たびたび御消息ありければ、「いでや」とは思しわづらひながら、「いとあまり埋もれいたきを、物越ばかりの対面は」と、人知れず待ちきこえたまひけり。

遙けき野辺を分け入りたまふより、いともものあはれなり。秋の花、みな衰へつつ、浅茅が原も枯れ枯れなる虫の音に、松風、すぐく吹きあはせて、そのこ

賢 木

賢

木

「今日は、いみじく思ひたまへ忍ぶるを、かく渡らせたまへるになむ、なか
なか」

など聞こえたまひて、

「昔にならひはべりにける御よそひも、月ごろは、いとど涙に霧りふたがり
て、色あひなく御覧ぜられはべらむと思ひたまふれど、今日ばかりは、なほや
つれさせたまへ」

とて、いみじくし尽くしたまへるものども、また重ねてたてまつれたまへり。
かならず今日たてまつるべき、と思しける御下襲は、色も織りざまも、世の常
ならず、心ことなるを、かひなくやはとて、着替へたまふ。来ざらましかば、
口惜しう思さましと、心苦し。御返りに、

「春や来ぬるとも、まづ御覧ぜられになむ、参りはべりつれど、思ひたまへ
出でらるること多くて、え聞こえさせはべらず。

あまた年今日改めし色衣

着ては涙ぞふる心地する

えこそ思ひたまへしづめね」

と聞こえたまへり。御返り、

「新しき年ともいはずふるものは

ふりぬる人の涙なりけり」

おろかなるべきことにぞあらぬや。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

し放たず。

「この姫君を、今まで世人もその人とも知りきこえぬも、物げなきやうなり。父宮に知らせきこえてむ」と、思ほしなりて、御裳着のこと、人にあまねくはのたまはねど、なべてならぬさまに思しまうくる御用意など、いとありがたけれど、女君は、こよなう疎みきこえたまひて、「年ごろよろづに頼みきこえて、まつはしきこえけるこそ、あさましき心なりけれ」と、悔しうのみ思して、さやかに見合はせたてまつりたまはず、聞こえ戯れたまふも、苦しうわりなきものに思しむすぼほれて、ありしにもあらずなりたまへる御ありさまを、をかしうもいとほしうも思されて、

「年ごろ、思ひきこえし本意なく、馴れはまさらぬ御けしきの、心憂きこと」と、怨みきこえたまふほどに、年も返りぬ。

朔日の日は、例の、院に参りたまひてぞ、内、春宮などにも参りたまふ。それより大殿にまかでたまへり。大臣、新しき年ともいはず、昔の御ことども聞こえ出でたまひて、さうぎうしく悲しと思すに、いとどかくさへ渡りたまへるにつけて、念じ返したまへど、堪へがたう思したり。

御年の加はるけにや、ものものしきけさへ添ひたまひて、ありしよりけに、きよらに見えたまふ。立ち出でて、御方に入りたまへれば、人びともめづらしう見たてまつりて、忍びあへず。

若君見たてまつりたまへば、こよなうおよすけて、笑ひがちにおはするも、あはれなり。まみ、口つき、ただ春宮の御同じさまなれば、「人もこそ見たてまつりとがむれ」と見たまふ。

御しつらひなども変はらず、御衣掛の御装束など、例のやうにし掛けられたるに、女のが並ばぬこそ、栄なくさうぎうしく栄なけれ。

宮の御消息にて、

少納言は、「いと、かうしもや」とこそ思ひきこえさせつれ、あはれにかたじけなく、思しいたらぬことなき御心ばへを、まづうち泣かれぬ。

「さて、うちうちのにたまはせよな。かの人も、いかに思ひつらむ」と、ささめきあへり。

かくて後は、内にも院にも、あからさまに参りたまへるほどだに、静心なく、面影に恋しければ、「あやしの心や」と、我ながら思さる。通ひたまひし所々よりは、うらめしげにおどろかしきこえたまひなどすれば、いとほしと思すもあれど、新手枕の心苦しくて、「夜をや隔てむ」と、思しわづらはるれば、いともの憂くて、悩ましげにのみもてなしたまひて、

「世の中のいと憂くおぼゆるほど過ぐしてなむ、人にも見えたてまつるべき」とのみいらへたまひつつ、過ぐしたまふ。

今后は、御匣殿なほこの大将にのみ心つけたまへるを、

「げにはた、かくやむごとなかりつる方も失せたまひぬめるを、さてもあらむに、などか口惜しからむ」

など、大臣のたまふに、「いと憎し」と、思ひきこえたまひて、

「宮仕へも、をさをさしくだにしましたまへらば、などか悪しからむ」と、参らせたてまつらむことを思しはげむ。

君も、おしなべてのさまにはおぼえざりしを、口惜しとは思せど、ただ今なことさまに分くる御心もなくて、

「何かは、かばかり短かめる世に。かくて思ひ定まりなむ。人の怨みも負ふまじかりけり」

と、いとど危ふく思し懲りにたり。

「かの御息所は、いといとほしけれど、まことのよるべと頼みきこえむには、かならず心おかれぬべし。年ごろのやうにて見過ぐしたまはば、さるべき折ふしにもの聞こえあはする人にてはあらむ」など、さすがに、ことのほかには思

の子はいくつか仕うまつらすべうはべらむ」

と、まめだちて申せば、

「三つが一つかにもあらむかし」

とのたまふに、心得果てて、立ちぬ。「もの馴れのさまや」と君は思す。人にも言はで、手づからといふばかり、里にてぞ、作りぬたりける。

君は、こしらへわびたまひて、今はじめ盗みもて来たらむ人の心地するも、いとをかしくて、「年ごろあはれと思ひきこえつるは、片端にもあらざりけり。人の心こそうたであるものはあれ。今は一夜も隔てむことのわりなかるべきこと」と思さる。

のたまひし餅、忍びて、いたう夜更かして持て参れり。「少納言はおとなしくて、恥づかしくや思さむ」と、思ひやり深く心しらひて、娘の弁といふを呼び出でて、

「これ、忍びて参らせたまへ」

とて、香壺の筥を一つ、さし入れたり。

「たしかに、御枕上に参らすべき祝ひの物にはべる。あな、かしこ。あだにな」

と言へば、「あやし」と思へど、

「あだなることは、まだならはぬものを」

とて、取れば、

「まことに、今はさる文字忌ませたまへよ。よも混じりはべらじ」

と言ふ。若き人にて、けしきもえ深く思ひ寄らねば、持て参りて、御枕上の御几帳よりさし入れたるを、君ぞ、例の聞こえ知らせたまふらむかし。

人はえ知らぬに、翌朝、この筥をまかでさせたまへるにぞ、親しき限りの人びと、思ひ合はすることどもありける。御皿どもなど、いつのまにかし出でけむ。花足いときよらにして、餅のさまも、ことさらび、いとをかしう調べたり。

昼つかた、渡りたまひて、

「悩ましげにしたまふらむは、いかなる御心地ぞ。今日は、暮も打たで、さうぎょうしや」

とて、覗きたまへば、いよいよ御衣ひきかづきて臥したまへり。人びとは退きつつさぶらへば、寄りたまひて、

「など、かくいぶせき御もてなしぞ。思ひのほか心に心憂くこそおはしけれな。人もいかにあやしと思ふらむ」

とて、御衾をひきやりたまへれば、汗におしひたして、額髪もいたう濡れたまへり。

「あな、うたて。これはいとゆゆしきわざぞよ」

とて、よろづにこしらへきこえたまへど、まことに、いとつらしと思ひたまひて、つゆの御いらへもしたまはず。

「よしよし。さらに見えたてまつらじ。いと恥づかし」

など怨じたまひて、御硯開けて見たまへど、物もなければ、「若の御ありさまや」と、らうたく見たてまつりたまひて、日一日、入りゐて、慰めきこえたまへど、解けがたき御けしき、いとどらうたげなり。

その夜さり、亥の子餅参らせたり。かかる御思ひのほどなれば、ことことしきさまにはあらで、こなたばかりに、をかしげなる桧破籠などばかりを、色々にて参れるを見たまひて、君、南のかたに出でたまひて、惟光を召して、

「この餅、かう数々に所狭きさまにはあらで、明日の暮れに参らせよ。今日は忌ま忌ましき日なりけり」

と、うちほほ笑みてのたまふ御けしきを、心とき者にて、ふと思ひ寄りぬ。惟光、たしかにも承らで、

「げに、愛敬の初めは、日選りして聞こし召すべきことにこそ。さても、子

ぬ。

朝には、若君の御もとに御文たてまつりたまふ。あはれなる御返りを見たまふにも、尽きせぬことどものみなむ。

いとつれづれに眺めがちなれど、何となき御歩きも、もの憂く思しなられて、思しも立たれず。

姫君の、何ごともあらまほしうとのひ果てて、いとめでたうのみ見えたまふを、似げなからぬほどに、はた、見なしたまへれば、けしきばみたることなど、折々聞こえ試みたまへど、見も知りたまはぬけしきなり。

つれづれなるままに、ただこなたにて碁打ち、偏つぎなどしつつ、日を暮らしたまふに、心ばへのらうらうじく愛敬づき、はかなき戯れごとのなかにも、うつくしき筋をし出でたまへば、思し放ちたる年月こそ、たださるかたのらうたさのみはありつれ、しのびがたくなりて、心苦しけれど、いかがありけむ、人のけぢめ見たてまつりわくべき御仲にもあらぬに、男君はとく起きたまひて、女君はさらに起きたまはぬ朝あり。

人びと、「いかなれば、かくおはしますならむ。御心地の例ならず思さるるにや」と見たてまつり嘆くに、君は渡りたまふとて、御硯の箱を、御帳のうちにさし入れておはしにけり。

人まにからうして頭もたげたまへるに、引き結びたる文、御枕のもとにあり。何心もなく、ひき開けて見たまへば、

「あやなくも隔てけるかな夜をかさね

さすがに馴れし夜の衣を」

と、書きすさびたまへるやうなり。「かかる御心おはすらむ」とは、かけても思し寄らざりしかば、

「などてかう心憂かりける御心を、うらなく頼もしきものに思ひきこえけむ」と、あさましう思さる。

も、なまめかしきまさりたまへり。

春宮にも久しう参らぬおぼつかなきなど、聞こえたまひて、夜更けてぞ、まかでたまふ。

二条院には、方々払ひみがきて、男女、待ちきこえたり。上臈ども皆参う上りて、我も我もと装束き、化粧じたるを見るにつけても、かのみ並み屈じたりつるけしきどもぞ、あはれに思ひ出でられたまふ。

御装束たてまつり替へて、西の対に渡りたまへり。衣更への御しつらひ、くもりなくあざやかに見えて、よき若人童女の、形、姿めやすくとのへて、「少納言がもてなし、心もとなきところなう、心にくし」と見たまふ。

姫君、いとうつくしうひきつくろひておはす。

「久しかりつるほどに、いとこよなうこそ大人びたまひにけれ」

とて、小さき御几帳ひき上げて見たてまつりたまへば、うちそばみて笑ひたまへる御さま、飽かぬところなし。

「火影の御かたはらめ、頭つきなど、ただ、かの心尽くしきこゆる人に、違ふところなくなりゆくかな」

と見たまふに、いとうれし。

近く寄りたまひて、おぼつかかなりつるほどのことどもなど聞こえたまひて、「日ごろの物語、のどかに聞こえまほしけれど、忌ま忌ましうおぼえはべれば、しばし他方にやすらひて、参り来む。今は、とだえなく見たてまつるべければ、厭はしうさへや思されむ」

と、語らひきこえたまふを、少納言はうれしと聞くものから、なほ危ふく思ひきこゆ。「やむごとなき忍び所多うかかづらひたまへれば、またわづらはしきや立ち代はりたまはむ」と思ふぞ、憎き心なるや。

御方に渡りたまひて、中将の君といふ、御足など参りすさびて、大殿籠もり

添へて、恋しさの堪へがたきと、この大将の君の、今はとよそになりたまはむなむ、飽かずいみじく思ひたまへらるる。一日、二日も見えたまはず、かれがれにおはせしをだに、飽かず胸いたく思ひはべりしを、朝夕の光失ひては、いかでかながらふべからむ」

と、御声もえ忍びあへたまはず泣いたまふに、御前なるおとなおとなしき人など、いと悲しくて、さとうち泣きたる、そぞろ寒き夕べのけしきなり。

若き人びとは、所々に群れるつつ、おのがどち、あはれなることどもうち語らひて、

「殿の思しのたまはするやうに、若君を見たてまつりてこそは、慰むべかれと思ふも、いとはかなきほどの御形見にこそ」

とて、おのおの、「あからさまにまかでて、参らむ」と言ふもあれば、かたみに別れ惜しむほど、おのがじしあはれなることども多かり。

院へ参りたまへれば、

「いといたう面瘦せにけり。精進にて日を経るけにや」

と、心苦しげに思し召して、御前にて物など参らせたまひて、とやかくやと思し扱ひきこえさせたまへるさま、あはれにかたじけなし。

中宮の御方に参りたまへれば、人びと、めづらしがり見たてまつる。命婦の君して、

「思ひ尽きせぬことどもを、ほど経るにつけてもいかに」

と、御消息聞こえたまへり。

「常なき世は、おほかたにも思うたまへ知りにしを、目に近く見はべりつるに、厭はしきこと多く思うたまへ乱れしも、たびたびの御消息に慰めはべりてなむ、今日までも」

とて、さらぬ折だにある御けしき取り添へて、いと心苦しげなり。無紋の表の御衣に、鈍色の御下襲、纓巻きたまへるやつれ姿、はなやかなる御装ひより

あいな頼めしはべりつるを。げにこそ、心細き夕べにはべれ」

とても、泣きたまひぬ。

「いと浅はかなる人びとの嘆きにもはべるなるかな。まことに、いかなりともと、のどかに思ひたまへつるほどは、おのづから御目離るる折もはべりつらむを、なかなか今は、何を頼みにてかはおこたりはべらむ。今御覧じてむ」

とて出でたまふを、大臣見送りきこえたまひて、入りたまへるに、御しつらひよりはじめ、ありしに変はることもなけれど、空蟬のむなしき心地ぞしたまふ。

御帳の前に、御硯などうち散らして、手習ひ捨てたまへるを取りて、目をおししぼりつつ見たまふを、若き人びとは、悲しきなかにも、ほほ笑むあるべし。あはれなる古言ども、唐のも大和のも書きけがしつつ、草にも真名にも、さまざまめづらしきさまに書き混ぜたまへり。

「かしこの御手や」

と、空を仰ぎて眺めたまふ。よそ人に見たてまつりなさむが、惜しきなるべし。「旧き枕故き衾、誰と共にか」とある所に、

「なき魂ぞいとど悲しき寝し床の

あくがれがたき心ならひに」

また、「霜の花白し」とある所に、

「君なくて塵つもりぬる常夏の

露うち払ひいく夜寝ぬらむ」

一日の花なるべし、枯れて混じれり。

宮に御覧ぜさせたまひて、

「いふかひなきことをばさるものにて、かかる悲しき類ひ、世になくやはと、思ひなしつつ、契り長からで、かく心を惑はすべくてこそはありけめと、かへりてはつらく、前の世を思ひやりつつなむ、覚ましはべるを、ただ、日ごろに

大臣ぞ、やがて渡りたまへる。いと堪へがたげに思して、御袖も引き放ちたまはず。見たてまつる人びともいと悲し。

大将の君は、世を思しつづくること、いとさまざまにて、泣きたまふさま、あはれに心深きものから、いとさまよくなまめきたまへり。大臣、久しうためらひたまひて、

「齢のつもりには、さしもあるまじきことにつけてだに、涙もろなるわざにはべるを、まして、干る世なう思ひたまへ惑はれはべる心を、えのどめはべらねば、人目も、いと乱りがはしう、心弱きさまにはべるべければ、院などにも参りはべらぬなり。ことのついでには、さやうにおもむけ奏せさせたまへ。いくばくもはべるまじき老いの末に、うち捨てられたるが、つらうもはべるかな」と、せめて思ひ静めてのたまふけしき、いとわりなし。君も、たびたび鼻うちかみて、

「後れ先立つほどの定めなさは、世のさがと見たまへ知りながら、さしあたりておぼえはべる心惑ひは、類ひあるまじきわざとなむ。院にも、ありさま奏しはべらむに、推し量らせたまひてむ」と聞こえたまふ。

「さらば、時雨も隙なくはべるめるを、暮れぬほどに」と、そそのかしきこえたまふ。

うち見まはしたまふに、御几帳の後、障子のあなたなどのあき通りたるなどに、女房三十人ばかりおしこりて、濃き、薄き鈍色どもを着つつ、皆いみじう心細げにて、うちしほたれつつ集りたるを、いとあはれ、と見たまふ。

「思し捨つまじき人もとまりたまへれば、さりととも、ものついでには立ち寄せたまはじやなど、慰めはべるを、ひとへに思ひやりなき女房などは、今日を限りに、思し捨てつる故里と思ひ屈じて、長く別れぬる悲しびよりも、ただ時々馴れ仕うまつる年月の名残なかるべきを、嘆きはべるめるなむ、ことわりなる。うちとけおはしますことははべらざりつれど、さりとともつひにはと、

萱草の袴など着たるも、をかしき姿なり。

「昔を忘れざらむ人は、つれづれを忍びても、幼なき人を見捨てず、ものしたまへ。見し世の名残なく、人びときへ離れなば、たづきなさままさりぬべくなむ」

など、みな心長かるべきことどもをのたまへど、「いでや、いとど待遠にぞなりたまはむ」と思ふに、いとど心細し。

大殿は、人びとに、際々ほど置きつつ、はかなきもてあそびものども、また、まことにかの御形見なるべきものなど、わざとならぬさまに取りなしつつ、皆配らせたまひけり。

君は、かくてのみも、いかでかはつくづくと過ぐしたまはむとて、院へ参りたまふ。御車さし出でて、御前など参り集るほど、折知り顔なる時雨うちそそきて、木の葉さそふ風、あわたたしう吹き払ひたるに、御前にさぶらふ人びと、ものいと心細くて、すこし隙ありつる袖ども湿ひわたりぬ。

夜さりは、やがて二条院に泊りたまふべしとて、侍ひの人びとも、かしこにて待ちきこえむとなるべし、おのおの立ち出づるに、今日にしもとぢむまじきことなれど、またなくもの悲し。

大臣も宮も、今日のけしきに、また悲しき改めて思さる。宮の御前に御消息聞こえたまへり。

「院におぼつかながりのたまはするにより、今日なむ参りはべる。あからさまに立ち出ではべるにつけても、今日までながらへはべりにけるよと、乱り心地のみ動きてなむ、聞こえさせむもなかなかにはべるべければ、そなたにも参りはべらぬ」

とあれば、いとどしく宮は、目も見えたまはず、沈み入りて、御返りも聞こえたまはず。

「つれなながら、さるべき折々のあはれを過ぐしたまはぬ、これこそ、かたみに情けも見果つべきわざなれ。なほ、ゆゑづきよしづきて、人目に見ゆばかりなるは、あまりの難も出で来けり。対の姫君を、さは生ほし立てじ」と思す。「つれづれにて恋しと思ふらむかし」と、忘るる折なけれど、ただ女親なき子を、置きたらむ心地して、見ぬほど、うしろめたく、「いかが思ふらむ」とおぼえぬぞ、心やすきわざなりける。

暮れ果てぬれば、御殿油近く参らせたまひて、さるべき限りの人びと、御前にて物語などせさせたまふ。

中納言の君といふは、年ごろ忍び思ししかど、この御思ひのほどは、なかなかさやうなる筋にもかけたまはず。「あはれなる御心かな」と見たてまつる。おほかたにはなつかしううち語らひたまひて、

「かう、この日ごろ、ありしよりけに、誰も誰も紛るるかたなく、見なれ見なれて、えしも常にかからずは、恋しからじや。いみじきことをばさるものにて、ただうち思ひめぐらすこそ、耐へがたきこと多かりけれ」

とのたまへば、いとどみな泣きて、

「いふかひなき御ことは、ただかきくらす心地しはべるは、さるものにて、名残なきさまにあくがれ果てさせたまはむほど、思ひたまふるこそ」

と、聞こえもやらず。あはれと見わたしたまひて、

「名残なくは、いかがは。心浅くも取りなしたまふかな。心長き人だにあらば、見果てたまひなむものを。命こそはかなけれ」

とて、灯をうち眺めたまへるまみの、うち濡れたまへるほどぞ、めでたき。とりわきてらうたくしたまひし小さき童の、親どももなく、いと心細げに思へる、ことわりに見たまひて、

「あてきは、今は我をこそは思ふべき人なめれ」

とのたまへば、いみじう泣く。ほどなき相、人よりは黒う染めて、黒き汗衫、

枯れたる下草のなかに、龍胆、撫子などの、咲き出でたるを折らせたまひて、中將の立ちたまひぬる後に、若君の御乳母の宰相の君して、

「草枯れのまがきに残る撫子を

別れし秋のかたみとぞ見る

にほひ劣りてや御覽ぜらるらむ」

と聞こえたまへり。げに何心なき御笑み顔ぞ、いみじうつくしき。宮は、吹く風につけてだに、木の葉よりけにもろき御涙は、まして、とりあへたまはず。

「今も見てなかなか袖を朽たすかな

垣ほ荒れにし大和撫子」

なほ、いみじうつれづれなれば、朝顔の宮に、「今日のあはれは、さりともし見知りたまふらむ」と推し量らるる御心ばへなれば、暗きほどなれど、聞こえたまふ。絶え間遠けれど、さのものとなりたる御文なれば、咎なくて御覽ぜさす。空の色したる唐の紙に、

「わきてこの暮こそ袖は露けけれ

もの思ふ秋はあまた経ぬれど

いつも時雨は」

とあり。御手などの心とどめて書きたまへる、常よりも見どころありて、「過ぐしがたきほどなり」と人も聞こえ、みづからも思されければ、

「大内山を、思ひやりきこえながら、えやは」とて、

「秋霧に立ちおくれぬと聞きしより

しぐるる空もいかがとぞ思ふ」

とのみ、ほのかなる墨つきにて、思ひなし心にくし。

何ごとにつけても、見まきはかたき世なめるを、つらき人しもこそと、あはれにおぼえたまふ人の御心ざまなる。

へり。

君は、西のつまの高欄におしかかりて、霜枯れの前裁見たまふほどなりけり。風荒らかに吹き、時雨さとしたるほど、涙もあらそふ心地して、

「雨となり雲とやなりにけむ、今は知らず」

と、うちひとりごちて、頬杖つきたまへる御さま、「女にては、見捨てて亡くならむ魂かならずとまりなむかし」と、色めかき心地に、うちまもられつつ、近うついゐたまへれば、しどけなくうち乱れたまへるさまながら、紐ばかりをさし直したまふ。

これは、今すこしこまやかなる夏の御直衣に、紅のつややかなるひき重ねて、やつれたまへるしも、見ても飽かぬ心地ぞする。

中将も、いとあはれなるまみに眺めたまへり。

「雨となりしぐるる空の浮雲を

いづれの方とわきて眺めむ

行方なしや」

と、独り言のやうなるを、

「見し人の雨となりにし雲居さへ

いとど時雨にかき暮らすころ」

とのたまふ御けしきも、浅からぬほどしるく見ゆれば、

「あやしう、年ごろはいとしもあらぬ御心ざしを、院など、居立ちてのたまはせ、大臣の御もてなしも心苦しう、大宮の御方さまに、もて離るまじきなど、かたがたにさしあひたれば、えしもふり捨てたまはで、もの憂げなる御けしきながら、あり経たまふなめりかすと、いとほしう見ゆる折々ありつるを、まことに、やむごとなく重きかたは、ことに思ひきこえたまひけるなめり」

と見知るに、いよいよ口惜しうおぼゆ。よろづにつけて光失せぬる心地して、屈じいたかりけり。

はしきこえさせたまひて、この齋宮の御ことをも、ねむごろに聞こえつけさせたまひしかば、『その御代はりにも、やがて見たてまつり扱はむ』など、常にのたまはせて、『やがて内住みしたまへ』と、たびたび聞こえさせたまひしをだに、いとあるまじきこと、と思ひ離れにしを、かく心よりほかに若々しきもの思ひをして、つひに憂き名をさへ流し果てつべきこと」

と、思し乱るるに、なほ例のさまにもおはせず。

さるは、おほかたの世につけて、心にくくよしある聞こえありて、昔より名高くものしたまへば、野の宮の御移ろひのほどにも、をかしう今めきたること多くしなして、「殿上人どもの好ましきなどは、朝夕の露分けありくを、そのころの役になむする」など聞きたまひても、大将の君は、「ことわりぞかし。ゆるは飽くまでつきたまへるものを。もし、世の中に飽き果てて下りたまひなば、さうざうしくもあるべきかな」と、さすがに思されけり。

御法事など過ぎぬれど、正日までは、なほ籠もりおはす。ならばぬ御つれづれを、心苦しがりたまひて、三位中将は常に参りたまひつつ、世の中の御物語など、まめやかなるも、また例の乱りがはしきことをも聞こえ出でつつ、慰めきこえたまふに、かの内侍ぞ、うち笑ひたまふくさはひにはなるめる。大将の君は、

「あな、いとほしや。祖母殿の上、ないたう軽めたまひそ」

といさめたまふものから、常にをかしと思したり。

かの十六夜の、さやかならざりし秋のことなど、さらぬも、さまさまの好色事どもを、かたみに隈なく言ひあらはしたまふ、果て果ては、あはれなる世を言ひ言ひて、うち泣きなどもしたまひけり。

時雨うちして、ものあはれなる暮つ方、中将の君、鈍色の直衣、指貫、うすらかに衣更へして、いと雄々しうあぎやかに、心恥づかしきさまして参りたま

寝に明かしかねたまへる朝ぼらけの霧りわたれるに、菊のけしきばめる枝に、濃き青鈍の紙なる文つけて、さし置きて往にけり。「今めかしうも」とて、見たまへば、御息所の御手なり。

「聞こえぬほどは、思し知るらむや。

人の世をあはれと聞くも露けきに

後るる袖を思ひこそやれ

ただ今の空に思ひたまへあまりてなむ」

とあり。「常よりも優にも書いたまへるかな」と、さすがに置きがたう見たまふものから、「つれなの御巾ひや」と心憂し。さりとして、かき絶え音なう聞こえざらむもいとほしく、人の御名の朽ちぬべきことを思し乱る。

「過ぎにし人は、とてもかくても、さるべきにこそはものしたまひけめ、何にさることを、さださだとけざやかに見聞きけむ」と悔しきは、わが御心ながら、なほえ思し直すまじきなめりかし。

「齋宮の御きよまはりもわづらはしくや」など、久しう思ひわづらひたまへど、「わざとある御返りなくは、情けなくや」とて、紫のにばめる紙に、

「こよなうほど経はべりにけるを、思ひたまへおこたらずながら、つつましきほどは、さらば、思し知るらむやとてなむ。

とまる身も消えしもおなじ露の世に

心置くらむほどぞはかなき

かつは思し消ちてよかし。御覽ぜずもやとて、誰れにも」

と聞こえたまへり。

里におはするほどなりければ、忍びて見たまひて、ほのめかしたまへるけしきを、心の鬼にしるく見たまひて、「さればよ」と思すも、いといみじ。

「なほ、いと限りなき身の憂さなりけり。かやうなる聞こえありて、院にもいかに思さむ。故前坊の、同じき御はらからと言ふなかにも、いみじう思ひ交

思すさへ、

「限りあれば薄墨衣浅けれど

涙ぞ袖を淵となしける」

とて、念誦したまへるさま、いとどなまめかしきさまさりて、経忍びやかに誦
みたまひつつ、「法界三昧普賢大士」とうちのたまへる、行ひ馴れたる法師より
はけなり。若君を見たてまつりたまふにも、「何に忍ぶの」と、いとど露けけれ
ど、「かかる形見さへなからましかば」と、思し慰む。

宮はしづみ入りて、そのままに起き上がりたまはず、危ふげに見えたまふを、
また思し騒ぎて、御祈りなどせさせたまふ。

はかなう過ぎゆけば、御わざのいそぎなどせさせたまふも、思しかげざりし
ことなれば、尽きせずいみじうなむ。なのめにかたほなるをだに、人の親はい
かが思ふめる、ましてことわりなり。また、類ひおはせぬをだに、さうざうし
く思しつるに、袖の上の玉の砕けたりけむよりも、あさましげなり。

大将の君は、二条院にだに、あからさまにも渡りたまはず、あはれに心深う
思ひ嘆きて、行ひをまめにしたまひつつ、明かし暮らしたまふ。所々には、御
文ばかりぞたてまつりたまふ。

かの御息所は、齋宮は左衛門の司に入りたまひにければ、いとどいつくしき
御きよまはりにことつけて、聞こえも通ひたまはず。憂しと思ひ染みにし世も、
なべて厭はしうなりたまひて、「かかるほだしだに添はざらましかば、願はしき
さまにもなりなまし」と思すには、まづ対の姫君の、さうざうしくてもものした
まふらむありさまぞ、ふと思しやらるる。

夜は、御帳の内に一人臥したまふに、宿直の人びとは近うめぐりてさぶらへ
ど、かたはら寂しくて、「時しもあれ」と寝覚めがちなるに、声すぐれたる限り
選りさぶらはせたまふ念仏の、暁方など、忍びがたし。

「深き秋のあはれまさりゆく風の音、身にしみけるかな」と、ならはぬ御独

に残ることなく、かつ損なはれたまふことどものあるを見る見るも、尽きせず
思し惑へど、かひなくて日ごろになれば、いかがはせむとて、鳥辺野に率てた
てまつるほど、いみじげなること、多かり。

こなたかなたの御送りの人ども、寺々の念仏僧など、そこら広き野に所もな
し。院をばさらにも申さず、後の宮、春宮などの御使、さらぬ所々のも参りち
がひて、飽かずいみじき御とぶらひを聞こえたまふ。大臣はえ立ち上がりたま
はず、

「かかる齡の末に、若く盛りの子に後れたてまつりて、もごよふこと
と恥ぢ泣きたまふを、こころの人悲しう見たてまつる。

夜もすがらいみじうののしりつる儀式なれど、いともはかなき御屍ばかりを
御名残にて、暁深く帰りたまふ。

常のことなれど、人一人か、あまたしも見たまはぬことなればにや、類ひな
く思し焦がれたり。八月二十余日の有明なれば、空もけしきもあはれ少なから
ぬに、大臣の闇に暮れ惑ひたまへるさまを見たまふも、ことわりにいみじけれ
ば、空のみ眺められたまひて、

「のぼりぬる煙はそれとわかねども

なべて雲居のあはれなるかな」

殿におはし着きて、つゆまどろまれたまはず。年ごろの御ありさまを思し出
でつつ、

「などで、つひにはおのづから見直したまひてむと、のどかに思ひて、なほ
ざりのすきびにつけても、つらしとおぼえられたてまつりけむ。世を経て、疎
く恥づかしきものに思ひて過ぎ果てたまひぬる」

など、悔しきこと多く、思しつづけられるれど、かひなし。にぼめる御衣たて
まつれるも、夢の心地して、「われ先立たましかば、深くぞ染めたまはまし」と、

たてまつらば、うれしかるべきを、宮のつとおはするに、心地なくやと、つつみて過ぐしつるも苦しきを、なほやうやう心強く思しなして、例の御座所にこそ。あまり若くもてなしたまへば、かたへは、かくものしたまふぞ」
など、聞こえおきたまひて、いときよげにうち装束きて出でたまふを、常よりは目とどめて、見出だして臥したまへり。

秋の司召あるべき定めにて、大殿も参りたまへば、君達も労はり望みたまふことどもありて、殿の御あたり離れたまはねば、皆ひき続き出でたまひぬ。

殿の内、人少なにしめやかなるほどに、にはかに例の御胸をせきあげて、いといったう惑ひたまふ。内に御消息聞こえたまふほどもなく、絶え入りたまひぬ。足を空にて、誰も誰も、まかでたまひぬれば、除目の夜なりけれど、かくわりなき御障りなれば、みな事破れたるやうなり。

ののしり騒ぐほど、夜中ばかりなれば、山の座主、何くれの僧都たちも、え請じあへたまはず。今はさりととも、と思ひたゆみたりつるに、あさましければ、殿の内の人、ものにぞあたる。所々の御とぶらひの使など、立ちこみたれど、え聞こえつかず、ゆすりみちて、いみじき御心惑ひども、いと恐ろしきまで見えたまふ。

御もののけのたびたび取り入れたてまつりしを思して、御枕などもさながら、二、三日見たてまつりたまへど、やうやう変はりたまふことどものあれば、限り、と思し果つるほど、誰も誰もいといみじ。

大将殿は、悲しきことに、ことを添へて、世の中をいと憂きものに思し染みぬれば、ただならぬ御あたりの弔ひどもも、心憂しとのみぞ、なべて思さるる。院に、思し嘆き、弔ひきこえさせたまふさま、かへりて面立たしげなるを、うれしき瀬もまじりて、大臣は御涙のいとまなし。

人の申すに従ひて、いかめしきことどもを、生きや返りたまふと、さまざま

む。

若君の御まみのうつくしきなどの、春宮にいみじう似たてまつりたまへるを、見たてまつりたまひても、まづ、恋しう思ひ出でられさせたまふに、忍びがたくて、参りたまはむとて、

「内などにもあまり久しう参りはべらねば、いぶせさに、今日なむ初立ちしはべるを、すこし気近きほどにて聞こえさせばや。あまりおぼつかなき御心の隔てかな」

と、恨みきこえたまへれば、

「げに、ただひとへに艶にのみあるべき御仲にもあらぬを、いたう衰へたまへりと言ひながら、物越にてなどあべきかは」

とて、臥したまへる所に、御座近う参りたれば、入りてものなど聞こえたまふ。

御いらへ、時々聞こえたまふも、なほいと弱げなり。されど、むげに亡き人と思ひきこえし御ありさまを思し出づれば、夢の心地して、ゆゆしかりしほどのことどもなど聞こえたまふついでにも、かのむげに息も絶えたるやうにおはせしが、引き返し、つぶつぶとのたまひしことども思し出づるに、心憂ければ、

「いさや、聞こえまほしきこといと多かれど、まだいとたゆげに思したためればこそ」

とて、「御湯参れ」などさへ、扱ひきこえたまふを、いつならひたまひけむと、人びとあはれ がりきこゆ。

いとをかしげなる人の、いたう弱りそこなはれて、あるかなきかのけしきにて臥したまへるさま、いとらうたげに心苦しげなり。御髪の乱れたる筋もなく、はらはらとかかれる枕のほど、ありがたきまで見ゆれば、「年ごろ、何ごとを飽かぬことありて思ひつらむ」と、あやしきまですちまもられたまふ。

「院などに参りて、いととうまかでなむ。かやうにて、おぼつかならず見

かでぬ。

多くの人の心を尽くしつる日ごろの名残、すこしうちやすみて、「今はさりと
も」と思す。御修法などは、またまた始め添へさせたまへど、まづは、興あり、
めづらしき御かしづきに、皆人ゆるべり。

院をはじめたてまつりて、親王たち、上達部、残るなき産養どもの、めづら
かにいかめしきを、夜ごとに見ののしる。男にてさへおはすれば、そのほどの
作法、にぎははしくめでたし。

かの御息所は、かかる御ありさまを聞きたまひても、ただならず。「かねては、
いと危ふく聞こえしを、たひらかにもはた」と、うち思しけり。

あやしう、我にもあらぬ御心地を思しつづくるに、御衣なども、ただ芥子の
香に染み返りたるあやしさに、御ゆるする参り、御衣着替へなどしたまひて、試
みたまへど、なほ同じやうにのみあれば、わが身ながらだに疎ましう思さるる
に、まして、人の言ひ思はむことなど、人にのたまふべきことならねば、心ひ
とつに思し嘆くに、いとど御心変はりもまさりゆく。

大将殿は、心地すこしのどめたまひて、あさましかりしほどの問はず語りも、
心憂く思し出でられつつ、「いとほど経にけるも心苦しう、また気近う見たてま
つらむには、いかにぞや。うたておぼゆべきを、人の御ためいとほしう」、よろ
づに思して、御文ばかりぞありける。

いたうわづらひたまひし人の御名残ゆしう、心ゆるびなげに、誰も思した
れば、ことわりにて、御歩きもなし。なほいと悩ましげにのみしたまへば、例
のさまにてもまだ対面したまはず。若君のいとゆしきまで見えたまふ御あり
さまを、今から、いとさまことにもてかしづききこえたまふさま、おろかなら
ず、ことあひたる心地して、大臣もうれしういみじと思ひきこえたまへるに、
ただ、この御心地おこたり果てたまはぬを、心もとなく思せど、「さばかりいみ
じかりし名残にこそは」と思して、いかでかは、さのみは心をも惑はしたまは

「何ごとも、いとかうな思し入れぞ。さりともけしうはおはせじ。いかなりとも、かならず逢ふ瀬あなれば、対面はありなむ。大臣、宮なども、深き契りある仲は、めぐりても絶えざなれば、あひ見るほどありなむと思せ」

と、慰めたまふに、

「いで、あらずや。身の上のいと苦しきを、しばしやすめたまへと聞こえむとてなむ。かく参り来むともさらに思はぬを、もの思ふ人の魂は、げにあくがるるものになむありける」

と、なつかしげに言ひて、

「嘆きわび空に乱るるわが魂を

結びとどめよしたがへのつま」

とのたまふ声、けはひ、その人にもあらず、変はりたまへり。「いとあやし」と思しめぐらすに、ただ、かの御息所なりけり。あさましう、人のとかく言ふを、よからぬ者どもの言ひ出づることも、聞きにくく思して、のたまひ消つを、目に見す見す、「世には、かかることこそはありけれ」と、疎ましうなりぬ。「あな、心憂」と思されて、

「かくのたまへど、誰とこそ知らね。たしかにのたまへ」

とのたまへば、ただそれなる御ありさまに、あさましとは世の常なり。人々近う参るも、かたはらいたう思さる。

すこし御声もしづまりたまへれば、隙おはするにやとて、宮の御湯持て寄せたまへるに、かき起こされたまひて、ほどなく生まれたまひぬ。うれしと思ふこと限りなきに、人に駆り移したまへる御もののけども、ねたがりまどふけはひ、いともの騒がしうて、後の事、またいと心もとなし。

言ふ限りなき願ども立てさせたまふけにや、たひらかに事なり果てぬれば、山の座主、何くれやむごとなき僧ども、したり顔に汗おしのごひつつ、急ぎま

くづくと臥し悩みたまふを、宮人、いみじき大事にて、御祈りなど、さまさま仕うまつる。

おどろおどろしきさまにはあらず、そこはかとなくて、月日を過ぐしたまふ。大将殿も、常にとぶらひきこえたまへど、まさる方のいたうわづらひたまへば、御心のいとまなげなり。

まださるべきほどにもあらずと、皆人もたゆみたまへるに、にはかに御けしきありて、悩みたまへば、いとどしき御祈り、数を尽くしてせさせたまへれど、例の執念き御もののけ一つ、さらに動かず、やむごとなき験者ども、めづらかなりともてなやむ。さすがに、いみじう調ぜられて、心苦しげに泣きわびて、

「すこしゆるべたまへや。大将に聞こゆべきことあり」とのたまふ。

「さればよ。あるやうあらむ」

とて、近き御几帳のもとに入れたてまつりたり。むげに限りのさまにものしたまふを、聞こえ置かまほしきこともおはするにやとて、大臣も宮もすこし退きたまへり。加持の僧ども、声しづめて法華経を誦みたる、いみじう尊し。

御几帳の帷子引き上げて見たてまつりたまへば、いとをかしげにて、御腹はいみじう高うて臥したまへるさま、よそ人だに、見たてまつらむに心乱れぬべし。まして惜しう悲しう思す、ことわりなり。白き御衣に、色あひいとはなやかにて、御髪の毛いと長うちちたきを、引き結ひてうち添へたるも、「かうてこそ、らうたげになまめきたる方添ひてをかしかりけれ」と見ゆ。御手をとらへて、

「あな、いみじ。心憂きめを見せたまふかな」

とて、ものも聞こえたまはず泣きたまへば、例はいとわづらはしう恥づかしげなる御まみを、いとたゆげに見上げて、うちまもりきこえたまふに、涙のこぼるるさまを見たまふは、いかがあはれの浅からむ。

あまりいたう泣きたまへば、「心苦しき親たちの御ことを思し、また、かく見たまふにつけて、口惜しうおぼえたまふにや」と思して、

大殿には、御もののけいたう起こりて、いみじうわづらひたまふ。「この御生
きすだま、故父大臣の御霊など言ふものあり」と聞きたまふにつけて、思しつ
づくれば、

「身一つの憂き嘆きよりほかに、人を悪しかれなど思ふ心もなけれど、もの
思ひにあくがるなる魂は、さもやあらむ」

と思し知らるることもあり。

年ごろ、よろづに思ひ残すことなく過ぐしつれど、かうしも碎けぬを、はか
なきことの折に、人の思ひ消ち、なきものにもてなすさまなりし御禊の後、ひ
とふしに思し浮かれにし心、鎮まりがたう思さるるけにや、すこしうちまどろ
みたまふ夢には、かの姫君とおぼしき人の、いとよらにてある所に行きて、
とかく引きまさぐり、うつつにも似ず、たけいにかきひたぶる心出で来て、う
ちかなぐるなど見えたまふこと、度かさなりにけり。

「あな、心憂や。げに、身を捨ててや、往にけむ」と、うつし心ならずおぼ
えたまふ折々もあれば、「さならぬことだに、人の御ためには、よさまのことを
しも言ひ出でぬ世なれば、ましてこれは、いとよう言ひなしつべきたよりなり」
と思すに、いと名だたしう、

「ひたすら世に亡くなりて、後に怨み残すは世の常のことなり。それだに、
人の上にては、罪深うゆゆしきを、うつつのわが身ながら、さる疎ましきこと
を言ひつけらるる宿世の憂きこと。すべて、つれなき人にいかで心もかけきこ
えじ」

と思し返せど、思ふものをなり。

齋宮は、去年内に入りたまふべかりしを、さまざま障はることありて、この
秋入りたまふ。九月には、やがて野の宮に移ろひたまふべければ、ふたたびの
御祓へのいそぎ、とりかさねてあるべきに、ただあやしうほけほけしうて、つ

めたる御心ならば、いとうれしうなむ」

など、語らひきこえたまふ。常よりも心苦しげなる御けしきを、ことわりに、あはれに見たてまつりたまふ。

うちとけぬ朝ぼらけに、出でたまふ御さまのかしきにも、なほふり離れなむことは思し返さる。

「やむごとなき方に、いとど心ざし添ひたまふべきことも出で来にたれば、一つ方に思ししづまりたまひなむを、かやうに待ちきこえつつあらむも、心のみ尽きぬべきこと」

なかなかもの思ひのおどろかさるる心地したまふに、御文ばかりぞ、暮れつ方ある。

「日ごろ、すこしおこたるさまなりつる心地の、にはかにいといたう苦しげにはべるを、え引きよかでなむ」

とあるを、「例のことつけ」と、見たまふものから、

「袖濡るる恋路とかつは知りながら

おりたつ田子のみづからぞ憂き

『山の井の水』もことわりに」

とぞある。「御手は、なほここの人のなかにすぐれたりかし」と見たまひつづ、「いかにぞやもある世かな。心も容貌も、とりどりに捨つべくもなく、また思ひ定むべきもなきを」苦しう思さる。御返り、いと暗うなりにたれど、

「袖のみ濡るるや、いかに。深からぬ御ことになむ。

浅みにや人はおりたつわが方は

身もそぼつままで深き恋路を

おぼろけにてや、この御返りを、みづから聞こえさせぬ」
などあり。

なきもの一つあり。いみじき験者どもにも従はず、執念きけしき、おぼろけのものにあらずと見えたり。

大将の君の御通ひ所、ここかしこと思し当つるに、

「この御息所、二条の君などばかりこそは、おしなべてのさまには思したらざめれば、怨みの心も深からめ」

とささめきて、ものなど問はせたまへど、さして聞こえ当つることもなし。もののけとても、わざと深き御かたきと聞こゆるもなし。過ぎにける御乳母だつ人、もしは親の御方につけつつ伝はりたるものの、弱目に出で来たるなど、むねむねしからずぞ乱れ現はるる。ただつくづくと、音をのみ泣きたまひて、折々は胸をせき上げつつ、いみじう堪へがたげに惑ふわざをしたまへば、いかにおはすべきにかと、ゆゆしう悲しく思しあわてたり。

院よりも、御とぶらひ隙なく、御祈りのことまで思し寄せたまふさまのかたじけなきにつけても、いとど惜しげなる人の御身なり。

世の中あまねく惜しみきこゆるを聞きたまふにも、御息所はただならず思さる。年ごろはいとかくしもあらざりし御いどみ心を、はかなかりし所の車争ひに、人の御心の動きにけるを、かの殿には、さまでも思し寄せらざりけり。

かかる御もの思ひの乱れに、御心地、なほ例ならずのみ思さるれば、ほかに渡りたまひて、御修法などせさせたまふ。大将殿聞きたまひて、いかなる御心地にかと、いとほしう、思し起して渡りたまへり。

例ならぬ旅所なれば、いたう忍びたまふ。心よりほかなるおこたりなど、罪ゆるされぬべく聞こえつづけたまひて、悩みたまふ人の御ありさまも、憂へきこえたまふ。

「みづからはさしも思ひ入れはべらねど、親たちのいとことしう思ひまどはるるが心苦しきに、かかるほどを見過ぐさむとてなむ。よろづを思しのど

「一日の御ありさまのうるはしかりしに、今日うち乱れて歩きたまふかし。誰ならむ。乗り並ぶ人、けしうはあらじはや」と、推し量りきこゆ。「挑ましからぬ、かざし争ひかな」と、さうぎょうしく思せど、かやうにいと面なからぬ人はた、人相ひ乗りたまへるにつつまれて、はかなき御いらへも、心やすく聞こえむも、まばゆしかし。

御息所は、ものを思し乱ること、年ごろよりも多く添ひにけり。つらき方に思ひ果てたまへど、今はとてふり離れ下りたまひなむは、「いと心細かりぬべく、世の人聞きも人笑へにならむこと」と思す。さりとして立ち止まるべく思しなるには、「かくこよなきさまに皆思ひくたすべかめるも、やすからず、釣する海人の浮けなれや」と、起き臥し思しわづらふけにや、御心地も浮きたるやうに思されて、悩ましようしたまふ。

大将殿には、下りたまはむことを、「もて離れてあるまじきこと」なども、妨げきこえたまはず、

「数ならぬ身を、見ま憂く思し捨てむもことわりなれど、今はなほ、いふかひなきにても、御覧じ果てむや、浅からぬにはあらむ」

と、聞こえかかづらひたまへば、定めかねたまへる御心もや慰むと、立ち出でたまへりし御禊河の荒かりし瀬に、いとど、よろづいと憂く思し入れたり。

大殿には、御もののけめきて、いたうわづらひたまへば、誰も誰も思し嘆くに、御歩きなど便なきころなれば、一条院にも時々ぞ渡りたまふ。さはいへど、やむごとなき方は、ことに思ひきこえたまへる人の、めづらしきことさへ添ひたまへる御悩みなれば、心苦しう思し嘆きて、御修法や何やなど、わが御方に、多く行はせたまふ。

もののけ、生すだまなどいふもの多く出でて、さまざまの名のりするなかに、人にさらに移らず、ただみづからの御身につと添ひたるさまにて、ことにおどろおどろしうわづらはしきこゆることもなければ、また、片時離るる折も

「千尋ともいかでか知らむ定めなく

満ち干る潮ののどけからぬに」

と、ものに書きつけておはするさま、らうらうじきものから、若うをかしきを、めでたしと思す。

今日も、所もなく立ちにけり。馬場の御殿のほどに立てわづらひて、

「上達部の車ども多くて、もの騒がしげなるわたりかな」

と、やすらひたまふに、よろしき女車の、いたう乗りこぼれたるより、扇をさし出でて、人を招き寄せて、

「ここにやは立たせたまはぬ。所避りきこえむ」

と聞こえたり。「いかなる好色者ならむ」と思されて、所もげによきわたりなれば、引き寄せさせたまひて、

「いかで得たまへる所ぞと、ねたさになむ」

とのたまへば、よしある扇のつまを折りて、

「はかなしや人のかざせる葵ゆゑ

神の許しの今日を待ちける

注連の内には」

とある手を思し出づれば、かの典侍なりけり。「あさましう、旧りがたくも今めくかな」と、憎さに、はしたなう、

「かざしける心ぞあだにおもほゆる

八十氏人になべて逢ふ日を」

女は、「つらし」と思ひきこえけり。

「悔しくもかざしけるかな名のみして

人だのめなる草葉ばかりを」

と聞こゆ。人と相ひ乗りて、簾をだに上げたまはぬを、心やましう思ふ人多かり。

がら、「なぞや、かくかたみにそばそばしからでおはせかし」と、うちつぶやかれたまふ。

今日は、二条院に離れおはして、祭見に出でたまふ。西の対に渡りたまひて、惟光に車のこと仰せたり。

「女房出で立つや」

とのたまひて、姫君のいとうつくしげにつくろひたてておはするを、うち笑みて見たてまつりたまふ。

「君は、いざたまへ。もろともに見むよ」

とて、御髪の常よりもきよらに見ゆるを、かきなでたまひて、

「久しう削ぎたまはざめるを、今日は、吉き日ならむかし」

とて、暦の博士召して、時間はせなどしたまふほどに、

「まづ、女房出でね」

とて、童の姿どものをかしげなるを御覧ず。いとらうたげなる髪どものすそ、はなやかに削ぎわたして、浮紋の表の袴にかかれるほど、けぎやかに見ゆ。

「君の御髪は、我削がむ」とて、「うたて、所狭うもあるかな。いかに生ひやらむとすらむ」

と、削ぎわづらひたまふ。

「いと長き人も、額髪はすこし短うぞあめるを、むげに後れたる筋のなきや、あまり情けなからむ」

とて、削ぎ果てて、「千尋」と祝ひきこえたまふを、少納言、「あはれにかたじけなし」と見たてまつる。

「はかりなき千尋の底の海松ぶさの

生ひゆくすゑは我のみぞ見む」

と聞こえたまへば、

壺装束などいふ姿にて、女房の卑しからぬや、また尼などの世を背きけるなども、倒れまどひつつ、物見に出でたるも、例は、「あながちなりや、あなにく」と見ゆるに、今日はことわりに、口うちすげみて、髪着こめたるあやしの者どもの、手をつくりて、額にあてつつ見たてまつりあげたるも。をこがましげなる賤の男まで、おのが顔のならむさまをば知らで笑みさかえたり。何とも見入れたまふまじき、えせ受領の娘などさへ、心の限り尽くしたる車どもに乗り、さまことさらび心げさうしたるなむ、をかしきやうやうの見物なりける。

まして、ここかしこにうち忍びて通ひたまふ所々は、人知れずのみ数ならぬ嘆きまさるも、多かり。

式部卿の宮、棧敷にてぞ見たまひける。

「いとまばゆきまでねびゆく人の容貌かな。神などは目もこそとめたまへ」と、ゆゆしく思したり。姫君は、年ごろ聞こえわたりたまふ御心ばへの世の人に似ぬを、

「なのめならむにてだにあり。まして、かうしも、いかで」

と御心とまりけり。いとど近くて見えむまでは思しよらず。若き人びとは、聞きにくきまでできこえあへり。

祭の日は、大殿にはもの見たまはず。大将の君、かの御車の所争ひを、まねび聞こゆる人ありければ、「いといとほしう憂し」と思して、

「なほ、あたら重りかにおはする人の、ものに情けおくれ、すくすくしきところつきたまへるあまりに、みづからはさしも思さざりけめども、かかる仲らひは情け交はすべきものとも思いたらぬ御おきてに従ひて、次々よからぬ人のせさせたるならむかし。御息所は、心ばせのいと恥づかしく、よしありておはするものを、いかに思し憂じにけむ」

と、いとほしくて、参うでたまへりけれど、齋宮のまだ本の宮におはしませば、榊の憚りにことつけて、心やすくも対面したまはず。ことわりとは思しな

など言ふを、その御方の人も混じれば、いとほしと見ながら、用意せむもわづらはしければ、知らず顔をつくる。

つひに、御車ども立て続けつれば、ひとだまひの奥におしやられて、物も見えず。心やましきをばさるものにて、かかるやつれをそれと知られぬるが、いみじうねたきこと、限りなし。榻などもみな押し折られて、すずろなる車の筒にうちかけたれば、またなう人悪ろく、くやしう、「何に、来つらむ」と思ふにかひなし。物も見で帰らむとしたまへど、通り出でむ隙もなきに、

「事なりぬ」

と言へば、さすがに、つらき人の御前渡りの待たるるも、心弱しや。「笹の隈」にだにあらねばにや、つれなく過ぎたまふにつけても、なかなか御心づくしなり。

げに、常よりも好みとのへたる車どもの、我も我もと乗りこぼれたる下簾の隙間どもも、さらぬ顔なれど、ほほ笑みつつ後目にとどめたまふもあり。大殿のは、しるければ、まめだちて渡りたまふ。御供の人びとうちかしこまり、心ばへありつつ渡るを、おし消たれたるありさま、こよなう思さる。

「影をのみ御手洗川のつれなきに

身の憂きほどぞいとど知らるる」

と、涙のこぼるるを、人の見るもはしたなけれど、目もあやなる御さま、容貌の、「いとどしう出でばえを見ざらましかば」と思さる。

ほどほどにつけて、装束、人のありさま、いみじくととのへたりと見ゆるなかに、上達部はいとことなるを、一所の御光にはおし消たれたためり。大将の御仮の隨身に、殿上の将監などのすることは常のことにもあらず、めづらしき行幸などの折のわざなるを、今日は右近の蔵人の将監仕うまつれり。さらぬ御隨身どもも、容貌、姿、まばゆくとのへて、世にもてかしづかれたまへるさま、木草もなびかぬはあるまじげなり。

一条の大路、所なく、むくつけきまで騒ぎたり。所々の御棧敷、心々にし尽くしたるしつらひ、人の袖口さへ、いみじき見物なり。

大殿には、かやうの御歩きもをさをさしたまはぬに、御心地さへ悩ましければ、思しかげざりけるを、若き人びと、

「いでや。おのがどちひき忍びて見はべらむこそ、栄なかるべけれ。おほよそ人だに、今日の物見には、大將殿をこそは、あやしき山賤さへ見たてまつらむとすなれ。遠き国々より、妻子を引き具しつとも参うで来なるを。御覽ぜぬは、いとあまりもはべるかな」

と言ふを、大宮聞こしめして、

「御心地もよろしき隙なり。さぶらふ人びともさうざうしげなめり」

とて、にはかにめぐらし仰せたまひて、見たまふ。

日たけゆきて、儀式もわざとならぬさまにて出でたまへり。隙もなう立ちわたりたるに、よそほしう引き続きて立ちわづらふ。よき女房車多くて、雑々の人なき隙を思ひ定めて、皆さし退けさするなかに、網代のすこしなれたるが、下簾のさまなどよしばめるに、いたう引き入りて、ほのかなる袖口、裳の裾、汗衫など、ものの色、いときよらにて、ことさらにやつれたるけはひしるく見ゆる車、二つあり。

「これは、さらに、さやうにさし退けなどすべき御車にもあらず」

と、口ごはくて、手触れさせず。いづかたにも、若き者ども酔ひ過ぎ、立ち騒ぎたるほどのことは、えしたためあへず。おとなおとなしき御前の人びとは、「かくな」など言へど、えとどめあへず。

齋宮の御母御息所、もの思し乱るる慰めにもやと、忍びて出でたまへるなりけり。つれなしつくれど、おのづから見知りぬ。

「さばかりにては、さな言はせそ」

「大將殿をぞ、豪家には思ひきこゆらむ」

たまへど、まだ表はれては、わざとてなしきこえたまはず。

女も、似げなき御年のほどを恥づかしう思して、心とけたまはぬけしきなれば、それにつつみたるさまにもてなして、院に聞こし召し入れ、世の中の人も知らぬなくなりたるを、深うしもあらぬ御心のほどを、いみじう思し嘆きけり。

かかることを聞きたまふにも、朝顔の姫君は、「いかで、人に似じ」と深う思せば、はかなきさまなりし御返りなども、をきをさなし。さりとして、人憎く、はしたなくはもてなしたまはぬ御けしきを、君も、「なほことなり」と思しわたる。

大殿には、かくのみ定めなき御心を、心づきなしと思せど、あまりつつまぬ御けしきの、いふかひなければにやあらむ、深うも怨じきこえたまはず。心苦しきさまの御心地に悩みたまひて、もの心細げに思いたり。めづらしくあはれと思ひきこえたまふ。誰れも誰れもうれしきものから、ゆゆしう思して、さまざまの御つつしみせさせたてまつりたまふ。かやうなるほどに、いとど御心のいとまなくて、思しおこたるとはなけれど、とだえ多かるべし。

そのころ、齋院も下りゐたまひて、后腹の女三宮ゐたまひぬ。帝、后と、ことに思ひきこえたまへる宮なれば、筋ことになりたまふを、いと苦しう思したれど、こと宮たちのさるべきおはせず。儀式など、常の神わざなれど、いかめしうののしる。祭のほど、限りある公事に添ふこと多く、見所こよなし。人からと見えたり。

御禊の日、上達部など、数定まりて仕うまつりたまふわざなれど、おぼえことに、容貌ある限り、下襲の色、表の袴の紋、馬鞍までみな調べたり。とりわきたる宣旨にて、大将の君も仕うまつりたまふ。かねてより、物見車心づかひしけり。

世の中かはりて後、よろづもの憂く思され、御身のやむごとなきも添ふにや、軽々しき御忍び歩きもつつまじうて、ここもかしこも、おぼつかなきの嘆きを重ねたまふ、報いにや、なほ我につれなき人の御心を、尽きせずのみ思し嘆く。今は、ましてひまなう、ただ人のやうにて添ひおはしますを、今后は心やましう思すにや、内へのみさぶらひたまへば、立ち並ぶ人なう心やすげなり。折ふしに従ひては、御遊びなどを好まじう、世の響くばかりせさせたまひつつ、今の御ありさましもめでたし。ただ、春宮をぞいと恋しう思ひきこえたまふ。御後見のなきを、うしろめたう思ひきこえて、大将の君によるづ聞こえつけたまふも、かたはらいたきものから、うれしと思す。

まことや、かの六条御息所の御腹の前坊の姫君、齋宮にゐたまひにしかば、大将の御心ばへもいと頼もしげなきを、「幼き御ありさまのうしろめたさにことつけて下りやしなまし」と、かねてより思しけり。

院にも、かかることなむと、聞こし召して、
「故宮のいとやむごとなく思し、時めかしたまひしものを、軽々しうおしなべたるさまにもてなすなるが、いとほしきこと。齋宮をも、この御子たちの列になむ思へば、いづかたにつけても、おろかならざらむこそよからめ。心のすさびにまかせて、かく好色わぎするは、いと世のもどき負ひぬべきことなり」
など、御けしき悪しければ、わが御心地にも、げにと思ひ知らるれば、かしこまりてさぶらひたまふ。

「人のため、恥ぢがましきことなく、いづれをもなだらかにもてなして、女の怨みな負ひそ」

とのたまはするにも、「けしからぬ心のおほけなきを聞こし召しつけたらむ時」と、恐ろしければ、かしこまりてまかでたまひぬ。

また、かく院にも聞こし召し、のたまはするに、人の御名も、わがためも、好色がまじういとほしきに、いとどやむごとなく、心苦しき筋には思ひきこえ

葵

葵

れならむ」と、胸うちつぶれて、

「扇を取られて、からきめを見る」

と、うちおほどけたる声に言ひなして、寄りゐたまへり。

「あやしくも、さま変へける高麗人かな」

といらふるは、心知らぬにやあらむ。いらへはせで、ただ時々、うち嘆くけはひする方に寄りかかりて、几帳越しに手をとらへて、

「梓弓いるさの山に惑ふかな

ほの見し月の影や見ゆると

何ゆゑか」

と、推し当てにのたまふを、え忍ばぬなるべし。

「心いる方ならませば弓張の

月なき空に迷はましやは」

と言ふ声、ただそれなり。いとうれしきものから。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

「したり顔なりや」と笑はせたまひて、

「わざとあめるを、早うものせよかし。女御子たちなども、生ひ出づるところなれば、なべてのさまには思ふまじきを」

などのたまはす。御装ひなどひきつくろひたまひて、いたう暮るるほどに、待たれてぞ渡りたまふ。

桜の唐の綺の御直衣、葡萄染の下襲、裾いと長く引きて。皆人は表の衣なるに、あざれたる大君姿のなまめきたるにて、いつかれ入りたまへる御さま、げにいと異なり。花の匂ひもけおされて、なかなかことぎましになむ。

遊びなどいとおもしろうしたまひて、夜すこし更けゆくほどに、源氏の君、いたく酔ひ悩めるさまにもてなしたまひて、紛れ立ちたまひぬ。

寢殿に、女一宮、女三宮のおはします。東の戸口におはして、寄りゐたまへり。藤はこなたの妻にあたりてあれば、御格子ども上げわたして、人びと出でるたり。袖口など、踏歌の折おぼえて、ことさらめきもて出でたるを、ふさはしからずと、まづ藤壺わたり思し出でらる。

「なやましきに、いといたう強ひられて、わびにてはべり。かしこけれど、この御前にこそは、蔭にも隠させたまはめ」

とて、妻戸の御簾を引き着たまへば、

「あな、わづらはし。よからぬ人こそ、やむごとなきゆかりはかこちはべるなれ」

と言ふけしきを見たまふに、重々しうはあらねど、おしなべての若人どもにはあらず、あてにをかしきけはひしるし。

そらだきもの、いと煙たうくゆりて、衣の音なひ、いとはなやかにふるまひなして、心にくく奥まりたるけはひはたちおくれ、今めかしきことを好みたるわたりにて、やむごとなき御方々もの見たまふとて、この戸口は占めたまへるなるべし。さしもあるまじきことなれど、さすがにをかしう思ほされて、「いづ

と聞こえたまへば、

「ことにととのへ行ふこともはべらず。ただ公事に、そしうなる物の師どもを、ここかしこに尋ねはべりしなり。よろづのことよりは、「柳花苑」、まことに後代の例ともなりぬべく見たまへしに、まして「さかゆく春」に立ち出でさせたまへらましかば、世の面目にやはべらまし」

と聞こえたまふ。

弁、中将など参りあひて、高欄に背中おしつつ、とりどりに物の音ども調べ合はせて遊びたまふ、いとおもしろし。

かの有明の君は、はかなかりし夢を思し出でて、いともの嘆かしうながめたまふ。春宮には、卯月ばかりと思し定めたれば、いとわりなう思し乱れたるを、男も、尋ねたまはむにあとはかなくはあらねど、いづれとも知らで、ことに許したまはぬあたりにかかづらはむも、人悪く思ひわづらひたまふに、弥生の二十余日、右の大殿の弓の結に、上達部、親王たち多く集へたまひて、やがて藤の宴したまふ。

花盛りは過ぎにたるを、「ほかの散りなむ」とや教へられたりけむ、遅れて咲く桜、二木ぞいとおもしろき。新しう造りたまへる殿を、宮たちの御裳着の日、磨きしつらはれたり。はなばなとものしたまふ殿のやうにて、何ごとも今めかしようもてなしたまへり。

源氏の君にも、一日、内にて御対面のついでに、聞こえたまひしかど、おはせねば、口惜しう、ものの榮なしと思して、御子の四位少将をたてまつりたまふ。

「わが宿の花しなべての色ならば

何かはさらに君を待たまし」

内におはするほどにて、主上に奏したまふ。

るべし。さりとして、知らであらむ、はた、いと口惜しかるべければ、いかにせまし」と、思しわづらひて、つくづくとながめ臥したまへり。

「姫君、いかにつれづれならむ。日ごろになれば、屈してやあらむ」と、らうたく思しやる。かのしるしの扇は、桜襲ねにて、濃きかたにかすめる月を描きて、水にうつしたる心ばへ、目馴れたれど、ゆゑなつかしうもてならしたり。「草の原をば」と言ひしまのみ、心にかかりたまへば、

「世に知らぬ心地こそすれ有明の

月のゆくへを空にまがへて」

と書きつけたまひて、置きたまへり。

「大殿にも久しうなりにける」と思せど、若君も心苦しければ、こしらへむと思して、二条院へおはしぬ。見るままに、いとうつくしげに生ひなりて、愛敬づきらうらうじき心ばへ、いとことなり。飽かぬところなう、わが御心のまに教へなさむ、と思すにかなひぬべし。男の御教へなれば、すこし人馴れたることや混じらむと思ふこそ、うしろめたけれ。

日ごろの御物語、御琴など教へ暮らして出でたまふを、例のと、口惜しう思せど、今はいとようならはされて、わりなくは慕ひまつはさず。

大殿には、例の、ふとも対面したまはず。つれづれとよろづ思しめぐらされて、箏の御琴まさぐりて、

「やはらかに寝る夜はなくて」

とうたひたまふ。大臣渡りたまひて、一日の興ありしこと、聞こえたまふ。

「ここらの齢にて、明王の御代、四代をなむ見はべりぬれど、このたびのやうに、文ども警策に、舞、楽、物の音どもとのほりて、齢延ぶることなむはべらざりつる。道々のものの上手ども多かるころほひ、詳しうしろしめし、とのへさせたまへるけなり。翁もほとほと舞ひ出でぬべき心地なむしはべりし」

「さも、たゆみなき御忍びありきかな」

とつきしろひつつ、そら寝をぞしあへる。入りたまひて臥したまへれど、寝入られず。

「をかしかりつる人のさまかな。女御の御おとうとたちにこそはあらめ。まだ世に馴れぬは、五、六の君ならむかし。帥宮の北の方、頭中将のすさめぬ四の君などこそ、よしと聞きしか。なかなかそれならましかば、今すこしをかしてからまし。六は春宮にたてまつらむところざしたまへるを、いとほしうもあるべいかな。わづらはしう、尋ねむほどもまぎらはし、さて絶えなむとは思はぬけしきなりつるを、いかなれば、言通はすべきさまを教へずなりぬらむ」

など、よろづに思ふも、心のとまるなるべし。かうやうなるにつけても、まづ、「かのわたりのありさまの、こよなう奥まりたるはや」と、ありがたう思ひ比べられたまふ。

その日は後宴のことありて、まぎれ暮らしたまひつ。箏の琴仕うまつりたまふ。昨日のことよりも、なまめかしうおもしろし。藤壺は、暁に参う上りたまひにけり。「かの有明、出でやしぬらむ」と、心もそらにて、思ひ至らぬ隈なき良清、惟光をつけて、うかがはせたまひければ、御前よりまかだたまひけるほどに、

「ただ今、北の陣より、かねてより隠れ立ちてはべりつる車どもまかり出づる。御方々の里人はべりつるなかに、四位の少将、右中弁など急ぎ出でて、送りしはべりつるや、弘徽殿の御あかれならむと見たまへつる。けしうはあらぬけはひどもしるくて、車三つばかりはべりつ」

と聞こゆるにも、胸うちつぶれたまふ。

「いかにして、いづれと知らむ。父大臣など聞きて、ことごとしうもてなきむも、いかにぞや。まだ、人のありさまよく見さだめぬほどは、わづらはしか

とて、やをら抱き下ろして、戸は押し立てつ。あさましきにあきれたるさま、いとなつかしうをかしげなり。わななくわななく、

「ここに、人」

と、のたまへど、

「まろは、皆人に許されたれば、召し寄せたりとも、なんでふことかあらむ。

ただ、忍びてこそ」

とのたまふ声に、この君なりけりと聞き定めて、いささか慰めけり。わびしと思へるものから、情けなくこはごはしうは見えじ、と思へり。酔ひ心地や例ならざりけむ、許さむことは口惜しきに、女も若うたをやぎて、強き心も知らぬなるべし。

らうたしと見たまふに、ほどなく明けゆけば、心あわたたし。女は、まして、さまざまに思ひ乱れたるけしきなり。

「なほ、名のりしたまへ。いかでか、聞こゆべき。かうてやみなむとは、さりとも思されじ」

とのたまへば、

「憂き身世にやがて消えなば尋ねても

草の原をば問はじとや思ふ」

と言ふさま、艶になまめきたり。

「ことわりや。聞こえ違へたる文字かな」とて、

「いづれぞと露のやどりを分かむまに

小笹が原に風もこそ吹け

わづらはしく思すことならずは、何かつつまむ。もし、すかいたまふか」

とも言ひあへず、人々起き騒ぎ、上の御局に参りちがふけしきども、しげくまよへば、いとわりなくて、扇ばかりをしるしに取り換へて、出でたまひぬ。

桐壺には、人びと多くさぶらひて、おどろきたるもあれば、かかるを、

思されむ。中宮、御目のとまるにつけて、「春宮の女御のあながちに憎みたまふらむもあやしう、わがかう思ふも心憂し」とぞ、みづから思し返されける。

「おほかたに花の姿を見ましかば

つゆも心のおかれまじやは」

御心のうちなりけむこと、いかで漏りにけむ。

夜いたう更けてなむ、事果てける。

上達部おのおのあかれ、后、春宮帰らせたまひぬれば、のどやかになりぬるに、月いと明うさし出でてをかしきを、源氏の君、酔ひ心地に、見過ぐしがたくおぼえたまひければ、「上の人びともうち休みて、かやうに思ひかけぬほどに、もしさりぬべき隙もやある」と、藤壺わたりを、わりなう忍びてうかがひありけど、語らふべき戸口も鎖してければ、うち嘆きて、なほあらじに、弘徽殿の細殿に立ち寄りたまへれば、三の口開きたり。

女御は、上の御局にやがて参う上りたまひにければ、人少ななるけはひなり。

奥の枢戸も開きて、人音もせず。

「かやうにて、世の中のあやまちはするぞかし」と思ひて、やをら上りて覗きたまふ。人は皆寝たるべし。いと若うをかしげなる声の、なべての人とは聞こえぬ、

「朧月夜に似るものぞなき」

とうち誦じて、こなたさまには来るものか。いとうれしくて、ふと袖をとらへたまふ。女、恐ろしと思へるけしきにて、

「あな、むくつけ。こは、誰そ」とのたまへど、

「何か、疎ましき」とて、

「深き夜のあはれを知るも入る月の

おぼろけならぬ契りとぞ思ふ」

如月の二十日あまり、南殿の桜の宴させたまふ。后、春宮の御局、左右にして、参う上りたまふ。弘徽殿の女御、中宮のかくておはするを、をりふしごとによすからず思せど、物見にはえ過ぐしたまはで、参りたまふ。

日いとよく晴れて、空のけしき、鳥の声も、心地よげなるに、親王たち、上達部よりはじめて、その道のは皆、探韻賜はりて文つくりたまふ。宰相中将、「春といふ文字賜はれり」と、のたまふ声さへ、例の、人に異なり。次に頭中将、人の目移しも、ただならずおぼゆべかめれど、いとめやすくもてしづめて、声づかひなど、ものものしくすぐれたり。さての人びとは、皆臆しがちに鼻白める多かり。地下の人は、まして、帝、春宮の御才かしくすぐれておはします、かかる方にやむごとなき人多くものしたまふころなるに、恥づかしく、はるばると曇りなき庭に立ち出づるほど、はしたなくて、やすきことなれど、苦しげなり。年老いたる博士どもの、なりあやしくやつれて、例馴れたるも、あはれに、さまざま御覧ずるなむ、をかしかりける。

楽どもなどは、さらにもいはずとのへさせたまへり。やうやう入り日になるほど、春の鶯囀るといふ舞、いとおもしろく見ゆるに、源氏の御紅葉の賀の折、思し出でられて、春宮、かざし賜はせて、せちに責めのたまはするに、逃がれがたくて、立ちてのどかに袖返すところを一折れ、けしきばかり舞ひたまへるに、似るべきものなく見ゆ。左大臣、恨めしきも忘れて、涙落したまふ。

「頭中将、いづら。遅し」

とあれば、柳花苑といふ舞を、これは今すこし過ぐして、かかることもやと、心づかひやしけむ、いとおもしろければ、御衣賜はりて、いとめづらしきことに人思へり。上達部皆乱れて舞ひたまへど、夜に入りては、ことにけぢめも見えず。文など講ずるにも、源氏の君の御をば、講師もえ読みやらず、句ごとに誦じののしる。博士どもの心にも、いみじう思へり。

かうやうの折にも、まづこの君を光にしたまへれば、帝もいかでかおろかに

花 宴

花

宴

と、例の、やすからず世人も聞こえけり。

参りたまふ夜の御供に、宰相君も仕うまつりたまふ。同じ宮と聞こゆるなかにも、后腹の皇女、玉光りかかやきて、たぐひなき御おぼえにさへものしたまへば、人もいとことに思ひかしづききこえたり。まして、わりなき御心には、御輿のうちも思ひやられて、いとど及びなき心地したまふに、すずろはしきま
でなむ。

「尽きもせぬ心の闇に暮るるかな

雲居に人を見るにつけても」

とのみ、独りごたれつつ、ものいとあはれなり。

皇子は、およすけたまふ月日に従ひて、いと見たてまつり分きがたげなるを、宮、いと苦し、と思せど、思ひ寄る人なきなめりかし。げに、いかさまに作り変へてかは、劣らぬ御ありさまは、世に出でものしたまはまし。月日の光の空に通ひたるやうに、ぞ世人も思へる。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

ことは、憂しや、世の中よ」

と言ひあはせて、「鳥籠の山なる」と、かたみに口がたむ。

さて、そののち、ともすればことのついでごとに、言ひ迎ふるくさはひなるを、いとどものむつかしき人ゆゑと、思し知るべし。女は、なほいと艶に怨みかくるを、わびしと思ひありきたまふ。

中将は、妹の君にも聞こえ出でず、ただ、「さるべき折の脅しぐさにせむ」とぞ思ひける。やむごとなき御腹々の親王たちだに、主上の御もてなしのこよなきにわづらはしがりて、いとことにさりきこえたまへるを、この中将は、「さらにおし消たれきこえじ」と、はかなきことにつけても、思ひいどみきこえたまふ。

この君一人ぞ、姫君の御一つ腹なりける。帝の御子といふばかりにこそあれ、我も、同じ大臣と聞こゆれど、御おぼえことなるが、皇女腹にてまたなくかしづかれたるは、何ばかり劣るべき際と、おぼえたまはぬなるべし。人がらも、あるべき限りとのひて、何ごともあらまほしく、たらひてぞものしたまひける。この御仲どもの挑みこそ、あやしかりしか。されど、うるさくてなむ。

七月にぞ后ゐたまふめりし。源氏の君、宰相になりたまひぬ。帝、下りみさせたまはむの御心づかひ近うなりて、この若宮を坊に、と思ひきこえさせたまふに、御後見したまふべき人おはせず。御母方の、みな親王たちにて、源氏の公事しりたまふ筋ならねば、母宮をだに動きなきさまにしおきたてまつりて、強りにと思すになむありける。

弘徽殿、いとど御心動きたまふ、ことわりなり。されど、

「春宮の御世、いと近うなりぬれば、疑ひなき御位なり。思ほしのどめよ」

とぞ聞こえさせたまひける。「げに、春宮の御母にて二十余年になりたまへる女御をおきたてまつりては、引き越したてまつりたまひがたきことなりかし」

底もあらはに」

とあり。「面無のさまや」と見たまふも憎けれど、わりなしと思へりしもさすがにて、

「荒らだちし波に心は騒がねど

寄せけむ磯をいかが恨みぬ」

とのみなむありける。帯は、中將のなりけり。わが御直衣よりは色深し、と見たまふに、端袖もなかりけり。

「あやしのことどもや。おり立ちて乱るる人は、むべをこがましきことは多からむ」と、いとど御心をさめられたまふ。

中將、宿直所より、「これ、まづ綴ぢつけさせたまへ」とて、おし包みておこせたるを、「いかで取りつらむ」と、心やまし。「この帯を得ざらましかば」と思す。その色の紙に包みて、

「なか絶えばかことや負ふと危ふさに

はなだの帯を取りてだに見ず」

とて、やりたまふ。立ち返り、

「君にかく引き取られぬる帯なれば

かくて絶えぬるなかとかこたむ

え逃れさせたまはじ」

とあり。

日たけて、おのおの殿上に参りたまへり。いと静かに、もの遠きさましておはするに、頭の君もいとをかしけれど、公事多く奏しくだす日にて、いとうるはしくすくよかなるを見るも、かたみにほほ笑まる。人まにさし寄りて、

「もの隠しは懲りぬらむかし」

とて、いとねたげなるしり目なり。

「などでか、さしもあらむ。立ちながら帰りけむ人こそ、いとほしけれ。ま

るうはべこそ、さてもありけれ、五十七、八の人の、うちとけてもの言ひ騒げるけはひ、えならぬ二十の若人たちの御なかにももの怖ぢしたる、いとつきなし。かうあらぬさまにもてひがめて、恐ろしげなるけしきを見すれど、なかにかしるく見つけたまひて、「我と知りて、ことさらにするなりけり」と、をこになりぬ。「その人なめり」と見たまふに、いとをかしければ、太刀抜きたるかひなをとらへて、いといたうつみたまへれば、ねたきものから、え堪へで笑ひぬ。

「まことは、うつし心かとよ。戯れにくしや。いで、この直衣着む」

とのたまへど、つととらへて、さらに許しきこえず。

「さらば、もろともにこそ」

とて、中將の帯をひき解きて脱がせたまへば、脱がじとすまふを、とかくひきしろふほどに、ほころびはほろほろと絶えぬ。中將、

「つつむめる名や漏り出でむ引きかはし

かくほころぶる中の衣に

上に取り着ば、しるからむ」

と言ふ。君、

「隠れなきものと知る知る夏衣

着たるを薄き心とぞ見る」

と言ひかはして、うらやみなきしどけな姿に引きなされて、みな出でたまひぬ。

君は、「いと口惜しく見つけれぬること」と思ひ、臥したまへり。内侍は、あさましくおぼえければ、落ちとまれる御指貫、帯など、つとめてたてまつれり。

「恨みてもいふかひぞなきたちかさね

引きてかへりし波のなごりに

従へば、すこしはやりかなる戯れ言など言ひかはして、これもめづらしき心地ぞしたまふ。

頭中将は、この君のいたうまめだち過ぐして、常にもどきたまふがねたきを、つれなくてうちうち忍びたまふかたがた多かめるを、「いかで見あらはさむ」とのみ思ひわたるに、これを見つけたる心地、いとうれし。「かかる折に、すこし脅しきこえて、御心まどはして、懲りぬやと言はむ」と思ひて、たゆめきこゆ。

風ひややかにうち吹きて、やや更けゆくほどに、すこしまどろむにやと見ゆるけしきなれば、やをら入り来るに、君は、とけてしも寝たまはぬ心なれば、ふと聞きつけて、この中将とは思ひ寄らず、「なほ忘れがたくすなる修理大夫にこそあらめ」と思すに、おとなおとなしき人に、かく似げなきふるまひをして、見つけられむことは、恥づかしければ、

「あな、わづらはし。出でなむよ。蜘蛛のふるまひは、しるかりつらむものを。心憂く、すかしたまひけるよ」

とて、直衣ばかりを取りて、屏風のうしろに入りたまひぬ。中将、をかしきを念じて、引きたてまつる屏風のもとに寄りて、ごほごほとたたみ寄せて、おどろおどろしく騒がすに、内侍は、ねびたれど、いたくよしばみなよびたる人の、先々もかやうにて、心動かす折々ありければ、ならひて、いみじく心あわたたしきにも、「この君をいかにしきこえぬるか」とわびしきに、ふるふるふつとひかへたり。「誰れと知られで出でなばや」と思せど、しどけなき姿にて、冠などうちゆがめて走らむうしろで思ふに、「いとをこなるべし」と、思しやすらふ。

中将、「いかで我と知られきこえじ」と思ひて、ものも言はず、ただいみじう怒れるけしきにもてなして、太刀を引き抜けば、女、

「あが君、あが君」

と、向ひて手をするに、ほとほと笑ひぬべし。好ましう若やぎてもてなした

衣をだに着まほしがるたぐひもあなればにや、いたうもあらがひきこえさせず。人びとも、「思ひのほかなることかな」と、扱ふめるを、頭中将、聞きつけて、「至らぬ隈なき心にて、まだ思ひ寄らざりけるよ」と思ふに、尽きせぬ好み心も見まほしうなりにければ、語らひつきにけり。

この君も、人よりはいとことなるを、「かのつれなき人の御慰めに」と思ひつれど、見まほしきは、限りありけるをとや。うたての好みや。

いたう忍ぶれば、源氏の君はえ知りたまはず。見つけきこえては、まづ怨みきこゆるを、齡のほどいとほしければ、慰めむと思せど、かなはぬもの憂さに、いと久しくなりにけるを、夕立して、名残涼しき宵のまぎれに、温明殿のわたりをたたずみありきたまへば、この内侍、琵琶をいとをかしう弾きみたり。御前などにも、男方の御遊びに交じりなどして、ことにまさる人なき上手なれば、もの恨めしうおぼえける折から、いとあはれに聞こゆ。

「瓜作りになりやしなまし」

と、声はいとをかしうて歌ふぞ、すこし心づきなき。「鄂州にありけむ昔の人も、かくやをかしかりけむ」と、耳とまりて聞きたまふ。弾きやみて、いといたう思ひ乱れたるけはひなり。君、「東屋」を忍びやかに歌ひて寄りたまへるに、

「押し開いて来ませ」

と、うち添へたるも、例に違ひたる心地ぞする。

「立ち濡るる人しもあらじ東屋に

うたてもかかる雨そそきかな」

と、うち嘆くを、我ひとりしも聞き負ふまじけれど、「うとましや、何ごとをかくまでは」と、おぼゆ。

「人妻はあなわづらはし東屋の

真屋のあまりも馴れじとぞ思ふ」

とて、うち過ぎなまほしけれど、「あまりはしたなくや」と思ひ返して、人に

らず画きたるを、さし隠して見返りたるまみ、いたう見延べたれど、目皮らいたく黒み落ち入りて、いみじうはつれそそけたり。

「似つかはしからぬ扇のさまかな」と見たまひて、わが持たまへるに、さしかへて見たまへば、赤き紙の、うつるばかり色深きに、木高き森の画を塗り隠したり。片つ方に、手はいとさだ過ぎたれど、よしなからず、「森の下草老いぬれば」など書きすさびたるを、「ことしもあれ、うたての心ばへや」と笑まれながら、

「森こそ夏の、と見ゆめる」

とて、何くれとのたまふも、似げなく、人や見つけむと苦しきを、女はさも思ひたらず、

「君し来ば手なれの駒に刈り飼はむ

盛り過ぎたる下葉なりとも」

と言ふさま、こよなく色めきたり。

「笹分けば人やとがめむいつとなく

駒なつくめる森の木隠れ

わづらはしさに」

とて、立ちたまふを、ひかへて、

「まだかかるものをこそ思ひはべらね。今さらなる、身の恥になむ」

とて泣くさま、いといみじ。

「いま、聞こえむ。思ひながらぞや」

とて、引き放ちて出でたまふを、せめておよびて、「橋柱」と怨みかくるを、主上は御桂果てて、御障子より覗かせたまひけり。「似つかはしからぬあはひかな」と、いとをかしう思されて、

「好き心なしと、常にもて悩むめるを、さはいへど、過ぐさざりけるは」

とて、笑はせたまへば、内侍は、なままばゆけれど、憎からぬ人ゆゑは、濡

と、のたまはすれど、かしこまりたるさまにて、御いらへも聞こえたまはねば、「心ゆかぬなめり」と、いとほしく思し召す。

「さるは、好き好きしううち乱れて、この見ゆる女房にまれ、またこなたかなたの人びとなど、なべてならずなども見え聞こえぎめるを、いかなるものくまに隠れありきて、かく人にも怨みらるらむ」とのたまはず。

帝の御年、ねびさせたまひぬれど、かうやうの方、え過ぐさせたまはず、采女、女蔵人などを、容貌、心あるをば、ことにもてはやし思し召したれば、よしある宮仕へ人多かるころなり。はかなきことをも言ひ触れたまふには、もて離るることもありがたきに、目馴るるにやあらむ、「げにぞ、あやしう好いたまはぎめる」と、試みに戯れ事を聞こえかかりなどする折あれど、情けなからぬほどにうちいらへて、まことには乱れたまはぬを、「まめやかにさうさうし」と思ひきこゆる人もあり。

年いたう老いたる典侍、人もやむごとなく、心ばせあり、あてに、おぼえ高くはありながら、いみじうあだめいたる心ぎまにて、そなたには重からぬあるを、「かう、さだ過ぐるまで、などさしも乱るらむ」と、いぶかしくおぼえたまひければ、戯れ事言ひ触れて試みたまふに、似げなくも思はざりける。あさまし、と思しながら、さすがにかかるもをかしうて、ものなどのたまひてけれど、人の漏り聞かむも、古めかしきほどなれば、つれなくもてなしたまへるを、女は、いとつらしと思へり。

主上の御梳櫛にさぶらひけるを、果てにければ、主上は御桂の人召して出でさせたまひぬるほどに、また人もなくて、この内侍常よりもきよげに、様体、頭つきなまめきて、装束、ありさま、いとはなやかに好ましげに見ゆるを、「さも古りがたうも」と、心づきなく見たまふものから、「いかが思ふらむ」と、さすがに過ぐしがたくて、裳の裾を引きおどろかしたまへれば、かはぼりのえな

てまつらむと思ふぞ」

など、こまごまと語らひきこえたまへば、さすがに恥づかしうて、ともかくもいらへきこえたまはず。やがて御膝に寄りかかりて、寝入りたまひぬれば、いと心苦しうて、

「今宵は出でずなりぬ」

とのたまへば、皆立ちて、御膳などこなたに参らせたり。姫君起こしたてまつりたまひて、

「出でずなりぬ」

と聞こえたまへば、慰みて起きたまへり。もろともものなど参る。いとはかなげにすさびて、

「さらば、寝たまひねかし」

と、危ふげに思ひたまへれば、かかるを見捨てては、いみじき道なりとも、おもむきがたくおぼえたまふ。

かやうに、とどめられたまふ折々なども多かるを、おのづから漏り聞く人、大殿に聞こえければ、

「誰れならむ。いとめざましきことにもあるかな」

「今までその人とも聞こえず、さやうにまつはしたはぶれなどすらむは、あてやかに心にくき人にはあらじ」

「内わたりなどにて、はかなく見たまひけむ人を、ものめかしたまひて、人やとがめむと隠したまふななり。心なげにいはけて聞こゆるは」

など、さぶらふ人びとも聞こえあへり。

内にも、かかる人ありと聞こし召して、

「いとほしく、大臣の思ひ嘆かるなることも、げに、ものげなかりしほどを、おほなおほなかくものしたる心を、さばかりのことたどらぬほどにはあらじを。などか情けなくはもてなすなるらむ」

と口ずさみて、口おほひしたまへるさま、いみじうされてうつくし。

「あな、憎。かかること口馴れたまひにけりな。みるめに飽くは、まさなきことぞよ」

とて、人召して、御琴取り寄せて弾かせたてまつりたまふ。

「箏の琴は、中の細緒の堪へがたきこそとこせけれ」

とて、平調におしくだして調べたまふ。かき合はせばかり弾きて、さしやりたまへれば、え怨じ果てず、いとうつくしう弾きたまふ。

小さき御ほどに、さしやりて、ゆしたまふ御手つき、いとうつくしければ、らうたしと思して、笛吹き鳴らしつつ教へたまふ。いとさとくて、かたき調子どもを、ただひとわたりに習ひとりたまふ。大方らうらうじうをかしき御心ばへを、「思ひしことかなふ」と思す。「保曾呂惧世利」といふものは、名は憎けれど、おもしろう吹きすさびたまへるに、かき合はせ、まだ若けれど、拍子違はず上手めきたり。

大殿油参りて、絵どもなど御覧するに、「出でたまふべし」とありつれば、人びと声づくりきこえて、

「雨降りはべりぬべし」

など言ふに、姫君、例の、心細くて屈したまへり。絵も見さして、うつぶしておはすれば、いとらうたくて、御髪のいとめでたくこぼれかかりたるを、かき撫でて、

「他なるほどは恋しくやある」

とのたまへば、うなづきたまふ。

「我も、一日も見たてまつらぬはいと苦しうこそあれど、幼くおはするほどは、心やすく思ひきこえて、まづ、くねくねしく怨むる人の心破らじと思ひて、むつかしければ、しばしかくもありくぞ。おとなしく見なしては、他へもさらに行くまじ。人の怨み負はじなど思ふも、世に長うありて、思ふさまに見えた

わが御かたに臥したまひて、「胸のやるかたなきほど過ぐして、大殿へ」と思す。御前の前裁の、何となく青みわたれるなかに、常夏のはなやかに咲き出でたるを、折らせたまひて、命婦の君のもとに、書きたまふこと、多かるべし。

「よそへつつ見るに心はなぐさまで

露けきまさる撫子の花

花に咲かなむ、と思ひたまへしも、かひなき世にはべりければ」

とあり。さりぬべき隙にやありけむ、御覽ぜさせて、

「ただ塵ばかり、この花びらに」

と聞こゆるを、わが御心にも、ものいとあはれに思し知らるるほどにて、

「袖濡るる露のゆかりと思ふにも

なほ疎まれぬ大和撫子」

とばかり、ほのかに書きさしたるやうなるを、よろこびながらたてまつれる、

「例のことなれば、しるしあらじかし」と、くづほれて眺め臥したまへるに、胸うち騒ぎて、いみじくうれしきにも涙落ちぬ。

つくづくと臥したるにも、やるかたなき心地すれば、例の、慰めには西の対にぞ渡りたまふ。

しどけなくうちふくだみたまへる鬢ぐき、あざれたる桂姿にて、笛をなつかしう吹きすさびつつ、のぞきたまへれば、女君、ありつる花の露に濡れたる心地して、添ひ臥したまへるさま、うつくしうらうたげなり。愛敬こぼるるやうにて、おはしながらとくも渡りたまはぬ、なまうらめしかりければ、例ならず、背きたまへるなるべし。端の方についで、

「こちや」

とのたまへど、おどろかず、

「入りぬる磯の」

も、うちとけむつびたまはず。人目立つまじく、なだらかにもてなしたまふものから、心づきなしと思す時もあるべきを、いとわびしく思ひのほかなる心地すべし。

四月に内へ参りたまふ。ほどよりは大きにおよすけたまひて、やうやう起き返りなどしたまふ。あさましきまで、まぎれどころなき御顔つきを、思し寄りぬことにしあれば、「またならびなきどちは、げにかよひたまへるにこそは」と、思ほしけり。いみじう思ほしかしづくこと、限りなし。源氏の君を、限りなきものに思し召しながら、世の人のゆるしきこゆまじかりしによりて、坊にも据ゑたてまつらずなりにしを、飽かず口惜しう、ただ人にてかたじけなき御ありさま、容貌に、ねびもておはするを御覧するままに、心苦しく思し召すを、「かうやむごとなき御腹に、同じ光にてさし出でたまへれば、疵なき玉」と思しかしづくに、宮はいかなるにつけても、胸のひまなく、やすからずものを思ほす。

例の、中将の君、こなたにて御遊びなどしたまふに、抱き出でたてまつらせたまひて、

「御子たち、あまたあれど、そこをのみなむ、かかるほどより明け暮れ見し。されば、思ひわたさるるにやあらむ。いとよくこそおぼえたれ。いと小さきほどは、皆かくのみあるわざにやあらむ」

とて、いみじくうつくしと思ひきこえさせたまへり。

中将の君、面の色変はる心地して、恐ろしうも、かたじけなくも、うれしくも、あはれにも、かたがた移ろふ心地して、涙落ちぬべし。もの語りなどして、うち笑みたまへるが、いとゆゆしううつくしきに、わが身ながら、これに似たらむはいみじういたはしうおぼえたまふぞ、あながちなるや。宮は、わりなくかたはらいたきに、汗も流れてぞおはしける。中将は、なかなかなる心地の、乱るやうなれば、まかでたまひぬ。

めづらかなるまで写し取りたまへるさま、違ふべくもあらず。宮の、御心の鬼にいと苦しく、「人の見たてまつるも、あやしかりつるほどのあやまりを、まさに人の思ひとがめじや。さらぬはかなきことをだに、疵を求むる世に、いかなる名のつひに漏り出づべきにか」と思いつづくるに、身のみぞいと心憂き。命婦の君に、たまさかに逢ひたまひて、いみじき言どもを尽くしたまへど、何のかひあるべきにもあらず。若宮の御ことを、わりなくおぼつかながりきこえたまへば、

「など、かうしもあながちにのたまはすらむ。今、おのづから見たてまつらせたまひてむ」

と聞こえながら、思へるけしき、かたみにただならず。かたはらいたきことなれば、まほにもえのたまはで、

「いかならむ世に、人づてならで、聞こえさせむ」とて、泣いたまふさまぞ、心苦しき。

「いかさまに昔結べる契りにて

この世にかかるなかの隔てぞ

かかることこそ心得がたけれ」

とのたまふ。

命婦も、宮の思ほしたるさまなどを見たてまつるに、えはしたなうもさし放ちきこえず。

「見ても思ふ見ぬはたいかに嘆くらむ

こや世の人のまどふてふ闇

あはれに、心ゆるびなき御ことどもかな」

と、忍びて聞こえけり。

かくのみ言ひやる方なくて、帰りたまふものから、人のもの言ひもわづらはしきを、わりなきことにのたまはせ思して、命婦をも、昔おぼいたりしやうに

参座しにとても、あまた所も歩きたまはず、内、春宮、一院ばかり、さては、藤壺の三条の宮にぞ参りたまへる。

「今日はまたことにも見えたまふかな」

「ねびたまふままに、ゆゆしきまでなりまさりたまふ御ありさまかな」

と、人びとめできこゆるを、宮、几帳の隙より、ほの見たまふにつけても、思ほすことしげかりけり。

この御ことの、師走も過ぎにしが、心もとなきに、この月はさりとともと、宮人も待ちきこえ、内にも、さる御心まうけどもあり、つれなくて立ちぬ。「御ものけにや」と、世人も聞こえ騒ぐを、宮、いとわびしう、「このことにより、身のいたづらになりぬべきこと」と思し嘆くに、御心地もいと苦しくて悩みたまふ。

中将君は、いとど思ひあはせて、御修法など、さとはなくて所々にせさせたまふ。「世の中の定めなきにつけても、かくはかなくてや止みなむ」と、取り集めて嘆きたまふに、二月十余日のほどに、男御子生まれたまひぬれば、名残なく、内にも宮人も喜びきこえたまふ。

「命長くも」と思ほすは心憂けれど、「弘徽殿などの、うけはしげにのたまふ」と聞きしを、「むなしく聞きなしたまはましかば、人笑はれにや」と思し強りてなむ、やうやうすこしづつさはやいたまひける。

主上の、いつしかとゆかしげに思し召したること、限りなし。かの、人知れぬ御心にも、いみじう心もとなくて、人まに参りたまひて、

「主上のおぼつかながりきこえさせたまふを、まづ見たてまつりて詳しく奏しはべらむ」

と聞こえたまへど、

「むつかしげなるほどなれば」

とて、見せたてまつりたまはぬも、ことわりなり。さるは、いとあさましう、

む」

など聞こえたまへど、「わぎと人据ゑて、かしづきたまふ」と聞きたまひしよりは、「やむごとなく思し定めたることにこそは」と、心のみ置かれて、いとど疎く恥づかしく思さるべし。しひて見知らぬやうにもてなして、乱れたる御けはひには、えしも心強からず、御いらへなどうち聞こえたまへるは、なほ人よりはいとことなり。

四年ばかりがこのかみにおはすれば、うち過ぐし、恥づかしげに、盛りにととのほりて見えたまふ。「何ごとかはこの人の飽かぬところはものしたまふ。我が心のあまりけしからぬすさびに、かく怨みられたてまつるぞかし」と、思し知らる。同じ大臣と聞こゆるなかにも、おぼえやむごとなくおはするが、宮腹に一人いつきかしづきたまふ御心おごり、いとこよなくて、「すこしもおろかなるをば、めざまし」と思ひきこえたまへるを、男君は、「などかいときしも」と、ならはいたまふ、御心の隔てどもなるべし。

大臣も、かく頼もしげなき御心を、つらしと思ひきこえたまひながら、見たてまつりたまふ時は、恨みも忘れて、かしづきいとなみきこえたまふ。つとめて、出でたまふところにさしのぞきたまひて、御装束したまふに、名高き御帯、御手づから持たせてわたりたまひて、御衣のうしろひきつくろひなど、御沓を取らぬばかりにしたまふ、いとあはれなり。

「これは、内宴などいふこともはべるなるを、さやうの折にこそ」
など聞こえたまへば、

「それは、まさされるもはべり。これはただ目馴れぬさまなればなむ」

とて、しひてささせたてまつりたまふ。げに、よろづにかしづき立てて見たてまつりたまふに、生けるかひあり、「たまさかにても、かからむ人を出だし入れて見むに、ますことあらじ」と見えたまふ。

とて、うち笑みたまへる、いとめでたう愛敬ぶきたまへり。いつしか、雛をし据ゑて、そそきゐたまへる。三尺の御厨子一具に、品々しつらひ据ゑて、また小さき屋ども作り集めて、たてまつりたまへるを、ところせきまで遊びひろげたまへり。

「雛やらふとて、犬君がこれをこぼちはべりにければ、つくろひはべるぞ」とて、いと大事と思いたり。

「げに、いと心なき人のしわざにもはべるなるかな。今つくろはせはべらむ。今日は言忌して、な泣いたまひそ」

とて、出でたまふけしき、ところせきを、人びと端に出でて見たてまつれば、姫君も立ち出でて見たてまつりたまひて、雛のなかの源氏の君つくろひ立てて、内に参らせなしたまふ。

「今年だにすこし大人びさせたまへ。十にあまりぬる人は、雛遊びは忌みはべるものを。かく御夫などまうけたてまつりたまひては、あるべかしうしめやかにてこそ、見えたてまつらせたまはめ。御髪参るほどをだに、もの憂くせさせたまふ」

など、少納言聞こゆ。御遊びにのみ心入れたまへれば、恥づかしと思はせたてまつらむとて言へば、心のうちに、「我は、さは、夫まうけてけり。この人びとの夫とてあるは、醜くこそあれ。我はかくをかしげに若き人をも持たりけるかな」と、今ぞ思ほし知りける。さはいへど、御年の数添ふしるしなめりかし。かく幼き御けはひの、ことに触れてしるければ、殿のうちの人びとも、あやしと思ひけれど、いとかう世づかぬ御添臥ならむとは思はざりけり。

内より大殿にまかでたまへれば、例のうるはしうよそほしき御さまにて、心うつくしき御けしきもなく、苦しければ、

「今年よりだに、すこし世づきて改めたまふ御心見えば、いかにうれしから

てまつりたまふにも、かたがたむつましくおぼえたまひて、こまやかに御物語など聞こえたまふ。宮も、この御さまの常よりことになつかしううちとけたまへるを、「いとめでたし」と見たてまつりたまひて、婿などには思し寄らで、「女にて見ばや」と、色めきたる御心には思ほす。

暮れぬれば、御簾の内に入りたまふを、うらやましく、昔は、主上の御もてなしに、いとけ近く、人づてならで、ものをも聞こえたまひしを、こよなう疎みたまへるも、つらうおぼゆるぞわりなきや。

「しばしばもさぶらふべけれど、事ぞとはべらぬほどは、おのづからおこたりはべるを、さるべきことなどは、仰せ言もはべらむこそ、うれしく」

など、すすくしうて出でたまひぬ。命婦も、たばかりきこえむかたなく、宮の御けしきも、ありしよりは、いとど憂きふしに思しおきて、心とけぬ御けしきも、恥づかしくいとほしければ、何のしるしもなくて、過ぎゆく。「はかなの契りや」と思し乱るること、かたみに尽きせず。

少納言は、「おぼえずをかしき世を見るかな。これも、故尼上の、この御ことを思して、御行ひにも祈りきこえたまひし仏の御しるしにや」とおぼゆ。「大殿、いとやむごとなくておはします。ここかしこあまたかかづらひたまふをぞ、まことに大人びたまはむほどは、むつかしきこともや」とおぼえける。されど、かくとりわきたまへる御おぼえのほどは、いと頼もしげなりかし。

御服、母方は三月こそはとて、晦日には脱がせてまつりたまふを、また親もなくて生ひ出でたまひしかば、まばゆき色にはあらで、紅、紫、山吹の地の限り織れる御小桂などを着たまへるさま、いみじう今めかしくをかしげなり。

男君は、朝拝に参りたまふとて、さしのぞきたまへり。

「今日よりは、大人しくなりたまへりや」

直されなむ」と、「おだしく軽々しからぬ御心のほども、おのづから」と、頼まるる方はことなりけり。

幼き人は、見ついたまふままに、いとよき心ぎま、容貌にて、何心もなくむつれまとはしきこえたまふ。「しばし、殿の内の人にも誰れと知らせじ」と思つて、なほ離れたる対に、御しつらひ二なくして、我も明け暮れ入りおはして、よろづの御ことどもを教へきこえたまひ、手本書きて習はせなどしつつ、ただほかなりける御むすめを迎へたまへらむやうにぞ思したる。

政所、家司などをはじめ、ことに分かちて、心もとなからず仕うまつらせたまふ。惟光よりほかの人は、おぼつかなくのみ思ひきこえたり。かの父宮も、え知りきこえたまはざりけり。

姫君は、なほ時々思ひ出できこえたまふ時、尼君を恋ひきこえたまふ折多かり。君のおはするほどは、紛らはしたまふを、夜などは、時々こそ泊まりたまへ、ここかしこの御いとまなくて、暮るれば出でたまふを、慕ひきこえたまふ折などあるを、いとらうたく思ひきこえたまへり。

二、三日内にさぶらひ、大殿にもおはする折は、いといたく屈しなごしたまへば、心苦しうて、母なき子持たらむ心地して、歩きも静心なくおぼえたまふ。僧都は、かくなむ、と聞きたまひて、あやしきものから、うれしとなむ思ほしける。かの御法事などしたまふにも、いかめしうとぶらひきこえたまへり。

藤壺のまかでたまへる三条の宮に、御ありさまもゆかしうて、参りたまへれば、命婦、中納言の君、中務などやうの人びと対面したり。「けぎやかにもてなしたまふかな」と、やすからず思へど、しづめて、大方の御物語聞こえたまふほどに、兵部卿宮参りたまへり。

この君おはすと聞きたまひて、対面したまへり。いとよしあるさまして、色めかしうなよびたまへるを、「女にて見むはをかしかりぬべく」、人知れず見た

葉のなかより、青海波のかかやき出でたるさま、いと恐ろしきまで見ゆ。かざしの紅葉いたう散り過ぎて、顔のほひにけおされたる心地すれば、御前なる菊を折りて、左大将さし替へたまふ。

日暮れかかるほどに、けしきばかりうちしぐれて、空のけしきさへ見知り顔なるに、さるいみじき姿に、菊の色々移ろひ、えならぬをかざして、今日はまたなき手を尽くしたる入綾のほど、そぞろ寒く、この世のこととおぼえず。もの見知るまじき下人などの、木のもと、岩隠れ、山の木の葉に埋もれたるさへ、すこしものの心知るは涙落としけり。

承香殿の御腹の四の御子、まだ童にて、秋風楽舞ひたまへるなむ、さしつぎの見物なりける。これらにおもしろさの尽きにければ、こと事に目も移らず、かへりてはことざましにやありけむ。

その夜、源氏中将、正三位したまふ。頭中将、正下の加階したまふ。上達部は、皆さるべき限りよろこびしたまふも、この君にひかれたまへるなれば、人の目もおどろかし、心をもよろこばせたまふ、昔の世ゆかしげなり。

宮は、そのころまかでたまひぬれば、例の、隙もやとうかがひありきたまふをことにて、大殿には騒がれたまふ。いとど、かの若草たづね取りたまひてしを、「二条院には人迎へたまふなり」と人の聞こえければ、いと心づきなしと思いたり。

「うちうちのありさまは知りたまはず、さも思さむはことわりなれど、心うつくしく、例の人のやうに怨みのたまはば、我もうらなくうち語りて、慰めきこえてむものを、思はずにのみとりないたまふ心づきなさに、さもあるまじきすさびごともし出で来るぞかし。人の御ありさまの、かたほに、そのことの飽かぬとおぼゆる疵もなし。人よりさきに見たてまつりそめてしかば、あはれにやむごとなく思ひきこゆる心をも、知りたまはぬほどこそあらめ、つひには思し

つとめて、中将君、

「いかに御覧じけむ。世に知らぬ乱り心地ながらこそ。

もの思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の

袖うち振りし心知りきや

あなかしこ」

とある御返り、目もあやなりし御さま、容貌に、見たまひ忍ばれずやありけむ、

「唐人の袖振ることは遠けれど

立ち居につけてあはれとは見き

大方には」

とあるを、限りなうめづらしう、「かやうの方さへ、たどたどしからず、ひとの朝廷まで思ほしやれる御后言葉の、かねても」と、ほほ笑まれて、持経のやうにひき広げて見るたまへり。

行幸には、親王たちなど、世に残る人なく仕うまつりたまへり。春宮もおはします。例の、楽の舟ども漕ぎめぐりて、唐土、高麗と、尽くしたる舞ども、種多かり。楽の声、鼓の音、世を響かす。

一日の源氏の御夕影、ゆゆしう思されて、御誦経など所々にせさせたまふを、聞く人もことわりとあはれがり聞こゆるに、春宮の女御は、あながちなりと、憎みきこえたまふ。

垣代など、殿上人、地下も、心殊なりと世人に思はれたる有職の限りとのへさせたまへり。宰相二人、左衛門督、右衛門督、左右の楽のこと行ふ。舞の師どもなど、世になべてならぬを取りつつ、おのおの籠りみてなむ習ひける。

木高き紅葉の蔭に、四十人の垣代、言ひ知らず吹き立てたる物の音どもにあひたる松風、まことの深山おろしと聞こえて吹きまよひ、色々に散り交ふ木の

朱雀院の行幸は、神無月の十日あまりなり。世の常ならず、おもしろかるべきたびのことなりければ、御方々、物見たまはぬことを口惜しがりたまふ。主上も、藤壺の見たまはざらむを、飽かず思さるれば、試楽を御前にて、せさせたまふ。

源氏中将は、青海波をぞ舞ひたまひける。片手には大殿の頭中将。容貌、用意、人にはことなるを、立ち並びては、なほ花のかたはらの深山木なり。

入り方の日かげ、さやかにさしたるに、楽の声まさり、もののおもしろきほどに、同じ舞の足踏み、おももち、世に見えぬさまなり。詠などしたまへるは、「これや、仏の御迦陵頻伽の声ならむ」と聞こゆ。おもしろくあはれなるに、帝、涙を拭ひたまひ、上達部、親王たちも、みな泣きたまひぬ。詠はてて、袖うちなほしたまへるに、待ちとりたる楽のにぎははしきに、顔の色あひまさりて、常よりも光ると見えたまふ。

春宮の女御、かくめでたきにつけても、ただならず思して、「神など、空にめでつべき容貌かな。うたてゆゆし」とのたまふを、若き女房などは、心憂しと耳とどめけり。藤壺は、「おほけなき心のなからましかば、ましてめでたく見えまし」と思すに、夢の心地なむしたまひける。

宮は、やがて御宿直なりけり。

「今日の試楽は、青海波に事みな尽きぬな。いかが見たまひつる」

と、聞こえたまへば、あいなう、御いらへ聞こえにくくて、

「殊にはべりつ」とばかり聞こえたまふ。

「片手もけしうはあらずこそ見えつれ。舞のさま、手づかひなむ、家の子は殊なる。この世に名を得たる舞の男どもも、げにいとかしこけれど、ここしうなまめいたる筋を、えなむ見せぬ。試みの日、かく尽くしつれば、紅葉の蔭やさうざうしくと思へど、見せたてまつらむの心にて、用意せさせつる」など聞こえたまふ。

紅葉賀

紅
葉
賀

と、いとまめやかにのたまふを、いといとほしと思して、寄りて、拭ごひた
まへば、

「平中がやうに色どり添へたまふな。赤からむはあへなむ」
と、戯れたまふさま、いとをかしき妹背と見えたまへり。

日のいとうらかなるに、いつしかと霞みわたれる梢どもの、心もとなきな
かにも、梅はけしきばみ、ほほ笑みわたれる、とりわきて見ゆ。階隠のもとの
紅梅、いととく咲く花にて、色づきにけり。

「紅の花ぞあやなくうとまるる

梅の立ち枝はなつかしけれど

いでや」

と、あいなくうちうめかれたまふ。

かかる人びとの末々、いかなりけむ。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

「さへづる春は」

と、からうしてわななかし出でたり。

「さりや。年経ぬるしるしよ」と、うち笑ひたまひて、「夢かとぞ見る」

と、うち誦じて出でたまふを、見送りて添ひ臥したまへり。口おほひの側目より、なほ、かの末摘花、いとにほひやかにさし出でたり。見苦しのわざやと思さる。

二条院におはしたれば、紫の君、いともうつくしき片生ひにて、「紅はかうなつかしきもありけり」と見ゆるに、無紋の桜の細長、なよらかに着なして、何心もなくものしたまふさま、いみじうらうたし。古代の祖母君の御なごりにて、齒黒めもまだしかりけるを、ひきつくろはせたまへれば、眉のけぎやかになりたるも、うつくしうきよらなり。「心から、などか、かう憂き世を見あつかふらむ。かく心苦しきものも見てゐたらで」と、思しつつ、例の、もろともに雛遊びしたまふ。

絵など描きて、色どりたまふ。よろづにをかしうすさび散らしたまひけり。我も描き添へたまふ。髪いと長き女を描きたまひて、鼻に紅をつけて見たまふに、画に描きても見ま憂きさましたり。わが御影の鏡台にうつれるが、いときよらなるを見たまひて、手づからこの赤鼻を描きつけ、にほはして見たまふに、かくよき顔だに、さてまじれらむは見苦しかるべかりけり。姫君、見て、いみじく笑ひたまふ。

「まろが、かくかたはになりなむ時、いかならむ」とのたまへば、

「うたてこそあらめ」

とて、さもや染みつかむと、あやふく思ひたまへり。そら拭ごひをして、

「さらにこそ、白まね。用なきすさびわざなりや。内にいかにのたまはむとすらむ」

など、口々に言ふ。姫君も、おぼろけならでし出でたまひつるわざなれば、ものに書きつけて置きたまへりけり。

朔日のほど過ぎて、今年、男踏歌あるべければ、例の、所々遊びののしりたまふに、もの騒がしけれど、寂しき所のあはれに思しやらるれば、七日の日の節会果てて、夜に入りて、御前よりまかだたまひけるを、御宿直所にやがてとまりたまひぬるやうにて、夜更かしておはしたり。

例のありさまよりは、けはひうちそよめき、世づいたり。君も、すこしたをやぎたまへるけしきもてつけたまへり。「いかにぞ、改めてひき変へたらむ時」とぞ、思しつづけらるる。

日さし出づるほどに、やすらひなして、出でたまふ。東の妻戸、おし開けたれば、向ひたる廊の、上もなくあばれたれば、日の脚、ほどなくさし入りて、雪すこし降りたる光に、いとけぎやかに見入れらる。

御直衣などたてまつるを見出だして、すこしさし出でて、かたはら臥したまへる頭つき、こぼれ出でたるほど、いとめでたし。「生ひなほりを見出でたらむ時」と思されて、格子引き上げたまへり。

いとほしかりしもの懲りに、上げも果てたまはで、脇息をおし寄せて、うちかけて、御鬢ぐきのしどけなきをつくろひたまふ。わりなう古めきたる鏡台の、唐櫛笥、搔上の篋など、取り出でたり。さすがに、男の御具さへほのぼのあるを、されてをかしと見たまふ。

女の御装束、「今日は世づきたり」と見ゆるは、ありし篋の心葉を、さながらなりけり。さも思しよらず、興ある紋つきてしるき表着ばかりぞ、あやしと思しける。

「今年だに、声すこし聞かせたまへかし。侍たるものはさし置かれて、御けしきの改まらむなむゆかしき」とのたまへば、

「取り隠さむや。かかるわざは人のするものにやあらむ」

と、うちうめきたまふ。「何に御覽せさせつらむ。我さへ心なきやうに」と、いと恥づかしくて、やをら下りぬ。

またの日、上にさぶらへば、台盤所にさしのぞきたまひて、

「くはや。昨日の返り事。あやしく心ばみ過ぐさるる」

とて、投げたまへり。女房たち、何ごとならむと、ゆかしがる。

「ただ梅の花の色のごと、三笠の山のをとめをば捨てて」

と、歌ひすさびて出でたまひぬるを、命婦は「いとをかし」と思ふ。心知らぬ人びとは、

「なぞ、御ひとりゑみは」と、とがめあへり。

「あらず。寒き霜朝に、搔練好める花の色あひや見えつらむ。御つづしり歌のいとほしき」と言へば、

「あながちなる御ことかな。このなかには、にほへる鼻もなかめり」

「左近の命婦、肥後の采女や混じらひつらむ」

など、心も得ず言ひしろふ。

御返りたてまつりたれば、宮には、女房つどひて、見めでけり。

「逢はぬ夜をへだつるなかの衣手に

重ねていとど見もし見よとや」

白き紙に、捨て書いたまへるしもぞ、なかなかをかしげなる。

晦日の日、夕つ方、かの御衣篋に、「御料」とて、人のたてまつれる御衣一領、葡萄染の織物の御衣、また山吹か何ぞ、いろいろ見えて、命婦ぞたてまつりたる。「ありし色あひを悪ろしとや見たまひけむ」と思ひ知らるれど、「かれはた、紅の重々しかりしをや。さりとも消えじ」と、ねび人どもは定むる。

「御歌も、これよりのは、道理聞こえて、したたかにこそあれ」

「御返りは、ただをかしき方にこそ」

御よそひとて、わざとはべるめるを、はしたなうはえ返しはべらず。ひとり引き籠めはべらむも、人の御心違ひはべるべければ、御覽ぜさせてこそは」と聞こゆれば、

「引き籠められなむは、からかりなまし。袖まきほさむ人もなき身にいとうれしき心ざしにこそは」

とのたまひて、ことにもの言はれたまはず。「さても、あさましの口つきや。これこそは手づからの御ことの限りなめれ。侍従こそとり直すべかめれ。また、筆のしりとる博士ぞなかべき」と、言ふかひなく思す。心を尽くして詠み出でたまひつらむほどを思すに、

「いともかしこき方とは、これをも言ふべかりけり」

と、ほほ笑みて見たまふを、命婦、面赤みて見たてまつる。

今様色の、えゆるすまじく艶なう古めきたる直衣の、裏表ひとしうこまやかなる、いとなほなほしう、つまづまぞ見えたる。「あさまし」と思すに、この文をひろげながら、端に手習ひすさびたまふを、側目に見れば、

「なつかしき色ともなしに何にこの

すゑつむ花を袖に触れけむ

色濃き花と見しかども」

など、書きけがしたまふ。花のとがめを、なほあるやうあらむと、思ひ合はする折々の、月影などを、いとほしきものから、をかしう思ひなりぬ。

「紅のひと花衣うすくとも

ひたすら朽す名をし立てずは

心苦しの世や」

と、いといたう馴れてひとりごつを、よきにはあらねど、「かうやうのかいなでにだにあらましかば」と、返す返す口惜し。人のほどの心苦しきに、名の朽ちなむはさすがなり。人びと参れば、

ど、もてなしに隠されて、口惜しうはあらざりきかし。劣るべきほどの人なりや。げに品にもよらぬわざなりけり。心ばせのなだらかに、ねたげなりしを、負けて止みにしかな」と、ものの折ごとには思し出づ。

年も暮れぬ。内の宿直所におはしますに、大輔の命婦参れり。御梳櫛などには、懸想だつ筋なく、心やすきものの、さすがにのたまひたはぶれなどして、使ひならしたまへれば、召しなき時も、聞こゆべき事ある折は、参う上りけり。

「あやしきことのはべるを、聞こえさせざらむもひがひがしう、思ひたまへわづらひて」

と、ほほ笑みて聞こえやらぬを、

「何さまのことぞ。我にはつつむことあらじと、なむ思ふ」とのたまへば、

「いかがは。みづからの愁へは、かしこくとも、まづこそは。これは、いと聞こえさせにくくなむ」

と、いたう言籠めたれば、

「例の、艶なる」と憎みたまふ。

「かの宮よりはべる御文」とて、取り出でたり。

「まして、これは取り隠すべきことかは」

とて、取りたまふも、胸つぶる。

陸奥紙の厚肥えたるに、匂ひばかりは深うしめたまへり。いとよう書きおほせたり。歌も、

「唐衣君が心のつらければ

袂はかくぞそぼちつつのみ」

心得ずうちかたぶきたまへるに、包みに、衣篋の重りかに古代なるうち置きで、おし出でたり。

「これを、いかでかは、かたはらいたく思ひたまへざらむ。されど、朔日の

わがかうて見馴れけるは、故親王のうしろめたしとたぐへ置きたまひけむ魂のしるべなめり」とぞ思さるる。

橘の木の埋もれたる、御隨身召して払はせたまふ。うらやみ顔に、松の木のおのれ起きかへりて、さとこぼるる雪も、「名に立つ末の」と見ゆるなどを、「いと深からずとも、なだらかなるほどにあひしらはむ人もがな」と見たまふ。

御車出づべき門は、まだ開けざりければ、鍵の預かり尋ね出でたれば、翁のいといみじきぞ出で来たる。娘にや、孫にや、はしたなる大ききの女の、衣は雪にあひて煤けまどひ、寒しと思へるけしき、深うて、あやしきものに火をただほのかに入れて袖ぐくみに持たり。翁、門をえ開けやらねば、寄りてひき助くる、いとかたくななり。御供の人、寄りてぞ開けつる。

「降りにける頭の雪を見る人も
劣らず濡らす朝の袖かな

『幼き者は形蔽れず』

とうち誦じたまひても、鼻の色に出でて、いと寒しと見えつる御面影、ふと思ひ出でられて、ほほ笑まれたまふ。「頭中将に、これを見せたらむ時、いかなることをよそへ言はむ、常にうかがひ来れば、今見つけられなむ」と、術なう思す。

世の常なるほどの、異なることなきならば、思ひ捨てても止みぬべきを、さだかに見たまひて後は、なかなかあはれにいみじくて、まめやかなるさまに、常に訪れたまふ。

黒貂の皮ならぬ、絹、綾、綿など、若い人どもの着るべきものたぐひ、かの翁のためまで、上下思しやりてたてまつりたまふ。かやうのまめやかごとも恥づかしげならぬを、心やすく、「さる方の後見にて育まむ」と思ほしとりて、さまことに、さならぬうちとけわざもしたまひけり。

「かの空蟬の、うちとけたりし宵の側目には、いと悪ろかりし容貌ざまなれ

やうなれど、昔物語にも、人の御装束をこそまづ言ひためれ。

聴し色のわりなう上白みたる一襲、なごりなう黒き桂重ねて、表着には黒貂の皮衣、いときよらに香ばしきを着たまへり。古代のゆゑづきたる御装束なれど、なほ若やかなる女の御よそひには、似げなうおどろおどろしきこと、いともてはやされたり。されど、げに、この皮なうて、はた、寒からましと見ゆる御顔ざまなるを、心苦しと見たまふ。

何ごとも言はれたまはず、我さへ口閉ぢたる心地したまへど、例のしじまも心みむと、とかう聞こえたまふに、いたう恥ぢらひて、口おほひしたまへるさへ、ひなび古めかしう、ことごとしく、儀式官の練り出でたる臂もちおぼえて、さすがにうち笑みたまへるけしき、はしたなうすすろびたり。いとほしくあはれにて、いとど急ぎ出でたまふ。

「頼もしき人なき御ありさまを、見そめたる人には、疎からず思ひむつびたまはむこそ、本意ある心地すべけれ。ゆるしなき御けしきなれば、つらう」など、ことつけて、

「朝日さす軒の垂氷は解けながら

などかつららの結ばほるらむ」

とのたまへど、ただ「むむ」とうち笑ひて、いと口重げなるもいとほしければ、出でたまひぬ。

御車寄せたる中門の、いといたうゆがみよろぼひて、夜目にこそ、しるきながらもよろづ隠ろへたること多かりけれ、いとあはれにさびしく荒れまどへるに、松の雪のみ暖かげに降り積める、山里の心地して、ものあはれなるを、「かの人びとの言ひし葎の門は、かうやうなる所なりけむかし。げに、心苦しうたげならむ人をここに据ゑて、うしろめたう恋しと思はばや。あるまじきもの思ひは、それに紛れなむかし」と、「思ふやうなる住みかに合はぬ御ありさまは、取るべきかたなし」と思ひながら、「我ならぬ人は、まして見忍びてむや。

すくよかにて、何の栄えなきをぞ、口惜しう思す。

からうして明けぬるけしきなれば、格子手づから上げたまひて、前の前裁の雪を見たまふ。踏みあげたる跡もなく、はるばると荒れわたりて、いみじう寂しげなるに、ふり出でて行かむこともあはれにて、

「をかしきほどの空も見たまへ。尽きせぬ御心の隔てこそ、わりなけれ」

と、恨みきこえたまふ。まだほの暗けれど、雪の光にいとどきよらに若う見えたまふを、若い人ども笑みさかえて見たてまつる。

「はや出でさせたまへ。あぢきなし。心うつくしきこそ」

など教へきこゆれば、さすがに、人の聞こゆることをえいなびたまはぬ御心にて、とかう引きつくろひて、ゐざり出でたまへり。

見ぬやうにて、外の方を眺めたまへれど、後目はただならず。「いかにぞ、うちとけまさりの、いささかもあらばうれしからむ」と思すも、あながちなる御心なりや。

まづ、居丈の高く、を背長に見えたまふに、「さればよ」と、胸つぶれぬ。うちつぎて、あなかたはと見ゆるものは、鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物とおぼゆ。あさましう高うのびらかに、先の方すこし垂りて色づきたること、ことのほかにうたてあり。色は雪恥づかしく白うて真青に、額つきこよなうはれたるに、なほ下がちなる面やうは、おほかたおどろおどろしう長きなるべし。瘦せたまへること、いとほしげにさらぼひて、肩のほどなどは、いたげなるまで衣の上まで見ゆ。「何に残りなう見あらはしつらむ」と思ふものから、めづらしきさまのしたれば、さすがに、うち見やられたまふ。

頭つき、髪のかかりはしも、うつくしげにめでたしと思ひきこゆる人びとも、をさをさ劣るまじう、桂の裾にたまりて引かれたるほど、一尺ばかりあまりたらむと見ゆ。着たまへるものどもをさへ言ひたつるも、もの言ひさがなき

あるにや。見てしがな」と思ほせど、けぎやかにとりなさむもまばゆし。うちとけたる宵居のほど、やをら入りたまひて、格子のはさまより見たまひけり。されど、みづからは見えたまふべくもあらず。几帳など、いたく損なはれたるものから、年経にける立ちど変はらず、おしやりなど乱れねば、心もとなく、御達四、五人ゐたり。御台、秘色やうの唐土のものなれど、人悪ろきに、何のくさはひもなくあはれげなる、まかでて人びと食ふ。

隅の間ばかりにぞ、いと寒げなる女ばら、白き衣のいひしらず煤けたるに、きたなげなる褶引き結ひつけたる腰つき、かたくなしげなり。さすがに櫛おし垂れて挿したる額つき、内教坊、内侍所のほどに、かかる者どもあるはやと、をかし。かけても、人のあたりに近うふるまふ者とも知りたまはざりけり。

「あはれ、さも寒き年かな。命長ければ、かかる世にもあふものなりけり」とて、うち泣くもあり。

「故宮おはしましし世を、などてからしと思ひけむ。かく頼みなくても過ぐるものなりけり」

とて、飛び立ちぬべくふるふもあり。

さまざまに人悪ろきことどもを、愁へあへるを聞きたまふも、かたはらいたければ、たちのきて、ただ今おはするやうにて、うちたたきたまふ。

「そそや」など言ひて、火とり直し、格子放ちて入れたてまつる。

侍従は、齋院に参り通ふ若人にて、この頃はなかりけり。いよいよあやしうひなびたる限りにて、見ならはぬ心地ぞする。

いとど、愁ふなりつる雪、かきたれいみじう降りけり。空の気色はげしう、風吹き荒れて、大殿油消えにけるを、ともしつくる人もなし。かの、ものに襲はれし折思し出でられて、荒れたるさまは劣らざめるを、ほどの狭う、人氣のすこしあるなどに慰めたれど、すごう、うたていざとき心地する夜のさまなり。

をかしうもあはれにも、やうかへて、心とまりぬべきありさまを、いと埋れ

ものの音ども、常よりも耳かしかましくて、かたがたいどみつ、例の御遊びならず、大箏、尺八の笛などの大声を吹き上げつつ、太鼓をさへ高欄のもとにまろばし寄せて、手づからうち鳴らし、遊びおはさうず。御いとまなきやうにて、せちに思す所ばかりにこそ、盗まはれたまへれ、かのわたりには、いとおぼつかなくて、秋暮れ果てぬ。なほ頼み来しかひなくて過ぎゆく。

行幸近くなりて、試楽などののしるころぞ、命婦は参れる。

「いかにぞ」など、問ひたまひて、いとほしとは思したり。ありさま聞こえて、

「いとかう、もて離れたる御心ばへは、見たまふる人さへ、心苦しく」など、泣きぬばかり思へり。「心にくくもてなして止みなむと思へりしことを、くたいてける、心もなくこの人の思ふらむ」をさへ思す。正身の、ものは言はで、思しうづもれたまふらむさま、思ひやりたまふも、いとほしければ、

「いとまなきほどぞや。わりなし」と、うち嘆いたまひて、「もの思ひ知らぬやうなる心ぎまを、懲らさむと思ふぞかし」

と、ほほ笑みたまへる、若ううつくしげなれば、我もうち笑まるる心地して、「わりなの、人に恨みられたまふ御齡や。思ひやり少なう、御心のままならむも、ことわり」と思ふ。

この御いそぎのほど過ぐしてぞ、時々おはしける。

かの紫のゆかり、尋ねとりたまひて、そのうつくしみに心入りたまひて、六条わたりにだに、離れまさりたまふめれば、まして荒れたる宿は、あはれに思しおこたらずながら、もの憂きぞ、わりなかりけると、ところせき御もの恥ぢを見あらはさむの御心も、ことになうて過ぎゆくを、またうちかへし、「見まさりするやうもありかし。手さぐりのたどどしきに、あやしう、心得ぬことも

事ども多く定めらるる日にて、内にさぶらひ暮らしたまひつ。

かしこには、文をだにと、いとほしく思し出でて、夕つ方ぞありける。雨降り出でて、ところせくもあるに、笠宿りせむと、はた、思されずやありけむ。かしこには、待つほど過ぎて、命婦も、「いといとほしき御さまかな」と、心憂く思ひけり。正身は、御心のうちに恥づかしう思ひたまひて、今朝の御文の暮れぬれど、なかなか、咎とも思ひわきたまはざりけり。

「夕霧の晴るるけしきもまだ見ぬに

いぶせさそふる宵の雨かな

雲間待ち出でむほど、いかに心もとなう」

とあり。おはしますまじき御けしきを、人びと胸つぶれて思へど、

「なほ、聞こえさせたまへ」

と、そのかしあへれど、いとど思ひ乱れたまへるほどにて、え型のやうにも続けたまはねば、「夜更けぬ」とて、侍従ぞ、例の教へきこゆる。

「晴れぬ夜の月待つ里を思ひやれ

同じ心に眺めせずとも」

口々に責められて、紫の紙の、年経にければ灰おくれ古めいたるに、手はさすがに文字強う、中さだの筋にて、上下等しく書いたまへり。見るかひなううち置きたまふ。

いかに思ふらむと思ひやるも、安からず。

「かかることを、悔しなどは言ふにやあらむ。さりとていかがはせむ。我は、さりとも、心長く見果ててむ」と、思しなす御心を知らねば、かしこにはいみじうぞ嘆いたまひける。

大臣、夜に入りてまかだたまふに、引かれたてまつりて、大殿におはしましぬ。行幸のことを興ありと思ほして、君たち集りて、のたまひ、おのおの舞ども習ひたまふを、そのころのことにて過ぎゆく。

正身は、ただ我にもあらず、恥づかしくつつましきよりほかのことまたなければ、「今はかかるぞあはれなるかし、まだ世馴れぬ人、うちかしづかれたる」と、見ゆるしたまふものから、心得ず、なまいとほしとおぼゆる御さまなり。何ごとにつけてかは御心のとまらむ、うちうめかれて、夜深う出でたまひぬ。命婦は、「いかならむ」と、目覚めて、聞き臥せりけれど、「知り顔ならじ」とて、「御送りに」とも、声づくらず。君も、やをら忍びて出でたまひにけり。

二条院におはして、うち臥したまひても、「なほ思ふにかなひがたき世にこそ」と、思しつづけて、軽らかならぬ人の御ほどを、心苦しとぞ思しける。思ひ乱れておはするに、頭中将おはして、

「こよなき御朝寝かな。ゆるあらむかしとこそ、思ひたまへらるれ」と言へば、起き上がりたまひて、

「心やすき独り寝の床にて、ゆるびにけりや。内よりか」とのたまへば、

「しか。まかではべるままなり。朱雀院の行幸、今日なむ、楽人、舞人定めらるべきよし、昨夜うけたまはりしを、大臣にも伝へ申さむとてなむ、まかではべる。やがて帰り参りぬべうはべり」

と、いそがしげなれば、

「さらば、もろともに」

とて、御粥、強飯召して、客人にも参りたまひて、引き続きたれど、一つにたてまつりて、

「なほ、いとねぶたげなり」

と、とがめ出でつつ、

「隠いたまふこと多かり」

とぞ、恨みきこえたまふ。

君は、人の御ほどを思せば、「されくつがへる今様のよしばみよりは、こよなう奥ゆかしう」と思さるるに、いたうそそのかされて、みぎり寄りたまへるけはひ、忍びやかに、衣被の香いとなつかしう薫り出でて、おほどかなるを、「さればよ」と思す。年ごろ思ひわたるさまなど、いとよくのたまひつづくれど、まして近き御答へは絶えてなし。「わりなのわざや」と、うち嘆きたまふ。

「いくそたび君がしじまにまけぬらむ

ものな言ひそと言はぬ頼みに

のたまひも捨ててよかし。玉だすき苦し」

とのたまふ。女君の御乳母子、侍従とて、はやりかなる若人、「いと心もとなう、かたはらいたし」と思ひて、さし寄りて、聞こゆ。

「鐘つきてとぢめむことはさすがにて

答へまうきぞかつはあやなき」

いと若びたる声の、ことに重りかならぬを、人伝てにはあらぬやうに聞こえなせば、「ほどよりはあまえて」と聞きたまへど、

「めづらしきが、なかなか口ふたがるわざかな

言はぬをも言ふにまさると知りながら

おしこめたるは苦しかりけり」

何やかやと、はかなきことなれど、をかしきさまにも、まめやかにものたまへど、何のかひなし。

「いとかかるも、さまかはり、思ふ方ことにものしたまふ人にや」と、ねたくて、やをら押し開けて入りたまひにけり。

命婦、「あな、うたて。たゆめたまへる」と、いとほしければ、知らず顔にて、わが方へ往にけり。この若人ども、はた、世にたぐひなき御ありさまの音聞きに、罪ゆるしきこえて、おどろおどろしうも嘆かれず、ただ、思ひもよらずにはかにて、さる御心もなきをぞ、思ひける。

「人にも聞こえむやうも知らぬを」

とて、奥ぎまへみざり入りたまふさま、いとうひうひしげなり。うち笑ひて、
「いと若々しうおはしますこそ、心苦しけれ。限りなき人も、親などおはしてあつかひ後見きこえたまふほどこそ、若びたまふもことわりなれ、かばかり心細き御ありさまに、なほ世を尽きせず思し憚るは、つきなうこそ」と教へきこゆ。

さすがに、人の言ふことは強うもいなびぬ御心にて、

「答へきこえて、ただ聞け、とあらば。格子など鎖してはありなむ」とのたまふ。

「簀子などは便なうはべりなむ。おしたちて、あはあはしき御心などは、よも」

など、いとよく言ひなして、二間の際なる障子、手づからいと強く鎖して、御茵うち置きひきつくろふ。

いとつつましげに思したれど、かやうの人にも言ふらむ心ばへなども、夢に知りたまはざりければ、命婦のかう言ふを、あるやうこそはと思ひてものしたまふ。乳母だつ老い人などは、曹司に入り臥して、夕までひしたるほどなり。若き人、二、三人あるは、世にめでられたまふ御ありさまを、ゆかしきものと思ひきこえて、心げさうしあへり。よろしき御衣たてまつり変へ、つくろひきこゆれば、正身は、何の心げさうもなくておはす。

男は、いと尽きせぬ御さまを、うち忍び用意したまへる御けはひ、いみじうなまめきて、「見知らむ人にこそ見せめ、栄えあるまじきわたりを、あな、いとほし」と、命婦は思へど、ただおほどかにもものしたまふをぞ、「うしろやすう、さし過ぎたることは見えたてまつりたまはじ」と思ひける。「わが常に責められたてまつる罪さりごとに、心苦しき人の御もの思ひや出でこむ」など、やすからず思ひゐたり。

うまめやかにのたまふに、「聞き入れざらむも、ひがひがしかるべし。父親王おはしける折にだに、旧りにたるあたりとて、おとなひきこゆる人もなかりけるを、まして、今は浅茅分くる人も跡絶えたるに」。

かく世にめづらしき御けはひの、漏りにほひくるをば、なま女ばらなども笑み曲げて、「なほ聞こえたまへ」と、そそのかしたてまつれど、あさましうものづつみしたまふ心にて、ひたぶるに見も入れたまはぬなりけり。

命婦は、「さらば、さりぬべからむ折に、物越しに聞こえたまはむほど、御心につかずは、さても止みねかし。また、さるべきにて、仮にもおはし通はむを、とがめたまふべき人なし」など、あだめきたるはやり心はうち思ひて、父君にも、かかる事なども言はざりけり。

八月二十余日、宵過ぐるまで待たるる月の心もとなきに、星の光ばかりさやけく、松の梢吹く風の音心細くて、いにしへの事語り出でて、うち泣きなどしたまふ。「いとよき折かな」と思ひて、御消息や聞こえつらむ、例のいと忍びておはしたり。

月やうやう出でて、荒れたる籬のほどとましくうち眺めたまふに、琴そそのかさされて、ほのかにかき鳴らしたまふほど、けしうはあらず。「すこし、けしう今めきたる気をつけばや」とぞ、乱れたる心には、心もとなく思ひるたる。人目しなき所なれば、心やすく入りたまふ。命婦を呼ばせたまふ。今しもおどろき顔に、

「いとかたはらいたきわぎかな。しかしかこそ、おはしましたなれ。常に、かう恨みきこえたまふを、心になはぬ由をのみ、いなびきこえはべれば、『みづからことわりも聞こえ知らせむ』と、のたまひわたるなり。いかが聞こえ返さむ。なみなみのたはやすき御ふるまひならねば、心苦しきを。物越しにて、聞こえたまはむこと、聞こしめせ」

と言へば、いと恥づかしと思ひて、

のたまふ。

瘡病みにわづらひたまひ、人知れぬもの思ひの紛れも、御心のいとまなきやうにて、春夏過ぎぬ。

秋のころほひ、静かに思いつづけて、かの砧の音も耳につきて聞きにくかりしさへ、恋しう思し出でらるるままに、常陸宮にはしばしば聞こえたまへど、なほおぼつかなうのみあれば、世づかず、心やましよう、負けては止まじの御心さへ添ひて、命婦を責めたまふ。

「いかなるやうぞ。いとかかる事こそ、まだ知らね」

と、いともものしと思ひてのたまへば、いとほしと思ひて、

「もて離れて、似げなき御事とも、おもむけはべらず。ただ、おほかたの御ものづつみのわりなきに、手をえさし出でたまはぬとなむ見たまふる」と聞こゆれば、

「それこそは世づかぬ事なれ。物思ひ知るまじきほど、独り身をえ心にまかせぬほどこそ、ことわりなれ、何事も思ひしづまりたまへらむ、と思ふこそ。そこはかとなく、つれづれに心細うのみおぼゆるを、同じ心に答へたまはむは、願ひかなふ心地なむすべき。何やかやと、世づける筋ならで、その荒れたる簀子にたたずまほしきなり。いとうたて心得ぬ心地するを、かの御許しなくとも、たばかれかし。心苛られし、うたてあるもてなしには、よもあらじ」

など、語らひたまふ。

なほ世にある人のありさまを、おほかたなるやうにて聞き集め、耳とどめたまふ癖のつきたまへるを、さうさうしき宵居など、はかなきついでに、さる人こそとばかり聞こえ出でたりしに、かくわざとがましようのたまひわたれば、「なまわづらはしく、女君の御ありさまも、世づかはしく、よしめきなどもあらぬを、なかなかなる導きに、いとほしき事や見えむなむ」と思ひけれど、君のか

その後、こなたかなたより、文などやりたまふべし。いづれも返り事見え、おぼつかなく心やましきに、「あまりうたてもあるかな。さやうなる住まひする人は、もの思ひ知りたるけしき、はかなき本草、空のけしきにつけても、とりなしなどして、心ばせ推し測らるる折々あらむこそあはれなるべけれ、重しとても、いとかうあまり埋もれたらむは、心づきなく、悪びたり」と、中將は、まいて心焦られしけり。例の、隔てきこえたまはぬ心にて、

「しかしかの返り事は見たまふや。試みにかすめたりしこそ、はしたなくて止みにしか」

と、憂ふれば、「さればよ、言ひ寄りにけるをや」と、ほほ笑まれて、

「いさ、見むとしも思はねばにや、見るとしもなし」

と、答へたまふを、「人わきしける」と思ふに、いとねたし。

君は、深うしも思はぬことの、かう情けなきを、すさまじく思ひなりたまひにしかど、かうこの中將の言ひありきけるを、「言多く言ひなれたらむ方にぞ靡かむかし。したり顔にて、もとのことを思ひ放ちたらむけしきこそ、憂はしかるべけれ」と思ひて、命婦をまめやかに語らひたまふ。

「おぼつかなく、もて離れたる御けしきなむ、いと心憂き。好き好きしき方に疑ひ寄せたまふにこそあらめ。さりとも、短き心ばへつかはぬものを。人の心のどやかなることなくて、思はずにのみあるになむ、おのづからわがあやまちにもなりぬべき。心のどかにて、親はらからのもてあつかひ恨むるもなう、心やすからむ人は、なかなかむらうたかるべきを」とのたまへば、

「いでや、さやうにをかしき方の御笠宿りには、えしもやと、つきなげにこそ見えはべれ。ひとへにもものづつみし、ひき入りたる方はしも、ありがたうものしたまふ人になむ」

と、見るありさま語りきこゆ。「らうらうじう、かどめきたる心はなきなめり。いと子めかしうおほどかならむこそ、らうたくはあるべけれ」と思し忘れず、

「かう慕ひありかば、いかにせさせたまはむ」と聞こえたまふ。

「まことは、かやうの御歩きには、隨身からこそはかばかしきこともあるべけれ。後らさせたまはでこそあらめ。やつれたる御歩きは、軽々しき事も出で来なむ」

と、おし返しいさめたてまつる。かうのみ見つけらるるを、ねたしと思せど、かの撫子はえ尋ね知らぬを、重き功に、御心のうちに思し出づ。

おのおの契れる方にも、あまえて、え行き別れたまはず、一つ車に乗りて、月のをかしきほどに雲隠れたる道のほど、笛吹き合せて大殿におはしぬ。

前駆なども追はせたまはず、忍び入りて、人見ぬ廊に御直衣ども召して、着替へたまふ。つれなう、今来るやうにて、御笛ども吹きすさびておはすれば、大臣、例の聞き過ぐしたまはで、高麗笛取り出でたまへり。いと上手におはすれば、いとおもしろう吹きたまふ。御琴召して、内にも、この方に心得たる人びとに弾かせたまふ。

中務の君、わざと琵琶は弾けど、頭の君心かけたるをもて離れて、ただこのたまさかなる御けしきのなつかしきをば、え背ききこえぬに、おのづから隠れなくて、大宮などもよろしからず思しなりたれば、もの思はしく、はしたなき心地して、すさまじげに寄り臥したり。絶えて見たてまつらぬ所に、かけ離れなむも、さすがに心細く思ひ乱れたり。

君たちは、ありつる琴の音を思し出でて、あはれげなりつる住まひのさまなども、やう変へてをかしう思ひつづけ、「あらましがごとくに、いとをかしうらうたき人の、さて年月を重ねるたらむ時、見そめて、いみじう心苦しうは、人にももて騒がるばかりや、わが心もさま悪しからむ」などさへ、中将は思ひけり。この君のかう気色ばみありきたまふを、「まさに、さては、過ぐしたまひてむや」と、なまねたう危ふがりけり。

けむ」

と聞こゆれば、たち返り、うち笑ひて、

「異人の言はむやうに、咎なあらはされそ。これをあだあだしきふるまひと
言はば、女のありさま苦しからむ」

とのたまへば、「あまり色めいたりと思して、折々かうのたまふを、恥づかし」
と思ひて、ものも言はず。

寢殿の方に、人のけはひ聞くやうもやと思して、やをら立ち退きたまふ。透
垣のただすこし折れ残りたる隠れの方に、立ち寄りたまふに、もとより立てる
男ありけり。「誰れならむ。心かけたる好き者ありけり」と思して、蔭につきて
立ち隠れたまへば、頭中将なりけり。

この夕つ方、内よりもろともにまかでたまひける、やがて大殿にも寄らず、
二条院にもあらで、引き別れたまひけるを、いづちならむと、ただならで、我
も行く方あれど、後につきてうかがひけり。あやしき馬に、狩衣姿のないがし
ろにて来ければ、え知りたまはぬに、さすがに、かう異方に入りたまひぬれば、
心も得ず思ひけるほどに、ものの音に聞きついて立てるに、帰りや出でたまふ
と、下待つなりけり。

君は、誰ともえ見分きたまはで、我と知られじと、抜き足に歩みたまふに、
ふと寄りて、

「ふり捨てさせたまへるつらさに、御送り仕うまつりつるは。

もろともに大内山は出でつれど

入る方見せぬいさよひの月」

と恨むるもねたけれど、この君と見たまふ、すこしをかしうなりぬ。

「人の思ひよらぬことよ」と憎む憎む、

「里わかぬかげをば見れどゆく月の

いるさの山を誰れか尋ぬる」

とて、召し寄するも、あいなう、いかが聞きたまはむと、胸つぶる。

ほのかに掻き鳴らしたまふ、をかしう聞こゆ。何ばかり深き手ならねど、ものの音がらの筋ことなるものなれば、聞きにくくも思されず。

「いといたう荒れわたりて寂しき所に、さばかりの人の、古めかしう、ところせく、かしづき据ゑたりけむ名残なく、いかに思ほし残すことなからむ。かやうの所にこそは、昔物語にもあはれなることどもありけれ」など思ひ続けても、ものや言ひ寄らまし、と思せど、うちつけにや思さむと、心恥づかしくて、やすらひたまふ。

命婦、かどある者にて、いたう耳ならささせたてまつらじ、と思ひければ、

「曇りがちにはべるめり。客人の来むとはべりつる、いとひ顔にもこそ。いま心のどかにを。御格子参りなむ」

とて、いたうもそそのかきで帰りたれば、

「なかなかなるほどにても止みぬるかな。もの聞き分くほどにもあらで、ねたう」

とのたまふけしき、をかしと思したり。

「同じくは、け近きほどの立ち聞きせさせよ」

とのたまへど、「心にくくて」と思へば、

「いでや、いとかすかなるありさまに思ひ消えて、心苦しげにものしたまふめるを、うしろめたきさまにや」

と言へば、「げに、さもあること。にはかに我も人もうちとけて語らふべき人の際は、際とこそあれ」など、あはれに思さるる人の御ほどなれば、

「なほ、さやうのけしきをほのめかせ」と、語らひたまふ。

また契りたまへる方やあらむ、いと忍びて帰りたまふ。

「主上の、まめにおはしますと、もてなやみきこえさせたまふこそ、をかしう思うたまへらるる折々はべれ。かやうの御やつれ姿を、いかでかは御覧じつ

らひ人と思へる」と聞こゆれば、

「三つの友にて、今一種やうたてあらむ」とて、「我に聞かせよ。父親王の、さやうの方にいとよしづきてもものしたまうければ、おしなべての手にはあらじ、となむ思ふ」とのたまへば、

「さやうに聞こし召すばかりにはあらずやはべらむ」

と言へど、御心とまるばかり聞こえなすを、

「いたうけしきばましや。このころのおぼろ月夜に忍びてもものせむ。まかだよ」

とのたまへば、わづらはしと思へど、内わたりものどやかなる春のつれづれにまかでぬ。

父の大輔の君は他にぞ住みける。ここには時々ぞ通ひける。命婦は、継母のあたりは住みもつかず、姫君の御あたりをむつびて、ここには来るなりけり。

のたまひもしるく、十六夜の月をかしきほどにおはしたり。

「いと、かたはらいたきわざかな。ものの音澄むべき夜のさまにもはべらぎめるに」と聞こゆれど、

「なほ、あなたにわたりて、ただ一声も、もよほしきこえよ。むなしくて帰らむが、ねたかるべきを」

とのたまへば、うちとけたる住み処に据ゑたてまつりて、うしろめたうかたじけなしと思へど、寝殿に参りたれば、まだ格子もさながら、梅の香をかしきを見出だしたまふ。よき折かな、と思ひて、

「御琴の音、いかにまさりはべらむと、思ひたまへらるる夜のけしきに、誘はれはべりてなむ。心あわたたしき出で入りに、えうけたまはらぬこそ口惜しけれ」と言へば、

「聞き知る人こそあなれ。百敷に行き交ふ人の聞くばかりやは」

思へどもなほ飽かざりし夕顔の露に後れし心地を、年月経れど、思し忘れず、
ここもかしこも、うちとけぬ限りの、気色ばみ心深きかたの御いどましきに、
け近くうちとけたりしあはれに、似るものなう恋しく思ほえたまふ。

いかで、こととしきおぼえはなく、いとらうたげならむ人の、つつましき
ことなからむ、見つけてしがなと、こりずまに思しわたれば、すこしゆゑづき
て聞こゆるわたりは、御耳とどめたまはぬ隈なきに、さてもやと、思し寄るば
かりのけはひあるあたりにこそ、一行をもほのめかしたまふめるに、なびきき
こえずもて離れたるは、をさをさあるまじきぞ、いと目馴れたるや。

つれなう心強きは、たとしへなう情けおくるるまめやかさなど、あまりもの
のほど知らぬやうに、さても過ぐしはせず、名残なくくづほれて、なほなほ
しき方に定まりなどするもあれば、のたまひさしつるも多かりける。

かの空蟬を、ものの折々には、ねたう思し出づ。萩の葉も、さりぬべき風の
たよりある時は、おどろかしたまふ折もあるべし。火影の乱れたりしさまは、
またさやうにても見まほしく思す。おほかた、名残なきもの忘れをぞ、えした
まはざりける。

左衛門の乳母とて、大貳のさしつぎに思いたるが女、大輔の命婦とて、内に
さぶらふ、わかむどほりの兵部大輔なる女なりけり。いといたう色好める若人
にてありけるを、君も召し使ひなどしたまふ。母は筑前守の妻にて、下りにけ
れば、父君のもとを里にて行き通ふ。

故常陸親王の、末にまうけていみじうかなしうかしづきたまひし御女、心細
くて残りゐたるを、ものついでに語りきこえければ、あはれのことやとて、
御心とどめて問ひ聞きたまふ。

「心ばへ容貌など、深き方はえ知りはべらず。かいひそめ、人疎うもてなし
たまへば、さべき宵など、物越しにてぞ、語らひはべる。琴をぞなつかしき語

未摘花

未
摘
花

かしき御ありさまどもなれば、思ふことなく遊びあへり。

君は、男君のおはせずなどして、さうざうしき夕暮などばかりぞ、尼君を恋ひきこえたまひて、うち泣きなどしたまへど、宮をばことに思ひ出できこえたまはず。もとより見ならひきこえたまはでならひたまへれば、今はただこの後の親を、いみじう睦びまつはしきこえたまふ。ものよりおはすれば、まづ出でむかひて、あはれにうち語らひ、御懐に入りみて、いささか疎く恥づかしとも思ひたらず。さるかたに、いみじうらうたきわざなりけり。

さかしら心あり、何くれとむつかしき筋になりぬれば、わが心地もすこし違ふふしも出で来やと、心おかれ、人も恨みがちに、思ひのほかのこと、おのづから出で来るを、いとをかしきもてあそびなり。女などはた、かばかりになれば、心やすくうちふるまひ、隔てなきさまに臥し起きなどは、えしもすまじきを、これは、いとさまかはりたるかしづきぐさなりと、思ほいためり。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

「まだ、ようは書かず」

とて、見上げたまへるが、何心なくうつくしげなれば、うちほほ笑みて、

「よからねど、むげに書かぬこそ悪ろけれ。教へきこえむかし」

とのたまへば、うちそばみて書いたまふ手つき、筆とりたまへるさまの幼げなるも、らうたうのみおぼゆれば、心ながらあやしと思す。「書きそこなひつ」と恥ぢて隠したまふを、せめて見たまへば、

「かこつべきゆゑを知らねばおぼつかな

いかなる草のゆかりなるらむ」

と、いと若けれど、生ひ先見えて、ふくよかに書いたまへり。故尼君のにぞ似たりける。「今めかしき手本習はば、いとよう書いたまひてむ」と見たまふ。雛など、わざと屋ども作り続けて、もろともに遊びつつ、こよなきもの思ひの紛らはしなり。

かのとまりにし人びと、宮渡りたまひて、尋ねきこえたまひけるに、聞こえやる方なくてぞ、わびあへりける。「しばし、人に知らせじ」と君ものたまひ、少納言も思ふことなれば、せちに口固めやりたり。ただ、「行方も知らず、少納言が率て隠しきこえたる」とのみ聞こえさするに、宮も言ふかひなう思して、「故尼君も、かしこに渡りたまはむことを、いとものしと思したりしことなれば、乳母の、いとさし過ぐしたる心ばせのあまり、おいらかに渡さむを、便なし、などは言はで、心にまかせ、率てはふらかしつるなめり」と、泣く泣く帰りたまひぬ。「もし、聞き出でたてまつらば、告げよ」とのたまふも、わづらはしく。僧都の御もとにも、尋ねきこえたまへど、あとはかなくて、あたらしかりし御容貌など、恋しく悲しと思す。

北の方も、母君を憎しと思ひきこえたまひける心も失せて、わが心にまかせつべう思しけるに違ひぬるは、口惜しう思しけり。

やうやう人参り集りぬ。御遊びがたきの童女、児ども、いとめづらかに今め

とのたまひて、対に童女召しにつかはす。「小さき限り、ことさらに参れ」とありければ、いとをかしげにて、四人参りたり。

君は御衣にまとはれて臥したまへるを、せめて起こして、

「かう、心憂くなおはせそ。すずろなる人は、かうはありなむや。女は心柔らかなるなむよき」

など、今より教へきこえたまふ。

御容貌は、さし離れて見しよりも、清らにて、なつかしううち語らひつつ、をかしき絵、遊びものども取りに遣はして、見せたてまつり、御心につくことどもをしたまふ。

やうやう起きみて見たまふに、鈍色のこまやかなるが、うち萎えたるどもを着て、何心なくうち笑みなどしてゐたまへるが、いとうつくしきに、我もうち笑まれて見たまふ。

東の対に渡りたまへるに、立ち出でて、庭の木立、池の方など覗きたまへば、霜枯れの前裁、絵に描けるやうにおもしろくて、見も知らぬ四位、五位こきまぜに、隙なう出で入りつつ、「げに、をかしき所かな」と思す。御屏風どもなど、いとをかしき絵を見つつ、慰めておはするもはかなしや。

君は、二、三日、内へも参りたまはで、この人をなつけ語らひきこえたまふ。やがて本にと思すにや、手習、絵などさまさまに書きつつ、見せたてまつりたまふ。いみじうをかしげに書き集めたまへり。「武蔵野と言へばかこたれぬ」と、紫の紙に書いたまへる墨つきの、いとことなるを取りて見ると、すこし小さくて、

「ねは見ねどあはれとぞ思ふ武蔵野の

露分けわぶる草のゆかりを」

とあり。

「いで、君も書いたまへ」とあれば、

「そは、心ななり。御自ら渡したてまつりつれば、帰りなむとあらば、送りせむかし」

とのたまふに、笑ひて下りぬ。にはかに、あさましう、胸も静かならず。「宮の思しのたまはむこと、いかになり果てたまふべき御ありさまにか、とてもかくても、頼もしき人びとに後れたまへるがいみじさ」と思ふに、涙の止まらぬを、さすがにゆゆしければ、念じりたり。

こなたは住みたまはぬ対なれば、御帳などもなかりけり。惟光召して、御帳、御屏風など、あたりあたり仕立てさせたまふ。御几帳の帷子引き下ろし、御座などただひき繕ふばかりにてあれば、東の対に、御宿直物召しに遣はして、大殿籠もりぬ。

若君は、いとむくつけく、いかにすることならむと、ふるはれたまへど、さすがに声立ててもえ泣きたまはず。

「少納言がもとに寝む」

とのたまふ声、いと若し。

「今は、さは大殿籠もるまじきぞよ」

と教へきこえたまへば、いとわびしくて泣き臥したまへり。乳母はうちも臥されず、ものもおぼえず起きりたり。

明けゆくままに、見わたせば、御殿の造りざま、しつらひざま、さらにも言はず、庭の砂子も玉を重ねたらむやうに見えて、かかやく心地するに、はしたなく思ひゐたれど、こなたには女などもさぶらはざりけり。け疎き客人などの参る折節の方なりければ、男どもぞ御簾の外にありける。

かく、人迎へたまへりと、聞く人、「誰れならむ。おぼろけにはあらじ」と、ささめく。御手水、御粥など、こなたに参る。日高う寝起きたまひて、

「人なくて、悪しかめるを、さるべき人びと、夕づけてこそは迎へさせたまはめ」

君は何心もなく寝たまへるを、抱きおどろかしたまふに、おどろきて、宮の御迎へにおはしたると、寝おびれて思したり。

御髪かき繕ひなどしたまひて、

「いぎ、たまへ。宮の御使にて参り来つるぞ」

とのたまふに、「あらざりけり」と、あきれて、恐ろしと思ひたれば、

「あな、心憂。まろも同じ人ぞ」

とて、かき抱きて出でたまへば、大輔、少納言など、「こは、いかに」と聞こゆ。

「ここには、常にもえ参らぬがおぼつかなければ、心やすき所にと聞こえしを、心憂く、渡りたまへるなれば、まして聞こえがたかべければ。人一人参られよかし」

とのたまへば、心あわたたしくて、

「今日は、いと便なくなむはべるべき。宮の渡らせたまはむには、いかさまにか聞こえやらむ。おのづから、ほど経て、さるべきにおはしまさば、ともかうもはべりなむを、いと思ひやりなきほどのことにはべれば、さぶらふ人びと苦しうはべるべし」と聞こゆれば、

「よし、後にも人は参りなむ」とて、御車寄せさせたまへば、あさましう、いかさまにと思ひあへり。

若君も、あやしと思して泣いたまふ。少納言、とどめきこえむかたなければ、昨夜縫ひし御衣どもひきさげて、自らもよろしき衣着かへて、乗りぬ。

二条院は近ければ、まだ明うもならぬほどにおはして、西の対に御車寄せて下りたまふ。若君をば、いと軽らかにかき抱きて下ろしたまふ。

少納言、

「なほ、いと夢の心地しはべるを、いかにしはべるべきことにか」と、やすらへば、

幼き人を盗み出でたりと、もどきおひなむ。そのさきに、しばし、人にも口固めて、渡してむ」と思して、

「暁かしこにもせむ。車の装束さながら。隨身一人二人仰せおきたれ」とのたまふ。うけたまはりて立ちぬ。

君、「いかにせまし。聞こえありて好きがましきやうなるべきこと。人のほだにものを思ひ知り、女の心交はしけることと推し測られぬべくは、世の常なり。父宮の尋ね出でたまへらむも、はしたなう、すずろなるべきを」と、思し乱るれど、さて外してむはいと口惜しかければ、まだ夜深う出でたまふ。

女君、例のしぶしぶに、心もとけずものしたまふ。

「かしこに、いとせちに見るべきことのはべるを思ひたまへ出でて、立ちかへり参り来なむ」とて、出でたまへば、さぶらふ人びとも知らざりけり。わが御方にて、御直衣などはたてまつる。惟光ばかりを馬に乗せておはしぬ。

門うちたたかせたまへば、心知らぬ者の開けたるに、御車をやら引き入れさせて、大夫、妻戸を鳴らして、しはぶけば、少納言聞き知りて、出で来たり。

「ここに、おはします」と言へば、

「幼き人は、御殿籠もりてなむ。などか、いと夜深うは出でさせたまへると、もののたよりと思ひて言ふ。

「宮へ渡らせたまふべかなるを、そのさきに聞こえ置かむとてなむ」とのたまへば、

「何ごとにかはべらむ。いかにはかばかしき御答へ聞こえさせたまはむ」

とて、うち笑ひてゐたり。君、入りたまへば、いとかたはらいたく、

「うちとけて、あやしき古人どものはべるに」と聞こえさす。

「まだ、おどろいたまはじな。いで、御目覚ましきこえむ。かかる朝霧を知らでは、寝るものか」

とて、入りたまへば、「や」とも、え聞こえず。

「あり経て後や、さるべき御宿世、逃れきこえたまはぬやうもあらむ。ただ今は、かけてもいと似げなき御ことと見たてまつるを、あやしう思しのたまはするも、いかなる御心にか、思ひ寄るかたなう乱れはべる。今日も、宮渡らせたまひて、『うしろやすく仕うまつれ。心幼くもてなしきこゆな』とのたまはせつるも、いとわづらはしう、ただなるよりは、かかる御好き事も思ひ出でられはべりつる」

など言ひて、「この人もことあり顔にや思はむ」など、あいなければ、いたう嘆かしげにも言ひなさず。大夫も、「いかなることにかあらむ」と、心得がたう思ふ。

参りて、ありさまなど聞こえければ、あはれに思しやらるれど、さて通ひたまはむも、さすがにすろなる心地して、「軽々しうもてひがめたと、人もや漏り聞かむ」など、つつましかければ、「ただ迎へてむ」と思す。

御文はたびたびたてまつれたまふ。暮るれば、例の大夫をぞたてまつれたまふ。「障はる事どものありて、え参り来ぬを、おろかにや」などあり。

「宮より、明日にはかに御迎へにとのたまはせたりつれば、心あわたたしくてなむ。年ごろの蓬生を離れなむも、さすがに心細く、さぶらふ人びとも思ひ乱れて」

と、言少なに言ひて、をさをさあへしらはず、もの縫ひいとなむけはひなどしるければ、参りぬ。

君は大殿におはしけるに、例の、女君とみにも対面したまはず。ものむつかしくおぼえたまひて、あづまをすががきて、「常陸には田をこそ作れ」といふ歌を、声はいとなまめきて、すさびるたまへり。

参りたれば、召し寄せてありさま問ひたまふ。しかしかなど聞こゆれば、口惜しう思して、「かの宮に渡りなば、わざと迎へ出でむも、好き好きしかるべし。

「何かは。心細くとも、しばしはかくておはしましなむ。すこしものの心思し知りなむにわたらせたまはむこそ、よくははべるべけれ」と聞こゆ。

「夜昼恋ひきこえたまふに、はかなきものもきこしめさず」

とて、げにいといたう面瘦せたまへれど、いとあてにうつくしく、なかなか見えたまふ。

「何か、さしも思す。今は世に亡き人の御ことはかひなし。おのれあれば」など語らひきこえたまひて、暮るれば帰らせたまふを、いと心細しと思ひて泣いたまへば、宮うち泣きたまひて、

「いとかう思ひな入りたまひそ。今日明日、渡したてまつらむ」など、返す返すこしらへおきて、出でたまひぬ。

なごりも慰めがたう泣きゐたまへり。行く先の身のあらむことなどまでも思し知らず、ただ年ごろ立ち離るる折なうまつはしならひて、今は亡き人となりたまひにける、と思すがいみじきに、幼き御心地なれど、胸つとふたがりて、例のやうにも遊びたまはず、昼はさても紛らはしたまふを、夕暮となれば、いみじく屈したまへば、かくてはいかでか過ごしたまはむと、慰めわびて、乳母も泣きあへり。

君の御もとよりは、惟光をたてまつれたまへり。

「参り来べきを、内より召あればなむ。心苦しう見たてまつりしも、しづ心なく」とて、宿直人たてまつれたまへり。

「あぢきなうもあるかな。戯れにても、もののはじめにこの御ことよ」

「宮聞こし召しつけば、さぶらふ人びとのおろかなるにぞさいなまむ」

「あなかしこ、ものついでに、いはけなくうち出できこえさせたまふな」
など

言ふも、それをば何とも思したらぬぞ、あさましきや。

少納言は、惟光にあはれなる物語どもして、

想もをかしかりぬべきに、さうざうしう思ひおはす。いと忍びて通ひたまふ所の道なりけるを思し出でて、門うちたたかせたまへど、聞きつくる人なし。かひなくて、御供に声ある人して歌はせたまふ。

「朝ぼらけ霧立つ空のまよひにも

行き過ぎがたき妹が門かな」

と、二返りばかり歌ひたるに、よしある下仕ひを出だして、

「立ちとまり霧のまがきの過ぎうくは

草のとぎしにさはりしもせじ」

と言ひかけて、入りぬ。また人も出で来ねば、帰るも情けなけれど、明けゆく空もはしたなくて殿へおはしぬ。

をかしかりつる人のなごり恋しく、独り笑みしつつ臥したまへり。日高う大殿籠もり起きて、文やりたまふに、書くべき言葉も例ならねば、筆うち置きつつすさびぬたまへり。をかしき絵などをやりたまふ。

かしこには、今日しも、宮わたりたまへり。年ごろよりもこよなう荒れまさり、広うもの古りたる所の、いとど人少なに久しければ、見わたしたまひて、

「かかる所には、いかでか、しばしも幼き人の過ぐしたまはむ。なほ、かしこに渡したてまつりてむ。何の所狭きほどにもあらず。乳母は、曹司などしてさぶらひなむ。君は、若き人びとあれば、もろともに遊びて、いとようものしたまひなむ」などのたまふ。

近う呼び寄せたてまつりたまへるに、かの御移り香の、いみじう艶に染みかへらせたまへれば、「をかしの御匂ひや。御衣はいと萎えて」と、心苦しげに思いたり。

「年ごろも、あつしくさだ過ぎたまへる人に添ひたまへるよ、かしこにわたりて見ならしたまへなど、ものせしを、あやしう疎みたまひて、人も心置くめりしを、かかる折にしものしたまはむも、心苦しう」などのたまへば、

とて、いと馴れ顔に御帳のうちに入りたまへば、あやしう思ひのほかにもと、あきれて、誰も誰もみたり。乳母は、うしろめたなうわりなしと思へど、荒ましう聞こえ騒ぐべきならねば、うち嘆きつつみたり。

若君は、いと恐ろしう、いかならむとわななかれて、いとうつくしき御肌つきも、そぞろ寒げに思したるを、らうたくおぼえて、単衣ばかりを押しくくみて、わが御心地も、かつはうたておぼえたまへど、あはれにうち語らひたまひて、

「いぎ、たまへよ。をかしき絵など多く、雛遊びなどする所に」

と、心につくべきことをのたまふけはひの、いとなつかしきを、幼き心地にも、いといたう怖ぢず、さすがに、むつかしう寝も入らずおぼえて、身じろき臥したまへり。

夜一夜、風吹き荒るるに、

「げに、かう、おはせざらましかば、いかに心細からまし」

「同じくは、よろしきほどにおはしまさましかば」

とささめきあへり。乳母は、うしろめたさに、いと近うさぶらふ。風すこし吹きやみたるに、夜深う出でたまふも、ことあり顔なりや。

「いとあはれに見たてまつる御ありさまを、今はまして、片時の間もおぼつかなかるべし。明け暮れ眺めはべる所に渡したてまつらむ。かくてのみは、いかが。もの怖ぢしたまはざりけり」とのたまへば、

「宮も御迎へになど聞こえのたまふめれど、この御四十九日過ぐしてや、なご思うたまふる」と聞こゆれば、

「頼もしき筋ながらも、よそよそにてならひたまへるは、同じうこそ疎うおぼえたまはめ。今より見たてまつれど、浅からぬ心ぎしはまさりぬべくなむ」

とて、かい撫でつつ、かへりみがちにて出でたまひぬ。

いみじう霧りわたれる空もただならぬに、霜はいと白うおきて、まことの懸

「宮にはあらねど、また思し放つべうもあらず。こち」

とのたまふを、恥づかしかりし人と、さすがに聞きなして、悪しう言ひてけりと思して、乳母にさし寄りて、

「いざかし、ねぶたきに」とのたまへば、

「今さらに、など忍びたまふらむ。この膝の上に大殿籠もれよ。今すこし寄りたまへ」

とのたまへば、乳母の、

「さればこそ。かう世づかぬ御ほどにてなむ」

とて、押し寄せたてまつりたれば、何心もなくゐたまへるに、手をさし入れて探りたまへれば、なよらかなる御衣に、髪はつやつやとかかりて、末のふさやかに探りつけられたる、いとうつくしう思ひやらる。手をとらへたまへれば、うたて例ならぬ人の、かく近づきたまへるは、恐ろしうて、

「寝なむ、と言ふものを」

とて、強ひて引き入りたまふにつきてすべり入りて、

「今は、まろぞ思ふべき人。な疎みたまひそ」

とのたまふ。乳母、

「いで、あなうたてや。ゆゆしうもはべるかな。聞こえさせ知らせたまふとも、さらに何のしるしもはべらじものを」とて、苦しげに思ひたれば、

「さりとて、かかる御ほどをいかかはあらむ。なほ、ただ世に知らぬ心ぎしのほどを見果てたまへ」とのたまふ。

霰降り荒れて、すぎき夜のさまなり。

「いかで、かう人少なに心細うて、過ぐしたまふらむ」

と、うち泣いたまひて、いと見棄てがたきほどなれば、

「御格子参りね。もの恐ろしき夜のさまなめるを、宿直人にてはべらむ。人びと、近うさぶらはれよかし」

「宮に渡したてまつらむとはべるめるを、『故姫君の、いと情けなく憂きものに思ひきこえたまへりしに、いとむげに見ならぬ齡の、まだはかばかしう人のおもむけをも見知りたまはず、中空なる御ほどにて、あまたものしたまふなる中の、あなづらはしき人にてや交じりたまはむ』など、過ぎたまひぬるも、世とともに思し嘆きつること、しるきこと多くはべるに、かくかたじけなきなげの御言の葉は、後の御心もたどりきこえさせず、いとうれしう思ひたまへられぬべき折節にはべりながら、すこしもなぞらひなるさまにもものしたまはず、御年よりも若びてならひたまへれば、いとかたはらいたくはべる」と聞こゆ。

「何か、かう繰り返し聞こえ知らする心のほどを、つつみたまふらむ。その言ふかひなき御心のありさまの、あはれにゆかしうおぼえたまふも、契りことになむ、心ながら思ひ知られける。なほ、人伝てならで、聞こえ知らせばや。

あしわかの浦にみるめはかたくとも

こは立ちながらかへる波かは

めざましからむ」とのたまへば、

「げにこそ、いとかしこけれ」とて、

「寄る波の心も知らでわかの浦に

玉藻なびかむほどぞ浮きたる

わりなきこと」

と聞こゆるさまの馴れたるに、すこし罪ゆるされたまふ。「なぞ越えざらむ」と、うち誦じたまへるを、身にしみて若き人びと思へり。

君は、上を恋ひきこえたまひて泣き臥したまへるに、御遊びがたきどもの、

「直衣着たる人のおはする、宮のおはしますなめり」

と聞こゆれば、起き出でたまひて、

「少納言よ。直衣着たりつらむは、いづら。宮のおはするか」

とて、寄りおはしたる御声、いとらうたし。

たるほどにて。かう問はせたまへるかしこまりは、この世ならでも聞こえさせむ」

とあり。いとあはれと思す。

秋の夕べは、まして、心のいとまなく思し乱るる人の御あたり心にかけて、あながちなるゆかりも尋ねまほしき心もまさりたまふなるべし。「消えむ空なき」とありし夕べ思し出でられて、恋しくも、また、見ば劣りやせむと、さすがにあやふし。

「手に摘みていつしかも見む紫の

根にかよひける野辺の若草」

十月に朱雀院の行幸あるべし。舞人など、やむごとなき家の子ども、上達部、殿上人なども、その方につきづきしきは、みな選らせたまへれば、親王達、大臣よりはじめて、とりどりの才ども習ひたまふ、いとまなし。

山里人にも、久しく訪れたまはざりけるを、思し出でて、ふりはへ遣はしたりければ、僧都の返り事のみあり。

「立ちぬる月の二十日のほどになむ、つひに空しく見たまへなして、世間の道理なれど、悲しび思ひたまふる」

などあるを見たまふに、世の中のはかなさもあはれに、「うしろめたげに思へりし人もいかならむ。幼きほどに、恋ひやすらむ。故御息所に後れたてまつりし」など、はかばかしからねど、思ひ出でて、浅からずとぶらひたまへり。少納言、ゆゑなからず御返りなど聞こえたり。

忌みなど過ぎて京の殿になど聞きたまへば、ほど経て、みづから、のどかなる夜おはしたり。いとすごげに荒れたる所の、人少なるに、いかに幼き人恐ろしからむと見ゆ。例の所に入れたてまつりて、少納言、御ありさまなど、うち泣きつつ聞こえ続けるに、あいなう、御袖もただならず。

いと近ければ、心細げなる御声絶え絶え聞こえて、

「いと、かたじけなきわざにもはべるかな。この君だに、かしこまりも聞こえたまつべきほどならましかば」

とのたまふ。あはれに聞きたまひて、

「何か、浅う思ひたまへむことゆゑ、かう好き好きしきさまを見えたてまつらむ。いかなる契りにか、見たてまつりそめしより、あはれに思ひきこゆるも、あやしきまで、この世のことにはおぼえはべらぬ」などのたまひて、「かひなき心地のみしはべるを、かのいはけなうものしたまふ御一声、いかで」とのたまへば、

「いでや、よろづ思し知らぬさまに、大殿籠もり入りて」

など聞こゆる折しも、あなたより来る音して、

「上こそ、この寺にありし源氏の君こそおはしたなれ。など見たまはぬ」とのたまふを、人びと、いとかたはらいたしと思ひて、「あなかま」と聞こゆ。

「いさ、『見しかば心地の悪しきなぐさみき』とのたまひしかばぞかし」

と、かしこきこと聞こえたりと思してのたまふ。

いとをかしと聞いたまへど、人びとの苦しと思ひたれば、聞かぬやうにて、まめやかなる御とぶらひを聞こえ置きたまひて、帰りたまひぬ。「げに、言ふかひなのけはひや。さりとも、いとよう教へてむ」と思す。

またの日も、いとまめやかにとぶらひきこえたまふ。例の、小さくて、

「いはけなき鶴の一声聞きしより

葦間になづむ舟ぞえならぬ

同じ人にや」

と、ことさら幼く書きなしたまへるも、いみじうをかしげなれば、「やがて御手本に」と、人びと聞こゆ。少納言ぞ聞こえたる。

「問はせたまへるは、今日をも過ぐしがたげなるさまにて、山寺にまかりわ

極わたりにて、内よりなれば、すこしほど遠き心地するに、荒れたる家の木立
いとももの古りて木暗く見えたるあり。例の御供に離れぬ惟光なむ、

「故按察使大納言の家にはべりて、ものたよりにとぶらひてはべりしかば、
かの尼上、いたう弱りたまひにたれば、何ごともおぼえず、となむ申してはべ
りし」と聞こゆれば、

「あはれのことや。とぶらふべかりけるを。などか、さなむどものせざりし。
入りて消息せよ」

とのたまへば、人入れて案内せさす。わぎとかう立ち寄りたまへることと言
はせられたれば、入りて、

「かく御とぶらひになむおはしましたる」と言ふに、おどろきて、

「いとかたはらいたきことかな。この日ごろ、むげにいと頼もしげなくな
せたまひにたれば、御対面などもあるまじ」

と言へども、帰したてまつらむはかしこしとて、南の廂ひきつくろひて、入
れたてまつる。

「いとむつかしげにはべれど、かしこまりをだにとて。ゆくりなう、もの深
き御座所になむ」

と聞こゆ。げにかかる所は、例に違ひて思さる。

「常に思ひたまへ立ちながら、かひなきさまにのみもてなさせたまふに、つ
つまればべりてなむ。悩ませたまふこと、重くとも、うけたまはらざりけるお
ぼつかなき」など聞こえたまふ。

「乱り心地は、いつともなくのみはべるが、限りのさまになりはべりて、い
とかたじけなく、立ち寄せたまへるに、みづから聞こえさせぬこと。のたま
はすることの筋、たまさかにも思し召し変はらぬやうはべらば、かくわりなき
齢過ぎはべりて、かならず数まへさせたまへ。いみじう心細げに見たまへ置く
なむ、願ひはべる道のほだしに思ひたまへられぬべき」など聞こえたまへり。

中將の君も、おどろおどろしうさま異なる夢を見たまひて、合はする者を召して、問はせたまへば、及びなう思しもかけぬ筋のことを合はせけり。

「その中に、違ひ目ありて、慎しませたまふべきことなむはべる」と言ふに、わづらはしくおぼえて、

「みづからの夢にはあらず、人の御ことを語るなり。この夢合ふまで、また人にまねぶな」

とのたまひて、心のうちには、「いかなることならむ」と思しわたるに、この女宮の御こと聞きたまひて、「もしさるやうもや」と、思し合はせたまふに、いとどしくいみじき言の葉尽くしきこえたまへど、命婦も思ふに、いとむくつけう、わづらはしきさまさりて、さらにたばかるべきかたなし。はかなき一行の御返りのたまさかなりしも、絶え果てにたり。

七月になりてぞ参りたまひける。めづらしうあはれにて、いとどしき御思ひのほど限りなし。すこしふくらかになりたまひて、うちなやみ、面瘦せたまへる、はた、げに似るものなくめでたし。

例の、明け暮れ、こなたにのみおはしまして、御遊びもやうやうをかしき空なれば、源氏の君も暇なく召しまつはしつつ、御琴、笛など、さまざまに仕うまつらせたまふ。いみじうつつみたまへど、忍びがたき気色の漏り出づる折々、宮も、さすがなる事どもを多く思し続けけり。

かの山寺の人は、よろしくなりて出でたまひにけり。京の御住処尋ねて、時々御消息などあり。同じさまにのみあるも道理なるうちに、この月ごろは、ありしにまさる物思ひに、異事なくて過ぎゆく。

秋の末つ方、いとももの心細くて嘆きたまふ。月のをかしき夜、忍びたる所からうして思ひ立ちたまへるを、時雨めいてうちそそく。おはする所は六条京

やがて紛るる我が身ともがな」

と、むせかへりたまふさまも、さすがにいみじければ、

「世語りに人や伝へむたぐひなく

憂き身を覚めぬ夢になしても」

思し乱れたるさまも、いと道理にかたじけなし。命婦の君ぞ、御直衣などは、かき集め持て来たる。

殿におはして、泣き寝に臥し暮らしたまひつ。御文なども、例の、御覧じ入れぬよしのみあれば、常のことながらも、つらういみじう思しほれて、内へも参らで、二、三日籠もりおはすれば、また、「いかなるにか」と、御心動かさせたまふべかめるも、恐ろしうのみおぼえたまふ。

宮も、なほいと心憂き身なりけりと、思し嘆くに、悩ましさまさりたまひて、とく参りたまふべき御使、しきれど、思しも立たず。

まことに、御心地、例のやうにもおはしまさぬは、いかなるにかと、人知れず思すこともありければ、心憂く、「いかならむ」とのみ思し乱る。

暑きほどは、いとど起きも上がりたまはず。三月になりたまへば、いとしるきほどにて、人びと見たてまつりとがむるに、あさましき御宿世のほど、心憂し。人は思ひ寄らぬことなれば、「この月まで、奏せさせたまはざりけること」と、驚ききこゆ。我が御心一つには、しるう思しわくこともありけり。

御湯殿などにも親しう仕うまつりて、何事の御気色をもしるく見たてまつり知れる、御乳母子の弁、命婦などぞ、あやしと思へど、かたみに言ひあはすべきにあらねば、なほ逃れがたかりける御宿世をぞ、命婦はあさましと思ふ。

内には、御物の怪の紛れにて、とみに気色なうおはしましけるやうにぞ奏しけむかし。見る人もさのみ思ひけり。いとどあはれに限りなう思されて、御使などのひまなきも、そら恐ろしう、ものを思すこと、ひまなし。

思すにか」と、ゆゆしうなむ、誰も誰も思しける。

御文にも、いとねむごろに書いたまひて、例の、中に、「かの御放ち書きなむ、なほ見たまへまほしき」とて、

「あさか山浅くも人を思はぬに

など山の井のかけ離るらむ」

御返し、

「汲み初めてくやしと聞きし山の井の

浅きながらや影を見るべき」

惟光も同じことを聞こゆ。

「このわづらひたまふことよろしくは、このごろ過ぐして、京の殿に渡りたまひてなむ、聞こえさすべき」とあるを、心もとなう思す。

藤壺の宮、悩みたまふことありて、まかでたまへり。上の、おぼつかながり、嘆ききこえたまふ御気色も、いといとほしう見たてまつりながら、かかる折だにと、心もあくがれ惑ひて、何処にも何処にも、まうでたまはず、内にてても里にても、昼はつれづれと眺め暮らして、暮るれば、王命婦を責め歩きたまふ。

いかがたばかりけむ、いとわりなくて見たてまつるほどさへ、現とはおぼえぬぞ、わびしきや。宮も、あさましかりしを思し出づるだに、世ともの御もの思ひなるを、さてだにやみなむと深う思したるに、いと憂くて、いみじき御気色なるものから、なつかしうらうたげに、さりとてうちとけず、心深う恥づかしげなる御もてなしなどの、なほ人に似させたまはぬを、「などか、なのめなることだにうち交じりたまはざりけむ」と、つらうさへぞ思さるる。何ごとをかは聞こえ尽くしたまはむ。くらぶの山に宿りも取らまほしげなれど、あやにくなる短夜にて、あさましう、なかなかなり。

「見てもまた逢ふ夜まれなる夢のうちに

「もて離れたりし御気色のつつまじきに、思ひたまふるさまをも、えあらはし果てはべらずなりにしをなむ。かばかり聞こゆるにても、おしなべたらぬ志のほどを御覧じ知らば、いかにうれしう」

などあり。中に、小さく引き結びて、

「面影は身をも離れず山桜

心の限りとめて来しかど

夜の間の風も、うしろめたくなむ」

とあり。御手などはさるものにて、ただはかなうおし包みたまへるさまも、さだすぎたる御目どもには、目もあやにこのまじう見ゆ。

「あな、かたはらいたや。いかが聞こえむ」と、思しわづらふ。

「ゆくての御ことは、なほざりにも思ひたまへなされしを、ふりはへさせたまへるに、聞こえさせむかたなくなむ。まだ「難波津」をだに、はかばかしう続けはべらざめれば、かひなくなむ。さても、

嵐吹く尾の上の桜散らぬ間を

心とめけるほどのはかなさ

いとどうしろめたう」

と

あり。僧都の御返りも同じさまなれば、口惜しくて、二、三日ありて、惟光をぞたてまつれたまふ。

「少納言の乳母と言ふ人あべし。尋ねて、詳しう語らへ」などのたまひ知らす。「さも、かからぬ隈なき御心かな。さばかりいはけなげなりしけはひを」と、まほならねども、見しほどを思ひやるもをかし。

わざと、かう御文あるを、僧都もかしまり聞こえたまふ。少納言に消息して会ひたり。詳しく、思しのたまふさま、おほかたの御ありさまなど語る。言葉多かる人にて、つきづきしう言ひ続けれど、「いとわりなき御ほどを、いかに

のに思して、年のかさなるに添へて、御心の隔てもまさるを、いと苦しく、思はずに、

「時々は、世の常なる御気色を見ばや。堪へがたうわづらひはべりしをも、いかがとだに、問ひたまはぬこそ、めづらしからぬことなれど、なほうらめしう」

と聞こえたまふ。からうして、

「問はぬは、つらきものにやあらむ」

と、後目に見おこせたまへるまみ、いと恥づかしげに、気高ううつくしげなる御容貌なり。

「まれまれは、あさましの御ことや。訪はぬ、など言ふ際は、異にこそはべるなれ。心憂くものたまひなすかな。世とともにしたなき御もてなしを、もし、思し直る折もやと、とぎまかうさまに試みきこゆるほど、いとど思ほし疎むなめりかし。よしや、命だに」

とて、夜の御座に入りたまひぬ。女君、ふとも入りたまはず、聞こえわづらひたまひて、うち嘆きて臥したまへるも、なま心づきなきにやあらむ、ねぶたげにもてなして、とかう世を思し乱ること多かり。

この若草の生ひ出でむほどのなほゆかしきを、「似げないほどと思へりしも、道理ぞかし。言ひ寄りがたきことにもあるかな。いかにかまへて、ただ心やすく迎へ取りて、明け暮れの慰めに見む。兵部卿宮は、いとあてになまめいたまへれど、匂ひやかになどもあらぬを、いかで、かの一族におぼえたまふらむ。ひとつ后腹なればにや」など思す。ゆかりいとむつましきに、いかでかと、深うおぼゆ。

またの日、御文たてまつれたまへり。僧都にもほのめかしたまふべし。尼上には、

「宮の御ありさまよりも、まさりたまへるかな」などのたまふ。

「さらば、かの人の御子になりておはしませよ」

と聞こゆれば、うちうなづきて、「いとようありなむ」と思したり。雛遊びにも、絵描いたまふにも、「源氏の君」と作り出でて、きよらなる衣着せ、かしづきたまふ。

君は、まづ内に参りたまひて、日ごろの御物語など聞こえたまふ。「いといたう衰へにけり」とて、ゆゆしと思し召したり。聖の尊かりけることなど、問はせたまふ。詳しく奏したまへば、

「阿闍梨などにもなるべき者にこそあなれ。行ひの労は積もりて、朝廷にしろしめされざりけること」と、尊がりのたまはせけり。

大殿、参りあひたまひて、

「御迎へにもと思ひたまへつれど、忍びたる御歩きに、いかがと思ひ憚りてなむ。のどやかに一、二日うち休みたまへ」とて、「やがて、御送り仕うまつらむ」と申したまへば、さしも思さねど、引かされてまかでたまふ。

我が御車に乗せたてまつりたまうて、自らは引き入りてたてまつれり。もてかしづききこえたまへる御心ばへのあはれなるをぞ、さすがに心苦しく思しける。

殿にも、おはしますらむと心づかひしたまひて、久しく見たまはぬほど、いとど玉の台に磨きしつらひ、よろづをととのへたまへり。

女君、例の、はひ隠れて、とみにも出でたまはぬを、大臣、切に聞こえたまひて、からうして渡りたまへり。ただ絵に描きたるものの姫君のやうに、し据ゑられて、うちみじろきたまふこともかたく、うるはしうてもものしたまへば、思ふこともうちかすめ、山道の物語をも聞こえむ、言ふかひありて、をかしういらへたまはばこそ、あはれならめ、世には心も解けず、うとく恥づかしきも

霞むる空の気色をも見む」

と、よしある手の、いとあてなるを、うち捨て書いたまへり。

御車にたてまつるほど、大殿より、「いづちともなくて、おはしましにけること」とて、御迎への人びと、君達などあまた参りたまへり。頭中将、左中弁、さらぬ君達も慕ひきこえて、

「かうやうの御供には、仕うまつりはべらむ、と思ひたまふるを、あさましく、おくらさせたまへること」と恨みきこえて、「いといみじき花の蔭に、しばしもやすらはず、立ち帰りはべらむは、飽かぬわざかな」とのたまふ。

岩隠れの苔の上に並みゐて、土器参る。落ち来る水のさまなど、ゆるある滝のもとなり。頭中将、懐なりける笛取り出でて、吹きすましたり。弁の君、扇はかなううち鳴らして、「豊浦の寺の、西なるや」と歌ふ。人よりは異なる君達を、源氏の君、いといたううち悩みて、岩に寄りゐたまへるは、たぐひなくゆしき御ありさまにぞ、何ごとにも目移るまじかりける。例の、箏篋吹く隨身、笙の笛持たせたる好き者などあり。

僧都、琴をみづから持て参りて、

「これ、ただ御手一つあそばして、同じうは、山の鳥もおどろかしはべらむ」と切に聞こえたまへば、

「乱り心地、いと堪へがたきものを」と聞こえたまへど、けに憎からずかき鳴らして、皆立ちたまひぬ。

飽かず口惜しと、言ふかひなき法師、童べも、涙を落としあへり。まして、内には、年老いたる尼君たちなど、まださらにかかる人の御ありさまを見ざりつれば、「この世のものともおぼえたまはず」と聞こえあへり。僧都も、

「あはれ、何の契りにて、かかる御さまながら、いとむつかしき日本の末の世に生まれたまへらむと見るに、いとなむ悲しき」とて、目おしのごひたまふ。

この若君、幼な心地に、「めでたき人かな」と見たまひて、

とのたまふ御もてなし、声づかひさへ、目もあやなるに、

「優曇華の花待ち得たる心地して

深山桜に目こそ移らね」

と聞こえたまへば、ほほゑみて、「時ありて、一度開くなるは、かたかなるものを」とのたまふ。

聖、御土器賜はりて、

「奥山の松のとぼそをまれに開けて

まだ見ぬ花の顔を見るかな」

と、うち泣きて見たてまつる。聖、御まもりに、独鈷たてまつる。見たまひて、僧都、聖徳太子の百済より得たまへりける金剛子の数珠の、玉の装束したる、やがてその国より入れたる筥の、唐めいたるを、透きたる袋に入れて、五葉の枝に付けて、紺瑠璃の壺どもに、御薬ども入れて、藤、桜などに付けて、所につけたる御贈物ども、ささげたてまつりたまふ。

君、聖よりははじめ、読経しつる法師の布施ども、まうけの物ども、さまさまに取りにつかはしたりければ、そのわたりの山がつまで、さるべき物ども賜ひ、御誦経などして出でたまふ。

内に僧都入りたまひて、かの聞こえたまひしこと、まねびきこえたまへど、「ともかくも、ただ今は、聞こえむかたなし。もし、御志あらば、いま四、五年を過ぐしてこそは、ともかくも」とのたまへば、「さなむ」と同じさまにのみあるを、本意なしと思す。

御消息、僧都のもとなる小さき童して、

「夕まぐれほのかに花の色を見て

今朝は霞の立ちぞわづらふ」

御返し、

「まことにや花のあたりは立ち憂きと

「よし、かう聞こえそめはべりぬれば、いと頼もしうなむ」とて、おし立てたまひつ。

暁方なりにければ、法華三昧行ふ堂の懺法の声、山おろしにつきて聞こえくる、いと尊く、滝の音に響きあひたり。

「吹きまよふ深山おろしに夢さめて

涙もよほす滝の音かな」

「さしぐみに袖ぬらしける山水に

澄める心は騒ぎやはする

耳馴ればべりにけりや」と聞こえたまふ。

明けゆく空は、いといたう霞みて、山の鳥どもそこはかとなうさへづりあひたり。名も知らぬ木草の花どもも、いろいろに散りまじり、錦を敷けると見ゆるに、鹿のたたずみ歩くも、めづらしく見たまふに、悩ましきも紛れ果てぬ。

聖、動きもえせねど、とかうして護身参らせたまふ。かれたる声の、いといたうすきひがめるも、あはれに功づきて、陀羅尼誦みたり。

御迎への人びと参りて、おこたりたまへる喜び聞こえ、内よりも御とぶらひあり。僧都、世に見えぬさまの御くだもの、何くれと、谷の底まで掘り出で、いとなみきこえたまふ。

「今年ばかりの誓ひ深うはべりて、御送りにもえ参りはべるまじきこと。なかなかにも思ひたまへらるべきかな」

など聞こえたまひて、大御酒参りたまふ。

「山水に心とまりはべりぬれど、内よりもおぼつかながらせたまへるも、かしこければなむ。今、この花の折過ぐさず参り来む。

宮人に行きて語らむ山桜

風よりさきに来ても見るべく」

答へきこえむ」とのたまへば、

「はしたなうもこそ思せ」と人びと聞こゆ。

「げに、若やかなる人こそうたてもあらめ、まめやかにのたまふ、かたじけなし」

とて、みざり寄りたまへり。

「うちつけに、あさはかなりと、御覧ぜられぬべきついでなれど、心にはさもおぼえはべらねば。仏はおのづから」

とて、おとなおとなしう、恥づかしげなるにつつまれて、とみにもえうち出でたまはず。

「げに、思ひたまへ寄りがたきついでに、かくまでのたまはせ、聞こえさするも、いかが」とのたまふ。

「あはれにうけたまはる御ありさまを、かの過ぎたまひにけむ御かほりに、思しないでむや。言ふかひなきほどの齢にて、むつましかるべき人にも立ち後はべりにければ、あやしう浮きたるやうにて、年月をこそ重ねはべれ。同じさまにもものしたまふなるを、たぐひになさせたまへと、いと聞こえまほしきを、かかる折はべりがたくてなむ、思されむところをも憚らず、うち出ではべりぬる」と聞こえたまへば、

「いとうれしう思ひたまへぬべき御ことながらも、聞こしめしひがめたることなどやはべらむと、つつましうなむ。あやしき身一つを頼もし人にする人なむはべれど、いとまだ言ふかひなきほどにて、御覧じ許さるる方もはべりがたげなれば、えなむうけたまはりとはめられざりける」とのたまふ。

「みな、おぼつかかなからずうけたまはるものを、所狭う思し憚らで、思ひたまへ寄るさまことなる心のほどを、御覧ぜよ」

と聞こえたまへど、いと似げなきことを、さも知らでのたまふ、と思して、心解けたる御答へもなし。僧都おはしぬれば、

すこし引き開けて、扇を鳴らしたまへば、おぼえなき心地すべかめれど、聞き知らぬやうにやとて、みぎり出づる人あなり。すこし退きて、

「あやし、ひが耳にや」とたどるを、聞きたまひて、

「仏の御しるべは、暗きに入りても、さらに違ふまじかなるものを」

とのたまふ御声の、いと若うあてなるに、うち出でむ声づかひも、恥づかしけれど、

「いかなる方の、御しるべにか。おぼつかなく」と聞こゆ。

「げに、うちつけなりとおぼめきたまはむも、道理なれど、

初草の若葉の上を見つるより

旅寝の袖も露ぞ乾かぬ

と聞こえたまひてむや」とのたまふ。

「さらに、かやうの御消息、うけたまはりわくべき人もものしたまはぬさまは、しろしめしたりげなるを。誰れにかは」と聞こゆ。

「おのづからさるやうありて聞こゆるならむと思ひなしたまへかし」

とのたまへば、入りて聞こゆ。

「あな、今めかし。この君や、世づいたるほどにおはするとぞ、思すらむ。

さるにては、かの『若草』を、いかで聞いたまへることぞ」と、さまざまあやしきに、心乱れて、久しうなれば、情けなしとて、

「枕結ふ今宵ばかりの露けさを

深山の苔に比べざらなむ

乾がたうはべるものを」と聞こえたまふ。

「かうやうのついでなる御消息は、まださらに聞こえ知らず、ならはぬことになむ。かたじけなくとも、かかるついでに、まめまめしう聞こえさすべきことなむ」と聞こえたまへれば、尼君、

「ひがこと聞きたまへるならむ。いとむつかしき御けはひに、何ごとをかは

「いとあはれにもものしたまふことかな。それは、とどめたまふ形見もなきか」と、幼かりつる行方の、なほ確かに知らまほしくて、問ひたまへば、

「亡くなりはべりしほどにこそ、はべりしか。それも、女にてぞ。それにつけて物思ひのもよほしになむ、齡の末に思ひたまへ嘆きはべるめる」と聞こえたまふ。

「さればよ」と思さる。

「あやしきことなれど、幼き御後見に思すべく、聞こえたまひてむや。思ふ心ありて、行きかかづらふ方もはべりながら、世に心の染まぬにやあらむ、独り住みにてのみなむ。まだ似げなきほどと常の人に思しなずらへて、はしたなくや」などのたまへば、

「いとうれしかるべき仰せ言なるを、まだむげにいはきなきほどにはべるめれば、たはぶれにても、御覧じがたくや。そもそも、女人は、人にもてなされて大人にもなりたまふものなれば、詳しくはえとり申さず、かの祖母に語らひはべりて聞こえさせむ」

と、すくよかに言ひて、ものごはきさましたまへれば、若き御心に恥づかしくて、えよくも聞こえたまはず。

「阿弥陀仏ものしたまふ堂に、することはべるころになむ。初夜、いまだ勤めはべらず。過ぐしてさぶらはむ」とて、上りたまひぬ。

君は、心地もいと悩ましきに、雨すこしうちそそぎ、山風ひやかに吹きたるに、滝のよどみもまさりて、音高う聞こゆ。すこしねぶたげなる読経の絶え絶えすごく聞こゆるなど、すずろなる人も、所からものあはれなり。まして、思しめぐらすこと多くて、まどろませたまはず。初夜と言ひしかども、夜もいたう更けにけり。内にも、人の寝ぬけはひしるくて、いと忍びたれど、数珠の脇息に引き鳴らさるる音ほの聞こえ、なつかしううちそよめく音なひ、あてはかなりと聞きたまひて、ほどもなく近ければ、外に立てわたしたる屏風の中を、

僧都、世の常なき御物語、後世のことなど聞こえ知らせたまふ。我が罪のほど恐ろしう、「あぢきなきことに心をしめて、生ける限りこれを思ひ悩むべきなめり。まして後の世のいみじかるべき」。思し続けて、かうやうなる住まひもせまほしうおぼえたまふものから、昼の面影心にかかりて恋しければ、

「ここにもものしたまふは、誰れにか。尋ねきこえまほしき夢を見たまへしかな。今日なむ思ひあはせつる」

と聞こえたまへば、うち笑ひて、

「うちつけなる御夢語りにぞはべるなる。尋ねさせたまひても、御心劣りせさせたまひぬべし。故按察使大納言は、世になくて久しくなりはべりぬれば、えしろしめさじかし。その北の方なむ、なにがしが妹にはべる。かの按察使かくれて後、世を背きてはべるが、このごろ、わづらふことはべるにより、かく京にもまかでねば、頼もし所に籠もりてものははべるなり」と聞こえたまふ。

「かの大納言の御女、ものしたまふと聞きたまへしは。好き好きしき方にはあらで、まめやかに聞こゆるなり」と、推し当てにのたまへば、

「女ただ一人はべりし。亡せて、この十余年にやなりはべりぬらむ。故大納言、内にたてまつらむなど、かしこういつきはべりしを、その本意のごとくものしはべらで、過ぎはべりにしかば、ただこの尼君一人もてあつかひはべりしほどに、いかなる人のしわざにか、兵部卿宮なむ、忍びて語らひつきたまへりけるを、本の北の方、やむごとなくなどして、安からぬこと多くて、明け暮れ物を思ひてなむ、亡くなりはべりにし。物思ひに病づくものと、目に近く見たまへし」

など申したまふ。「さらば、その子なりけり」と思しあはせつ。「親王の御筋にて、かの人にもかよひきこえたるにや」と、いとどあはれに見まほし。「人のほどもあてにをかしう、なかなかのさかしら心なく、うち語らひて、心のままに教へ生ほし立てて見ばや」と思す。

「あはれなる人を見つるかな。かかれれば、この好き者どもは、かかる歩きをのみして、よくさるまじき人をも見つくるなりけり。たまさかに立ち出づるだに、かく思ひのほかなることを見るよ」と、をかしう思す。「さて、いとうつくしかりつる児かな。何人ならむ。かの人の御代はりに、明け暮れの慰めにも見ばや」と思ふ心、深うつきぬ。

うち臥したまへるに、僧都の御弟子、惟光を呼び出でさす。ほどなき所なれば、君もやがて聞きたまふ。

「通りおはしましけるよし、ただ今なむ、人申すに、おどろきながら、さぶらべきを、なにがしこの寺に籠もりはべりとは、しろしめしながら、忍びさせたまへるを、憂はしく思ひたまへてなむ。草の御むしろも、この坊にこそ設けはべるべけれ。いと本意なきこと」と申したまへり。

「いぬる十余日のほどより、瘡病にわづらひはべるを、度重なりて堪へがたくはべれば、人の教へのまま、にはかに尋ね入りはべりつれど、かやうなる人の験あらはさぬ時、はしたなかるべきも、ただなるよりは、いとほしう思ひたまへつつみてなむ、いたう忍びはべりつる。今、そなたにも」とのたまへり。

すなはち、僧都参りたまへり。法師なれど、いと心恥づかしく人柄もやむごとなく、世に思はれたまへる人なれば、軽々しき御ありさまを、はしたなう思す。かく籠もれるほどの御物語など聞こえたまひて、「同じ柴の庵なれど、すこし涼しき水の流れも御覧せさせむ」と、せちに聞こえたまへば、かの、まだ見ぬ人びとにことごとしう言ひ聞かせつるを、つつましう思せど、あはれなりつるありさまもいぶかしくて、おはしぬ。

げに、いと心ことによしありて、同じ本草をも植ゑなしたまへり。月もなきころなれば、遣水に篝火ともし、灯笼なども参りたり。南面いと清げにしつらひたまへり。そらだきもの、いと心にくく薫り出で、名香の香など匂ひみちたるに、君の御追風いとことなれば、内の人びとも心づかひすべかめり。

まつれるが、まもらるるなりけり」と、思ふにも涙ぞ落つる。

尼君、髪をかき撫でつつ、

「梳ることをうるさがりたまへど、をかしの御髪や。いとかなうものしたまふこそ、あはれにうしろめたけれ。かばかりになれば、いとかからぬ人もあるものを。故姫君は、十ばかりにて殿に後れたまひしほど、いみじうものは思ひ知りたまへりしぞかし。ただ今、おのれ見捨てたてまつらば、いかで世におはせむとすらむ」

とて、いみじく泣くを見たまふも、すずろに悲し。幼心地にも、さすがうちまもりて、伏目になりてうつぶしたるに、こぼれかかりたる髪、つやつやとめでたう見ゆ。

「生ひ立たむありかも知らぬ若草を

おくらす露ぞ消えむそらなき」

またゐたる大人、「げに」と、うち泣きて、

「初草の生ひ行く末も知らぬまに

いかでか露の消えむとすらむ」

と聞こゆるほどに、僧都、あなたより来て、

「こなたはあらはにやはべらむ。今日しも、端におはしましけるかな。この上の聖の方に、源氏の中将の瘡病まじなひにもしたまひけるを、ただ今なむ、聞きつけはべる。いみじう忍びたまひければ、知りはべらで、ここにはべりながら、御とぶらひにもまでざりける」とのたまへば、

「あないみじや。いとあやしきさまを、人や見つらむ」とて、簾下ろしつ。

「この世に、ののしりたまふ光る源氏、かかるついでに見たてまつりたまはむや。世を捨てたる法師の心地にも、いみじう世の憂へ忘れ、齡延ぶる人の御ありさまなり。いで、御消息聞こえむ」

とて、立つ音すれば、帰りたまひぬ。

げに読みみたる尼君、ただ人と見えぬ。四十余ばかりにて、いと白うあてに、瘦せたれど、つらつきふくらかに、まみのほど、髪のうちくしげにそがれたる末も、なかなか長きよりもこよなう今めかしきものかなと、あはれに見たまふ。清げなる大人二人ばかり、さては童女ぞ出で入り遊ぶ。中に十ばかりやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て、走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひさき見えて、うつくしげなる容貌なり。髪は扇を広げたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。

「何ごとぞや。童女と腹立ちたまへるか」

とて、尼君の見上げたるに、すこしおぼえたるどころあれば、「子なめり」と見たまふ。

「雀の子を犬君が逃がしつる。伏籠のうちに籠めたりつるものを」

とて、いと口惜しと思へり。このみたる大人、

「例の、心なしの、かかるわざをして、さいなまるこそ、いと心づきなけれ。いづ方へかまかりぬる。いとをかしう、やうやうなりつるものを。烏などもこそ見つけ」

とて、立ちて行く。髪ゆるるかにいと長く、めやすき人なめり。少納言の乳母とこそ人言ふめるは、この子の後見なるべし。

尼君、

「いで、あな幼や。言ふかひなうものしたまふかな。おのが、かく、今日明日におぼゆる命をば、何とも思したらで、雀慕ひたまふほどよ。罪得ることぞと、常に聞こゆるを、心憂く」とて、「こちや」と言へば、ついゐたり。

つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざし、いみじうつくし。「ねびゆかむさまゆかしき人かな」と、目とまりたまふ。さるは、「限りなう心を尽くしきこゆる人に、いとよう似たて

「さて、たたずみ寄るならむ」

と言ひあへり。

「いで、さ言ふとも、田舎びたらむ。幼くよりさる所に生ひ出でて、古めいたる親にのみ従ひたらむは」

「母こそゆゑあるべけれ。よき若人、童など、都のやむごとなき所々より、類にふれて尋ねとりて、まばゆくこそもてなすなれ」

「情けなき人なりて行かば、さて心安くてしも、え置きたらじをや」

など言ふもあり。君、

「何心ありて、海の底まで深う思ひ入るらむ。底の「みるめ」も、ものむつかしう」

などのたまひて、ただならず思したり。かやうにても、なべてならず、もてひがみたること好みたまふ御心なれば、御耳とどまらむをや、と見たてまつる。

「暮れかかりぬれど、おこらせたまはずなりぬるにこそはあめれ。はや帰らせたまひなむ」

とあるを、大徳、

「御もののけなど、加はれるさまにおはしましけるを、今宵は、なほ静かに加持など参りて、出でさせたまへ」と申す。

「さもあること」と、皆人申す。君も、かかる旅寝も慣らひたまはねば、さすがにかしくて、

「さらば暁に」とのたまふ。

人なくて、つれづれなれば、夕暮のいたう霞みたるに紛れて、かの小柴垣のほどに立ち出でたまふ。人びとは帰したまひて、惟光朝臣と覗きたまへば、ただこの西面にしも、仏据ゑたてまつりて行ふ、尼なりけり。簾すこし上げて、花たてまつるめり。中の柱に寄りゐて、脇息の上に経を置きて、いとなやまし

びかなる所にはべる。

かの国の前の守、新発意の、女かしづきたる家、いといたしかし。大臣の後にて、出で立ちもすべかりける人の、世のひがものにて、交じらひもせず、近衛の中将を捨てて、申し賜はれりける司なれど、かの国の人にもすこしあなづられて、『何の面目にてか、また都にも帰らむ』と言ひて、頭も下ろしはべりにけるを、すこし奥まりたる山住みもせで、さる海づらに出でゐたる、ひがひがしきやうなれど、げに、かの国のうちに、さも、人の籠もりゐぬべき所々はありながら、深き里は、人離れ心すごく、若き妻子の思ひわびぬべきにより、かつは心をやれる住まひになむはべる。

先つころ、まかり下りてはべりしついでに、ありさま見たまへに寄りてはべりしかば、京にてこそ所得ぬやうなりけれ、そこらはるかに、いかめしう占めて造れるさま、さは言へど、国の司にてし置きけることなれば、残りの齡ゆたかに経べき心構へも、二なくしたりけり。後の世の勤めも、いとよくして、なかなか法師まさりしたる人になむはべりける」と申せば、

「さて、その女は」と、問ひたまふ。

「けしうはあらず、容貌、心ばせなどはべるなり。代々の国の司など、用意ことにして、さる心ばへ見すなれど、さらにうけひかず。『我が身のかくいたづらに沈めるだにあるを、この人ひとりにこそあれ、思ふさまことなり。もし我に後れてその志とげず、この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね』と、常に遺言しおきてはべるなる」

と聞こゆれば、君もをかしと聞きたまふ。人びと、

「海龍王の后になるべきいつき女ななり」

「心高き苦しや」とて笑ふ。

かく言ふは、播磨守の子の、蔵人より、今年、かうぶり得たるなりけり。

「いと好きたる者なれば、かの入道の遺言破りつべき心はあらむかし」

「何人の住むにか」

と問ひたまへば、御供なる人、

「これなむ、なにがし僧都の、二年籠もりはべる方にはべるなる」

「心恥づかしき人住むなる所にこそあなれ。あやしうも、あまりやつしけるかな。聞きもこそすれ」などのたまふ。

清げなる童などあまた出で来て、闕伽たてまつり、花折りなどするもあらはに見ゆ。

「かしこに、女こそありけれ」

「僧都は、よも、さやうには、据ゑたまはじを」

「いかなる人ならむ」

と口々言ふ。下りて覗くもあり。

「をかしげなる女子ども、若き人、童女なむ見ゆる」と言ふ。

君は、行ひしたまひつつ、日たくるままに、いかならむと思したるを、

「とかう紛らはさせたまひて、思し入れぬなむ、よくはべる」

と聞こゆれば、後への山に立ち出でて、京の方を見たまふ。はるかに霞みわたりて、四方の梢そこはかとなう煙りわたれるほど、

「絵にいとよくも似たるかな。かかる所に住む人、心に思ひ残すことはあらじかし」とのたまへば、

「これは、いと浅くはべり。人の国などにはべる海、山のありさまなどを御覧せさせてはべらば、いかに、御絵いみじうまさらせたまはむ。富士の山、なにがしの嶽」

など、語りきこゆるもあり。また西国のおもしろき浦々、磯の上を言ひ続けるもありて、よろづに紛らはしきこゆ。

「近き所には、播磨の明石の浦こそ、なほことにはべれ。何の至り深き隈はなけれど、ただ、海の面を見わたしたるほどなむ、あやしく異所に似ず、ゆほ

わらは病にわづらひたまひて、よろづにまじなひ加持など参らせたまへど、しるしなくて、あまたたびおこりたまひければ、ある人、「北山になむ、なにがし寺といふ所に、かしこき行ひ人はべる。去年の夏も世におこりて、人びとまじなひわづらひしを、やがてとどむるたぐひ、あまたはべりき。ししこらかしつる時はうたてはべるを、とくこそ試みさせたまはめ」など聞こゆれば、召しに遣はしたるに、「老いかがりて、室の外にもまかです」と申したれば、「いかがはせむ。いと忍びてものせむ」とのたまひて、御供にむつましき四、五人ばかりして、まだ暁におはす。

やや深う入る所なりけり。三月のつごもりなれば、京の花盛りはみな過ぎにけり。山の桜はまだ盛りにて、入りもておはするままに、霞のたたずまひもをかしう見ゆれば、かかるありさまならひたまはず、所狭き御身にて、めづらしう思されけり。

寺のさまもいとあはれなり。峰高く、深き巖屋の中にぞ、聖入りゐたりける。登りたまひて、誰とも知らせたまはず、いといたうやつれたまへれど、しるき御さまなれば、

「あな、かしこや。一日、召しはべりしにやおはしますらむ。今は、この世のことを思ひたまへねば、験方の行ひも捨て忘れてはべるを、いかで、かうおはしましつらむ」

と、おどろき騒ぎ、うち笑みつつ見たてまつる。いと尊き大徳なりけり。さるべきもの作りて、すかせたてまつり、加持など参るほど、日高くさし上がりぬ。

すこし立ち出でつつ見渡したまへば、高き所にて、ここかしこ、僧坊どもあらはに見おろさるる、ただこのつづら折の下に、同じ小柴なれど、うるはしくし渡して、清げなる屋、廊など続けて、木立いとよしあるは、

若 紫

若

紫

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文
(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

この家主人ぞ、西の京の乳母の女なりける。三人その子はありて、右近は他人なりければ、「思ひ隔てて、御ありさまを聞かせぬなりけり」と、泣き恋ひけり。右近はた、かしかましく言ひ騒がむを思ひて、君も今さらに漏らさじと忍びたまへば、若君の上をだにえ聞かず、あさましく行方なくて過ぎゆく。

君は、「夢をだに見ばや」と、思しわたるに、この法事したまひて、またの夜、ほのかに、かのありし院ながら、添ひたりし女のさまも同じやうにて見えければ、「荒れたりし所に住みけむ物の、我に見入れけむたよりに、かくなりぬること」と、思し出づるにもゆゆしくなむ。

伊予介、神無月の朔日ごろに下る。女房の下らむにとて、たむけ心ことにせさせたまふ。また、内々にもわざとしたまひて、こまやかにをかきさまなる櫛、扇多くして、幣などわざとがましくて、かの小桂も遣はず。

「逢ふまでの形見ばかりと見しほどに　　ひたすら袖の朽ちにけるかな」
こまかなることどもあれど、うるさければ書かず。

御使、帰りにけれど、小君して、小桂の御返りばかりは聞こえさせたり。

「蝉の羽もたちかへてける夏衣　　かへすを見てもねは泣かれけり」

「思へど、あやしう人に似ぬ心強きにても、ふり離れぬるかな」と思ひ続けたまふ。今日ぞ冬立つ日なりけるも、しるく、うちしぐれて、空の気色いとあはれなり。眺め暮らしたまひて、

「過ぎにしも今日別るるも二道に　　行く方知らぬ秋の暮かな」

なほ、かく人知れぬことは苦しかりけりと、思し知りぬらむかし。かやうのくぐだだしきことは、あながちに隠ろへ忍びたまひしもいとほしくて、みな漏らしとどめたるを、「など、帝の御子ならむからに、見む人さへ、かたほならずものほめがちなる」と、作りごとめきてとりなす人ものしたまひければなむ。あまりもの言ひさがなき罪、さりどころなく。

に、憎からず。なほ「こりずまに、またもあだ名立ちぬべき」御心のすさびなめり。

かの人の四十九日、忍びて比叡の法華堂にて、事そがず、装束よりはじめて、さるべきものども、こまかに、誦経などせさせたまひぬ。経、仏の飾りまでおろかならず、惟光が兄の阿闍梨、いと尊き人にて、二なうしけり。

御書の師にて、睦しく思す文章博士召して、願文作らせたまふ。その人となって、あはれと思ひし人のはかなきさまになりたるを、阿弥陀仏に譲りきこゆるよし、あはれげに書き出でたまへれば、

「ただかくながら、加ふべきことはべらざめり」と申す。

忍びたまへど、御涙もこぼれて、いみじく思したれば、

「何人ならむ。その人と聞こえもなく、かう思し嘆かすばかりなりけむ宿世の高さ」

と言ひけり。忍びて調ぜさせたまへりける装束の袴を取り寄せさせたまひて、

「泣く泣くも今日は我が結ふ下紐を　いづれの世にかとけて見るべき」

「このほどまでは漂ふなるを、いづれの道に定まりて赴くらむ」と思ほしやりつつ、念誦をいとあはれにしたまふ。頭中将を見たまふにも、あいなく胸騒ぎて、かの撫子の生ひ立つありさま、聞かせまほしけれど、かことに怖ぢて、うち出でたまはず。

かの夕顔の宿りには、いづ方にと思ひ惑へど、そのままにえ尋ねきこえず。右近だに訪れねば、あやしと思ひ嘆きあへり。確かならねど、けはひをさばかりにやと、ささめきしかば、惟光をかこちけれど、いとかけ離れ、気色なく言ひなして、なほ同じごと好き歩きければ、いとど夢の心地して、「もし、受領の子どもの好き好きしきが、頭の君に怖ぢきこえて、やがて、率て下りにけるにや」とぞ、思ひ寄りける。

を聞きて、さすがにうち嘆きけり。遠く下りなどするを、さすがに心細ければ、思し忘れぬるか、試みに、

「承り、悩むを、言に出でては、えこそ、

問はぬをもなどか、問はでほどふるに　いかばかりかは思ひ乱るる　『益田』
はまことになむ」

と聞こえたり。めづらしきに、これもあはれ忘れたまはず。

「生けるかひなきや、誰が言はましことにか。

空蟬の世は憂きものと知りにしを　また言の葉にかかる命よ　はかなしや」
と、御手もうちわななかるるに、乱れ書きたまへる、いとどうつくしげなり。
なほ、かのもぬけを忘れたまはぬを、いとほしうもをかしうも思ひけり。

かやうに憎からずは、聞こえ交はせど、け近くとは思ひよらず、さすがに、
言ふかひならずは見えたてまつりてやみなむ、と思ふなりけり。

かの片つ方は、蔵人少将をなむ通はす、と聞きたまふ。「あやしや。いかに
思ふらむ」と、少将の心のうちもいとほしく、また、かの人の気色もゆかしけ
れば、小君して、「死に返り思ふ心は、知りたまへりや」と言ひ遣はす。

「ほのかにも軒端の萩を結ばずは　露のかことを何にかけまし」

高やかなる萩に付けて、「忍びて」とのたまへれど、「取り過ちて、少将も
見つけて、我なりけりと思ひあはせば、さりとも、罪ゆるしてむ」と思ふ、御
心おごりぞ、あいなかりける。

少将のなき折に見すれば、心憂しと思へど、かく思し出でたるも、さすがに
て、御返り、口ときばかりをかことにて取らす。

「ほのめかす風につけても下萩の　半ばは霜にむすぼほれつつ」

手は悪しげなるを、紛らはしさればみて書いたるさま、品なし。火影に見し
顔、思し出でらる。「うちとけで向ひゐたる人は、え疎み果つまじきさまもし
たりしかな。何の心ばせありげもなく、さうどき誇りたりしよ」と思し出づる

づるも恥づかし。竹の中に家鳩といふ鳥の、ふつつかに鳴くを聞きたまひて、かのありし院にこの鳥の鳴きしを、いと恐ろしと思ひたりしさまの、面影にらうたく思し出でらるれば、

「年はいくつにかものしたまひし。あやしく世の人に似ず、あえかに見えたまひしも、かく長かるまじくてなりけり」とのたまふ。

「十九にやなりたまひけむ。右近は、亡くなりける御乳母の捨て置きてはべりければ、三位の君のらうたがりたまひて、かの御あたり去らず、生ほしたてたまひしを思ひたまへ出づれば、いかでか世にはべらむずらむ。いとしも人にと、悔しくなむ。ものはかなげにもものしたまひし人の御心を、頼もしき人にて、年ごろならひはべりけること」と聞こゆ。

「はかなびたるこそは、らうたけれ。かしこく人になびかぬ、いと心づきなきわざなり。自らはかばかしくすぐよかならぬ心ならひに、女はただやはらかに、とりはづして人に欺かれぬべきが、さすがにもものづつみし、見む人の心には従はむなむ、あはれにて、我が心のままにとり直して見むに、なつかしくおぼゆべき」などのたまへば、

「この方の御好みには、もて離れたまはざりけり、と思ひたまふるにも、口惜しくはべるわざかな」とて泣く。

空のうち曇りて、風冷やかなるに、いといたく眺めたまひて、

「見し人の煙を雲と眺むれば　夕べの空もむつまじきかな」

と独りごちたまへど、えさし答へも聞こえず。かやうにて、おはせましかば、と思ふにも、胸塞がりておぼゆ。耳かしかましかりし砧の音を、思し出づるさへ恋しくて、「正に長き夜」とうち誦じて、臥したまへり。

かの、伊予の家の小君、参る折あれど、ことにありしやうなる言伝てもしたまはねば、憂しと思し果てにけるを、いとほしと思ふに、かくわづらひたまふ

命さへ堪へたまはずなりにしのち、はかなきものたよりにて、頭中将なむ、まだ少将にもものしたまひし時、見初めたてまつらせたまひて、三年ばかりは、志あるさまに通ひたまひしを、去年の秋ごろ、かの右の大殿より、いと恐ろしきことの聞こえ参で来しに、物怖ぢをわりなくしたまひし御心に、せむかたなく思し怖ぢて、西の京に、御乳母住みはべる所になむ、はひ隠れたまへりし。それもと見苦しきに、住みわびたまひて、山里に移ろひなむと思したりしを、今年よりは塞がりける方にはべりければ、違ふとて、あやしき所にもものしたまひしを、見あらはされたてまつりぬることと、思し嘆くめりし。世の人に似ず、ものづつみをしたまひて人に物思ふ気色を見えむを、恥づかしきものにしたまひて、つれなくのみもてなして、御覽ぜられたてまつりたまふめりしか」と、語り出づるに、「さればよ」と、思しあはせて、いよいよあはれまさりぬ。

「幼き人惑はしたりと、中将の愁へしは、さる人や」と問ひたまふ。

「しか。一昨年 of 春ぞ、ものしたまへりし。女にて、いとらうたげになむ」と語る。

「さて、いづこにぞ。人にさとは知らせで、我に得させよ。あとはかなく、いみじと思ふ御形見に、いとうれしかるべくなむ」とのたまふ。「かの中将にも伝ふべけれど、言ふかひなきかこと負ひなむ。とぎまかうぎまにつけて、育まむに咎あるまじきを。そのあらむ乳母などにも、ことぎまに言ひなして、ものせよかし」など語らひたまふ。

「さらば、いとうれしくなむはべるべき。かの西の京にて生ひ出でたまはむは、心苦しくなむ。はかばかしく扱ふ人なしとて、かしこに」など聞こゆ。

夕暮の静かなるに、空の気色いとあはれに、御前の前裁枯れ枯れに、虫の音も鳴きかれて、紅葉のやうやう色づくほど、絵に描きたるやうにおもしろきを見わたして、心よりほかにをかしき交じらひかなと、かの夕顔の宿りを思ひ出

九月二十日のほどにぞ、おこたり果てたまひて、いといたく面瘦せたまへれど、なかなか、いみじくなまめかしくて、ながめがちに、ねをのみ泣きたまふ。見たてまつりとがむる人もありて、「御物の怪なめり」など言ふもあり。

右近を召し出でて、のどやかなる夕暮に、物語などしたまひて、

「なほ、いとなむあやしき。などでその人と知られじとは、隠いたまへりしぞ。まことに海人の子なりとも、さばかりに思ふを知らで、隔てたまひしかばなむ、つらかりし」とのたまへば、

「などでか、深く隠しきこえたまふことははべらむ。いつのほどにてかは、何ならぬ御名のりを聞こえたまはむ。初めより、あやしうおぼえぬさまなりし御ことなれば、『現ともおぼえずなむある』とのたまひて、『御名隠しも、さばかりにこそは』と聞こえたまひながら、『なほざりにこそ紛らはしたまふらめ』となむ、憂きことに思したりし」と聞こゆれば、

「あいなかりける心比べどもかな。我は、しか隔つる心もなかりき。ただ、かやうに人に許されぬ振る舞ひをなむ、まだ慣らはぬことなる。内に諫めのたまはするをはじめ、つつむこと多かる身にて、はかなく人にたはぶれごとを言ふも、所狭う、取りなしうるさき身のありさまになむあるを、はかなかりし夕べより、あやしう心にかかりて、あながちに見たてまつりしも、かかるべき契りこそはものしたまひけめと思ふも、あはれになむ。またうち返し、つらうおぼゆる。かう長かるまじきにては、など、さしも心に染みて、あはれとおぼえたまひけむ。なほ詳しく語れ。今は、何ごとを隠すべきぞ。七日七日に仏描かしても、誰が為とか、心のうちにも思はむ」とのたまへば、

「何か、隔てきこえさせはべらむ。自ら、忍び過ぐしたまひしことを、亡き御うしろに、口さがなくやは、と思うたまふばかりになむ。

親たちは、はや亡せたまひにき。三位中将となむ聞こえし。いとらうたきものに思ひきこえたまへりしかど、我が身のほどの心もとなさを思すめりしに、

りなし。御祈り、方々に隙なくのしる。祭、祓、修法など、言ひ尽くすべくもあらず。世にたぐひなくゆゆしき御ありさまなれば、世に長くおはしますまじきにやと、天の下の人の騒ぎなり。

苦しき御心地にも、かの右近を召し寄せて、局など近くたまひて、さぶらはせたまふ。惟光、心地も騒ぎ惑へど、思ひのどめて、この人のたづきなしと思ひたるを、もてなし助けつつさぶらはす。

君は、いささか隙ありて思さるる時は、召し出でて使ひなどすれば、ほどなく交じらひつきたり。服、いと黒くして、容貌などよからねど、かたはに見苦しからぬ若人なり。

「あやしう短かかりける御契りにひかされて、我も世にえあるまじきなめり。年ごろの頼み失ひて、心細く思ふらむ慰めにも、もしながらへば、よろづに育まむとこそ思ひしか、ほどなくまたたち添ひぬべきが、口惜しくもあるべきかな」

と、忍びやかにのたまひて、弱げに泣きたまへば、言ふかひなきことをばおきて、「いみじく惜し」と思ひきこゆ。

殿のうちの人、足を空にて思ひ惑ふ。内より、御使、雨の脚よりもけにしげし。思し嘆きおはしますを聞きたまふに、いとかたじけなくて、せめて強く思しなる。大殿も経営したまひて、大臣、日々に渡りたまひつつ、さまさまのことをせさせたまふ、しるしにや、二十余日、いと重くわづらひたまひつれど、ことなる名残のこらず、おこたるさまに見えたまふ。

穢らひ忌みたまひしも、一つに満ちぬる夜なれば、おぼつかながらせたまふ御心、わりなくて、内の御宿直所に参りたまひなす。大殿、我が御車にて迎へたてまつりたまひて、御物忌なにやと、むつかしう慎ませたてまつりたまふ。我にもあらず、あらぬ世によみがへりたるやうに、しばしはおぼえたまふ。

ひ参りなむ」と言ふ。

「道理なれど、さなむ世の中はある。別れと言ふもの、悲しからぬはなし。とあるもかかるも、同じ命の限りあるものになむある。思ひ慰めて、我を頼め」と、のたまひこしらへて、「かく言ふ我が身こそは、生きとまるまじき心地すれ」

とのたまふも、頼もしげなしや。

惟光、「夜は、明け方になりはべりぬらむ。はや帰らせたまひなむ」

と聞こゆれば、返りみのみせられて、胸もつと塞がりて出でたまふ。

道いと露けきに、いとどしき朝霧に、いづこともなく惑ふ心地したまふ。ありしながらうち臥したりつるさま、うち交はしたまへりしが、我が御紅の御衣の着られたりつるなど、いかなりけむ契りにかと道すがら思さる。御馬にも、はかばかしく乗りたまふまじき御さまなれば、また、惟光添ひ助けておはしまさするに、堤のほどにて、御馬よりすべり下りて、いみじく御心地惑ひければ、「かかる道の空にて、はふれぬべきにやあらむ。さらに、え行き着くまじき心地なむする」

とのたまふに、惟光心地惑ひて、「我がはかばかしくは、さのたまふとも、かかる道に率て出でたてまつるべきかは」と思ふに、いと心あわたたしければ、川の水に手を洗ひて、清水の観音を念じたてまつりても、すべなく思ひ惑ふ。君も、しひて御心を起こして、心のうちに仏を念じたまひて、また、とかく助けられたまひてなむ、二条院へ帰りたまひける。

あやしう夜深き御歩きを、人びと、「見苦しきわざかな。このごろ、例よりも静心なき御忍び歩きの、しきるなかにも、昨日の御気色の、いと悩ましう思したりしに。いかでかく、たどり歩きたまふらむ」と、嘆きあへり。

まことに、臥したまひぬるままに、いといたく苦しがりたまひて、二、三日になりぬるに、むげに弱るやうにしたまふ。内にも、聞こしめし、嘆くこと限

も、危かりし物懲りに、いかにせむと思しわづらへど、なほ悲しきのやる方なく、「ただ今の骸を見では、またいつの世にかありし容貌をも見む」と、思念じて、例の大夫、隨身を具して出でたまふ。

道遠くおぼゆ。十七日の月さし出でて、河原のほど、御前駆の火もほのかるに、鳥辺野の方など見やりたるほどなど、ものむつかしきも、何ともおぼえたまはず、かき乱る心地したまひて、おはし着きぬ。

辺りさへすごきに、板屋のかたはらに堂建てて行へる尼の住まひ、いとあはれなり。御燈明の影、ほのかに透きて見ゆ。その屋には、女一人泣く声のみして、外の方に、法師ばら二、三人物語しつつ、わざとの声立てぬ念仏ぞする。寺々の初夜も、みな行ひ果てて、いとしめやかなり。清水の方ぞ、光多く見え、人のけはひもしげかりける。この尼君の子なる大徳の声尊くて、経うち読みたるに、涙の残りなく思さる。

入りたまへれば、火取り背けて、右近は屏風隔てて臥したり。いかにわびしからむと、見たまふ。恐ろしきけもおぼえず、いとらうたげなるさまして、まだいささか変りたるところなし。手をとらへて、

「我に、今一度、声をだに聞かせたまへ。いかなる昔の契りにかありけむ、しばしのほどに、心を尽くしてあはれに思ほえしを、うち捨てて、惑はしたまふが、いみじきこと」

と、声も惜しまず、泣きたまふこと、限りなし。

大徳たちも、誰とは知らぬに、あやしと思ひて、皆、涙落としけり。

右近を、「いぎ、二条へ」とのたまへど、

「年ごろ、幼くはべりしより、片時たち離れたてまつらず、馴れきこえつる人に、にはかに別れたてまつりて、いづこにか帰りはべらむ。いかになりたまひにきとか、人にも言ひはべらむ。悲しきことをばさるものにて、人に言ひ騒がれはべらむが、いみじきこと」と言ひて、泣き惑ひて、「煙にたぐひて、慕

と、語りきこゆるままに、いといみじと思して、

「我も、いと心地悩ましく、いかなるべきにかとなむおぼゆる」とのたまふ。

「何か、さらに思ほしものせさせたまふ。さるべきにこそ、よろづのことはべらめ。人にも漏らさじと思うたまふれば、惟光おり立ちて、よろづはものはべる」など申す。

「さかし。さ皆思ひなせど、浮かびたる心のすさびに、人をいたづらになしつるかごと負ひぬべきが、いとからきなり。少将の命婦などにも聞かすな。尼君ましてかやうのことなど、諫めらるるを、心恥づかしくなむおぼゆべき」と、口かためたまふ。

「さらぬ法師ばらなどにも、皆、言ひなすさま異にはべる」と聞こゆるにぞ、かかりたまへる。

ほの聞く女房など、「あやしく、何ごとならむ、穢らひのよしのたまひて、内にも参りたまはず、また、かくささめき嘆きたまふ」と、ほのぼのあやしがる。

「さらに事なくしなせ」と、そのほどの作法のたまへど、

「何か、ことごとしくすべきにもはべらず」

とて立つが、いと悲しく思さるれば、

「便なしと思ふべけれど、今一度、かの亡骸を見ざらむが、いといぶせかるべきを、馬にてもものせむ」

とのたまふを、いとたいだいしきこととは思へど、

「さ思されむは、いかがせむ。はや、おはしまして、夜更けぬ先に帰らせおはしませ」

と申せば、このごろの御やつれにまうけたまへる、狩の御装束着替へなどして出でたまふ。

御心地かきくらし、いみじく堪へがたければ、かくあやしき道に出で立ちて

などのたまふ。中将、

「さらば、さるよしをこそ奏しはべらめ。昨夜も、御遊びに、かしこく求めたてまつらせたまひて、御気色悪しくはべりき」と聞こえたまひて、立ち返り、「いかなる行き触れにかからせたまふぞや。述べやらせたまふことこそ、まことと思うたまへられね」

と言ふに、胸つぶれたまひて、

「かく、こまかにはあらで、ただ、おぼえぬ穢らひに触れたるよしを、奏したまへ。いとこそたいだいしくはべれ」

と、つれなくのたまへど、心のうちには、言ふかひなく悲しきことを思すに、御心地も悩ましければ、人に目も見合せたまはず。蔵人弁を召し寄せて、まめやかにかかるよしを奏せさせたまふ。大殿などにも、かかることありて、え参らぬ御消息など聞こえたまふ。

日暮れて、惟光参れり。かかる穢らひありとのたまひて、参る人びとも、皆立ちながらまかづれば、人しげからず。召し寄せて、

「いかにぞ。今はと見果てつや」

とのたまふままに、袖を御顔に押しあてて泣きたまふ。惟光も泣く泣く、

「今は限りにこそはものしたまふめれ。長々と籠もりはべらむも便なきを、明日なむ、日よろしくはべれば、とかくの事、いと尊き老僧の、あひ知りてはべるに、言ひ語らひつけはべりぬる」と聞こゆ。

「添ひたりつる女はいかに」とのたまへば、

「それなむ、また、え生くまじくはべるめる。我も後れじと惑ひはべりて、今朝は谷に落ち入りぬとなむ見たまへつる。』かの故里人に告げやらむ」と申せど、『しばし、思ひしづめよ、と。ことのさま思ひめぐらして』となむ、こしらへおきはべりつる」

とて、右近を添へて乗すれば、徒歩より、君に馬はたてまつりて、くくり引き上げなどして、かつは、いとあやしく、おぼえぬ送りなれど、御気色のいみじきを見たてまつれば、身を捨てて行くに、君は物もおぼえたまはず、我かさまにて、おはし着きたり。

人びと、「いづこより、おはしますにか。なやましげに見えさせたまふ」など言へど、御帳の内に入りたまひて、胸をおさへて思ふに、いといみじければ、「などで、乗り添ひて行かざりつらむ。生き返りたらむ時、いかなる心地せむ。見捨てて行きあかれにけりと、つらくや思はむ」と、心惑ひのなかにも、思ほすに、御胸せきあぐる心地したまふ。御頭も痛く、身も熱き心地して、いと苦しく、惑はれたまへば、「かくはかなくて、我もいたづらになりぬるなめり」と思す。

日高くなれど、起き上がりたまはねば、人びとあやしがりて、御粥などそそのかしきこゆれど、苦しくて、いと心細く思さるるに、内より御使あり。昨日、え尋ね出でたてまつらざりしより、おぼつかながらせたまふ。大殿の君達参りたまへど、頭中将ばかりを、「立ちながら、こなたに入りたまへ」とのたまひて、御簾の内ながらのたまふ。

「乳母にてはべる者の、この五月のころほひより、重くわづらひはべりしが、頭剃り忌むこと受けなどして、そのしるしにや、よみがへりたりしを、このごろ、またおこりて、弱くなむなりにたる、『今一度、とぶらひ見よ』と申したりしかば、いときなきよりなづきひし者の、今はのきぎみに、つらしとや思はむ、と思うたまへてまかれりしに、その家なりける下人の、病しけるが、にはかに出であへで亡くなりけるを、怖ぢ憚りて、日を暮らしてなむ取り出ではべりけるを、聞きつけはべりしかば、神事なるころ、いと不便なること、と申すうたまへかしこまりて、え参らぬなり。この暁より、しはぶき病みにやはらむ、頭いと痛くて苦しくはべれば、いと無礼にて聞こゆること」

の事どももせさせむ。願なども立てさせむとて、阿闍梨ものせよ、と言ひつるは「とのたまふに、

「昨日、山へまかり上りにけり。まづ、いとめづらかなることにもはべるかな。かねて、例ならず御心地ものせさせたまふことやはべりつらむ」

「さることもなかりつ」とて、泣きたまふさま、いとをかしげにらうたく、見たてまつる人もいと悲しくて、おのれもよよと泣きぬ。

さいへど、年うちねび、世の中のとあることと、しほじみぬる人こそ、ものをりふしは頼もしかりけれ、いづれもいづれも若きどちにて、言はむ方もなけれど、

「この院守などに聞かせむことは、いと便なかるべし。この人一人こそ睦しくもあらめ、おのづから物言ひ漏らしつべき眷属も立ちまじりたらむ。まづ、この院を出でおはしましね」と言ふ。

「さて、これより人少ななる所はいかであらむ」とのたまふ。

「げに、さぞはべらむ。かの故里は、女房などの、悲しびに堪へず、泣き惑ひはべらむに、隣しげく、とがむる里人多くはべらむに、おのづから聞こえはべらむを、山寺こそ、なほかやうのこと、おのづから行きまじり、物紛るることとはべらめ」と、思ひまはして、「昔、見たまへし女房の、尼にてはべる東山の辺に、移したてまつらむ。惟光が父の朝臣の乳母にはべりし者の、みづはぐみて住みはべるなり。辺りは、人しげきやうにはべれど、いとかがこかにはべり」と聞こえて、明けはなるるほどの紛れに、御車寄す。

この人をえ抱きたまふまじければ、上席におしくくみて、惟光乗せたてまつる。いとささやかにて、疎ましげもなく、らうたげなり。したたかにしもえせねば、髪はこぼれ出でたるも、目くれ惑ひて、あさましう悲し、と思せば、なり果てむさまを見むと思せど、

「はや、御馬にて、二条院へおはしまさむ。人騒がしくなりはべらぬほどに」

ゆ。うち思ひめぐらすに、こなたかなた、けどほく疎ましきに、人声はせず、「などで、かくはかなき宿りは取りつるぞ」と、悔しさもやらむ方なし。

右近は、物もおぼえず、君につと添ひたてまつりて、わななき死ぬべし。「また、これもいかならむ」と、心そらにて捉へたまへり。我一人さかしき人にて、思しやる方ぞなきや。

火はほのかにまたたきて、母屋の際に立てたる屏風の上、ここかしこの隈々しくおぼえたまふに、物の足音、ひしひしと踏み鳴らしつつ、後ろより寄り来る心地す。「惟光、とく参らなむ」と思す。ありか定めぬ者にて、ここかしこ尋ねけるほどに、夜の明くるほどの久しきは、千夜を過ぐさむ心地したまふ。

からうして、鶏の声はるかに聞こゆるに、「命をかけて、何の契りに、かかる目を見るらむ。我が心ながら、かかる筋に、おほけなくあるまじき心の報いに、かく、来し方行く先の例となりぬべきことはあるなめり。忍ぶとも、世にあること隠れなくて、内に聞こし召さむをはじめて、人の思ひ言はむこと、よからぬ童べの口ずさびになるべきなめり。ありありて、をこがましき名をとるべきかな」と、思しめぐらす。

からうして、惟光朝臣参れり。夜中、暁といはず、御心に従へる者の、今宵しもさぶらはで、召しにさへおこたりつるを、憎しと思すものから、召し入れて、のたまひ出でむことのおへなきに、ふとも物言はれたまはず。右近、大夫のけはひ聞くに、初めよりのこと、うち思ひ出でられて泣くを、君もえ堪へたまはで、我一人さかしがり抱き持たまへりけるに、この人に息をのべたまひてぞ、悲しきことも思されける、とばかり、いといたく、えもとどめず泣きたまふ。

ややためらひて、「ここに、いとあやしきことのあるを、あさましと言ふにもあまりてなむある。かかるとみの事には、誦経などをこそはすなれとて、そ

面影に見えて、ふと消え失せぬ。

「昔の物語などにこそ、かかることは聞け」と、いとめづらかにむくつけけれど、まづ、「この人いかになりぬるぞ」と思ほす心騒ぎに、身の上も知られたまはず、添ひ臥して、「やや」と、おどろかしたまへど、ただ冷えに冷え入りて、息は疾く絶え果てにけり。言はむかたなし。頼もしく、いかにと言ひ触れたまふべき人もなし。法師などをこそは、かかる方の頼もしきものには思すべけれど。さこそ強がりたまへど、若き御心にて、いふかひなくなりぬるを見たまふに、やるかたなくて、つと抱きて、

「あが君、生き出でたまへ。いといみじき目な見せたまひそ」
とのたまへど、冷え入りにたれば、けはひものうとくなりゆく。

右近は、ただ「あな、むつかし」と思ひける心地みな冷めて、泣き惑ふさまいといみじ。

南殿の鬼の、なにがしの大臣脅やかしけるたとひを思し出でて、心強く、「さりとも、いたづらになり果てたまはじ。夜の声はおどろおどろし。あなかま」

と諫めたまひて、いとあわたたしきに、あきれたる心地したまふ。
この男を召して、

「ここに、いとあやしう、物に襲はれたる人のなやましげなるを、ただ今、惟光朝臣の宿る所にまかりて、急ぎ参るべきよし言へ、と仰せよ。なにがし阿闍梨、そこにもものするほどならば、ここに来べきよし、忍びて言へ。かの尼君などの聞かむに、おどろおどろしく言ふな。かかる歩き許さぬ人なり」

など、物のたまふやうなれど、胸塞がりて、この人を空しくしなしてむことのいみじく思さるるに添へて、大方のむくむくしき、たとへむ方なし。

夜中も過ぎにけむかし、風のやや荒々しう吹きたるは。まして、松の響き、木深く聞こえて、気色ある鳥のから声に鳴きたるも、「梟」はこれにやとおぼ

「紙燭さして参れ。『隨身も、弦打して、絶えず声づくれ』と仰せよ。人離れたる所に、心とけて寝ぬるものか。惟光朝臣の来たりつらむは」と、問はせたまへば、

「さぶらひつれど、仰せ言もなし。暁に御迎へに参るべきよし申してなむ、まかではべりぬる」と聞こゆ。この、かう申す者は、滝口なりければ、弓弦いとつきづきしくうち鳴らして、「火あやふし」と言ふ言ふ、預りが曹司の方里去ぬなり。内を思しやりて、「名対面は過ぎぬらむ、滝口の宿直奏し、今こそ」と、推し量りたまふは、まだ、いたう更けぬにこそは。

帰り入りて、探りたまへば、女君はさながら臥して、右近はかたはらにうつぶし臥したり。

「こはなぞ。あな、もの狂ほしの物怖ぢや。荒れたる所は、狐などやうのもの、人を脅やかさむとて、け恐ろしう思はするならむ。まろあれば、さやうのものには脅されじ」とて、引き起こしたまふ。

「いとうたて、乱り心地の悪しうはべれば、うつぶし臥してはべるや。御前にこそわりなく思さるらめ」と言へば、

「そよ。なかうは」とて、かい探りたまふに、息もせず。引き動かしたまへど、なよなよとして、我にもあらぬさまなれば、「いといたく若びたる人にて、物にけどられぬるなめり」と、せむかたなき心地したまふ。

紙燭持て参れり。右近も動くべきさまにもあらねば、近き御几帳を引き寄せ、

「なほ持て参れ」

とのたまふ。例ならぬことにて、御前近くもえ参らぬ、つつまじきに、長押にもえ上らず。

「なほ持て来や、所に従ひてこそ」

とて、召し寄せて見たまへば、ただこの枕上に、夢に見えつる容貌したる女、

も苦しき御ありさまを、すこし取り捨てばや」と、思ひ比べられたまひける。宵過ぐるほど、すこし寝入りたまへるに、御枕上に、いとをかしげなる女みて、

「己がいとめでたしと見たてまつるをば、尋ね思ほさで、かく、ことなることなき人を率ておはして、時めかしたまふこそ、いとめざましくつらけれ」

とて、この御かたはらの人をかき起こさむとす、と見たまふ。

物に襲はるる心地して、おどろきたまへれば、火も消えにけり。うたて思さるれば、太刀を引き抜きて、うち置きたまひて、右近を起こしたまふ。これも恐ろしと思ひたるさまにて、参り寄れり。

「渡殿なる宿直人起こして、『紙燭さして参れ』と言へ」とのたまへば、

「いかでかまからむ。暗うて」と言へば、

「あな、若々し」と、うち笑ひたまひて、手をたたきたまへば、山彦の答ふる声、いとうとまし。人え聞きつけて参らぬに、この女君、いみじくわななきまどひて、いかさまにせむと思へり。汗もしとどになりて、我かの気色なり。

「物怖ぢをなむわりなくせさせたまふ本性にて、いかに思さるるにか」と、

右近も聞こゆ。「いとか弱くて、昼も空をのみ見つるものを、いとほし」と思して、

「我、人を起こさむ。手たたけば、山彦の答ふる、いとうるさし。ここに、しばし、近く」

とて、右近を引き寄せたまひて、西の妻戸に出でて、戸を押し開けたまへれば、渡殿の火も消えにけり。

風すこしうち吹きたるに、人は少なくて、さぶらふ限りみな寝たり。この院の預りの子、むつましく使ひたまふ若き男、また上童一人、例の隨身ばかりぞありける。召せば、御答へして起きたれば、

とのたまへば、後目に見おこせて、

「光ありと見し夕顔のうは露は たそかれ時のそら目なりけり」

とほのかに言ふ。をかしと思しなす。げに、うちとけたまへるさま、世になく、所から、まいてゆゆしきまで見えたまふ。

「尽きせず隔てたまへるつらさに、あらはさじと思ひつるものを。今だに名のりしたまへ。いとむくつけし」

とのたまへど、「海人の子なれば」とて、さすがにうちとけぬさま、いとあいだれたり。

「よし、これも我からなめり」と、怨みかつは語らひ、暮らしたまふ。

惟光、尋ねきこえて、御くだものなど参らす。右近が言はむこと、さすがにいとほしければ、近くもえさぶらひ寄らず。「かくまでたどり歩きたまふ、をかしう、さもありぬべきありさまにこそは」と推し量るにも、「我がいとよく思ひ寄りぬべかりしことを、譲りきこえて、心ひろさよ」など、めざましう思ひをる。

たとしへなく静かなる夕べの空を眺めたまひて、奥の方は暗うものむつかしと、女は思ひたれば、端の簾を上げて、添ひ臥したまへり。夕映えを見交はして、女も、かかるありさまを、思ひのほかにあやしき心地はしながら、よろづの嘆き忘れて、すこしうちとけゆく気色、いとらうたし。つと御かたはらに添ひ暮らして、物をいと恐ろしと思ひたるさま、若う心苦し。格子とく下ろしたまひて、大殿油参らせて、「名残りなくなりたる御ありさまにて、なほ心のうちの隔て残したまへるなむつらき」と、恨みたまふ。

「内に、いかに求めさせたまふらむを、いづこに尋ぬらむ」と、思しやりて、かつは、「あやしの心や。六条わたりにも、いかに思ひ乱れたまふらむ。恨みられむに、苦しう、ことわりなり」と、いとほしき筋は、まづ思ひきこえたまふ。何心もなきさしむかひを、あはれと思すままに、「あまり心深く、見る人

とて、もの恐ろしうすごげに思ひたれば、「かのさし集ひたる住まひの慣らひならむ」と、をかしく思す。

御車入れさせて、西の対に御座などよそふほど、高欄に御車ひきかけて立ちたまへり。右近、艶なる心地して、来し方のことなども、人知れず思ひ出でけり。預りいみじく経営しありく気色に、この御ありさま知りはてぬ。

ほのぼのと物見ゆるほどに、下りたまひぬめり。かりそめなれど、清げにしつらひたり。

「御供に人もさぶらはざりけり。不便なるわぎかな」とて、むつまじき下家司にて、殿にも仕うまつる者なりければ、参りよりて、「さるべき人召すべきにや」など、申さすれど、

「ことさらに人來まじき隠れ家求めたるなり。さらに心よりほかに漏らすな」と口がためさせたまふ。

御粥など急ぎ参らせたれど、取り次ぐ御まかなひうち合はず。まだ知らぬことなる御旅寝に、「息長川」と契りたまふことよりほかのことなし。

日たくるほどに起きたまひて、格子手づから上げたまふ。いといたく荒れて、人目もなくはるばると見渡されて、木立いとうとましくものふりたり。け近き草木などは、ことに見所なく、みな秋の野らにて、池も水草に埋もれたれば、いとけうとげになりになる所かな。別納の方にぞ、曹司などして、人住むべかめれど、こなたは離れたり。

「けうとくもなりにける所かな。さりとて、鬼なども我をば見許してむ」とのたまふ。

顔はなほ隠したまへれど、女のいとつらしと思へれば、「げに、かばかりにて隔てあらむも、ことのさまに違ひたり」と思して、

「夕露に紐とく花は玉鉾の　　たよりに見えし縁にこそありけれ　　露の光や
いかに」

明け方も近うなりにけり。鶏の声などは聞こえて、御嶽精進にやあらむ、ただ翁びたる声にぬかづくぞ聞こゆる。起ち居のけはひ、堪へがたげに行ふ。いとあはれに、「朝の露に異ならぬ世を、何を貧る身の祈りにか」と、聞きたまふ。「南無当来導師」とぞ拝むなる。

「かれ、聞きたまへ。この世とのみは思はざりけり」と、あはれがりたまひて、

「優婆塞が行ふ道をしるべにて 来む世も深き契り違ふな」

長生殿の古き例はゆゆしくて、翼を交さむとは引きかへて、弥勒の世をかねたまふ。行く先の御頼め、いとこちたし。

「前の世の契り知らるる身の憂さに 行く末かねて頼みがたさよ」

かやうの筋なども、さるは、心もとなかめり。

いさよふ月に、ゆくりなくあくがれむことを、女は思ひやすらひ、とかくのたまふほど、にはかに雲隠れて、明け行く空いとをかし。はしたなきほどにならぬ先にと、例の急ぎ出でたまひて、軽らかにうち乗せたまへれば、右近ぞ乗りぬる。

そのわたり近きなにかしの院におはしまし着きて、預り召し出づるほど、荒れたる門の忍ぶ草茂りて見上げられたる、たとしへなく木暗し。霧も深く、露けきに、簾をさへ上げたまへれば、御袖もいたく濡れにけり。

「まだかやうなることを慣らはざりつるを、心尽くしなることにもありけるかな。

いにしへもかくやは人の惑ひけむ 我がまだ知らぬしののめの道

慣らひたまへりや」

とのたまふ。女、恥ぢらひて、

「山の端の心も知らで行く月は うはの空にて影や絶えなむ 心細く」

ぢかかやかむよりは、罪許されてぞ見えける。

ごほごほと鳴る神よりもおどろおどろしく、踏み轟かす唐臼の音も枕上とおぼゆる。「あな、耳かしかまし」と、これにぞ思さるる。何の響きとも聞き入れたまはず、いとあやしうめざましき音なひとのみ聞きたまふ。くだくだしきことのみ多かり。

白妙の衣うつ砧の音も、かすかにこなたかなた聞きわたされ、空飛ぶ雁の声、取り集めて、忍びがたきこと多かり。端近き御座所なりければ、遣戸を引き開けて、もろともに見出だしたまふ。ほどなき庭に、されたる呉竹、前栽の露は、なほかかる所も同じごときらめきたり。虫の声々乱りがはしく、壁のなかの蟋蟀だに間遠に聞き慣らひたまへる御耳に、さし当てたるやうに鳴き乱るるを、なかなかさまかへて思さるるも、御心ざし一つの浅からぬに、よろづの罪許さるるなめりかし。

白き袷、薄色のなよかなるを重ねて、はなやかならぬ姿、いとらうたげにあえかなる心地して、そこと取り立ててすぐれたることもなければ、細やかにたをたをとして、ものうち言ひたるけはひ、「あな、心苦し」と、ただいとらうたく見ゆ。心ばみたる方をすこし添へたらば、と見たまひながら、なほうちとけて見まほしく思さるれば、

「いざ、ただこのわたり近き所に、心安くて明かさむ。かくてのみは、いと苦しかりけり」とのたまへば、

「いかでか。にはかならむ」

と、いとおいらかに言ひてゐたり。この世のみならぬ契りなどまで頼めたまふに、うちとくる心ばへなど、あやしくやう変はりて、世馴れたる人とおぼえねば、人の思はむ所もえ憚りたまはで、右近を召し出でて、隨身を召させたまひて、御車引き入れさせたまふ。このある人びとも、かかる御心ざしのおろかならぬを見知れば、おぼめかしながら、頼みかけきこえたり。

「なほ、あやしう。かくのたまへど、世づかぬ御もてなしなれば、もの恐ろしくこそあれ」

と、いと若びて言へば、「げに」と、ほほ笑まれたまひて、
「げに、いづれか狐なるらむな。ただはかられたまへかし」

と、なつかしげにのたまへば、女もいみじくなびきて、さもありぬべく思ひたり。「世になく、かたはなることなりとも、ひたぶるに従ふ心は、いとあはれげなる人」と見たまふに、なほ、かの頭中将の常夏疑はしく、語りし心ざま、まづ思ひ出でられたまへど、「忍ぶるやうこそは」と、あながちにも問ひ出でたまはず。

気色ばみて、ふと背き隠るべき心ざまなどはなければ、「かれがれにとだえ置かむ折こそは、さやうに思ひ変ることもあらめ、心ながらも、すこし移ろふことあらむこそあはれなるべけれ」とさへ、思しけり。

八月十五夜、隈なき月影、隙多かる板屋、残りなく漏り来て、見慣らひたまはぬ住まひのさまも珍しきに、暁近くなりにはけるなるべし、隣の家々、あやしき賤の男の声々、目覚まして、

「あはれ、いと寒しや」

「今年こそ、なりはひにも頼むところすくなく、田舎の通ひも思ひかけねば、いと心細けれ。北殿こそ、聞きたまふや」

など、言ひ交はすも聞こゆ。

いとあはれなるおのがじしの営みに起き出でて、そそめき騒ぐもほどなきを、女いと恥づかしく思ひたり。

艶だち気色ばまむ人は、消えも入りぬべき住まひのさまなめりかし。されど、のどかに、つらきも憂きもかたはらいたきことも、思ひ入れたるさまならで、我がもてなしありさまは、いとあてはかにこめかしくて、またなくらうがはしき隣の用意なきを、いかなる事とも聞き知りたるさまならねば、なかなか、恥

ともの狂ほしく、さまで心とどむべきことのさまにもあらずと、いみじく思ひ
さましたまふに、人のけはひ、いとあさましくやはらかにおほどきて、もの深
く重き方はおくれて、ひたぶるに若びたるものから、世をまだ知らぬにもあら
ず。いとやむごとなきにはあるまじ、いづくにいとかうしもとまる心ぞ、と返
す返す思す。

いとことさらめきて、御装束をもやつれたる狩の御衣をたてまつり、さまを
変へ、顔をもほの見せたまはず、夜深きほどに、人をしづめて出で入りなどし
たまへば、昔ありけむものの変化めきて、うたて思ひ嘆かるれど、人の御けは
ひ、はた、手さぐりもしるべきわざなりければ、「誰ればかりにかはあらむ。
なほこの好き者のし出でつるわざなめり」と、大夫を疑ひながら、せめてつれ
なく知らず顔にて、かけて思ひよらぬさまに、たゆまずあざれありけば、いか
なることにかと心得がたく、女方もあやしうやう違ひたるもの思ひをなむしけ
る。

君も、「かくうらなくたゆめてはひ隠れなば、いづこをはかりとか、我も尋
ねむ。かりそめの隠れ処と、はた見ゆめれば、いづ方にもいづ方にも、移ろひ
ゆかむ日を、いつとも知らじ」と思すに、追ひまどはして、なのめに思ひなし
つべくは、ただかばかりのすさびにても過ぎぬべきことを、さらにさて過ぐし
てむと思されず。

人目を思して、隔ておきたまふ夜な夜などは、いと忍びがたく、苦しきま
でおぼえたまへば、「なほ誰れとなくて二条院に迎へてむ。もし聞こえありて
便なかるべきことなりとも、さるべきにこそは。我が心ながら、いとかく人に
しむことはなきを、いかなる契りにかはありけむ」など思ほしよる。

「いざ、いと心安き所にて、のどかに聞こえむ」
など、語らひたまへば、

ただ、我れどちと知らせて、物など言ふ若きおもとのはべるを、そらおぼれしてなむ、隠れまかり歩く。いとよく隠したりと思ひて、小さき子どもなどはべるが言誤りしつべきも、言ひ紛らはして、また人なきさまを強ひてつくりはべる」など、語りて笑ふ。

「尼君の訪ひにもせむついでに、かいま見せさせよ」とのたまひけり。かりにても、宿れる住ひのほどを思ふに、「これこそ、かの人の定め、あなづりし下の品ならめ。その中に、思ひの外にをかしきこともあらば」など、思すなりけり。

惟光、いささかのことも御心に違はじと思ふに、おのれも隈なき好き心にて、いみじくたばかりまどひ歩きつつ、しひておはしまさせ初めてけり。このほどのこと、くだくだしければ、例のもらしつ。

女、さしてその人と尋ね出でたまはねば、我も名のりをしたまはで、いとわりなくやつれたまひつつ、例ならず下り立ちありきたまふは、おろかに思されぬなるべし、と見れば、我が馬をばたてまつりて、御供に走りありく。

「懸想人のいとものげなき足もとを、見つけられてはべらむ時、からくもあるべきかな」とわぶれど、人に知らせたまはぬままに、かの夕顔のしるべせし隨身ばかり、さては、顔むげに知るまじき童一人ばかりぞ、率ておはしける。

「もし思ひよる気色もや」とて、隣に中宿をだにしたまはず。

女も、いとあやしく心得ぬ心地のみして、御使に人を添へ、暁の道をうかがはせ、御在処見せむと尋ぬれど、そこはかとなくまどはしつつ、さすがに、あはれに見ではえあるまじく、この人の御心にかかりたれば、便なく軽々しきことと、思ほし返しわびつつ、いとしばしばおはします。

かかる筋は、まめ人の乱るる折もあるを、いとめやすくしづめたまひて、人のとがめきこゆべき振る舞ひはしたまはざりつるを、あやしきまで、今朝のほど、昼間の隔ても、おぼつかなくなど、思ひわづらはれたまへば、かつは、い

つるあたりは、ほどほどにつけて、我がかなしと思ふ女を、仕うまつらせばやと願ひ、もしは、口惜しからずと思ふ妹など持たる人は、卑しきにても、なほ、この御あたりにさぶらはせむと、思ひ寄らぬはなかりけり。

まして、さりぬべきついでの御言の葉も、なつかしき御気色を見たてまつる人の、すこし物の心思ひ知るは、いかがはおろかに思ひきこえむ。明け暮れうちとけてしもおはせぬを、心もとなきことに思ふべかめり。

まことや、かの惟光が預かりのかいま見は、いとよく案内見とりて申す。

「その人とは、さらにえ思ひえはべらず。人にいみじく隠れ忍ぶる気色になむ見えはべるを、つれづれなるままに、南の半蔀ある長屋にわたり来つつ、車の音すれば、若き者どもの覗きなどすべかめるに、この主とおぼしきも、はひわたる時はべかめる。容貌なむ、ほのかなれど、いとらうたげにはべる。

一日、前駆追ひて渡る車のはべりしを、覗きて、童女の急ぎて、『右近の君こそ、まづ物見たまへ。中将殿こそ、これより渡りたまひぬれ』と言へば、また、よろしき大人出で来て、『あなかま』と、手かくものから、『いかでさは知るぞ、いで、見む』とて、はひ渡る。打橋だつものを道にてなむ通ひはべる。急ぎ来るものは、衣の裾を物に引きかけて、よろぼひ倒れて、橋よりも落ちぬべければ、『いで、この葛城の神こそ、さがしうしおきたれ』と、むつかりて、物覗きの心も冷めぬめりき。『君は、御直衣姿にて、御隨身どももありし。なにがし、くれがし』と数へしは、頭中将の隨身、その小舎人童をなむ、しるしに言ひはべりし』など聞こゆれば、

「たしかにその車をぞ見まし」

とのたまひて、「もし、かのあはれに忘れざりし人にや」と、思ほしよるも、いと知らまほしげなる御気色を見て、

「私の懸想もいとよくしおきて、案内も残るところなく見たまへおきながら、

秋にもなりぬ。人やりならず、心づくしに思し乱ることどもありて、大殿には、絶え間置きつつ、恨めしくのみ思ひ聞こえたまへり。

六条わたりにも、とけがたかりし御気色をおもむけ聞こえたまひて後、ひき返し、なのめならむはいとほしかし。されど、よそなりし御心惑ひのやうに、あながちなる事はなきも、いかなることにかと見えたり。

女は、いとものをあまりなるまで、思ししめたる御心ぎまにて、齢のほども似げなく、人の漏り聞かむに、いとどかくつらき御夜がれの寝覚め寝覚め、思ししをるること、いとさまざまなり。

霧のいと深き朝、いたくそそのかされたまひて、ねぶたげなる気色に、うち嘆きつつ出でたまふを、中將のおもと、御格子一間上げて、見たてまつり送りたまへ、とおぼしく、御几帳引きやりたれば、御頭もたげて見出だしたまへり。

前栽の色々乱れたるを、過ぎがてにやすらひたまへるさま、げにたぐひなし。廊の方へおはするに、中將の君、御供に参る。紫苑色の折にあひたる、羅の裳、鮮やかに引き結ひたる腰つき、たをやかになまめきたり。

見返りたまひて、隅の間の高欄に、しばし、ひき据ゑたまへり。うちとけたらぬもてなし、髪の下がりば、めざましくも、と見たまふ。

「咲く花に移るてふ名はつつめども　折らで過ぎ憂き今朝の朝顔　いかがすべき」

とて、手をとらへたまへれば、いと馴れてとく、

「朝霧の晴れ間も待たぬ気色にて　花に心を止めぬとぞ見る」
と、おほやけごとにぞ聞こえなす。

をかしげなる侍童の、姿このましよう、ことさらめきたる、指貫の裾、露けげに、花の中に混りて、朝顔折りて参るほどなど、絵に描かまほしげなり。

大方に、うち見たてまつる人だに、心とめたてまつらぬはなし。物の情け知らぬ山がつも、花の蔭には、なほやすらはまほしきにや、この御光を見たてま

うらもなく待ちきこえ顔なる片つ方人を、あはれと思さぬにしもあらねど、つれなくて聞きみたらむことの恥づかしければ、「まづ、こなたの心見果てて」と思すほどに、伊予介上りぬ。

まづ急ぎ参れり。舟路のしわざとて、すこし黒みやつれたる旅姿、いとふつつかに心づきなし。されど、人もいやしからぬ筋に、容貌などねびたれど、きよげにて、ただならず、気色よしづきてなどぞありける。

国の物語など申すに、「湯桁はいくつ」と、問はまほしく思せど、あいなくまばゆくて、御心のうちに思し出づることもさまざまなり。

「ものまめやかなる大人を、かく思ふも、げにをこがましく、うしろめたきわざなりや。げに、これぞ、なのめならぬ片はなべかりける」と、馬頭の諫め思し出でて、いとほしきに、「つれなき心はねたけれど、人のためは、あはれ」と思しなさる。

「娘をばさるべき人に預けて、北の方をば率て下りぬべし」と、聞きたまふに、ひとかたならず心あわたたしくて、「今一度はえあるまじきことにや」と、小君を語らひたまへど、人の心を合せたらむことにてだに、軽らかにえしも紛れたまふまじきを、まして、似げなきことに思ひて、今さらに見苦しかるべし、と思ひ離れたり。

さすがに、絶えて思ほし忘れなむことも、いと云ふかひなく、憂かるべきことに思ひて、さるべき折々の御答へなど、なつかしく聞こえつつ、なげの筆づかひにつけたる言の葉、あやしくうたげに、目とまるべきふし加へなどして、あはれと思しぬべき人のけはひなれば、つれなくねたきものの、忘れがたきに思す。

いま一方は、主強くなるとも、変らずうちとけぬべく見えしさまなるを頼みて、とかく聞きたまへど、御心も動かさずぞありける。

はかばかしくも申しはべらず。『いと忍びて、五月のころほひよりものしたまふ人なむあるべけれど、その人とは、さらに家の内の人にだに知らせず』となむ申す。時々、中垣のかいま見しはべるに、げに若き女どもの透影見えはべり。褶だつもの、かことばかり引きかけて、かしづく人はべるなめり。昨日、夕日のなごりなくさし入りてはべりしに、文書くとてゐてはべりし人の、顔こそいとよくはべりしか。もの思へるけはひして、ある人びとも忍びてうち泣くさまなどなむ、しるく見えはべる」

と聞こゆ。君うち笑みたまひて、「知らばや」と思ほしたり。

おぼえこそ重かるべき御身のほどなれど、御よはひのほど、人のなびきめできこえたるさまなど思ふには、好きたまはざらむも、情けなくさうぎうしかるべしかし、人のうけひかぬほどにてだに、なほ、さりぬべきあたりのことは、このましようおぼゆるものを、と思ひをり。

「もし、見たまへ得ることもやはべると、はかなきついで作り出でて、消息など遣はしたりき。書き馴れたる手して、口とく返り事などはべりき。いと口惜しうはあらぬ若人どもなむはべるめる」

と聞こゆれば、

「なほ言ひ寄れ。尋ね寄らでは、さうぎうしかりなむ」とのたまふ。

かの、下が下と、人の思ひ捨てし住まひなれど、その中にも、思ひのほかには口惜しからぬを見つけたらばと、めづらしく思ほすなりけり。

さて、かの空蟬のあさましくつれなきを、この世の人には違ひて思すに、おいらかならましかば、心苦しき過ちにてもやみぬべきを、いとねたく、負けてやみなむを、心にかからぬ折なし。かやうの並々までは思ほしかからざりつるを、ありし「雨夜の品定め」の後、いぶかしく思ほしなる品々あるに、いとど限なくなりぬる御心なめりかし。

「さらば、その宮仕人ななり。したり顔にももの馴れて言へるかな」と、「めざましかるべき際にやあらむ」と思せど、さして聞こえかかれる心の、憎からず過ぐしがたきぞ、例の、この方には重からぬ御心なめるかし。御畳紙にいたうあらぬさまに書き変へたまひて、

「寄りてこそそれかとも見めたそかれに　　ほのぼの見つる花の夕顔」
ありつる御隨身して遣はす。

まだ見ぬ御さまなりけれど、いとしく思ひあてられたまへる御側目を見過ぐさで、さしおどろかしけるを、答へたまはほど経ければ、なまはしたなきに、かくわざとめかしければ、あまえて、「いかに聞こえむ」など言ひしろふべかめれど、めざましと思ひて、隨身は参りぬ。

御前駆の松明ほのかにて、いと忍びて出でたまふ。半蔀は下ろしてけり。隙々より見ゆる灯の光、螢よりけにほのかにあはれなり。

御心ぎしの所には、木立前栽など、なべての所に似ず、いとどかに心にくく住みなしたまへり。うちとけぬ御ありさまなどの、気色ことなるに、ありつる垣根思ほし出でらるべくもあらずかし。

翌朝、すこし寝過ぐしたまひて、日さし出づるほどに出でたまふ。朝明の姿は、げに人のめできこえむも、ことわりなる御さまなりけり。

今日もこの蔀の前渡りしたまふ。来し方も過ぎたまひけむわたりなれど、ただはかなき一ふしに御心とまりて、「いかなる人の住み処ならむ」とは、往き来に御目とまりたまひけり。

惟光、日頃ありて参れり。

「わづらひはべる人、なほ弱げにはべれば、とかく見たまへあつかひてなむ」など、聞こえて、近く参り寄りて聞こゆ。

「仰せられしのちなむ、隣のこと知りてはべる者、呼びて問はせはべりしかど、

「いはけなかりけるほどに、思ふべき人びとのうち捨ててものしたまひにけるなごり、育む人あまたあるやうなりしかど、親しく思ひ睦ぶる筋は、またなくなむ思ほえし。人となりて後は、限りあれば、朝夕にしもえ見たてまつらず、心のままに訪らひ参づることはなけれど、なほ久しう対面せぬ時は、心細くおぼゆるを、『さらぬ別れはなくもがな』」

となむ、こまやかに語らひたまひて、おし拭ひたまへる袖のほひも、いと所狭きまで薫り満ちたるに、げに、よに思へば、おしなべたらぬ人の御宿世ぞかすと、尼君をもどかすと見つる子ども、皆うちしほたれけり。

修法など、またまた始むべきことなど掟てのたまはせて、出でたまふとて、惟光に紙燭召して、ありつる扇御覧ずれば、もて馴らしたる移り香、いと染み深うなつかしくて、をかしうおぼえたまふ。惟光に、

「心あてにそれかとぞ見る白露の　光そへたる夕顔の花」

そこはかとなく書き紛らはしたるも、あてはかにゆゑづきたれば、いと思ひのほか、をかしうおぼえたまふ。惟光に、

「この西なる家は何人の住むぞ。問ひ聞きたりや」

とのたまへば、例のうるさき御心とは思へども、えさは申さで、

「この五、六日ここにはべれど、病者のことを思うたまへ扱ひはべるほどに、隣のことはいえ聞きはべらず」

など、はしたなやかに聞こゆれば、

「憎しとこそ思ひたれな。されど、この扇の、尋ぬべきゆゑありて見ゆるを。」

なほ、このわたりの心知れらむ者を召して問へ」

とのたまへば、入りて、この宿守なる男を呼びて問ひ聞く。

「揚名介なる人の家になむはべりける。男は田舎にまかりて、妻なむ若く事好みて、はらからなど宮仕人にて来通ふ、と申す。詳しくことは、下人のえ知りはべらぬにやあらむ」と聞こゆ。

「これに置きて参らせよ。枝も情けなげなめる花を」

とて取らせたれば、門開けて惟光朝臣出で来たるして、奉らす。

「鍵を置きまどはしはべりて、いと不便なるわざなりや。もののあやめ見たまへ分くべき人もはべらぬわたりなれど、らうがはしき大路に立ちおはしまし
て」とかしこまり申す。

引き入れて、下りたまふ。惟光が兄の阿闍梨、婿の三河守、娘など、渡り集
ひたるほどに、かくおはしましたる喜びを、またなきことにかしこまる。

尼君も起き上がりて、

「惜しげなき身なれど、捨てがたく思うたまへつることは、ただ、かく御前
にさぶらひ、御覽ぜらるることの変りはべりなむことを口惜しく思ひたまへ、
たゆたひしかど、忌むことのしるしによみがへりてなむ、かく渡りおはします
を、見たまへはべりぬれば、今なむ阿弥陀仏の御光も、心清く待たればべるべ
き」

など聞こえて、弱げに泣く。

「日ごろ、おこたりがたくものせらるるを、安からず嘆きわたりつるに、か
く、世を離るるさまにもしたまへば、いとあはれに口惜しうなむ。命長くて、
なほ位高くなど見なしたまへ。さてこそ、九品の上にも、障りなく生まれたま
はめ。この世にすこし恨み残るは、悪ろきわざとなむ聞く」など、涙ぐみての
たまふ。

かたほなるをだに、乳母やうの思ふべき人は、あさましうまほに見なすもの
を、まして、いと面立たしう、なづさひ仕うまつりけむ身も、いたはしうかた
じけなく思ほゆべかめれば、すすろに涙がちなり。

子どもは、いと見苦しと思ひて、「背きぬる世の去りがたきやうに、みづか
らひそみ御覽ぜられたまふ」と、つきしろひ目くはす。

君は、いとあはれと思ほして、

六条わたりの御忍び歩きのころ、内よりまかでたまふ中宿に、大弍の乳母のいたくわづらひて尼になりける、とぶらはむとて、五条なる家尋ねておはしたり。

御車入るべき門は鎖したりければ、人して惟光召させて、待たせたまひけるほど、むつかしげなる大路のさまを見わたしたまへるに、この家のかたはらに、桧垣といふもの新しうして、上は半部四五間ばかり上げわたして、簾などいとう涼しげなるに、をかしき額つきの透影、あまた見えて覗く。立ちさまよふらむ下つ方思ひやるに、あながちに丈高き心地ぞする。いかなる者の集へるならむと、やうかはりて思さる。

御車もいたくやつしたまへり、前駆も追はせたまはず、誰れとか知らむとうちとけたまひて、すこしさし覗きたまへれば、門は葎のやうなる、押し上げたる、見入れのほどなく、ものはかなき住まひを、あはれに、「何処かさして」と思ほしなせば、玉の台も同じことなり。

切懸だつ物に、いと青やかなる葛の心地よげに這ひかかれるに、白き花ぞ、おのれひとり笑みの眉開けたる。

「遠方人にも申す」

と独りごちたまふを、御隨身ついで、

「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になむ咲きはべりける」

と申す。げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりの、このもかのも、あやしきうちよろぼひて、むねむねしからぬ軒のつまなどに這ひまつはれたるを、

「口惜しの花の契りや。一房折りて参れ」

とのたまへば、この押し上げたる門に入りて折る。さすがに、されたる遣戸口に、黄なる生絹の単袴、長く着なしたる童の、をかしげなる出で来て、うち招く。白き扇のいたうこがしたるを、

夕 顔

夕

顔

とて、恥づかしめたまふ。左右に苦しう思へど、かの御手習取り出でたり。さすがに、取りて見たまふ。かのもぬけを、いかに、伊勢をの海人のしほなれてや、など思ふもただならず、いとよろづに乱れて。

西の君も、もの恥づかしき心地してわたりたまひにけり。また知る人もなきことなれば、人知れずうちながめてゐたり。小君の渡り歩くにつけても、胸のみ塞がれど、御消息もなし。あさましと思ひ得る方もなくて、されたる心に、ものあはれなるべし。

つれなき人も、さこそしづむれ、いとあさはかにもあらぬ御気色を、ありしながらのわが身ならばと、取り返すものならねど、忍びがたければ、この御畳紙の片つ方に、

「空蝉の羽に置く露の木隠れて

忍び忍びに濡るる袖かな」

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

いとわりなければ、下にはべりつるを、人少ななりとて召ししかば、昨夜参う上りしかど、なほえ堪ふまじくなむ」

と、憂ふ。答へも聞かで、

「あな、腹々。今聞こえむ」とて過ぎぬるに、からうして出でたまふ。なほかかる歩きは軽々しくあやしかりけりと、いよいよ思し懲りぬべし。

小君、御車の後にて、二条院におはしましぬ。ありさまのたまひて、「幼かりけり」とあはめたまひて、かの人の心を爪弾きをしつつ恨みたまふ。いとほしうて、ものもえ聞こえず。

「いと深う憎みたまふべかめれば、身も憂く思ひ果てぬ。などか、よそにても、なつかしき答へばかりはしたまふまじき。伊予介に劣りける身こそ」

など、心づきなしと思ひてのたまふ。ありつる小桂を、さすがに、御衣の下に引き入れて、大殿籠もれり。小君を御前に臥せて、よろづに恨み、かつは、語らひたまふ。

「あこは、らうたけれど、つらきゆかりにこそ、え思ひ果つまじけれ」

とまめやかにのたまふを、いとわびしと思ひたり。

しばしうち休みたまへど、寝られたまはず。御硯急ぎ召して、さしはへたる御文にはあらで、畳紙に手習のやうに書きすさびたまふ。

「空蝉の身をかへてける木のもとに　なほ人がらのなつかしきかな」

と書きたまへるを、懐に引き入れて持たり。かの人もいかに思ふらむと、いとほしけれど、かたがた思ほしかへして、御ことつけもなし。かの薄衣は、小桂のいとなつかしき人香に染めるを、身近くならして見ゐたまへり。

小君、かしこに行きたれば、姉君待ちつけて、いみじくのたまふ。

「あさましかりしに、とかう紛らはしても、人の思ひけむことさりとどころなきに、いとなむわりなき。いとかう心幼きを、かつはいかに思ほすらむ」

もえまかすまじくなむありける。また、さるべき人びとも許されじかしと、かねて胸いたくなむ。忘れて待ちたまへよ」など、なほなほしく語らひたまふ。

「人の思ひはべらむことの恥づかしきになむ、え聞こえさすまじき」とうらもなく言ふ。

「なべて、人に知らせばこそあらめ、この小さき上人に伝へて聞こえむ。気色なくもてなしたまへ」

など言ひおきて、かの脱ぎすべしたると見ゆる薄衣を取りて出でたまひぬ。

小君近う臥したるを起こしたまへば、うしろめたう思ひつつ寝ければ、ふとおどろきぬ。戸をやをら押し開くるに、老いたる御達の声にて、

「あれは誰ぞ」

とおどろおどろしく問ふ。わづらはしくて、

「まろぞ」と答ふ。

「夜中に、こは、なぞ外歩かせたまふ」

ときかしがりて、外さまへ来。いと憎くて、

「あらず。ここもとへ出づるぞ」

とて、君を押し出でたてまつるに、暁近き月、隈なくさし出でて、ふと人の影見えければ、

「またおはするは、誰ぞ」と問ふ。

「民部のおもとなめり。けしうはあらぬおもとの丈だちかな」

と言ふ。丈高き人の常に笑はるるを言ふなりけり。老人、これを連ねて歩きけると思ひて、

「今、ただ今立ちならびたまひなむ」

と言ふ言ふ、我もこの戸より出でて来。わびしければ、えはた押し返さで、渡殿の口にかい添ひて隠れ立ちたまへれば、このおもときし寄りて、

「おもとは、今宵は、上にやさぶらひたまひつる。一昨日より腹を病みて、

思ひ分かれず、やをら起き出でて、生絹なる単衣を一つ着て、すべり出でにけり。

君は入りたまひて、ただひとり臥したるを心やすく思す。床の下に二人ばかりぞ臥したる。衣を押しやりて寄りたまへるに、ありしけはひよりは、ものものしくおぼゆれど、思ほしうも寄らずかし。いぎたなきさまなどぞ、あやしく変はりて、やうやう見あらはしたまひて、あさましく心やましけれど、「人違へとたどりて見えむも、をこがましく、あやしと思ふべし、本意の人を尋ね寄らむも、かばかり逃るる心あめれば、かひなう、をこにこそ思はめ」と思す。かのをかしかりつる灯影ならば、いかがはせむに思しなるも、悪ろき御心浅さなめりかし。

やうやう目覚めて、いとおぼえずあさましきに、あきれたる気色にて、何の心深いとほしき用意もなし。世の中をまだ思ひ知らぬほどよりは、さればみたる方にて、あえかにも思ひまどはず。我とも知らせじと思ほせど、いかにしてかかることぞと、後に思ひめぐらさむも、わがためには事にもあらねど、あのつらき人の、あながちに名をつつむも、さすがにいとほしければ、たびたびの御方違へにことつけたまひしさまを、いとよう言ひなしたまふ。たどらむ人は心得つべけれど、まだいと若き心地に、さこそさし過ぎたるやうなれど、えしも思ひ分かず。

憎しとはなけれど、御心とまるべきゆゑもなき心地して、なほかのうれたき人の心をいみじく思す。「いづくにはひ紛れて、かたくなしと思ひゐたらむ。かく執念き人はありがたきものを」と思すしも、あやにくに、紛れがたう思ひ出でられたまふ。この人の、なま心なく、若やかなるけはひもあはれなれば、さすがに情け情けしく契りおかせたまふ。

「人知りたることよりも、かやうなるは、あはれも添ふこととなむ、昔人も言ひける。あひ思ひたまへよ。つつむことなきにしもあらねば、身ながら心に

「若君はいづくにおはしますならむ。この御格子は鎖してむ」とて、鳴らすなり。

「静まりぬなり。入りて、さらば、たばかれ」とのたまふ。

この子も、いもうとの御心はたわむところなくまめだちたれば、言ひあはせむ方なくて、人少なならむ折に入れたてまつらむと思ふなりけり。

「紀伊守の妹もこなたにあるか。我にかいま見せさせよ」とのたまへど、

「いかでか、さははべらむ。格子には几帳添へてはべり」と聞こゆ。

さかし、されどもをかしく思せど、「見つとは知らせじ、いとほし」と思して、夜更くることの心もとなさをのたまふ。

こたみは妻戸を叩きて入る。皆人びと静まり寝にけり。

「この障子口に、まろは寝たらむ。風吹きとほせ」とて、畳広げて臥す。御達、東の廂にいとあまた寝たるべし。戸放ちつる童もそなたに入りて臥しぬれば、とばかり空寝して、灯明かき方に屏風を広げて、影ほのかなるに、やをら入れたてまつる。

「いかにぞ、をこがましきこともこそ」と思すに、いとおつましけれど、導くままに、母屋の几帳の帷子引き上げて、いとやをら入りたまふとすれど、皆静まれる夜の、御衣のけはひやはらかなるしも、いとしかりけり。

女は、さこそ忘れたまふをうれしきに思ひなせど、あやしく夢のやうなることを、心に離るる折なきころにて、心とけたる寝だに寝られずなむ、昼はながめ、夜は寝覚めがちなれば、春ならぬ木の芽も、いとなく嘆かしきに、碁打ちつる君、「今宵は、こなたに」と、今めかしくうち語らひて、寝にけり。

若き人は、何心なくいとようまどろみたるべし。かかるけはひの、いと香ばしくうち匂ふに、顔をもたげたるに、単衣うち掛けたる几帳の隙間に、暗けれど、うち身じろき寄るけはひ、いとしかるし。あさましくおぼえて、ともかくも

ど、

「いで、このたびは負けにけり。隅のところ、いでいで」と指をかがめて、
「十、二十、三十、四十」などかぞふるさま、伊予の湯桁もたどたどしかるま
じう見ゆ。すこし品おくれたり。

たとしへなく口おほひて、さやかにも見せねど、目をしつめたまへれば、お
のづから側目も見ゆ。目すこし腫れたる心地して、鼻などもあざやかなるとこ
ろなうねびれて、にほはしきところも見えず。言ひ立つれば、悪ろきによれる
容貌をいいたうもてつけて、このまされる人よりは心あらむと、目とどめつ
べきさましたり。

にぎははしう愛敬づきをかしげなるを、いよいよほこりにうちとけて、笑
ひなどそぼるれば、にほひ多く見えて、さる方にいとをかしき人ざまなり。あ
はつけしとは思しながら、まめならぬ御心は、これもえ思し放つまじかりけり。

見たまふかぎりの人は、うちとけたる世なく、ひきつくるひ側めたるうはべ
をのみこそ見たまへ、かくうちとけたる人のありさまかいま見などは、まだし
たまはざりつることなれば、何心もなうさやかなるはいとほしながら、久しう
見たまはまほしきに、小君出で来る心地すれば、やをら出でたまひぬ。

渡殿の戸口に寄りゐたまへり。いとかたじけなしと思ひて、

「例ならぬ人はべりて、え近うも寄りはべらず」

「さて、今宵もや帰してむとする。いとあさましよう、からうこそあべけれ」
とのたまへば、

「などでか。あなたに帰りはべりなば、たばかりはべりなむ」と聞こゆ。

「さもなびかしつべき気色にこそはあらめ。童なれど、ものの心ばへ、人の
気色見つべくしづまれるを」と、思すなりけり。

碁打ち果てつるにやあらむ、うちそよめく心地して、人びとあかるるけはひ
などすなり。

入りぬ。御達、

「あらはなり」と言ふなり。

「なぞ、かう暑きに、この格子は下ろされたる」と問へば、

「昼より、西の御方の渡らせたまひて、碁打たせたまふ」と言ふ。

さて向かひるたらむを見ばや、と思ひて、やをら歩み出でて、簾のはさまに入りたまひぬ。

この入りつる格子はまだ鎖さねば、隙見ゆるに、寄りて西ざまに見通したまへば、この際に立てたる屏風、端の方おし畳まれたるに、紛るべき几帳なども、暑ければにや、うち掛けて、いとよく見入れらる。

火近う灯したり。母屋の中柱に側める人やわが心かくると、まづ目とどめたまへば、濃き綾の単衣襲なめり。何にかあらむ表に着て、頭つき細やかに小さき人の、ものげなき姿ぞしたる。顔などは、差し向かひたらむ人などにも、わざと見ゆまじうもてなしたり。手つき痩せ瘦せにて、いたうひき隠しためり。

いま一人は、東向きにて、残るところなく見ゆ。白き羅の単衣襲、二藍の小桂だつもの、ないがしろに着なして、紅の腰ひき結へる際まで胸あらはに、ばうぞくなるもてなしなり。いと白うをかしげに、つぶつぶと肥えて、そぞろかなる人の、頭つき額つきものあざやかに、まみ口つき、いと愛敬づき、はなやかなる容貌なり。髪はいとふさやかにて、長くはあらねど、下り端、肩のほどきよげに、すべていとねぢけたるところなく、をかしげなる人と見えたり。

むべこそ親の世になくは思ふらめと、をかしく見たまふ。心地ぞ、なほ静かなる気を添へばやと、ふと見ゆる。かどなきにはあるまじ。碁打ち果てて、結さすわたり、心とげに見えて、きはぎはとさうどけば、奥の人はいと静かにのどめて、

「待ちたまへや。そこは持にこそあらめ。このわたりの劫をこそ」など言へ

寝られたまはぬままには、「我は、かく人に憎まれてもならばぬを、今宵なむ、初めて憂しと世を思ひ知りぬれば、恥づかしくて、ながらふまじうこそ、思ひなりぬれ」などのたまへば、涙をさへこぼして臥したり。いとらうたしと思す。手さぐりの、細く小さきほど、髪の毛いと長からざりしけはひのさまかよひたるも、思ひなしにやあはれなり。あながちにかかづらひたどり寄らむも、人悪ろかるべく、まめやかにめざましと思し明かしつつ、例のやうにもものたまひまつはさず。夜深う出でたまへば、この子は、いといとほしく、さうざうしと思ふ。

女も、並々ならずかたはらいたしと思ふに、御消息も絶えてなし。思し懲りにけると思ふにも、「やがてつれなくて止みたまひなましかば憂からまし。しひていとほしき御振る舞ひの絶えざらむもうたてあるべし。よきほどに、かくて閉ぢめてむ」と思ふものから、ただならず、ながめがちなり。

君は、心づきなしと思しながら、かくてはえ止むまじう御心にかかり、人悪ろく思ほしわびて、小君に、「いとつらうも、うれたうもおぼゆるに、しひて思ひ返せど、心にしも従はず苦しきを。さりぬべきを見て、対面すべくたばかれ」とのたまひわたれば、わづらはしけれど、かかる方にて、のたまひまつはすは、うれしうおぼえけり。

紀伊守国に下りなどして、女どちのどやかなる夕闇の道たどしげなる紛れに、わが車にて率てたてまつる。

この子も幼きを、いかならむと思せど、さのみもえ思しのどむまじければ、さりげなき姿にて、門など鎖さぬ先にと、急ぎおはす。

人見ぬ方より引き入れて、降ろしたてまつる。童なれば、宿直人などもことに見入れ追従せず、心やすし。

東の妻戸に、立てたてまつりて、我は南の隅の間より、格子叩きののしりて

空 蝉

空

蝉

「いとむつかしげにさし籠められて、人あまたはべるめれば、かしこげに」と聞こゆ。いとほしと思へり。

「よし、あこだに、な捨てそ」

とのたまひて、御かたはらに臥せたまへり。若くなつかしき御ありさまを、うれしくめでたしと思ひたれば、つれなき人よりは、なかなかあはれに思さるとぞ。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

「かく、けしからぬ心ばへは、つかふものか。幼き人のかかること言ひ伝ふるは、いみじく忌むなるものを」と言ひおどして、「『心地悩ましければ、人びと避けずおさへさせてなむ』と聞こえさせよ。あやしと誰も誰も見るらむ」と言ひ放ちて、心の中には、「いと、かく品定まりぬる身のおぼえならで、過ぎにし親の御けはひとまれるふるさとながら、たまさかにも待ちつけたてまつらば、をかしようもやあらまし。しひて思ひ知らぬ顔に見消つも、いかにほど知らぬやうに思すらむ」と、心ながらも、胸いたく、さすがに思ひ乱る。「とてもかくても、今は言ふかひなき宿世なりければ、無心に心づきなくて止みなむ」と思ひ果てたり。

君は、いかにたばかりなきむと、まだ幼きをうしろめたく待ち臥したまへるに、不用なるよしを聞こゆれば、あさましくめづらかなりける心のほどを、「身もいと恥づかしくこそなりぬれ」と、いといとほしき御気色なり。とばかりものものたまはず、いたくうめきて、憂しと思したり。

「帚木の心を知らで園原の 道にあやなく惑ひぬるかな 聞こえむ方こそなけれ」

とのたまへり。女も、さすがに、まどろまざりければ、

「数ならぬ伏屋に生ふる名の憂さに あるにもあらず消ゆる帚木」 と聞こえたり。

小君、いといとほしさに眠たくもあらでまどひ歩くを、人あやしと見るらむ、とわびたまふ。

例の、人びとはいぎたなきに、一所すずろにすさまじく思し続けらるれど、人に似ぬ心ぎまの、なほ消えず立ち上れりける、とねたく、かかるにつけてこそ心もとまれと、かつは思しながら、めざましくつらければ、さばれと思せども、さも思し果つまじく、

「隠れたらむ所に、なほ率て行け」とのたまへど、

しき名さへとり添へむ、身のおぼえをいとつきなかるべく思へば、めでたきこともわが身からこそと思ひて、うちとけたる御答へも聞こえず。ほのかなりし御けはひありさまは、「げに、なべてにやは」と、思ひ出できこえぬにはあらねど、「をかしきさまを見えたてまつりても、何にかはなるべき」など、思ひ返すなりけり。

君は思しおこたる時の間もなく、心苦しくも恋しくも思し出づ。思へりし気色などのいとほしさも、晴るけむ方なく思しわたる。軽々しく這ひ紛れ立ち寄りたまはむも、人目しげからむ所に、便なき振る舞ひやあらはれむと、人のためもいとほしく、と思しわづらふ。

例の、内に日数経たまふころ、さるべき方の忌み待ち出でたまふ。にはかまかでたまふまねして、道のほどよりおはしましたり。

紀伊守おどろきて、遣水の面目とかしこまり喜ぶ。小君には、昼より、「かくなむ思ひよれる」とのたまひ契れり。明け暮れまつはし馴らしたまひければ、今宵もまづ召し出でたり。

女も、さる御消息ありけるに、思したばかりつらむほどは、浅くしも思ひなされねど、さりとて、うちとけ、人げなきありさまを見えたてまつりても、あぢきなく、夢のやうにて過ぎにし嘆きを、またや加へむ、と思ひ乱れて、なほさて待ちつけきこえさせむことのまばゆければ、小君が出でて往ぬるほどに、「いとけ近ければ、かたはらいたし。なやましければ、忍びてうち叩かせなごせむに、ほど離れてを」

とて、渡殿に、中將といひしが局したる隠れに、移ろひぬ。

さる心して、人とく静めて、御消息あれど、小君は尋ねあはず。よろづの所求め歩き、渡殿に分け入りて、からうしてたどり来たり。いとあさましくつらし、と思ひて、

「いかにかひなしと思さむ」と、泣きぬばかり言へば、

身を思ひ続けて臥したまへり。

またの日、小君召したれば、参るとて御返り乞ふ。

「かかる御文見るべき人もなし、と聞こえよ」

とのたまへば、うち笑みて、

「違ふべくものたまはざりしものを。いかが、さは申さむ」

と言ふに、心やましく、残りなくのたまはせ、知らせてけると思ふに、つらきこと限りなし。

「いで、およすけたることは言はぬぞよき。さは、な参りたまひそ」とむつかられて、

「召すには、いかでか」とて、参りぬ。

紀伊守、好き心にこの継母のありさまをあたらしきものに思ひて、追従しありければ、この子をもてかしづきて、率てありく。

君、召し寄せて、

「昨日待ち暮らししを。なほあひ思ふまじきなめり」

と怨じたまへば、顔うち赤めてゐたり。

「いづら」とのたまふに、しかしかと申すに、

「言ふかひなのことや。あさまし」とて、またも賜へり。

「あこは知らじな。その伊予の翁よりは、先に見し人ぞ。されど、頼もしげなく頸細しとて、ふつつかなる後見まうけて、かく悔りたまふなめり。さりともし、あこはわが子にてをあれよ。この頼もし人は、行く先短かりなむ」

とのたまへば、「さもやありけむ、いみじかりけることかな」と思へる、「をかし」と思す。

この子をまつはしたまひて、内にも率て参りなどしたまふ。わが御匣殿にのたまひて、装束などもせさせ、まことに親めきてあつかひたまふ。

御文は常にあり。されど、この子もいと幼し、心よりほかに散りもせば、軽々

な。隈なく見集めたる人の言ひしことは、げに」と思し合はせられけり。

このほどは大殿にのみおはします。なほいとかき絶えて、思ふらむことのとほしく御心にかかりて、苦しく思しわびて、紀伊守を召したり。

「かの、ありし中納言の子は、得させてむや。らうたげに見えしを。身近く使ふ人にせむ。主上にも我奉らむ」とのたまへば、

「いとかしこき仰せ言にはべるなり。姉なる人にのたまひみむ」

と申すも、胸つぶれて思せど、

「その姉君は、朝臣の弟や持たる」

「さもはべらず。この二年ばかりぞ、かくてものしはべれど、親のおきてに違へりと思ひ嘆きて、心ゆかぬやうになむ、聞きたまふる」

「あはれのことや。よろしく聞こえし人ぞかし。まことによしや」とのたまへば、

「けしうははべらざるべし。もて離れてうとうとしくはべれば、世のたとひにて、睦びはべらず」と申す。

さて、五六日ありて、この子率て参れり。こまやかにをかしとはなけれど、なまめきたるさまして、あて人と見えたり。召し入れて、いとなつかしく語らひたまふ。童心地に、いとめでたくうれしと思ふ。いもうとの君のことも詳しく問ひたまふ。さるべきことは答へ聞こえなどして、恥づかしげにしづまりたれば、うち出でにくし。されど、いとよく言ひ知らせたまふ。

かかることこそはと、ほの心得るも、思ひの外なれど、幼な心地に深くしもたどらず。御文を持って来たれば、女、あさましきに涙も出で来ぬ。この子の思ふらむこともはしたなくて、さすがに、御文を面隠しに広げたり。いと多くて、

「見し夢を逢ふ夜ありやと嘆くまに　目さへあはでどころも経にける　寝る夜なければ」

など、目も及ばぬ御書きざまも、霧り塞がりて、心得ぬ宿世うち添へりける

「女などの御方違へこそ。夜深く急がせたまふべきかは」など言ふもあり。君は、またかやうのついであらむこともいとかたく、さしはへてはいかでか、御文なども通はむことのいとわりなきを思すに、いと胸いたし。奥の中將も出でて、いと苦しければ、許したまひても、また引きとどめたまひつつ、

「いかでか、聞こゆべき。世に知らぬ御心のつらさも、あはれも、浅からぬ世の思ひ出では、さまざまめづらかなるべき例かな」

とて、うち泣きたまふ気色、いとなまめきたり。鶏もしばしば鳴くに、心あわたたしくて、

「つれなきを恨みも果てぬしののめに　とりあへぬまでおどろかすらむ」
女、身のありさまを思ふに、いとつきなくまばゆき心地して、めでたき御もてなしも、何ともおぼえず、常はいとすすくしく心づきなしと思ひあなづる伊予の方の思ひやられて、「夢にや見ゆらむ」と、そら恐ろしくつつまし。

「身の憂さを嘆くにあかで明くる夜は　とり重ねてぞ音もなかけける」
ことと明くなれば、障子口まで送りたまふ。内も外も人騒がしければ、引き立てて、別れたまふほど、心細く、隔つる関と見えたり。

御直衣など着たまひて、南の高欄にしばしうち眺めたまふ。西面の格子そそき上げて、人びと覗くべかめる。簀子の中のほどに立てたる小障子の上より仄かに見えたまへる御ありさまを、身にしむばかり思へる好き心どもあめり。

月は有明にて、光をさまれるものから、かげげざやかに見えて、なかなかかきき曙なり。何心なき空のけしきも、ただ見る人から、艶にもすぐくも見ゆるなりけり。人知れぬ御心には、いと胸いたく、言伝てやらむすがだになきをと、かへりみがちにて出でたまひぬ。

殿に帰りたまひても、とみにもまどろまれたまはず。またあひ見るべき方なきを、まして、かの人の思ふらむ心の中、いかならむと、心苦しく思ひやりたまふ。「すぐれたることはなけれど、めやすくもてつけてもありつる中の品か

げにいとほしく、心恥づかしきけはひなれば、

「その際々を、まだ知らぬ、初事ぞや。なかなか、おしなべたる列に思ひなしたまへるなむうたてありける。おのづから聞きたまふやうもあらむ。あながちなる好き心は、さらにならぬを。さるべきにや、げに、かくあはめられたてまつるも、ことわりなる心まどひを、みづからもあやしきまでなむ」

など、まめだちてよろづにのたまへど、いとたぐひなき御ありさまの、いよいようちとけきこえむことわびしければ、すぐよかに心づきなしとは見えたてまつるとも、さる方の言ふかひなきにて過ぐしてむと思ひて、つれなくのみもてなしたり。人柄のたをやぎたるに、強き心をしひて加へたれば、なよ竹の心地して、さすがに折るべくもあらず。

まことに心やましくて、あながちなる御心ばへを、言ふ方なしと思ひて、泣くさまなど、いとあはれなり。心苦しくはあれど、見ざらましかば口惜しからまし、と思す。慰めがたく、憂しと思へれば、

「など、かく疎ましきものにしも思すべき。おぼえなきさまなるしもこそ、契りあるとは思ひたまはめ。むげに世を思ひ知らぬやうに、おぼはれたまふなむ、いとつらき」と恨みられて、

「いとかく憂き身のほどの定まらぬ、ありしなごらの身にて、かかる御心ばへを見ましかば、あるまじき我が頼みにて、見直したまふ後瀬をも思ひたまへ慰めましを、いとかう仮なる浮き寝のほどを思ひはべるに、たぐひなく思うたまへ惑はるるなり。よし、今は見きとなかけそ」

とて、思へるさま、げにいとことわりなり。おろかならず契り慰めたまふこと多かるべし。

鶏も鳴きぬ。人びと起き出でて、

「いといぎたなかりける夜かな」 「御車ひき出でよ」

など言ふなり。守も出で来て、

思ひわたる心のうちも、聞こえ知らせむとてなむ。かかるをりを待ち出でたるも、さらに浅くはあらじと、思ひなしたまへ」

と、いとやはらかにのたまひて、鬼神も荒だつまじきけはひなれば、はしたなく、「ここに、人」とも、えののしらず。心地はた、わびしく、あるまじきことと思へば、あさましく、

「人違へにこそはべるめれ」と言ふも息の下なり。消えまどへる気色、いと心苦しうたげなれば、をかしと見たまひて、

「違ふべくもあらぬ心のしるべを、思はずにもおぼめいたまふかな。好きがましきさまには、よに見えたてまつらじ。思ふことすこし聞こゆべきぞ」

とて、いと小さやかなれば、かき抱きて障子のもと出でたまふにぞ、求めつる中将だつ人来あひたる。

「やや」とのたまふに、あやしくて探り寄りたるにぞ、いみじく匂ひみちて、顔にもくゆりかかる心地するに、思ひ寄りぬ。あさましう、こはいかなることぞと思ひまどはるれど、聞こえむ方なし。並々の人ならばこそ、荒らかにも引きかなぐらめ、それだに人のあまた知らむは、いかがあらむ。心も騒ぎて、慕ひ来たれど、動もなくて、奥なる御座に入りたまひぬ。

障子をひきたてて、「暁に御迎へにものせよ」とのたまへば、女は、この人の思ふらむことさへ、死ぬばかりわりなきに、流るるまで汗になりて、いと悩ましげなる、いとほしけれど、例の、いづこより取う出たまふ言の葉にかあらむ、あはれ知らるばかり、情け情けしくのたまひ尽くすべかめれど、なほいとあさましきに、

「現ともおぼえずこそ。数ならぬ身ながらも、思しくたしける御心ばへのほども、いかが浅くは思うたまへざらむ。いとかやうなる際は、際とこそはべなれ」

とて、かくおし立ちたまへるを、深く情けなく憂しと思ひ入りたるさまも、

と、かれたる声のをかしきにて言へば、

「ここにぞ臥したる。客人は寝たまひぬるか。いかに近からむと思ひつるを、されど、け遠かりけり」

と言ふ。寝たりける声のしどけなき、いとよく似通ひたれば、いもうとと聞きたまひつ。

「廂にぞ大殿籠もりぬる。音に聞きつる御ありさまを見たてまつりつる、げにこそめでたかりけれ」と、みそかに言ふ。

「昼ならましかば、覗きて見たてまつりてまし」

とねぶたげに言ひて、顔ひき入れつる声す。「ねたう、心とどめても問ひ聞けかし」とあぢきなく思す。

「まろは端に寝はべらむ。あなくるし」

とて、灯かかげなどすべし。女君は、ただこの障子口筋交ひたるほどにぞ臥したるべき。

「中将の君はいづくにぞ。人げ遠き心地して、もの恐ろし」

と言ふなれば、長押の下に、人びと臥して答へすなり。

「下に湯におりて。『ただ今参らむ』とはべる」と言ふ。

皆静まりたるけはひなれば、掛金を試みに引きあけたまへれば、あなたよりは鎖さざりけり。几帳を障子口には立てて、灯はほの暗きに、見たまへば唐櫃だつ物どもを置きたれば、乱りがはしき中を、分け入りたまへれば、ただ一人いとささやかにて臥したり。なまわづらはしけれど、上なる衣押しやるまで、求めつる人と思へり。

「中将召しつればなむ。人知れぬ思ひの、しるしある心地して」

とのたまふを、ともかくも思ひ分かれず、物に襲はるる心地して、「や」とおびゆれど、顔に衣のさはりて、音にも立てず。

「うちつけに、深からぬ心のほどと見たまふらむ、ことわりなれど、年ごろ

に後れはべりて、姉なる人のよすがに、かくてはべるなり。才などもつきはべりぬべく、けしうははべらぬを、殿上なども思ひたまへかけながら、すがすがしうはえ交じらひはべらぎめる」と申す。

「あはれのことや。この姉君や、まうとの後の親」

「さなむはべる」と申すに、

「似げなき親をも、まうけたりけるかな。主上にも聞こし召しおきて、『宮仕へに出だし立てむと漏らし奏せし、いかになりにけむ』と、いつぞやのたまはせし。世こそ定めなきものなれ」と、いとおよすけのたまふ。

「不意に、かくてもものしはべるなり。世の中といふもの、さのみこそ、今も昔も、定まりたることはべらね。中についても、女の宿世は浮かびたるなむ、あはれにはべる」など聞こえさす。

「伊予介は、かしづくや。君と思ふらむな」

「いかがは。私の主とこそは思ひてはべるめるを、好き好きしきことと、なにがしよりはじめて、うけひきはべらずなむ」と申す。

「さりとも、まうとたちのつきづきしく今めきたらむに、おろしたてむやは。

かの介は、いとよしありて気色ばめるをや」など、物語したまひて、

「いづかたにぞ」

「皆、下屋におろしはべりぬるを、えやまかりおりあへざらむ」と聞こゆ。

酔ひすすみて、皆人びと簀子に臥しつつ、静まりぬ。

君は、とけても寝られたまはず、いたづら臥しと思さるるに御目覚めて、この北の障子のあなたに人のけはひするを、「こなたや、かくいふ人の隠れたる方ならむ、あはれや」と御心とどめて、やをら起きて立ち聞きたまへば、ありつる子の声にて、

「ものけたまはる。いづくにおはしますぞ」

るに、この西面にぞ人のけはひする。衣の音なひはらはらとして、若き声どもにくからず。さすがに忍びて、笑ひなどするけはひ、ことさらびたり。格子を上げたりけれど、守、「心なし」とむつかりて下しつれば、火灯したる透影、障子の上より漏りたるに、やをら寄りたまひて、「見ゆや」と思せど、隙もなければ、しばし聞きたまふに、この近き母屋に集ひるたるなるべし、うちささめき言ふことどもを聞きたまへば、わが御上なるべし。

「いといたうまめだちて。まだきに、やむごとなきやすが定まりたまへるこそ、さうぎうしかめれ」 「されど、さるべき隈には、よくこそ、隠れ歩きたまふなれ」

など言ふにも、思すことのみ心にかかりたまへば、まづ胸つぶれて、「かやうのついでにも、人の言ひ漏らさむを、聞きつけたらむ時」などおぼえたまふ。ことなることなければ、聞きさしたまひつ。式部卿宮の姫君に朝顔奉りたまひし歌などを、すこしほほゆがめて語るも聞こゆ。「くつろぎがましく、歌誦じがちにもあるかな、なほ見劣りはしなむかし」と思す。

守出で来て、灯笼掛け添へ、灯明くかかげなどして、御くだものばかり参れり。

「とぼり帳も、いかにぞは。さる方の心もとなくては、めざましき饗応ならむ」とのたまへば、

「何よけむとも、えうけたまはらず」と、かしこまりてさぶらふ。端つ方の御座に、仮なるやうにて大殿籠もれば、人びとも静まりぬ。

主人の子ども、をかしげにてあり。童なる、殿上のほどに御覧じ馴れたるもあり。伊予介の子もあり。あまたある中に、いとけはひあてはかにて、十二、三ばかりなるもあり。

「いづれかいづれ」など問ひたまふに、

「これは、故衛門督の末の子にて、いとかなしくしはべりけるを、幼きほど

くにか違へむ。いと悩ましきに」

とて大殿籠もれり。「いと悪しきことなり」と、これかれ聞こゆ。

「紀伊守にて親しく仕うまつる人の、中川のわたりなる家なむ、このころ水せき入れて、涼しき蔭にはべる」と聞こゆ。

「いとよかなり。悩ましきに、牛ながら引き入れつべからむ所を」

とのたまふ。忍び忍びの御方違へ所は、あまたありぬべけれど、久しくほど経て渡りたまへるに、方塞げて、ひき違へ他ざまへと思さむは、いとほしきなるべし。紀伊守に仰せ言賜へば、承りながら、退きて、

「伊予守の朝臣の家に慎むことはべりて、女房なむまかり移れるころにて、狭き所にはべれば、なめげなることやはべらむ」

と、下に嘆くを聞きたまひて、

「その人近からむなむ、うれしかるべき。女遠き旅寝は、もの恐ろしき心地すべきを。ただその几帳のうしろに」とのたまへば、

「げに、よろしき御座所にも」とて、人走らせやる。いと忍びて、ことさらにこととしからぬ所をと、急ぎ出でたまへば、大臣にも聞こえたまはず、御供にも睦ましき限りしておはしませぬ。

「にはかに」とわぶれど、人も聞き入れず。寝殿の東面払ひあけさせて、かりそめの御しつらひしたり。水の心ばへなど、さる方にをかしくしなしたり。田舎家だつ柴垣して、前栽など心とめて植ゑたり。風涼しくて、そこはかとなき虫の声々聞こえ、螢しげく飛びまがひて、をかしきほどなり。

人びと、渡殿より出でたる泉にのぞきみて、酒呑む。主人も肴求むと、こゆるぎのいそぎありくほど、君はのどやかに眺めたまひて、かの、中の品に取り出でて言ひし、この並ならむかしと思し出づ。

思ひ上がれる気色に聞きおきたまへる女なれば、ゆかしくて耳とどめたまへ

もおのづから、げに後に思へばをかしくもあはれにもあべかりけることの、その折につきなく、目にとまらぬなどを、推し量らず詠み出でたる、なかなか心後れて見ゆ。

よろづのことに、などかは、さても、とおぼゆる折から、時々、思ひわかぬばかりの心にては、よしばみ情け立たざらむなむ目やすかるべき。

すべて、心に知れらむことをも、知らず顔にもてなし、言はまほしからむことをも、一つ二つのふしは過ぐすべくなむあべかりける」

と言ふにも、君は、一人の御ありさまを、心の中に思ひつづけたまふ。「これに足らずまたさし過ぎたることなくものしたまひけるかな」と、ありがたきにも、いとど胸ふたがる。

いづ方により果つともなく、果て果てはあやしきことどもになりて、明かしたまひつ。

からうして今日は日のけしきも直れり。かくのみ籠もりさぶらひたまふも、大殿の御心いとほしければ、まかでたまへり。

おほかたの気色、人のけはひも、けぎやかにけ高く、乱れたるところまじらず、なほ、これこそは、かの、人びとの捨てがたく取り出でしまめ人には頼まれぬべけれ、と思すものから、あまりうるはしき御ありさまの、とけがたく恥づかしげに思ひしづまりたまへるをさうざうしくて、中納言の君、中務などやうの、おしなべたらぬ若人どもに、戯れ言などのたまひつつ、暑さに乱れたまへる御ありさまを、見るかひありと思ひきこえたり。

大臣も渡りたまひて、うちとけたまへれば、御几帳隔てておはしまして、御物語聞こえたまふを、「暑きに」とにがみたまへば、人びと笑ふ。「あなかま」とて、脇息に寄りおはす。いとやすらかなる御振る舞ひなりや。

暗くなるほどに、「今宵、中神、内よりは塞がりてはべりけり」と聞こゆ。

「さかし、例は忌みたまふ方なりけり」 「二条の院にも同じ筋にて、いづ

と、言ひも果てず走り出ではべりぬるに、追ひて、

『逢ふことの夜をし隔てぬ仲ならば　ひる間も何かまばゆからまし』

さすがに口疾くなどははべりき」

と、しづしづと申せば、君達あさましと思ひて、「嘘言」とて笑ひたまふ。

「いづこのさる女かあるべき。おいらかに鬼とこそ向かひるたらめ。むくつ
けきこと」

と爪弾きをして、「言はむ方なし」と、式部をあはめ憎みて、

「すこしよろしからむことを申せ」と責めたまへど、

「これよりめづらしきことはさぶらひなむや」とて、をり。

「すべて男も女も悪ろ者は、わづかに知れる方のことを残りなく見せ尽くさ
むと思へるこそ、いとほしけれ。

三史五経、道々しき方を、明らかに悟り明かさむこそ、愛敬なからめ、など
かは、女といはむからに、世にあることの公私につけて、むげに知らずいたら
ずしもあらむ。わざと習ひまねばねど、すこしもかどあらむ人の、耳にも目にも
とまること、自然に多かるべし。

さるままには、真名を走り書いて、さるまじきどちの女文に、なかば過ぎて
書きすすめたる、あなうたて、この人のたをやかならましかばと見えたり。心
地にはさしも思はざらめど、おのづからこはごはしき声に読みなされなどしつ
つ、ことさらびたり。上臆の中にも、多かることぞかし。

歌詠むと思へる人の、やがて歌にまつはれ、をかしき古言をも初めより取り
込みつつ、すさまじき折々、詠みかけたるこそ、ものしきことなれ。返しせね
ば情けなし、えせざらむ人ははしたなからむ。

さるべき節会など、五月の節に急ぎ参る朝、何のあやめも思ひしづめられぬ
に、えならぬ根を引きかけ、九日の宴に、まづ難き詩の心を思ひめぐらして暇
なき折に、菊の露をかこち寄せなどやうの、つきなき営みにあはせ、さならで

も、身の才つき、朝廷に仕うまつるべき道々しきことを教へて、いときよげに消息文にも仮名といふもの書きませず、むべむべしく言ひまはしはべるに、おのづからえまかり絶えで、その者を師としてなむ、わづかなる腰折文作ることなど習ひはべりしかば、今にその恩は忘れはべらねど、なつかしき妻子とうち頼まむには、無才の人、なま悪ろならむ振る舞ひなど見えむに、恥づかしくなむ見えはべりし。まいて君達の御ため、はかばかしくしたたかなる御後見は、何にかせさせたまはむ。はかなし、口惜し、とかつ見つつも、ただわが心につき、宿世の引く方はべるめれば、男しもなむ、仔細なきものははべめる」

と申せば、残りを言はせむとて、「さてさてをかしかりける女かな」とすかいたまふを、心は得ながら、鼻のわたりをこづきて語りなす。

「さて、いと久しくまからざりしに、ものたよりに立ち寄りてはべれば、常のうちとけるたる方にははべらで、心やましき物越しにてなむ逢ひてはべる。ふすぶるにやと、をこがましくも、また、よきふしなりとも思ひたまふるに、このさかし人はた、軽々しきもの怨じすべきにもあらず、世の道理を思ひとりて恨みざりけり。

声もはやりかにて言ふやう、

『月ごろ、風病重きに堪へかねて、極熱の草葉を服して、いと臭きによりなむ、え対面賜はらぬ。目のあたりならずとも、さるべからむ雑事らは承らむ』

と、いとあはれにむべむべしく言ひはべり。答へに何とかは。ただ、『承りぬ』とて、立ち出ではべるに、さうざうしくやおぼえけむ、

『この香失せなむ時に立ち寄りたまへ』と高やかに言ふを、聞き過ぐさむもいとほし、しばしやすらふべきに、はたはべらねば、げにそのにほひさへ、はなやかにたち添へるも術なくて、逃げ目をつかひて、

『ささがにのふるまひしるき夕暮れに　　ひるま過ぐせといふがあやなさいかなることつけぞや』

かれはたえしも思ひ離れず、折々人やりならぬ胸焦がるる夕べもあらむとおぼえはべり。これなむ、え保つまじく頼もしげなき方なりける。

されば、かのさがな者も、思ひ出である方に忘れがたけれど、さしあたりて見むにはわづらはしくよ、よくせずは、飽きたきこともありなむや。琴の音すすめけむかどかどしきも、好きたる罪重かるべし。この心もとなきも、疑ひ添ふべければ、いづれとつひに思ひ定めずなりぬるこそ。世の中や、ただかくこそ。とりどりに比べ苦しかるべき。このさまさまのよき限りをとり具し、難ずべきくさはひませぬ人は、いづこにかはあらむ。吉祥天女を思ひかけむとすれば、法氣づき、くすしからむこそ、また、わびしかりぬべけれ」とて、皆笑ひぬ。

「式部がところにぞ、けしきあることはあらむ。すこしづつ語り申せ」と責めらる。

「下が下の中には、なでふことか、聞こし召しどころはべらむ」

と言へど、頭の君、まめやかに「遅し」と責めたまへば、何事をとり申さむと思ひめぐらすに、

「まだ文章生にはべりし時、かしこき女の例をなむ見たまへし。かの、馬頭の申したまへるやうに、公事をも言ひあはせ、私さまの世に住まふべき心おきてを思ひめぐらさむ方もいたり深く、才の際なまなまの博士恥づかしく、すべて口あかすべくなむはべらざりし。

それは、ある博士のもとに学問などしはべるとて、まかり通ひしほどに、主人のむすめども多かりと聞きたまへて、はかなきついでに言ひ寄りてはべりしを、親聞きつけて、盃持て出でて、『わが両つの途歌ふを聴け』となむ、聞こえごちはべりしかど、をさをさうちとけてもまからず、かの親の心を憚りて、さすがにかかづらひはべりしほどに、いとあはれに思ひ後見、寢覚の語らひに

の見たまふるわたりより、情けなくうたてあることをなむ、さるたよりありてかすめ言はせたりける、後にこそ聞きはべりしか。

さる憂きことやあらむとも知らず、心には忘れずながら、消息などもせで久しくはべりしに、むげに思ひしをれて心細かりければ、幼き者などもありしに思ひわづらひて、撫子の花を折りておこせたりし」とて涙ぐみたり。

「さて、その文の言葉は」と問ひたまへば、「いさや、ことなることなかりきや。」

『山がつの垣ほ荒るとも折々に あはれはかけよ撫子の露』

思ひ出でしままにまかりたりしかば、例のうらもなきものから、いと物思ひ顔にて、荒れたる家の露しげきを眺めて、虫の音に競へるけしき、昔物語めきておぼえはべりし。

『咲きまじる色はいづれと分かねども なほ常夏にしくものぞなき』

大和撫子をばさしおきて、まづ『塵をだに』など、親の心をとる。

『うち払ふ袖も露けき常夏に あらし吹きそふ秋も来にけり』

とはかなげに言ひなして、まめまめしく恨みたるさまも見えず。涙をもらし落としても、いと恥づかしくつつましげに紛らはし隠して、つらきをも思ひ知りけりと見えむは、わりなく苦しきものと思ひたりしかば、心やすくて、またとだえ置きはべりしほどに、跡もなくこそかき消ちて失せにしか。

まだ世にあらば、はかなき世にぞさすらふらむ。あはれと思ひしほどに、わづらはしげに思ひまとはすけしき見えましかば、かくもあくがらさざらまし。こよなきとだえおかず、さるものにしなして長く見るやうもはべりなまし。かの撫子のらうたくはべりしかば、いかで尋ねむと思ひたまふるを、今もえこそ聞きつけはべらね。

これこそそのたまへるはかなき例なめれ。つれなくてつらしと思ひけるも知らで、あはれ絶えざりしも、益なき片思ひなりけり。今やうやう忘れゆく際に、

さても見る限りはをかしくもありぬべし。時々にも、さる所にて忘れぬよすがと思ひたまへむには、頼もしげなくさし過ぐいたり心おかれて、その夜のことにつけてこそ、まかり絶えにしか。

この二つのことを思うたまへあはするに、若き時の心にだに、なほさやうにもて出でたることは、いとあやしく頼もしげなくおぼえはべりき。今より後は、ましてさのみなむ思ひたまへらるべき。御心のままに、折らば落ちぬべき萩の露、拾はば消えなむと見る玉笹の上の霰などの、艶にあえかなる好き好きしさのみこそ、をかしく思さるらめ、今さりとて、七年あまりがほどに思し知りはべなむ。なにがしがいやしき諫めにて、好きたわめらむ女に心おかせたまへ。過ちして、見む人のかたくななる名をも立てつべきものなり」

と戒む。中将、例のうなづく。君すこしかた笑みて、さることとは思すべかめり。

「いづ方につけても、人悪ろくはしたなかりける身物語かな」とて、うち笑ひおはさうず。

中将、「なにがしは、痴者の物語をせむ」とて、「いと忍びて見そめたりし人の、さても見つべかりしけはひなりしかば、ながらふべきものとしも思ひたまへざりしかど、馴れゆくままに、あはれとおぼえしかば、絶え絶え忘れぬものに思ひたまへしを、さばかりになれば、うち頼めるけしきも見えき。頼むにつけては、恨めしと思ふこともあらむと、心ながらおぼゆるをりをりもはべりしを、見知らぬやうにて、久しきとだえをも、かうたまさかなる人とも思ひたらず、ただ朝夕にもてつけたらむありさまに見えて、心苦しかりしかば、頼めわたることなどもありきかし。

親もなく、いと心細げにて、さらばこの人こそはと、事にふれて思へるさまもらうたげなりき。かうのどけきにおだしくて、久しくまからざりしころ、こ

こよなく心とまりはべりき。この人亡せて後、いかがはせむ、あはれながらも過ぎぬるはかひなくて、しばしばまかり馴るるには、すこしまばゆく艶に好ましきことは、目につかぬ所あるに、うち頼むべくは見えず、かれがれにのみ見せはべるほどに、忍びて心交はせる人ぞありけらし。

神無月のころほひ、月おもしろかりし夜、内よりまかではべるに、ある上人来あひて、この車にあひ乗りてはべれば、大納言の家にまかり泊まらむとするに、この人言ふやう、『今宵人待つらむ宿なむ、あやししく心苦しき』とて、この女の家はた、避きぬ道なりければ、荒れたる崩れより池の水かげ見えて、月だに宿る住処を過ぎむもさすがにて、下りはべりぬかし。

もとよりさる心を交はせるにやありけむ、この男いたくすすろきて、門近き廊の簀子だつものに尻かけて、とばかり月を見る。菊いとおもしろく移ろひわたり、風に競へる紅葉の乱れなど、あはれと、げに見えたり。

懐なりける笛取り出でて吹き鳴らし、『蔭もよし』などつづしり謡ふほどに、よく鳴る和琴を、調べととのへたりける、うるはしく掻き合はせたりしほど、けしうはあらずかし。律の調べは、女のものやはらかに掻き鳴らして、簾の内より聞こえたるも、今めきたる物の声なれば、清く澄める月に折つきなからず。男いたくめでて、簾のもとに歩み来て、

『庭の紅葉こそ、踏み分けたる跡もなけれ』などねたます。菊を折りて、

『琴の音も月もえならぬ宿ながら　つれなき人をひきやとめける

悪ろかめり』など言ひて、『今ひと声、聞きはやすべき人のある時、手な残いたまひそ』など、いたくあざれかかれば、女、いたう声つくろひて、

『木枯に吹きあはすめる笛の音を　ひきとどむべき言の葉ぞなき』

となまめき交はすに、憎くなるをも知らで、また、箏の琴を盤渉調に調べて、今めかしく掻い弾きたる爪音、かどなきにはあらねど、まばゆき心地なむしはべりし。ただ時々うち語らふ宮仕へ人などの、あくまでさればみ好きたるは、

心やありけむと、さしも見たまへざりしことなれど、心やましきままに思ひはべりしに、着るべき物、常よりも心とどめたる色あひ、しぎまいとあらまほしくて、さすがにわが見捨ててむ後をさへなむ、思ひやり後見たりし。

さりとも、絶えて思ひ放つやうはあらじと思うたまへて、とかく言ひはべりしを、背きもせずと、尋ねまどはさむとも隠れ忍びず、かかやかしからず答へつつ、ただ、『ありしながらは、えなむ見過ぐすまじき。あらためてのどかに思ひならばなむ、あひ見るべき』など言ひしを、さりともえ思ひ離れじと思ひたまへしかば、しばし懲らさむの心にて、『しかあらためむ』とも言はず、いたく綱引きて見せしあひだに、いといたく思ひ嘆きて、はかなくなりはべりしかば、戯れにくくなむおぼえはべりし。

ひとへにうち頼みたらむ方は、さばかりにてありぬべくなむ思ひたまへ出でらるる。はかなきあだ事をもまことの大事をも、言ひあはせたるにかひなからず、龍田姫と言はむにもつきなからず、織女の手にも劣るまじくその方も具して、うるさくなむはべりし」

とて、いとあはれと思ひ出でたり。中将、

「その織女の裁ち縫ふ方をのどめて、長き契りにぞあえまし。げに、その龍田姫の錦には、またしくものあらじ。はかなき花紅葉といふも、をりふしの色あひつきなく、はかばかしからぬは、露のはえなく消えぬるわざなり。さあるにより、難き世とは定めかねたるぞや」

と、言ひはやしたまふ。

「さて、また同じころ、まかり通ひし所は、人も立ちまさり心ばせまことにゆゑありと見えぬべく、うち詠み、走り書き、搔い弾く爪音、手つき口つき、みなたどたどしからず、見聞きわたりはべりき。見る目もこともなくはべりしかば、このさがな者を、うちとけたる方にて、時々隠ろへ見はべりしほどは、

べければ、かたみに背きぬべききざみになむある』

とねたげに言ふに、腹立たしくなりて、憎げなることどもを言ひはげまはべるに、女もえをさめぬ筋にて、指ひとつを引き寄せて喰ひてはべりしを、おどろおどろしくかこちて、

『かかる疵さへつきぬれば、いよいよ交じらひをすべきにもあらず。辱めたまふめる官位、いとどしく何につけてかは人めかむ。世を背きぬべき身なめり』など言ひ脅して、『さらば、今日こそは限りなめれ』と、この指をかがめてまかでぬ。

『手を折りてあひ見しことを数ふれば　これひとつやは君が憂きふし　えうらみじ』

など言ひはべれば、さすがにうち泣きて、

『憂きふしを心ひとつに数へきて　こや君が手を別るべきをり』

など、言ひしろひはべりしかど、まことには変るべきこととも思ひたまへずながら、日ごろ経るまで消息も遣はさず、あくがれまかり歩くに、臨時の祭の調楽に、夜更けていみじう霽降る夜、これかれまかりあかるる所にて、思ひめぐらせば、なほ家路と思はむ方はまたなかりけり。

内わたりの旅寝すさまじかるべく、気色ばめるあたりはそぞろ寒くや、と思ひたまへられしかば、いかが思へると、気色も見がてら、雪をうち払ひつつ、なまな悪ろく爪喰はるれど、さりとて今宵日ごろの恨みは解けなむ、と思つたまへしに、火ほのかに壁に背け、萎えたる衣どもの厚肥えたる、大いなる籠のうち掛けて、引き上ぐべきものの帷子などうち上げて、今宵ばかりやと、待ちけるさまなり。さればよと、心おごりするに、正身はなし。さるべき女房どもばかりとまりて、『親の家に、この夜さりなむ渡りぬる』と答へはべり。

艶なる歌も詠まず、気色ばめる消息もせで、いとひたや籠もりに情けなかりしかば、あへなき心地して、さがなく許しなかりしも、我を疎みねと思ふ方の

く疑ひはべりしもうるさくて、かく数ならぬ身を見も放たで、などかくしも思ふらむと、心苦しき折々もはべりて、自然に心をさめらるるやうになむはべりし。

この女のあるやう、もとより思ひいたらざりけることにも、いかでこの人のためにはと、なき手を出だし、後れたる筋の心をも、なほ口惜しくは見えじと思ひはげみつつ、とにかくにつけて、ものまめやかに後見、つゆにても心に違ふことはなくもがなと思へりしほどに、進める方と思ひしかど、とかくになびきてなよびゆき、醜き容貌をも、この人に見や疎まれむと、わりなく思ひつくるひ、疎き人に見えば、面伏せにや思はむと、憚り恥ぢて、みさをにもてつけて見馴るるままに、心もけしうはあらずはべりしかど、ただこの憎き方一つなむ、心をさめずはべりし。

そのかみ思ひはべりしやう、かうあながちに従ひ怖ぢたる人なめり、いかで懲るばかりのわざして、おどして、この方もすこしよろしくもなり、さがなきもやめむと思ひて、まことに憂しなども思ひて絶えぬべき気色ならば、かばかり我に従ふ心ならば思ひ懲りなむと思うたまへ得て、ことさらに情けなくつれなきさまを見せて、例の腹立ち怨ずるに、

『かくおぞましくは、いみじき契り深くとも、絶えてまた見じ。限りと思はば、かくわりなきもの疑ひはせよ。行く先長く見えむと思はば、つらきことありとも、念じてなのために思ひなりて、かかる心だに失せなば、いとあはれとなむ思ふべき。人並々にもなり、すこしおとなびむに添へて、また並ぶ人なくあるべき』やうなど、かしこく教へたつるかなと思ひたまへて、われたけく言ひそしはべるに、すこしうち笑ひて、

『よろづに見立てなく、ものげなきほどを見過ぐして、人数なる世もやと待つ方は、いとのだかに思ひなされて、心やましくもあらず。つらき心を忍びて、思ひ直らむ折を見つけむと、年月を重ねむあいな頼みは、いと苦しくなむある

め、ふとしも見え分かれず。かかれど、人の見及ばぬ蓬萊の山、荒海の怒れる魚の姿、唐国のはげしき獣の形、目に見えぬ鬼の顔などの、おどろおどろしく作りたる物は、心にまかせてひとときは目驚かして、実には似ざらめど、さてありぬべし。

世の常の山のたたずまひ、水の流れ、目に近き人の家居ありさま、げにと見え、なつかしくやはらいだる形などを静かに描きまぜて、すくよかならぬ山の景色、木深く世離れて畳みなし、け近き籬の内をば、その心しらひおきてなどをなむ、上手はいと勢ひことに、悪ろ者は及ばぬ所多かめる。

手を書きたるにも、深きことはなくて、ここかしの、点長に走り書き、そこはかとなく気色ばめるは、うち見るにかどかどしく気色だちたれど、なほまことの筋をこまやかに書き得たるは、うはべの筆消えて見ゆれど、今ひとたびとり並べて見れば、なほ実になむよりける。

はかなきことだにかくこそはべれ。まして人の心の、時にあたりて気色ばめらむ見る目の情けをば、え頼むまじく思うたまへ得てはべる。そのはじめのこゝと、好き好きしくとも申しはべらむ」

とて、近くゐる寄れば、君も目覚ましたまふ。中将いみじく信じて、頬杖をつきて向かひゐたまへり。法の師の世のことわり説き聞かせむ所の心地するも、かつはをかしけれど、かかるついでは、おのおの睦言もえ忍びとどめずなむありける。

「はやう、まだいと下臆にはべりし時、あはれと思ふ人はべりき。聞こえさせつるやうに、容貌などいとまほにもはべらざりしかば、若きほどの好き心には、この人をとまりにとも思ひとどめはべらず、よるべとは思ひながら、さうざうしくて、とかく紛れはべりしを、もの怨じをいたくしはべりしかば、心づきなく、いとかからで、おいらかならましかばと思ひつつ、あまりいと許しな

また、なのめに移ろふ方あらむ人を恨みて、気色ばみ背かむ、はたをこがま
しかりなむ。心は移ろふ方ありとも、見そめし心ざしいとほしく思はば、さる
方のよすがに思ひてもありぬべきに、さやうならむたぢろきに、絶えぬべきわ
ざなり。

すべて、よろづのことなだらかに、怨ずべきことをば見知れるさまにほのめ
かし、恨むべからむふしをも憎からずかすめなさば、それにつけて、あはれも
まさりぬべし。多くは、わが心も見る人からをさまりもすべし。あまりむげに
うちゆるべ見放ちたるも、心安くらうたきやうなれど、おのづから軽き方にぞ
おぼえはべるかし。繋がぬ舟の浮きたる例も、げにあやなし。さははべらぬか」
と言へば、中将うなづく。

「さしあたりて、をかしともあはれとも心に入らむ人の、頼もしげなき疑ひ
あらむこそ、大事なるべけれ。わが心あやまちなくて見過ぐさば、さし直して
もなどか見ざらむとおぼえたれど、それさしもあらじ。ともかくも、違ふべき
ふしあらむを、のどやかに見忍ばむよりほかに、ますことあるまじかりけり」
と言ひて、わが妹の姫君は、この定めにかなひたまへりと思へば、君のうち
ねぶりに言葉ませたまはぬを、さうざうしく心やましと思ふ。馬頭、物定め
の博士になりて、ひひらきむたり。中将は、このことわり聞き果てむと、心入れ
て、あへしらひるたまへり。

「よろづのことによそへて思せ。木の道の匠のよろづの物を心にまかせて作
り出だすも、臨時のもてあそび物の、その物と跡も定まらぬは、そばつきされ
ばみたるも、げにかうもしつべかりけりと、時につけつつさまを変へて、今め
かしきに目移りてをかしきもあり。大事として、まことにうるはしき人の調度
の飾りとする、定まれるやうある物を難なくし出づることなむ、なほまことの
物の上手は、さまことに見え分かれはべる。

また絵所に上手多かれど、墨がきに選ばれて、次々にさらに劣りまさるけぢ

もむきならむよるべをぞ、つひの頼み所には思ひおくべかりける。あまりのゆゑよし心ばせうち添へたらむをば、よろこびに思ひ、すこし後れたる方あらむをも、あながちに求め加へじ。うしろやすくのどけき所だに強くは、うはべの情けは、おのづからもてつけつべきわざをや。

艶にも恥ぢして、恨み言ふべきことも見知らぬさまに忍びて、上はつれなくみさをづくり、心一つに思ひあまる時は、言はむかたなくすぎき言の葉、あはれなる歌を詠みおき、しのぼるべき形見をとどめて、深き山里、世離れたる海づらなどにはひ隠れぬるをり。

童にはべりし時、女房などの物語読みしを聞きて、いとあはれに悲しく、心深きことかなと、涙をさへなむ落としはべりし。今思ふには、いと軽々しく、ことさらびたることなり。心ざし深からむ男をおきて、見る目の前につらきことありとも、人の心を見知らぬやうに逃げ隠れて、人をまどはし、心を見むとするほどに、長き世のもの思ひになる、いとあぢきなきことなり。『心深しや』など、ほめたてられて、あはれ進みぬれば、やがて尼になりぬかし。思ひ立つほどは、いと心澄めるやうにて、世に返り見すべくも思へらず。『いで、あな悲し。かくはた思しなりにけるよ』などやうに、あひ知れる人來とぶらひ、ひたすらに憂しとも思ひ離れぬ男、聞きつけて涙落とせば、使ふ人、古御達など、『君の御心は、あはれなりけるものを。あたら御身を』など言ふ。みづから額髪をかきさぐりて、あへなく心細ければ、うちひそみぬかし。忍ぶれど涙こぼれそめぬれば、折々ごとにえ念じえず、悔しきこと多かめるに、仏もなかなか心ぎたなしと、見たまひつべし。濁りにしめるほどよりも、なま浮かびにては、かへりて悪しき道にも漂ひぬべくぞおぼゆる。絶えぬ宿世浅からで、尼にもなさで尋ね取りたらむも、やがてあひ添ひて、とあらむ折もかからむきぎみをも、見過ぐしたらむ仲こそ、契り深くあはれならめ、我も人も、うしろめたく心おかれじやは。

言ひ寄れど、息の下にひき入れ言少ななるが、いとよくもて隠すなりけり。なよびかに女しと見れば、あまり情けにひきこめられて、とりなせば、あだめく。これをはじめの難とすべし。

事が中に、なのめなるまじき人の後見の方は、ものあはれ知り過ぐし、はかなきついで的情けあり、をかしきに進める方なくてもよかるべしと見えたるに、また、まめまめしき筋を立てて耳はさみがちに美さうなき家刀自の、ひとへにうちとけたる後見ばかりをして。

朝夕の出で入りにつけても、公私の人のたたずまひ、善き悪しきことの、目にも耳にもとまるありさまを、疎き人に、わざとうちまねばむやは。近くて見む人の聞きわき思ひ知るべからむに語りも合はせばやと、うちも笑まれ、涙もさしぐみ、もしは、あやなきおほやけ腹立たしく、心ひとつに思ひあまることなど多かるを、何にかは聞かせむと思へば、うちそむかれて、人知れぬ思ひ出で笑ひもせられ、『あはれ』とも、うち独りごたるるに、『何ごとぞ』など、あはつかにさし仰ぎみたらむは、いかがは口惜しからぬ。

ただひたふるに子めきて柔らかならむ人を、とかくひきつくろひてはなどか見ざらむ。心もとなくとも、直し所ある心地すべし。げに、さし向ひて見むほどは、さてもらうたき方に罪ゆるし見るべきを、立ち離れてさるべきことをも言ひやり、をりふしにし出でむわぎのあだ事にもまめ事にも、わが心と思ひ得ることなく深きいたりなからむは、いと口惜しく頼もしげなき咎や、なほ苦しからむ。常はすこしそばそばしく心づきなき人の、をりふしにつけて出でばえするやうもありかし」

など、隈なきもの言ひも、定めかねていたくうち嘆く。

「今は、ただ、品にもよらじ。容貌をばさらにも言はじ。いと口惜しくねぢけがましきおぼえだになくは、ただひとへにものまめやかに、静かなる心のお

「いでや、上の品と思ふにだに難げなる世を」と、君は思すべし。白き御衣どものなよらかなるに、直衣ばかりをしどけなく着なしたまひて、紐などもち捨てて、添ひ臥したまへる御火影、いとめでたく、女にて見たてまつらまほし。この御ためには上が上を選び出でてでも、なほ飽くまじく見えたまふ。

さまさまの人の上どもを語り合はせつつ、

「おほかたの世につけて見るには咎なきも、わがものとうち頼むべきを選らむに、多かる中にも、えなむ思ひ定むまじかりける。男の朝廷に仕うまつり、はかばかしき世のかためとなるべきも、まことの器ものとなるべきを取り出ださむには、かたかるべしかし。されど、賢しとても、一人二人世の中をまつりごちしるべきならねば、上は下に輔けられ、下は上になびきて、こと広きに譲ろふらむ。

狭き家の内の主人とすべき人一人を思ひめぐらすに、足らはで悪しかるべき大事どもなむ、かたがた多かる。とあればかかり、あふさきるさにて、なのめにさてもありぬべき人の少なきを、好き好きしき心のすさびにて、人のありさまをあまた見合はせむの好みならねど、ひとへに思ひ定むべきよるべとすばかりに、同じくは、わが力入りをし直しひきつくるふべき所なく、心になふやうにもやと、選りそめつる人の、定まりがたきなるべし。

かならずしもわが思ふにかなはねど、見そめつる契りばかりを捨てがたく思ひとまる人は、ものまめやかなりと見え、さて、保たるる女のためも、心にくく推し量らるるなり。されど、何か、世のありさまを見たまへ集むるままに、心に及ばずいとゆかしきこともなしや。君達の上なき御選びには、まして、いかばかりの人かは足らひたまはむ。

容貌きたなげなく、若やかなるほどの、おのがじしは塵もつかじと身をもてなし、文を書けど、おほどかに言選りをし、墨つきほのかに心もとなく思はせつつ、またさやかにも見てしがなとすべなく待たせ、わづかなる声聞くばかり

受領と言ひて、人の国のことにかかづらひ宮みて、品定まりたる中にも、またきざみきざみありて、中の品のけしうはあらぬ、選り出でつべきころほひなり。なまなまの上達部よりも非参議の四位どもの、世のおぼえ口惜しからず、もとの根ざし卑しからぬ、やすらかに身をもてなしふるまひたる、いとかはらかなりや。

家の内に足らぬことなど、はたなかめるままに、省かずまばゆきまでもてかしづける女などの、おとしめがたく生ひ出づるもあまたあるべし。宮仕へに出で立ちて、思ひかけぬ幸ひとり出づる例ども多かりかし」など言へば、

「すべて、にぎははしきによるべきなり」とて、笑ひたまふを、

「異人の言はむやうに、心得ず仰せらる」と、中将憎む。

「元の品、時世のおぼえうち合ひ、やむごとなきあたりの内々のもてなしけはひ後れたらむは、さらにも言はず、何をしてかく生ひ出でけむと、言ふかひなくおぼゆべし。うち合ひてすぐれたらむもことわり、これこそはさるべきこととおぼえて、めづらかなることと心も驚くまじ。なにがしが及ぶべきほどならねば、上が上はうちおきはべりぬ。

さて、世にありと人に知られず、さびしくあばれたらむ葎の門に、思ひの外にらうたげならむ人の閉ぢられたらむこそ、限りなくめづらしくはおぼえめ。いかで、はたかかりけむと、思ふより違へることなむ、あやしく心とまるわざなる。

父の年老い、ものむつかしげに太りすぎ、兄の顔憎げに、思ひやりことなることなき閨の内に、いといたく思ひあがり、はかなくし出でたることわざも、ゆゑなからず見えたらむ、片かどにても、いかが思ひの外にをかしからざらむ。

すぐれて疵なき方の選びにこそ及ばざらめ、さる方にて捨てがたきものをは」とて、式部を見やれば、わが妹どものよろしき聞こえあるを思ひてのたまふにや、とや心得らむ、ものも言はず。

び出だすに、『それ、しかあらじ』と、そらにいかがは推し量り思ひくたさむ。まことかとも見もてゆくに、見劣りせぬやうは、なくなむあるべき」

と、うめきたる気色も恥づかしげなれば、いとなべてはあらねど、われ思し合はすることやあらむ、うちほほ笑みて、

「その、片かどもなき人は、あらむや」とのたまへば、

「いと、さばかりならむあたりには、誰れかはすかされ寄りはべらむ。取るかたなく口惜しき際と、優なりとおぼゆばかりすぐれたるとは、数等しくこそはべらめ。人の品高く生まれぬれば、人にもてかしづかれて、隠るること多く、自然にそのけはひこよなかるべし。中の品になむ、人の心々、おのがじしの立てたるおもむきも見えて、分かるべきことかたがた多かるべき。下のきざみといふ際になれば、ことに耳たたずかし」

とて、いと隈なげなる気色なるも、ゆかしくて、

「その品々や、いかに。いづれを三つの品に置いてか分くべき。元の品高く生まれながら、身は沈み、位みじかくて人げなき。また直人の上達部などまでなり上り、我は顔にて家の内を飾り、人に劣らじと思へる。そのけぢめをば、いかが分くべき」

と問ひたまふほどに、左馬頭、藤式部丞、御物忌に籠もらむとて参れり。世の好き者にて物よく言ひとほれるを、中将待ちとりて、この品々をわきまへ定め争ふ。いと聞きにくきこと多かり。

「なり上れども、もとよりさるべき筋ならぬは、世人の思へることも、さは言へど、なほことなり。また、元はやむごとなき筋なれど、世に経るたづき少なく、時世に移ろひて、おぼえ衰へぬれば、心は心としてこと足らず、悪ろびたることども出でくるわざなめれば、とりどりにことわりて、中の品にぞ置くべき。」

しがれば、

「さりぬべき、すこしは見せむ。かたはなるべきもこそ」と、許したまはねば、

「そのうちとけてかたはらいたしと思されむこそゆかしけれ。おしなべたるおほかたのは、数ならねど、程々につけて、書き交はしつつも見はべりなむ。おのがじし、恨めしき折々、待ち顔ならむ夕暮れなどのこそ、見所はあらめ」と怨ずれば、やむごとなくせちに隠したまふべきなどは、かやうにおほぞうなる御厨子などにうち置き散らしたまふべくもあらず、深くとり置きたまふべかめれば、二の町の心安きなるべし。片端づつ見るに、「かくさまざまなる物どもこそはべりけれ」とて、心あてに「それか、かれか」など問ふなかに、言ひ当つるもあり、もて離れたることをも思ひ寄せて疑ふも、をかしと思せど、言少なにてとかく紛らはしつつ、とり隠したまひつ。

「そこにこそ多く集へたまふらめ。すこし見ばや。さてなむ、この厨子も心よく開くべき」とのたまへば、

「御覧じ所あらむこそ、難くはべらめ」など聞こえたまふついでに、「女の、これはしもと難つくまじきは、難くもあるかなと、やうやうなむ見たまへ知る。ただうはべばかりの情けに、手走り書き、をりふしの答へ心得て、うちしなどばかりは、随分によろしきも多かりと見たまふれど、そもまことにその方を取り出でむ選びにかならず漏るまじきは、いと難しや。わが心得たることばかりを、おのがじし心をやりて、人をば落としめなど、かたはらいたきこと多かり。親など立ち添ひもてあがめて、生ひ先籠れる窓の内なるほどは、ただ片かどを聞き伝へて、心を動かすこともあめり。容貌をかしくうちおほどき、若やかにて紛ることなきほど、はかなきすさびをも、人まねに心を入るることもあるに、おのづから一つゆゑづけてし出づることもあり。

見る人、後れたる方をば言ひ隠し、さてありぬべき方をばつくろひて、まね

光る源氏、名のみことことしう、言ひ消たれたまふ咎多かなるに、いとど、かかる好きごとどもを、末の世にも聞き伝へて、軽びたる名をや流さむと、忍びたまひける隠ろへごとをさへ、語り伝へけむ人のもの言ひさがなきよ。さるは、いといたく世を憚り、まめだちたまひけるほど、なよびかにをかきことはなくて、交野少将には笑はれたまひけむかし。

まだ中将などにもおしたまひし時は、内にのみさぶらひようしたまひて、大殿には絶え絶えまかだたまふ。忍ぶの乱れやと、疑ひきこゆることもありしかど、さしもあだめき目馴れたるうちつけの好き好きしさなどは好ましからぬ御本性にて、まれには、あながちに引き違へ心尽くしなることを、御心に思しとどむる癖なむ、あやにくにて、さるまじき御振る舞ひもうち混じりける。

長雨晴れ間なきころ、内の御物忌さし続きて、いとど長居さぶらひたまふを、大殿にはおぼつかなく恨めしく思したれど、よろづの御よそひ何くれとめづらしきさまに調じ出でたまひつつ、御息子の君たちただこの御宿直所の宮仕へを勤めたまふ。

宮腹の中将は、なかに親しく馴れきこえたまひて、遊び戯れをも人よりは心安く、なれなれしく振る舞ひたり。右大臣のいたはりかしづきたまふ住み処は、この君もいとももの憂くして、好きがましきあだ人なり。

里にても、わが方のしつらひまばゆくして、君の出で入りしたまふにうち連れきこえたまひつつ、夜昼、学問をも遊びをももろともにして、をさをさ立ちおくれず、いづくにてもまつはれきこえたまふほどに、おのづからかしこまりもえおかず、心のうちに思ふことをも隠しあへずなむ、睦れきこえたまひける。

つれづれと降り暮らして、しめやかなる宵の雨に、殿上にもをさをさ人少なに、御宿直所も例よりはのどやかなる心地するに、大殿油近くて書どもなど見たまふ。近き御厨子なる色々の紙なる文どもを引き出でて、中将わりなくゆか

帶 木

帶

木

「かかる所に思ふやうならむ人を据ゑて住まばや」とのみ、嘆かしう思しわ
たる。

「光る君といふ名は、高麗人のめできこえてつけたてまつりける」とぞ、言
ひ伝へたるとなむ。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

ければ、いづ方につけてもいとかなやかなるに、この君さへかくおはし添ひぬれば、春宮の御祖父にて、つひに世の中を知りたまふべき右大臣の御勢ひは、ものにもあらず庄されたまへり。

御子どもあまた腹々にものしたまふ。宮の御腹は、蔵人少将にていと若うをかしきを、右大臣の、御仲はいと好からねど、え見過ぐしたまはで、かしづきたまふ四の君にあはせたまへり。劣らずもてかしづきたるは、あらまほしき御あはひどもになむ。

源氏の君は、主上の常に召しまつはせば、心安く里住みもえしたまはず。心のうちには、ただ藤壺の御ありさまを、類なしと思ひきこえて、「さやうならむ人をこそ見め。似る人なくもおはしけるかな。大殿の君、いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかず」おぼえたまひて、幼きほどの心一つにかかりて、いと苦しきまでぞおはしける。

大人になりたまひて後は、ありしやうに御簾の内にも入れたまはず。御遊びの折々、琴笛の音に聞こえかよひ、ほのかなる御声を慰めにて、内住みのみ好ましようおぼえたまふ。五六日さぶらひたまひて、大殿に二三日など、絶え絶えにまかでたまへど、ただ今は幼き御ほどに、罪なく思しなして、いとなみかしづききこえたまふ。

御方々の人びと、世の中におしなべたらぬを選りとのへすぐりてさぶらはせたまふ。御心につくべき御遊びをし、おほなおほな思しいたつく。

内には、もとの淑景舎を御曹司にて、母御息所の御方の人びとまかで散らずさぶらはせたまふ。

里の殿は、修理職、内匠寮に宣旨下りて、二なう改め造らせたまふ。もとの木立、山のたたずまひ、おもしろき所なりけるを、池の心広くしなして、めでたく造りののしる。

しにも」ともよほさせたまひければ、さ思したり。

さぶらひにまかだたまひて、人びと大御酒など参るほど、親王たちの御座の末に源氏着きたまへり。大臣気色ばみきこえたまふことあれど、もののつつましきほどにて、ともかくもあへしらひきこえたまはず。

御前より、内侍、宣旨うけたまはり伝へて、大臣参りたまふべき召しあれば、参りたまふ。御祿の物、主上の命婦取りて賜ふ。白き大桂に御衣一領、例のことなり。

御盃のついでに、

「いときなき初元結ひに長き世を

契る心は結びこめつや」

御心ばへありて、おどろかさせたまふ。

「結びつる心も深き元結ひに

濃き紫の色し褪せずは」

と奏して、長橋より下りて舞踏したまふ。

左馬寮の御馬、蔵人所の鷹据ゑて賜はりたまふ。御階のもとに親王たち上達部つらねて、祿ども品々に賜はりたまふ。

その日の御前の折櫃物、籠物など、右大弁なむ承りて仕うまつらせける。屯食、祿の唐櫃どもなど、ところせきまで、春宮の御元服の折にも数まされり。なかなか限りもなくいかめしうなむ。

その夜、大臣の御里に源氏の君まかでさせたまふ。作法世にめづらしきまで、もてかしづききこえたまへり。いときびはにておはしたるを、ゆゆしううつくしと思ひきこえたまへり。女君はすこし過ぐしたまへるほどに、いと若うおはすれば、似げなく恥づかしと思いたり。

この大臣の御おぼえいとやむごとなきに、母宮、内の一つ后腹になむおはし

たてまつる。こよなう心寄せきこえたまへれば、弘徽殿の女御、またこの宮とも御仲そばそばしきゆゑ、うち添へて、もとよりの憎さも立ち出でて、ものしと思したり。

世にたぐひなしと見たてまつりたまひ、名高うおはする宮の御容貌にも、なほ匂はしきはたとへむ方なく、うつくしげなるを、世の人、「光る君」と聞こゆ。藤壺ならびたまひて、御おぼえもとりどりなれば、「かかやく日の宮」と聞こゆ。

この君の御童姿、いと変へまうく思せど、十二にて御元服したまふ。居起ち思しいとなみて、限りある事に事を添へさせたまふ。

一年の春宮の御元服、南殿にてありし儀式、よそほしかりし御響きに落とさせたまはず。所々の饗など、内蔵寮、穀倉院など、公事に仕うまつれる、おろそかなることぞと、とりわき仰せ言ありて、清らを尽くして仕うまつれり。

おはします殿の東の廂、東向きに椅子立てて、冠者の御座、引入の大臣の御座、御前にあり。申の時にて源氏参りたまふ。角髪結ひたまへるつらつき、顔のほひ、さま変へたまはむこと惜しげなり。大蔵卿、蔵人仕うまつる。いと清らなる御髪を削ぐほど、心苦しげなるを、主上は、「御息所の見ましかば」と、思し出づるに、堪へがたきを、心強く念じかへさせたまふ。

かうぶりしたまひて、御休所にまかだたまひて、御衣奉り替へて、下りて拝したてまつりたまふさまに、皆人涙落としたまふ。帝はた、ましてえ忍びあへたまはず、思し紛るる折もありつる昔のこと、とりかへし悲しく思さる。いとかうきびはなるほどは、あげ劣りやと疑はしく思されつるを、あさましよううつくしげき添ひたまへり。

引入の大臣の皇女腹にただ一人かしづきたまふ御女、春宮よりも御けしきあるを、思しわづらふことありける、この君に奉らむの御心なりけり。内にも、御けしき賜はらせたまへりければ、「さらば、この折の後見なかめるを、添ひ臥

まりて、ねむごろに聞こえさせたまひけり。

母后、「あな恐ろしや。春宮の女御のいとさがなくて、桐壺の更衣の、あらはにはかなくもてなされにし例もゆゆしう」と、思しつつみて、すがすがしうも思し立たざりけるほどに、后も亡せたまひぬ。

心細きさまにておはしますに、「ただ、わが女皇女たちの同じ列に思ひきこえむ」と、いとねむごろに聞こえさせたまふ。さぶらふ人びと、御後見たち、御兄の兵部卿の親王など、「かく心細くておはしまさむよりは、内住みせさせたまひて、御心も慰むべく」など思しなりて、参らせたてまつりたまへり。

藤壺と聞こゆ。げに、御容貌ありさま、あやしきまでぞおぼえたまへる。これは、人の御際まさりて、思ひなしめでたく、人もえおとしめきこえたまはねば、うけばりて飽かぬことなし。かれは、人の許しきこえざりしに、御心ぎしあやくなりしぞかし。思し紛るとはなけれど、おのづから御心移ろひて、こよなう思し慰むやうなるも、あはれなるわざなりけり。

源氏の君は、御あたり去りたまはぬを、ましてしげく渡らせたまふ御方は、え恥ぢあへたまはず。いづれの御方も、われ人に劣らむと思いたるやはある、とりどりにいとめでたけれど、うち大人びたまへるに、いと若うつくしげにて、切に隠れたまへど、おのづから漏り見たてまつる。

母御息所も、影だにおぼえたまはぬを、「いとよう似たまへり」と、典侍の聞こえけるを、若き御心地にいとあはれと思ひきこえたまひて、常に参らまほしく、「なづさひ見たてまつらばや」とおぼえたまふ。

主上も限りなき御思ひどちにて、「な疎みたまひそ。あやしくよそへきこえつべき心地なむする。なめしと思さで、らうたくしたまへ。つらつき、まみなどは、いとよう似たりしゆゑ、かよひて見えたまふも、似げなからずなむ」など聞こえつけたまへれば、幼心地にも、はかなき花紅葉につけても心ぎしを見え

弁も、いと才かしこき博士にて、言ひ交はしたることどもなむ、いと興ありける。文など作り交はして、今日明日帰り去りなむとするに、かくありがたき人に対面したるよろこび、かへりては悲しかるべき心ばへをおもしろく作りたるに、御子もいとあはれなる句を作りたまへるを、限りなうめでたてまつりて、いみじき贈り物どもを捧げたてまつる。朝廷よりも多くの物賜はず。

おのづから事広ごりて、漏らさせたまはねど、春宮の祖父大臣など、いかなることにかと思し疑ひてなむありける。

帝、かしこき御心に、倭相を仰せて、思しよりにける筋なれば、今までこの君を親王にもなさせたまはざりけるを、「相人はまことにかしこかりけり」と思して、「無品の親王の外戚の寄せなきにては漂はさじ。わが御世もいと定めなきを、ただ人にて朝廷の御後見をするなむ、行く先も頼もしげなめること」と思し定めて、いよいよ道々の才を習はさせたまふ。

際ことに賢くて、ただ人にはいとあたらしけれど、親王となりたまひなば、世の疑ひ負ひたまひぬべくものしたまへば、宿曜の賢き道の人に勘へさせたまふにも、同じさまに申せば、源氏になしたてまつるべく思しおきてたり。

年月に添へて、御息所の御ことを思し忘るる折なし。「慰むや」と、さるべき人びと参らせたまへど、「なずらひに思さるるだにいとかたき世かな」と、疎ましうのみよろづに思しなりぬるに、先帝の四の宮の、御容貌すぐれたまへる聞こえ高くおはします、母后世になくかしづききこえたまふを、主上にさぶらふ典侍は、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しう参り馴れたりければ、いはけなくおはしましし時より見たてまつり、今もほの見たてまつりて、「亡せたまひにし御息所の御容貌に似たまへる人を、三代の宮仕へに伝はりぬるに、え見たてまつりつけぬを、後の宮の姫宮こそ、いとようおぼえて生ひ出でさせたまへりけれ。ありがたき御容貌人になむ」と奏しけるに、「まことにや」と、御心と

かの御祖母北の方、慰む方なく思し沈みて、おはすらむ所にだに尋ね行かむと願ひたまひしるしにや、つひに亡せたまひぬれば、またこれを悲しび思すこと限りなし。御子六つになりたまふ年なれば、このたびは思し知りて恋ひ泣きたまふ。年ごろ馴れ睦びきこえたまひつるを、見たてまつり置く悲しびをなむ、返す返すのたまひける。

今は内へのみさぶらひたまふ。七つになりたまへば、読書始めなどせさせたまひて、世に知らず聡う賢くおはすれば、あまり恐ろしきまで御覧ず。

「今は誰れも誰れもえ憎みたまはじ。母君なくてだにらうたうしたまへ」とて、弘徽殿などにも渡らせたまふ御供には、やがて御簾の内に入れたてまつりたまふ。いみじき武士、仇敵なりとも、見てはうち笑まれぬべきさまのしたまへれば、えさし放ちたまはず。女皇女たち二ところ、この御腹におはしませど、なずらひたまふべきだにぞなかりける。御方々も隠れたまはず、今よりなまめかしう恥づかしげにおはすれば、いとをかしううちとけぬ遊び種に、誰れも誰れも思ひきこえたまへり。

わざとの御学問はさるものにて、琴笛の音にも雲居を響かし、すべて言ひ続ければ、ことごとしう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。

そのころ、高麗人の参れる中に、かしこき相人ありけるを聞こし召して、宮の内に召さむことは、宇多の帝の御誠めあれば、いみじう忍びて、この御子を鴻臚館に遣はしたり。御後見だちて仕うまつる右大弁の子のやうに思はせて率てたてまつるに、相人驚きて、あまたたび傾きあやしぶ。

「国の親となりて、帝王の上なき位に昇るべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。朝廷の重鎮となりて、天の下を輔くる方にて見れば、またその相違ふべし」と言ふ。

たまふなる。いとすさまじう、ものしと聞こし召す。このごろの御気色を見てまつる上人、女房などは、かたはらいたしと聞きけり。いとおし立ちかどかどしきところものしたまふ御方にて、ことにもあらず思し消ちてもてなしたまふなるべし。月も入りぬ。

「雲の上も涙にくるる秋の月

いかですむらむ浅茅生の宿」

思し召しやりつつ、灯火をかかげ尽くして起きおはします。右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなるべし。人目を思して、夜の御殿に入らせたまひても、まどろませたまふことかたし。朝に起きさせたまふとても、「明るも知らで」と思し出づるにも、なほ朝政は怠らせたまひぬべかめり。

ものなども聞こし召さず、朝餉のけしきばかり触れさせたまひて、大床子の御膳などは、いと遙かに思し召したれば、陪膳にさぶらふ限りは、心苦しき御気色を見たてまつり嘆く。すべて、近うさぶらふ限りは、男女、「いとわりなきわぎかな」と言ひ合はせつつ嘆く。「さるべき契りこそはおはしましけめ。そこらの人の誹り、恨みをも憚らせたまはず、この御ことに触れたることをば、道理をも失はせたまひ、今はた、かく世の中のことも、思ほし捨てたるやうになりゆくは、いとたいだいしきわぎなり」と、人の朝廷の例まで引き出で、ささめき嘆きけり。

月日経て、若宮参りたまひぬ。いとどこの世のものならず清らにおよすげたまへれば、いとゆゆしう思したり。

明くる年の春、坊定まりたまふにも、いと引き越さまほしう思せど、御後見すべき人もなく、また世のうけひくまじきことなりければ、なかなか危く思し憚りて、色にも出ださせたまはずなりぬるを、「さばかり思したれど、限りこそありけれ」と、世人も聞こえ、女御も御心落ちるたまひぬ。

せさせたまふ。いとこまやかにありさま問はせたまふ。あはれなりつること忍びやかに奏す。御返り御覧ずれば、

「いともかしこきは置き所もはべらず。かかる仰せ言につけても、かきくらす乱り心地になむ。

荒き風ふせぎし蔭の枯れしより

小萩がうへぞ静心なき」

などやうに乱りがはしきを、心をさめざりけるほどと御覧じ許すべし。いとかうしも見えじと、思し静むれど、さらにえ忍びあへさせたまはず、御覧じ初めし年月のことさへかき集め、よろづに思し続けられて、「時の間もおぼつかりしを、かくても月日は経にけり」と、あさましう思し召さる。

「故大納言の遺言あやまたず、宮仕への本意深くものしたりしよろこびは、かひあるさまにとこそ思ひわたりつれ。言ふかひなしや」とうちのたまはせて、いとあはれに思しやる。「かくても、おのづから若宮など生ひ出でたまはば、さるべきついでもありなむ。命長くとこそ思ひ念ぜめ」

などのたまはず。かの贈り物御覧ぜさす。「亡き人の住処尋ね出でたりけむしるしの釵ならましかば」と思ほすもいとかひなし。

「尋ねゆく幻もがなつてにても

魂のありかをそこと知るべく」

絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師といへども、筆限りありければいとにほひ少なし。大液芙蓉未央柳も、げに通ひたりし容貌を、唐めいたる装いはうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを思し出づるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。朝夕の言種に、「翼をならべ、枝を交はさむ」と契らせたまひしに、かなはざりける命のほどぞ、尽きせず恨めしき。

風の音、虫の音につけて、もののみ悲しう思さるるに、弘徽殿には、久しく上の御局にも参う上りたまはず、月のおもしろきに、夜更くるまで遊びをぞし

うち返しつつ、御しほたれがちにのみおはします」と語りて尽きせず。泣く泣く、「夜いたう更けぬれば、今宵過ぐさず、御返り奏せむ」と急ぎ参る。

月は入り方の、空清う澄みわたれるに、風いと涼しくなりて、草むらの虫の声ごゑもよほし顔なるも、いと立ち離れにくき草のもとなり。

「鈴虫の声の限りを尽くしても

長き夜あかずふる涙かな」

えも乗りやらず。

「いとどしく虫の音しげき浅茅生に

露置き添ふる雲の上人

かごと聞こえつべくなむ」

と言はせたまふ。をかしき御贈り物などあるべき折にもあらねば、ただかの御形見にとて、かかる用もやと残したまへりける御装束一領、御髪上げの調度めく物添へたまふ。

若き人びと、悲しきことはさらにも言はず、内わたりを朝夕にならひて、いとさうざうしく、主上の御ありさまなど思ひ出できこゆれば、とく参りたまはむことをそそのかしきこゆれど、「かく忌ま忌ましき身の添ひたてまつらむも、いと人聞き憂かるべし、また、見たてまつらでしほしもあらむは、いとうしろめたう」思ひきこえたまひて、すがすがともえ参らせたてまつりたまはぬなりけり。

命婦は、「まだ大殿籠もらせたまはざりける」と、あはれに見たてまつる。御前の壺前裁のいとおもしろき盛りなるを御覧するやうにて、忍びやかに心にき限りの女房四五人さぶらはせたまひて、御物語せさせたまふなりけり。このごろ、明け暮れ御覧する長恨歌の御絵、亭子院の描かせたまひて、伊勢、貫之に詠ませたまへる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ、枕言に

思し急ぐめれば、ことわりに悲しう見たてまつりはべるなど、うちうちに思うたまふるさまを奏したまへ。ゆゆしき身にはべれば、かくておはしますも、忌ま忌ましようかたじけなくなむ」

とのたまふ。宮は大殿籠もりにけり。

「見たてまつりて、くはしう御ありさまも奏しはべらまほしきを、待ちおはしますらむに、夜更けはべりぬべし」とて急ぐ。

「暮れまどふ心の闇も堪へがたき片端をだに、はるくばかりに聞こえまほしうはべるを、私にも心のどかにまかだたまへ。年ごろ、うれしく面だたしきついでにて立ち寄りたまひしものを、かかる御消息にて見たてまつる、返す返すつれなき命にもはべるかな。

生まれし時より、思ふ心ありし人にて、故大納言、いまはとなるまで、『ただ、この人の宮仕への本意、かならず遂げさせたてまつれ。我れ亡くなりぬとて、口惜しう思ひくづほるな』と、返す返す諫めおかれはべりしかば、はかばかしう後見思ふ人もなき交じらひは、なかなかなるべきことと思ひたまへながら、ただかの遺言を違へじとばかりに、出だし立てはべりしを、身に余るまでの御心ざしの、よろづにかたじけなきに、人げなき恥を隠しつつ、交じらひたまふめりつるを、人の嫉み深く積もり、安からぬこと多くなり添ひはべりつるに、横様なるやうにて、つひにかくなりはべりぬれば、かへりてはつらくなむ、かしこき御心ざしを思ひたまへられはべる。これもわりなき心の闇になむ」

と、言ひもやらずむせかへりたまふほどに、夜も更けぬ。

「主上もしかなむ。『我が御心ながら、あながちに人目おどろくばかり思されしも、長かるまじきなりけりと、今はつらかりける人の契りになむ。世にいささかも人の心を曲げたることはあらじと思ふを、ただこの人のゆゑにて、あまたさるまじき人の恨みを負ひし果て果ては、かううち捨てられて、心をさめむ方なきに、いとど人悪ろうかたくなになり果つるも、前の世ゆかしうなむ』と

「『参りては、いとど心苦しう、心肝も尽くるやうになむ』と、典侍の奏したまひしを、もの思うたまへ知らぬ心地にも、げにこそいと忍びがたうはべりけれ」

とて、ややためらひて、仰せ言伝へきこゆ。

「『しばしは夢かとのみたどられしを、やうやう思ひ静まるにしも、覚むべき方なく堪へがたきは、いかにすべきわざにかとも、問ひあはすべき人だになきを、忍びては参りたまひなむや。若宮のいとおぼつかなく、露けき中に過ぐしたまふも、心苦しう思さるるを、とく参りたまへ』など、はかばかしうものたまはせやらず、むせかへらせたまひつつ、かつは人も心弱く見たてまつるらむと、思しつつまぬにしもあらぬ御気色の心苦しきに、承り果てぬやうにてなむ、まかではべりぬる」

とて、御文奉る。

「目も見えはべらぬに、かくかしこき仰せ言を光にてなむ」とて、見たまふ。

「ほど経ばすこしうち紛るることもやと、待ち過ぐす月日に添へて、いと忍びがたきはわりなきわざになむ。いはけなき人をいかにと思ひやりつつ、もろともに育まぬおぼつかなさを。今は、なほ昔のかたみになずらへて、ものしたまへ」

など、こまやかに書かせたまへり。

「宮城野の露吹きむすぶ風の音に

小萩がもとを思ひこそやれ」

とあれど、え見たまひ果てず。

「命長さの、いとつらう思うたまへ知らるるに、松の思はむことだに、恥づかしう思うたまへはべれば、百敷に行きかひはべらむことは、ましていと憚り多くなむ。かしこき仰せ言をたびたび承りながら、みづからはえなむ思ひたまへたつまじき。若宮は、いかに思ほし知るにか、参りたまはむことをのみなむ

心ばせのなだらかにめやすく、憎みがたかりしことなど、今ぞ思し出づる。さま悪しき御もてなしゆゑこそ、すげなう嫉みたまひしか、人柄のあはれに情けありし御心を、主上の女房なども恋ひしのびあへり。なくてぞとは、かかる折にやと見えたり。

はかなく日ごろ過ぎて、後のわぎなどにもこまかにとぶらはせたまふ。ほど経るままに、せむ方なう悲しう思さるるに、御方がたの御宿直なども絶えてしまはず、ただ涙にひちて明かし暮らさせたまへば、見たてまつる人さへ露けき秋なり。「亡きあとまで、人の胸あくまじかりける人の御おぼえかな」とぞ、弘徽殿などにはなほ許しなうのたまひける。一の宮を見たてまつらせたまふにも、若宮の御恋しさのみ思ほし出でつつ、親しき女房、御乳母などを遣はしつつ、ありさまを聞こし召す。

野分立ちて、にはかに肌寒き夕暮のほど、常よりも思し出づること多くて、靱負命婦といふを遣はす。夕月夜のをかしきほどに出だし立てさせたまひて、やがて眺めおはします。かうやうの折は、御遊びなどせさせたまひしに、心ことなる物の音を掻き鳴らし、はかなく聞こえ出づる言の葉も、人よりはことなりしけはひ容貌の、面影につと添ひて思さるるにも、闇の現にはなほ劣りけり。

命婦、かしこに参で着きて、門引き入るるより、けはひあはれなり。やもめ住みなれど、人一人の御かしづきに、とかくつくろひ立てて、めやすきほどにて過ぐしたまひつる、闇に暮れて臥し沈みたまへるほどに、草も高くなり、野分にいと荒れたる心地して、月影ばかりぞ八重葎にも障はらず差し入りたる。南面に下ろして、母君も、とみにえものものたまはず。

「今までとまりはべるがいと憂きを、かかる御使の蓬生の露分け入りたまふにつけても、いと恥づかしうなむ」

とて、げにえ堪ふまじく泣いたまふ。

たゆげなれば、かくながら、ともかくもならむを御覽じはてむと思し召すに、
「今日始むべき祈りども、さるべき人びとうけたまはれる、今宵より」と、聞
こえ急がせば、わりなく思ほしながらまかでさせたまふ。

御胸つとふたがりて、つゆまどろまれず、明かしかねさせたまふ。御使の行
き交ふほどもなきに、なほいぶせさを限りなくのたまはせつるを、「夜半うち過
ぐるほどになむ、絶えはてたまひぬる」とて泣き騒げば、御使もいとあへなく
て帰り参りぬ。聞こし召す御心まどひ、何ごとも思し召しわかれず、籠もりお
はします。

御子は、かくてもいと御覽ぜまほしけれど、かかるほどにさぶらひたまふ、
例なきことなれば、まかでたまひなむとす。何事かあらむとも思したらず、さ
ぶらふ人びとの泣きまどひ、主上も御涙のひまなく流れおはしますを、あやし
と見たてまつりたまへるを、よろしきことにだに、かかる別れの悲しからぬは
なきわざなるを、ましてあはれに言ふかひなし。

限りあれば、例の作法にをさめたてまつるを、母北の方、同じ煙にのぼりな
むと、泣きこがれたまひて、御送りの女房の車に慕ひ乗りたまひて、愛宕とい
ふ所にいといかめしうその作法したるに、おはし着きたる心地、いかばかりか
はありけむ。「むなしき御骸を見る見る、なほおはするものと思ふが、いとかわ
なければ、灰になりたまはむを見たてまつりて、今は亡き人と、ひたぶるに思
ひなりなむ」と、さかしうのたまひつれど、車よりも落ちぬべうまろびたまへ
ば、さは思ひつかしと、人びともてわづらひきこゆ。

内より御使あり。三位の位贈りたまふよし、勅使来てその宣命読むなむ、悲
しきことなりける。女御とだに言はせずなりぬるが、あかず口惜しう思さるれ
ば、いま一階の位をだにと、贈らせたまふなりけり。これにつけても憎みたま
ふ人びと多かり。もの思ひ知りたまふは、様、容貌などのめでたかりしこと、

たくめづらしきまで見えたまふを、え嫉みあへたまはず。ものの心知りたまふ人は、「かかる人も世に出でおはするものなりけり」と、あさましきまで目をおどろかしたまふ。

その年の夏、御息所、はかなき心地にわづらひて、まかでなむとしたまふを、暇さらに許させたまはず。年ごろ、常の篤しきになりたまへれば、御目馴れて、「なほしばしころみよ」とのみのたまはするに、日々に重りたまひて、ただ五六日のほどにいと弱うなれば、母君泣く泣く奏して、まかでさせたまつりたまふ。かかる折にも、あるまじき恥もこそと心づかひして、御子をば留めたてまつりて、忍びてぞ出でたまふ。

限りあれば、さのみもえ留めさせたまはず、御覧じだに送らぬおぼつかなきを、言ふ方なく思ほさる。いとにほひやかにうつくしげなる人の、いたう面瘦せて、いとあはれとものを思ひしみながら、言に出でて聞こえやらす、あるかなきかに消え入りつつものしたまふを御覧するに、来し方行く末思し召されず、よろづのことを泣く泣く契りのたまはすれど、御いらへもえ聞こえたまはず、まみなどもいとたゆげにて、いとどなよなよと、我がの気色にて臥したれば、いかさまにと思し召しまどはる。輦車の宣旨などのたまはせても、また入らせたまひて、さらにえ許させたまはず。

「限りあらむ道にも、後れ先立たじと、契らせたまひけるを。さりとも、うち捨てては、え行きやらじ」

とのたまはするを、女もいといみじと、見たてまつりて、

「限りとて別るる道の悲しきに

いかまほしきは命なりけり

いとかく思ひたまへましかば」

と、息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげに

初めよりおしなべての上宮仕へしたまふべき際にはあらざりき。おぼえいとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなくまつはさせたまふあまりに、さるべき御遊びの折々、何事にもゆゑある事のふしぶしには、まづ参う上らせたまふ。ある時には大殿籠もり過ぐして、やがてさぶらはせたまひなど、あながちに御前去らずもてなさせたまひしほどに、おのづから軽き方にも見えしを、この御子生まれたまひて後は、いと心ことに思ほしおきてたれば、「坊にも、ようせずは、この御子の居たまふべきなめり」と、一の皇子の女御は思し疑へり。人より先に参りたまひて、やむごとなき御思ひなべてならず、皇女たちなどもおはしませば、この御方の御諫めのみぞ、なほわづらはしう心苦しう思ひきこえさせたまひける。

かしこき御蔭をば頼みきこえながら、落としめ疵を求めたまふ人は多く、わが身はか弱くものはかなきありさまにて、なかなかなるもの思ひをぞしたまふ。御局は桐壺なり。あまたの御方がたを過ぎさせたまひて、ひまなき御前渡りに、人の御心を尽くしたまふも、げにことわりと見えたり。参う上りたまふにも、あまりうちしきる折々は、打橋、渡殿のここかしこの道に、あやしきわざをしつつ、御送り迎への人の衣の裾、堪へがたく、まさなきこともあり。またある時には、え避らぬ馬道の戸を鎖しこめ、こなたかなた心を合はせて、はしたなめわづらはせたまふ時も多かり。事にふれて数知らず苦しきことのみまされば、いといたう思ひわびたるを、いとどあはれと御覧じて、後涼殿にもとよりさぶらひたまふ更衣の曹司を他に移させたまひて、上局に賜はず。その恨みましてやらむ方なし。

この御子三つになりたまふ年、御袴着のこと一の宮のたてまつりしに劣らず、内蔵寮、おさめ殿の物を尽くして、いみじうせさせたまふ。それにつけても、世の誹りのみ多かれど、この御子のおよすげもておはする御容貌心ばへありが

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひけるなかに、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。

はじめより我はと思ひ上がりたまへる御方がた、めざましきものにおとしめ嫉みたまふ。同じほど、それより下臈の更衣たちは、ましてやすからず。朝夕の宮仕へにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふ積もりにやありけむ、いと篤しくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよあかずあはれなるものに思ほして、人のそしりをもえ憚らせたまはず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。

上達部、上人なども、あいなく目を側めつつ、「いとまばゆき人の御おぼえなり。唐土にも、かかる事の起こりにこそ、世も乱れ、悪しかりけれ」と、やうやう天の下にもあぢきなう、人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに、いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにてまじらひたまふ。

父の大納言は亡くなりて、母北の方なむいにしへの人のよしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方がたにもいたう劣らず、なにごとの儀式をもてなしたまひけれど、とりたててはかばかしき後見しなければ、事ある時は、なほ抛り所なく心細げなり。

先の世にも御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせて御覧するに、めづらかなる稚児の御容貌なり。

一の皇子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなき儲の君と、世にもてかしづききこゆれど、この御にほひには並びたまふべくもあらざりければ、おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君をば、私物に思ほしかしづきたまふこと限りなし。

桐 壺

桐

壺

關 蓬 濤 明 須 花 賢 葵 花 紅 末 若 夕 空 帚 桐
屋 生 標 石 磨 散 木 葵 宴 葉 摘 紫 顏 蟬 木 壺

五 二 四 七 一 一 一 一 一 二 二 二 三 三 三 三
三 三 八 八 一 一 五 八 九 一 四 七 一 二 五 七
一 三 八 八 一 五 七 六 八 二 二 二 一 三 一